2012年8月号〈第316号〉昭和61年7月8日第三種郵便物認可　平成24年7月19日発行　毎月1回19日発行

住宅特集

新建築

316

2012
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU

8

特集／リノベーション解 20題

作品／二〇題

岸和郎
北山恒
長坂大　三題
荒谷省午
木村吉成＋松本尚子
三宅正浩
魚谷繁礼　二題
板坦元彬
能作淳平＋中田裕一
メジロスタジオ
山口誠
塩塚隆生　二題
稲垣淳哉＋佐野哲史＋
永井拓生＋堀英祐
石崎哲也＋石崎瑠美子
三澤文子
豊田保之

「U邸」（本誌9806）内部から外のテラスを見る。
撮影：新建築社写真部

さんぺい・じゅんいち
1968年千葉県生まれ／1995年日本工業大学大学院工学研究科修士課程修了／1996〜98年高松伸建築設計事務所／1999年A.L.X.設立／2000年青森県立美術館建築設計競技入選／2005年第12回空間デザインコンペ作品例部門銅賞受賞／2009年A.L.X.展（PRISMIC GALLERY）／2010年X.L.A.展（OZONE）
http://www.xain.jp/

空間に響くディテール

都市と住宅の境界面をつくるディテールのあり方によって、
人を魅了する自由で寛容な住空間が生まれます。

三幣順一（建築家）

建ち方から学ぶ
私は、現在、主に住宅を中心に設計を行っていますが、実務経験においては、専用住宅を設計する機会がまったくないまま独立しました。そのため当時は、勉強のため気になる住宅作品があると、時間を見つけて、建築雑誌の写真に映っている周囲の建物や、作品の解説文の内容から場所を推定したうえで、地図などで特定するという探偵のようなことをして、実際に建物を見に行っていました。もちろん、建主の方が住んでいるので外から外観を眺めるくらいなのですが、都市とのかかわり合いやスケール感、ある程度月日が経った状態での外観の変化、写真には写っていない部分の確認などができて参考になりました。

作品の日常を知る
そうして、いつものように探し出した、ある著名建築家の作品を外から眺めていると、建主の方がたまたまゴミ出しに出てきて、内部を拝見することができました。まだ5月でしたが、内部はとても蒸し暑く、快適とはいえません。見学の中で、直射日光が射し込むシングルガラスFIXの大開口部、明らかに足りない屋根の断熱性能などを原因と読み取ることができました。建主に住み心地をたずねたところ、暑いこと以外は気に入っているものの、夏は室温が40度を超えてしまい、エアコンが効かないといっていました。雑誌で見た時は大変な傑作であると感心したのに、帰り道は気持ちが落ち込んだことを覚えています。

公共性と自由さ
何度も内部空間を実体験した住宅としては、師事した建築家である高松伸の自邸「U邸」という作品があります。この住宅は打放しコンクリートの縦長プランのチューブ状の空間が、上昇しながら一筆書きの様に連続し、寝室まで扉なしでつながる奥行のある構成となっています。このような空間が自分の好みなのか、あるいは、この作品の影響を強く受けたからなのか分かりませんが、その後の自分の設計の中で、この作品の影響を少なからず感じています。高松伸は1980年代に過剰なディテール表現で時代の寵児となった建築家ですが、この作品では、トレードマークであるディテール表現は陰を潜めています。というよりもむしろディテールが意識的に排除されています。彼の代表作には、当然住宅もあるのですが、それとはまったく異なっていて、ニュートラルな空間です。基本は夫婦ふたりの住まいなのですが、50人以上のスタッフが集まって宴会をしたこともあれば、打ち合せを兼ねて数人のスタッフと昼食を取ったり、独立したご子息や友人が家族を伴って訪れたり、あるいは、ご夫婦のどちらかが出張で不在の時は、ひとり使用になることもありました。ひとりから数十人まで劇的な使用人数の変化を許容することが、この住宅の特徴だと思います。ある種、クローズでプライベートな住まいというよりは、パブリックな場所にたまたま住んでいるような住宅なのです。恐らくディテール表現の変化も、彼の初期の作品が社会に対峙する「抵抗の砦」だったのに対し、この住宅は社会に対し開かれた空間となっているのです。

都市のディテール
住宅においてディテールが目立たない、あるいは目立たなくなるのは、このような、空間の公共性あるいは一般性と深い関連があると思います。ディテールが目立たないといっても、ディテールがない訳ではありません。この作品は、コンクリート打ち放し工法の、コンクリート打ち放しディテールが採用されており、社会的に見て非常に一般的なディテールによってつくられた住まいと考えられます。これは都市のディテールと呼んでもよいと考えています。さらに付け加えると、このような都市のディテールを用いた住まいは、そのディテールの一般性と公共性により、非常に自由で寛容な住空間となって、人を魅了する力があります。

工法と表層の分離
今日の都市を見渡してみると、住宅の内／外境界面のディテールの大きな特徴として、工法と表層の分離現象が起きていることが上げられます。つまり、基本的に採用されているディテールは同じなのに、そこに現れている意匠は、まったくバラバラだということです。たとえば、外壁材のサイディングの場合、性能的には同じでも、そこにレンガ、石、タイル、漆喰などのさまざまなテクスチュアの模様が自由にプリントされています。これらの大変ユニークなところは、テクスチュアのパターンが規則正しくマッピングされている点で、これはコンピュータグラフィックスのレンダリングとまったく同じ手法になります。現実社会の住宅のつくられ方が、仮想現実の空間と同じなのです。

都市的な美観の喪失
この現象をあえてポジティブに考えると、現代日本の住宅では、建主が自由に自分の好きな意匠を選択できると見ることもできます。世界中のさまざまなデザインを引用することが可能なのですが、ここで問題なのは、それは本来の工法とは無縁の表層の意匠であることです。これらの集積が現代の都市景観であり、表層が多様なだけで、ディテールは徹底的に統一され、経済性が追求されています。
かつては世界中のどの時代のどの都市でも、ディテールにおける工法と表層については、ある程度一体性が保たれていたのであり、それが都市の風景をつくってきました。工法と表層の関係性の分離は、きわめて現代的な現象なのです。重要な点は、かつての風景が、厳格な規制によって美観が保たれたのではなく、その場所でもっとも現実的に容易く入手できる材料が、建設可能なコストで、その社会がもつ歴史性と経済システムに基づいて都市がつくられてきたことです。もし仮に現代都市においてそのような表層の統一性を実現しようと思えば、特定の美意識に基づく非常に厳格な規制が必要で、現実性は乏しいでしょう。現代都市のカオスは、工法と表層の分離によってもたらされたのです。

建築家からの提案を
現代日本において多くの人びとは、住空間のデザインを自分たちの生活風土とは異なる、海外や過去から参照し引用していますが、その原因として情報の氾濫以外にも、それらのデザインの方が、建築家の考えた住空間より高い評価を得ている事実もあると思います。確かに時代を切り拓くような新しい提案は、すぐに多くの人びとに支持されるものではありません。しかし、それが本質的な提案であれば、はじめは少数派でも、雑誌等メディアを媒介として、より多くの作家によって検討され進化して世に問われるのです。建築家には多くの人びとに支持される、時代を体現する住空間が求められています。

境界面の設計
パブリックとプライベートの関係、外部と内部の関係、工法と表層の関係、都市と住宅の関係は、社会における制限される部分と自由な部分との関係といえるでしょう。これは、設計可能な領域と、それが曖昧な領域との関係といい換えることもできます。住空間は生活者のためにありますが、空間は生活を拘束します。設計することは、自由と不自由を生み出すことであり、ディテールとは、そのようなさまざまな関係の境界を決定する要素です。それ故にディテールは、境界面の対立を強調するよりも調和させることが重要で、そのために存在をできる限り消すことが大切だといえるのです。すべてを決定する境界に比べると、表層の意匠は、自由度の高い要素で、基本的に交換可能なものだと考えます。

骨太な住空間へ
今日の住空間は、納まりが主張しない寛容で自由な空間と、工法と表層の分離した多様な表現が特徴だと思います。住宅は建築作品として、美しく繊細で緻密な部分もありますが、人びとが生活する以上、想定外の事態も起こったりするでしょう。だからこそ、どのような生活にも柔軟に対応できる、空間構成の力強さが必要です。そのような骨太な住空間に響くディテールとは、控えめで目立たない、空間を引き立たせる存在なのです。

Discussion's Theme

910mmモジュールについて（前編）

若原一貴（設計者）×杉下均（建築家）×服部信康（建築家）

南沢の小住宅　若原一貴（本誌1205）

左頁：左から服部さん、杉下さん、若原さん。
下：南沢の小住宅外観。

それぞれが考える910mm

若原　「南沢の小住宅」は、約50m²の小さなフットプリントを、910mm（三尺）モジュールを使いながら、立体的な気積を立ち上げて構成しています。今回、1,820mm（一間）を意識的に設計時に用いている杉下さんや、身体スケールから空間をつくられる服部さんと、この寸法体系をどんな意識で用いているのかお話したいと思います。

この住宅で僕は、ごく当たり前のことをテーマにしようと思っていました。モジュールに対する考え方は人によって異なると思いますが、910mmモジュールは施工側からすると精度が出しやすいのと同時に、無駄がなく経済性もよい。しかし一方で、汎用な空間に陥りやすく、新しいものは生まれないと考えられているモジュールでもあると思います。ただ、長い歴史の中で910mmモジュールを紐解いてみると、たとえば増沢洵さんや吉村順三さんの作品は、910mmを使ってできているものが多いんです。910mmを使わずに新たな空間を創出する選択肢ももちろんありますが、僕は、この寸法体系を使ったからといって、必ずしも新たな空間が生まれないということはないと思っています。その辺はおふたりはどのように考えていらっしゃいますか?

杉下　910mmという数字は、日本の長い伝統の中で培われて、定着した寸法になっています。この寸法の基である一尺、二尺という単位は、人間のスケールから生まれている寸法ですから、僕はこれを使わない手はないと思っています。でも、910mmをそのまま踏襲してしまうのでは、新しいものは生まれないでしょう。まずその伝統がどのように引き継がれてきたのかその流れを調べてみる。その視点から改めて過去の建築作品を見直すと、一尺や一間という数字を建築家がどのように使ってきたのか、人の行為や部材寸法、納まりに対する意識が見えてきます。それを読み解き面白さを知ることが、自分の設計の糧となって、そこに新たな空間づくりへの可能性が生まれてくるのだと思います。

僕は日本の建築文化の長い歴史、時間の中で、まったく新しいものをつくるのではなく、その流れの一過程にいると位置付けられるような、次の世代に渡していけるものをつくりたい。そんな風に考えています。その方が建築（住宅）が長生きできると思うのです。どんなに長い時間が経っても、人間のスケールが大幅に変わることはなかったわけで、これからもそうでしょう。ならば未知の寸法を使うのではなく、これまでに確立されてきたスケールを今の自分なりに読み解いて使っていくことを選んでいます。

服部　910mmというのは非常に悩ましい寸法だと僕は思っています。杉下さんの住宅は、いつも大きな大地に規則的な骨組みが立ち上がり、屋根が載る。その骨組みが内部空間とリンクするように立ち現れてくるのを見て、美しいなと思います。910mmの寸法体系を使っている方は何人かいらっしゃいますが、僕が知っているのは、たとえば高須賀晋さん。彼はどちらかというと奥行が浅く水平性が強く現れている住宅です。奥行が深い家といえば、篠原一男さんの住宅でしょう。一般的に一間でスパンを飛ばして効率をよくしようとすると、せいぜい二間が限界です。そしてそれに対して奥をつくるとそこに光が回らなかったり、プロポーションのコントロールもとても難しくなります。しかし篠原さんは、910mmを使っているとはいってもひとつの空間に対してスパンを大きく飛ばしているので、寸法体系を意識させません。平滑なモジュールを感じないが故に陰影と深さ、距離が生まれてくるのです。また、一間半でモジュール設定すると、今度は高須賀さんの住宅がもつ、横のライン、つまり水平的な広がりが生まれ得ない。どうしたら910mmを使って新たな空間体験につながる設計ができるのか、それは僕はずっと気になっていました。

平面図　縮尺1：80（グリッドラインが910mmモジュール）

変わらないものから新しさを見い出す

杉下　今回の若原さんの「南沢の小住宅」は、『新建築住宅特集』の誌面を見た時、とにかく910mmにえらくこだわっているなと思いました。今までの作品ももちろん910mmでつくられているのですが、この住宅ほどこだわっている感じは受けませんでした。そして今日、実際に空間を感じてみると、この住宅がもつスケール感が、空間をとても落ち着いた、居心地のよいものに導いていると体感しました。それは平面だけではなく、高さ、特にいちばん印象的なのは窓の位置なのですが、一間より少し低く設置されている開口からの光がこの空間の中で生きています。光自体を平面的な大きさに対してどのように生かすかがきちんと計画されている。上手な開口のあり方です。日本の建築は鴨居の高さを1,740mm、五尺七寸～八寸に抑えておけば、あとはどんな操作をしても場をつくれるという通念があって、それを思い起こしました。

服部　僕は実際に拝見して、910mmを使って、コンパクトなのに奥深くできていることに衝撃を受けました。民家のような水平性をもつ空間での910mmはなんとなく想像がつくのですが、コンパクトな住居として成立するのか、疑問だったんです。

910mmは吉村さんが使われて、宮脇檀さんや益子義弘さんといった方は、上手にイレギュラーを組み込むようになりました。高須賀さんぐらいでしょうか、キッチンからすべて細かい寸法も尺で抑えているのは。1,820mm（六尺）だとキッチンや水回りの納まりが無駄な部分を入れ込まないと上手くつくれません。僕も910mmは使いながら、ローコストの場合はできるだけその中で納めていましたが、そうでない場合はあまりその寸法を使わずに納めていました。

でもこの住宅は、910mmをすべてで踏襲しながら、内外に無理がなくこの空間性が生まれている。新しい発見ができたなと感じましたね。光の回り方も気持ちよいです。

若原　戦後、日本のライフスタイルが西洋化する流れの中で、910mmという寸法は徐々に乖離していきました。でも、なぜか今僕の中では逆にそこへ戻るべきだろうという意識があります。ただ戦前の910mmに戻りたいわけではありません。ライフスタイルは椅子とテーブルが中心の生活に変わっているのは事実で、設備機器も近代化していますから、モジュールを変えてしまうこともひとつの方法論だと思います。でも実はものをつくるシステムは戦前からほとんど変わっていないんです。特に在来木造。建築家に求められている大切な役割は、社会構造の中でいかに現代生活に合った快適なスタンダードをつくれるかだと思っていて、僕はそこを目指しています。

杉下　伝統というのは、厳然とあるものなんですよね。本当に長い時間培われてきてここにあるもの、それが伝統です。結果として今残っているものは、見慣れていると同時にやはり美しいものだと思うし、そういうものを見てきちんとプロポーションや寸法に反映させていくことはとても大切なことです。いま若原さんがおっしゃったように、これだけ技術は発達していろいろなことが変化しているにも関わらず、910mmと1,820mmのベニアがあったり、製品の体系もそう変わっていません。

この寸法を使うことで身体的な心地よさが生まれると感じる要因は、どんな人にも把握しやすい寸法だからということもあるのだと思います。たとえば、三尺とか一間は畳の寸法で、誰しも接したことがあるスケール感です。だからこちら側も説明がしやすい。僕の場合は二間を大きな寸法としてとらえていて、それが木造のよいスケール感だと思っています。材料の効率化もひとつの根拠で、昔からある4mという木材の寸法を徹底的に生かしたい。外来材も4mですしね。

「矩形の森」内観。

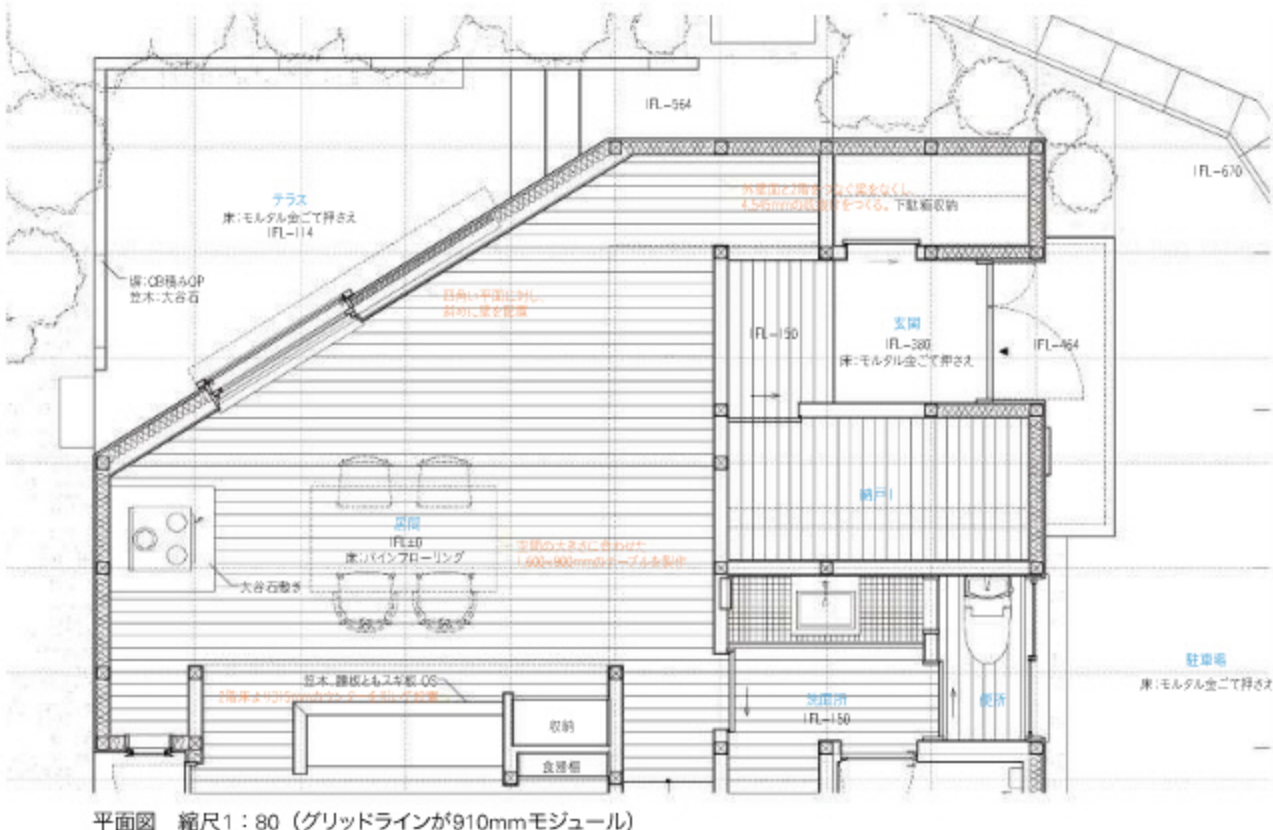
服部　無理な部材は使わずに、910mmをきれいにつくることで昔とは違う奥深いプロポーションができる可能性はありますよね。

若原　話していて思ったのですが、910mmがもつものって、日本語みたいなものですね。厳然たる日本文学の言葉の探求だけではなくて、言葉の新しさみたいなものもわれわれは考えていかなくてはいけない。

杉下　新しいものを生み出したいと思った時、何もないところからその新しさは生み出し得ません。やはり過去の寸法体系やプロポーションを理解することによって、そこから何を変えていくか、何が新しいのかが見えてくると思っています。今回この910mmをテーマに話をする機会をいただいたので、建築家がどう910mmを使っていたのか、改めていろんな本を見ました。たとえば篠原一男さんの「白の家」などは、全体が五間半の中に構成されています。架構は大きいのですが、寝室は二間で広間は三間半です。

新しい人では五十嵐淳さん。初作の自邸「矩形の森」（本誌0212）では、一間ピッチで縦横すべてに柱が入っているんです。こんなことするんだと思いました。さらに調べてみたら、他の作品もすべて910mmモジュールを使っています。あれだけ新しいことをやっているように見えて、基本はそこにあるのだということに、改めてすごいなと思い、美しく見えることの根拠を見た気がしましたね。

→次号へ続く

（2012年6月30日、「南沢の小住宅」にて。文責：本誌編集部）

職人と建築家の対話に立ち会う

高野保光（建築家）×**黒柳崇**（施工／内田産業）

8坪コートハウス
設計：高野保光／遊空間設計室
施工：内田産業

株式会社内田産業
所在地（東京営業所）：東京都西東京市新町5-5-20
連絡先：042-238-7001
http://www.uchida-sangyou.co.jp/

1.南側外観。／2.2月に行った作業の打ち合せ。左から黒柳さん、畳職人の鶴岡さん、高野さん。／3.円形畳部の試作を確認。／4.現場採寸、メモを基に隅部の畳を製作。／5.隅部畳を仮敷きし、円形部をプラベニアで型紙づくり。作業場で円形部製作後、仮敷き、微調整。／6.最終敷き込み。／写真提供：遊空間設計室

1.不定形な畳

高野　今回の住宅では、自邸ということもあり、いろいろ実験的な試みをしてみようと考えました。仕事をする中で、建主の方にこうしたらいいですと提案する場面がたくさんある中で、実際につくり、自ら体験し、具体的に実感をもって伝えたいと思ったからです。僕自身のこれからの設計に、何らかフィードバックできる試みをしたいと思っていたところがあり、今回現場を監理してもらった内田産業の黒柳さんと一緒に、さまざまな話をして進めました。

黒柳　高野さんとは7棟目の仕事になりますが、自邸ということで、今までとは違うこだわりをもっていらっしゃるのは感じていました。私の役割は、できるだけ職人や現場の人間とコミュニケーションを図って、モチベーション高く現場と向き合える状況をつくることでした。

高野　今回は敷地の隣が私の事務所だったので、とにかく現場へ通い、現場で考え検討を重ねた部分も多く、施工期限ぎりぎりまで何度も設計の変更がありました。でもそういったことができるのは、工程スケジュールや段取りをしっかりコントロールしてくれる現場監督さんの存在が大きのです。

黒柳　私だけでなく、高野さんの意識がひとりひとりの職人に伝わっていたんです。たとえば、リビング脇の小上がりの畳間は、真ん中に丸いテーブルがあって、丸く畳面がくり抜かれています。かつ畳を斜めに割っているので、ほとんどカネ（直角）の部分がありません。はじめ畳職人に話した時、できるかどうかとても弱気な返事でした。でも、僕らは彼に技術があるのは知っていたので、どうにかしてやってほしかった。職人のモチベーションを上げてくれたのは、「今回は僕の自邸なので、実験として考えてくれればよいから」という高野さんの言葉でした。その一言が不安を拭い去ってくれました。カネ（直角）がない畳では、四隅をぴったり合わせるのがとても難しいのです。鋭角だったり、丸く抜かれている部分の畳をどう織り込むかも課題となりました。その辺のつくり方に対しても、高野さんが「型紙ってどう?」と提案してくださったんです。畳割を図面にして、プラベニアで型紙をつくったことで、畳の成型がしやすくなりました。

高野　一般的に畳は現場で採寸して、作業場で製作後敷き込みですが、今回は何度もやり取りをして、一度仮敷きをして微調整、最後の敷き込みできれいに納まりました。円形畳をつくるにあたり数mmのズレは許容範囲であることを職人さんに伝えました。もちろんよりきれいな納まりであることは大切ですが、それ以上に工務店がもつ技術力と職人さんがもつ技能と経験を引き出し、全体をつくり上げることが重要だったんです。厚みについては、3階の茶室は床下収納もあり、15mm厚の薄畳ですが、不定形な畳については、どのくらいの厚みが適切か適切か検討したうえで、55mmにしました。その方が鋭角なところや曲線部分が織り込みやすかったからです。そういったことが、試作や話し合いの中で決まっていく。それが僕のつくり方で、職人さんがもっている技能や、体得してきたものをきちんと聞いて、それに自分のデザインを投げかけています。

黒柳　職人は高い技術をもっていても従来のやり方から一歩抜け出して新しいことにつなげる発想をもつことがなかなか難しいんです。それができるのだと建築家が導いてくれると、思う以上の仕事をしてくれることがあります。そうやって、ひとつの現場の中での発見を、さらに次につなげていくことが大切だと感じています。

（2012年6月26日、8坪コートハウスにて。文責：本誌編集部／次回は建具ほかを取り上げます）

等々力の二重円環

藤原徹平／フジワラテッペイアーキテクツラボ（本誌1206）

岩岡竜夫

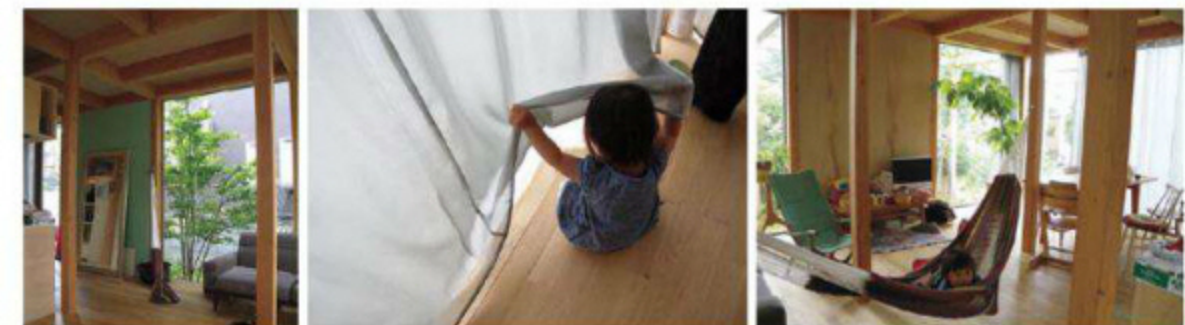
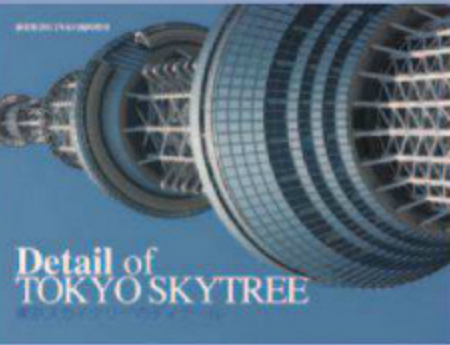
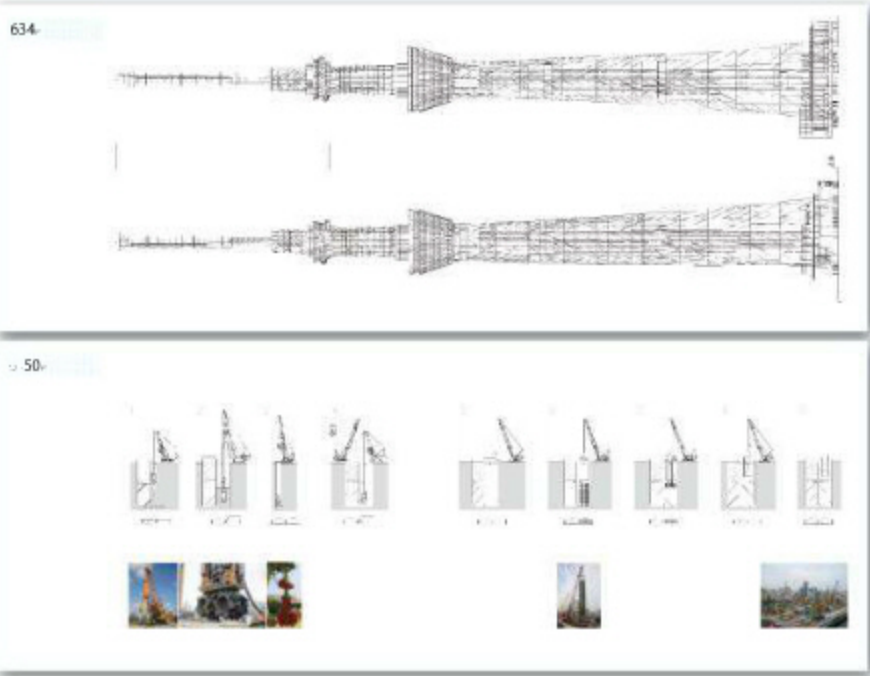
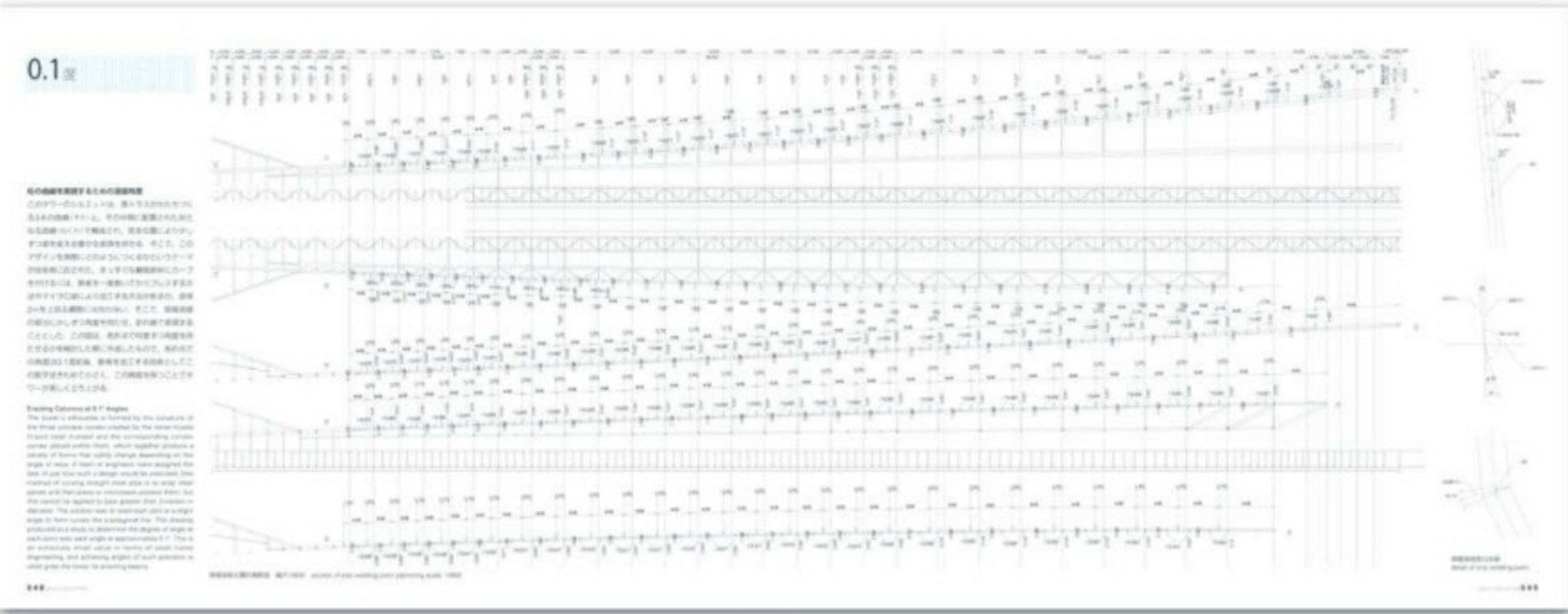
大井町線の等々力駅を下車したのは、学生時代のアパート暮らしの時以来、久しぶりのことだった。環八を越えて等々力渓谷公園の終点からさらに先の、閑静な住宅街の中に目指す住宅はあった。編集者からこの住宅の訪問記を書いてほしいといわれたので、雑誌に掲載された内容をよく吟味してから見に行くことにしていた。かつて自分が設計した住宅（『台形面の家』、本誌0312）と似ているなと思いつつ、一方で藤原徹平とは何者かということにも興味があった。旗竿敷地の竿（アプローチ）部分の緩やかなスロープを下って、住宅の玄関先に着いた時には小雨がパラついていた。住宅の内部を見学する前に、まずこの建物の外周に　開する外構を所員の岡真由美さんのナビゲートで右回りに歩いてみた。

〈第1の円環〉であるこのドーナツ状のヴォイドは、このエリアの環境保全や防犯上の目的でつくられた1.5m以上の壁面後退義務からできたものである。建物の向きを隣家とややずらすことで、建物外壁面と敷地境界線との間に多様性が生じている。隣家に面する北側と墓地に面する南側には、さりげなくコントロールされた通り庭のような植栽スペースがつくられていた。さらに進んで建物の西側に行くと、国の所有であるが使用権が認められている暗渠の水路があり、建主さんは水路と外壁面の約50cmのスキマを花壇のように使っている。さらにアプローチ空間に連続する北側のスペースはパーゴラ付きの駐車場。旗竿敷地の奥に、こうした開放的な風景が　開していたことに驚かされた。

〈第2の円環〉は、室内の1階部分における動線のサーキュレーションである。収納、階段、キッチン、トイレなどを部屋の中央に納めることで、室内全体が自由に周回できるようになっている。よく見ると、プラン的にはセンターコア形式であるが、架構と照明は1.8mスパンの均等グリッド上にしっかり乗っている。間仕切壁と天井面とのスリットやキッチンスペースのあり方が、センターコアあるいはグリッドシステムという建築形式を曖昧なものにしているように見える。こうした曖昧さは、この家の暮らし方の自由度を担保しているように思えた。

この住宅の最大の特徴は、〈第1の円環〉と〈第2の円環〉の明確な境界を構成する外壁面のデザインである。階高いっぱいまで拡大された外付けのスチールサッシ、戸袋部分のフレーム、霧よけなどが外壁の一部として独自にシステム化されている。室内からはそれらのエレメントはほとんど見えず、柱のすぐ裏側を途切れることなく続くレールに吊られた半透明のカーテンが、室内全体を柔らかく包み込んでいる。そのカーテンを少しだけ引いてみた。室内からガラス越しに見た西側の古家の光景が印象的だった。

開口部のみでなく外壁全体を本体と明確に切り離して施工区分を明確化することで、施工の精度を上げると共に、建設コストの削減につなげている。このファサードエンジニアリングの概念を独立住宅にもち込む発想は、設計者のバックグラウンドからくるものであろう。建主や施工業者、造園家やデザイナーたちとの信頼関係の中で、制度を揺さぶっていこうとするフジワラ方式を、この小さな住宅の設計に見た。

（いわおか・たつお／建築家）

室内外共に、家の改造が進んでいる。／左上：外観。2階に手摺りが追加された。／中左：建主によって塗られた緑色の壁が外構の緑とよく栄えていた。／中央：家を包むカーテンをめくって遊ぶ娘さん。シルバーと白のオーガンジーを合わせている。／中右：柱を利用して吊り下げられたハンモック。／下：ダイニングテーブルで藤原さん（右）に説明を受ける岩岡さん。撮影：本誌編集部

© 新建築住宅特集2012年8月号／第316号
2012年7月19日発行　毎月1回19日発行
定価2,000円　本体1,905円
振替：00150-6-30658

［編集発行人］吉田信之
［編集長］中村光恵

［表紙・誌面フォーマットデザイン監修］　K2
［発行所］株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
tel. (03)6205-4380（代表／総務・出版）
(03)6205-4381（編集部直通）
(03)6205-4382（広告部）
fax.(03)6205-4386（代表／総務・出版）
(03)6205-4387（編集部・広告部）
e-mail　jt@japan-architect.co.jp
URL　http://www.japan-architect.co.jp
写真部：
東京都文京区湯島2-30-8 5階　〒113-0034
tel. (03)3811-9132
fax. (03)3816-2589
［印刷所］凸版印刷株式会社
［取次店］トーハン　日販　大阪屋　中央社
栗田　鍬谷　協和　太洋社　西村

表紙の写真　壬生東檜町の住宅
設計：魚谷繁礼／魚谷繁礼建築研究所
撮影：新建築社写真部

CONTENTS

特集／リノベーション解 20題

CONTENTS

連載

コラム & エッセイ

EXHIBITION

BOOKS

NEWS

TOPICS

PROFILE・編集後記

KIM HOUSE 2011

大阪市

岸和郎＋K. ASSOCIATES/Architects
Waro Kishi+K. ASSOCIATES/Architects

竣工当時（1987年）の外観。*

竣工当時（1987年）に誌面掲載されたアクソメ

屋根の架け替えを行って
2階最奥の1スパンをテラスに変更
屋内外空間が変化した

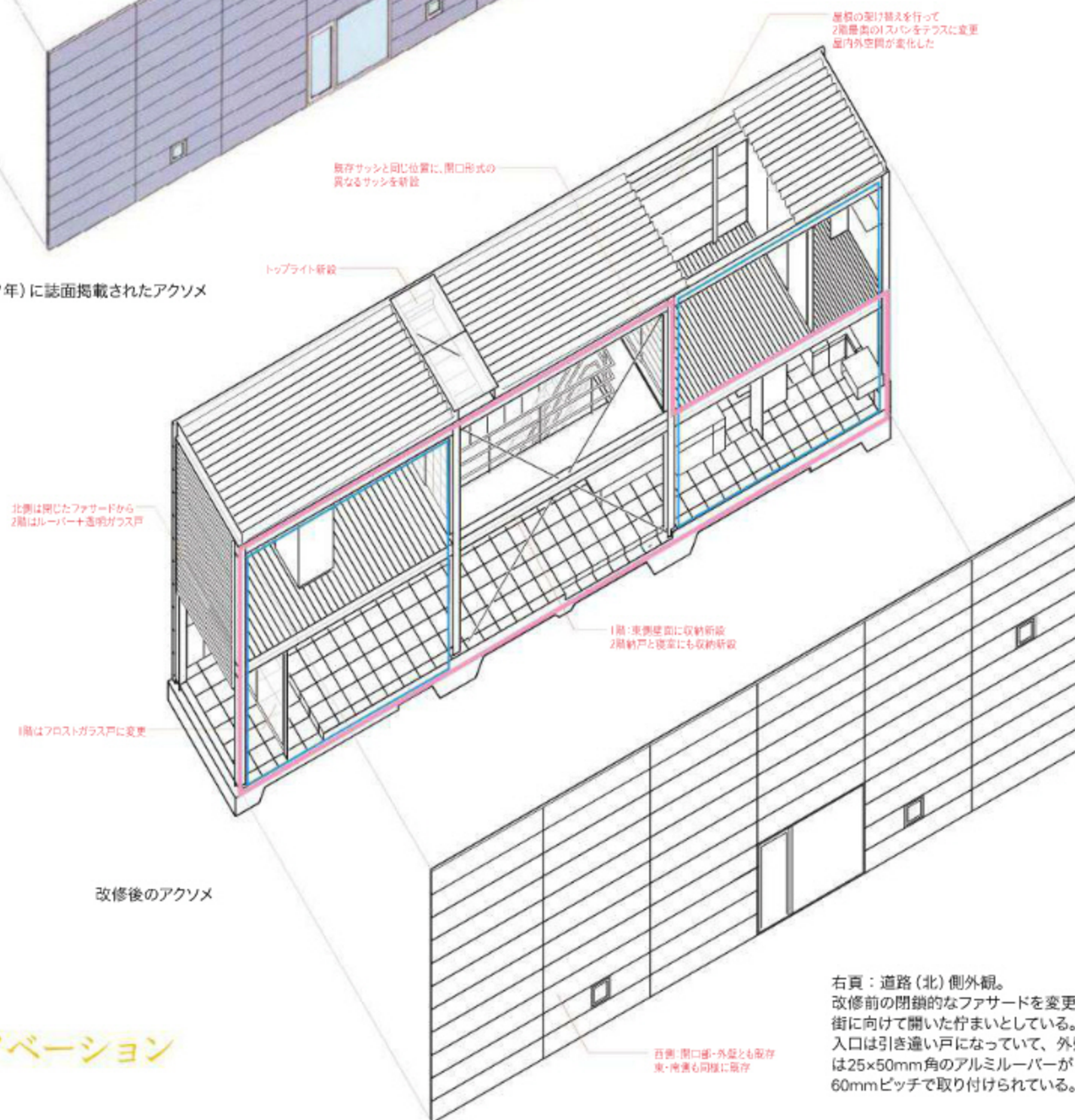
既存サッシと同じ位置に、開口形式の
異なるサッシを新設

トップライト新設

北側は閉じたファサードから
2階はルーバー＋透明ガラス戸

1階：東側壁面に収納新設
2階納戸と寝室にも収納新設

1階はフロストガラス戸に変更

西側：開口部・外壁とも既存
東・南側も同様に既存

改修後のアクソメ

Renovation Point

24年後のリノベーション

右頁：道路（北）側外観。
改修前の閉鎖的なファサードを変更し、街に向けて開いた佇まいとしている。
入口は引き違い戸になっていて、外壁には25×50mm角のアルミルーバーが60mmピッチで取り付けられている。

1階ダイニングからの見返し。内部壁面は既存成型セメント板 撥水剤塗布。
内外壁が同じ仕上げになっている。左の開口は既存のFIX＋片開き戸。

既存2階平面図

既存1階平面図　縮尺1：100

既存断面図　縮尺1：100

部分ディテール　ア
（改修後も見えている箇所）

イ

ウ

エ

オ

時が流れても変化しないことへの思い

——KIM HOUSE、24年後の改修

岸和郎

24年前のKIM HOUSE

1987年、大阪の下町、戦前からの棟割り長屋が建ち並び、工場や倉庫が点在している地域に小さな住宅を設計した。

長屋の一軒を切り取り、そこに間口2.58m（1スパン）、奥行方向5.4m（3スパン）の2層分の鉄骨造を挿入し、中央の1スパン分を中庭とする。1階の床は内外共白いタイル貼りとし、サッシをフル・オープンにすれば、屋内外が一体となったスペースとして使うことができる。

この住宅では可能なかぎり工場製作の比重を高め、現場での作業を少なくする工法を考えた。工場製作されたH型鋼の日の字型フレームを4個、奥行方向に等間隔に並べた後、1階床と地中梁のコンクリートを一度に打設することで架構はでき上がる。その後工業製品である成型セメント板やアルミ・サッシをカーテン・ウォール状に取り付ければ、それでほとんど竣工する。

地耐力を期待できない敷地条件と厳しい工事コストの最善の妥協点として決定したこの計画は延べ床面積が$69.07m^2$しかなく、夫婦2人＋子供3人＋祖母の合計6人の住まいとしては、床面積としても、部屋数からいっても、住まい方に工夫を求めざるを得ないものだった。

竣工後、エアコンのない鉄骨造2階建ての2階の室温が夏は想像を絶するものだったり、あるいは軒や屋根の上を歩いている子供の姿に仰天したり、といった話を笑いながらするクライアントから、建築家として学んだことは数限りなくあった。ほとんど処女作といってよいこの住宅は、でき上がった後には私自身の建築家としての教科書だったのだ。

2011年、突然の手紙。24年ぶりにその改装を依頼される。

1987年には3世代、6人の住まいとして設計したものを、今度は夫婦2人のための住宅へ改装する計画である。24年の時間は長い。子供たちはすでに独立し、家族像は変化している。

しかし、そんな変化は想像の内だった。いちばんびっくりしたのは、24年経っても両隣の住宅が当時のままという事実だった。それに見回してみると隣だけでなく、近隣の風景も昔のままだ。この住宅ができ上がった後、バブル経済の到来と崩壊など、24年間の日本の経済状況の変化は凄まじかったが、この地域そのものにはほとんど変化がない。さながら昭和30年代で時間が止まったような風景。

2011年のKIM HOUSE

2011年の改装の主題はそんな都市との関係を改めて見直すことだった。1987年時点では都市に閉じたファサードとしたが、その変化のない街並み、24年前と同じ街並みを見ていると、実はそんなに防御的になる必要も本当はなかったのではないか、という反省が生まれる。

あれからヨーロッパからアジアの都市に興味が移り、積極的にアジアの都市を歩きながら、たとえばホーチミンやチェンマイの都市住宅、一階の正面に壁やサッシなどなく、シャッターだけしか装備していないファサードなどを見続けているうち、こんな都市の暮らし方もあるのか、と気付かされてきた。

そんなアジアの都市での暮らし方に大阪の下町での生活の風景が重なり、今回は逆に都市に開いた表情を提案した。年齢を経たご夫婦の暮らし方とご近所とのつき合い方に教えられた部分が大きいのは、もちろんだ。

中庭からの光と風の取り入れ方も、1987年の閉じた中庭、内部／外部という厳格な形式ではなく、2011年という時代の気分を反映した形式としたかった。

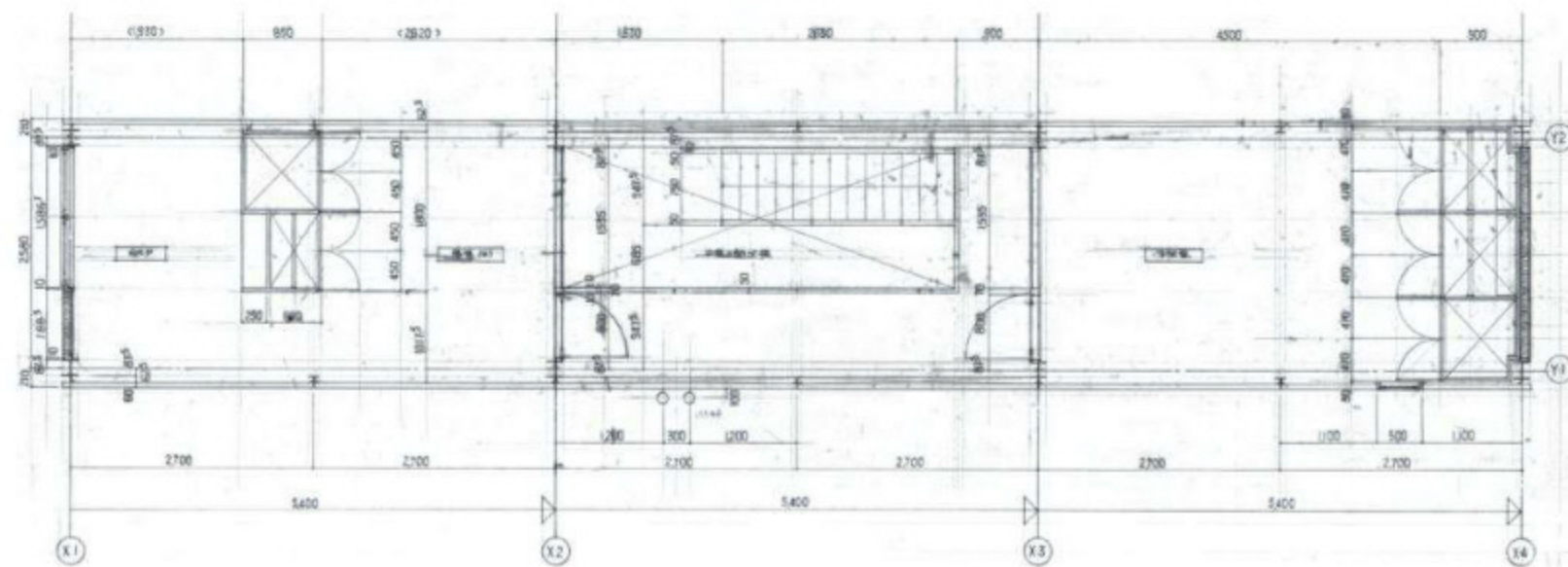
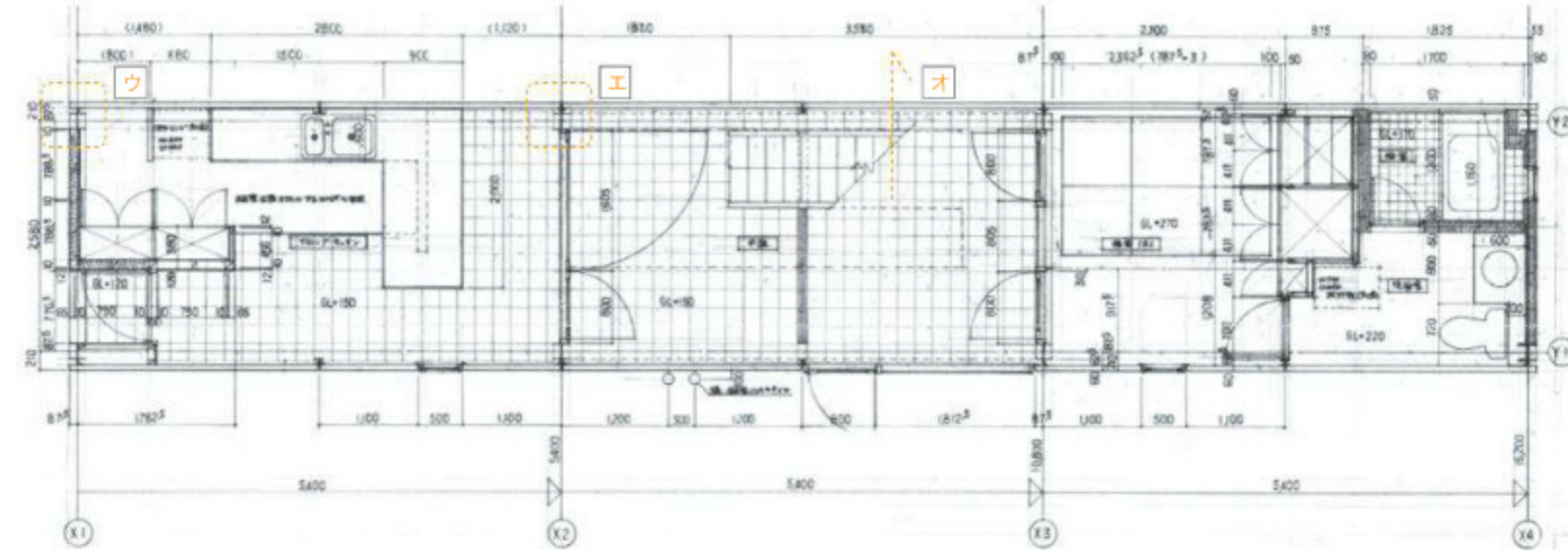
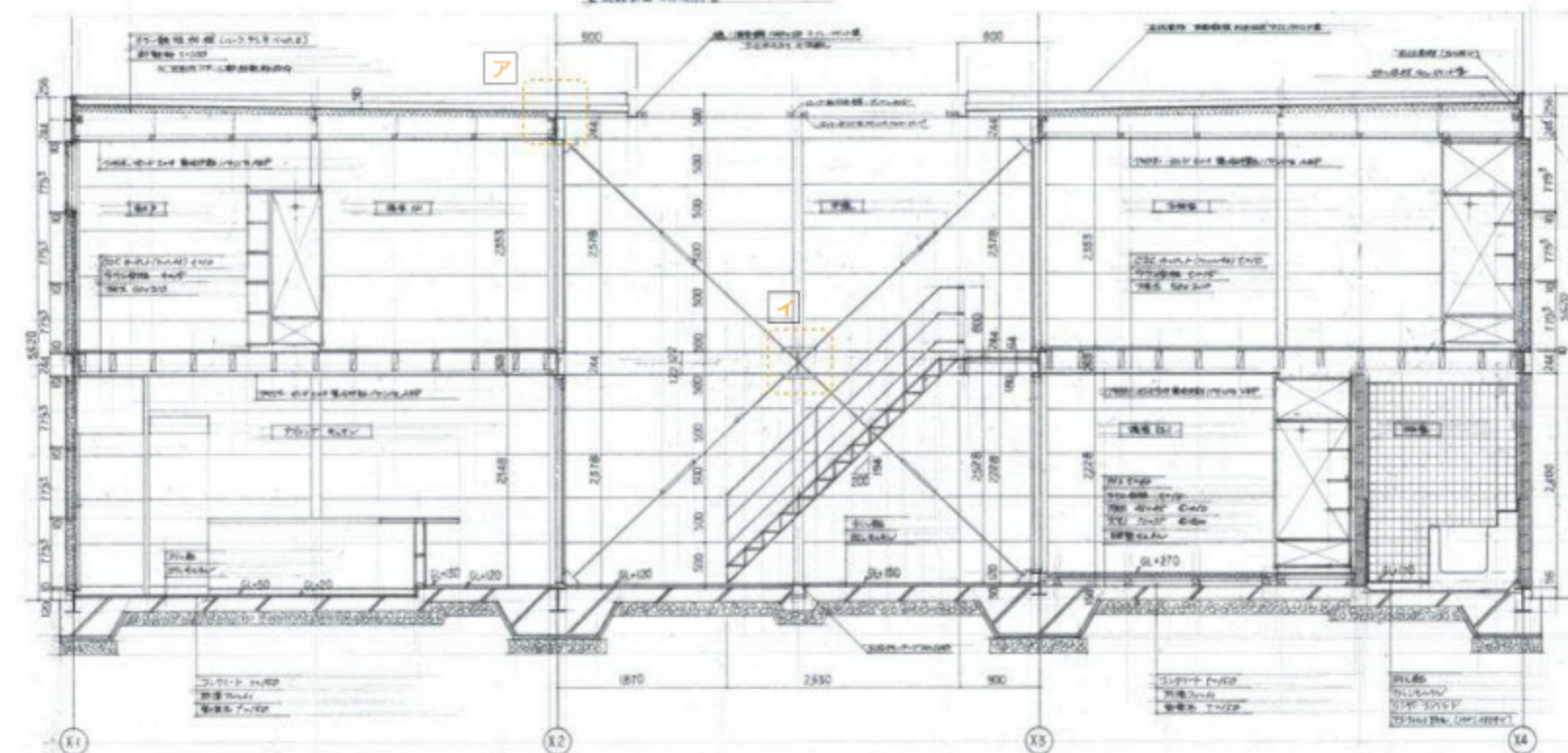
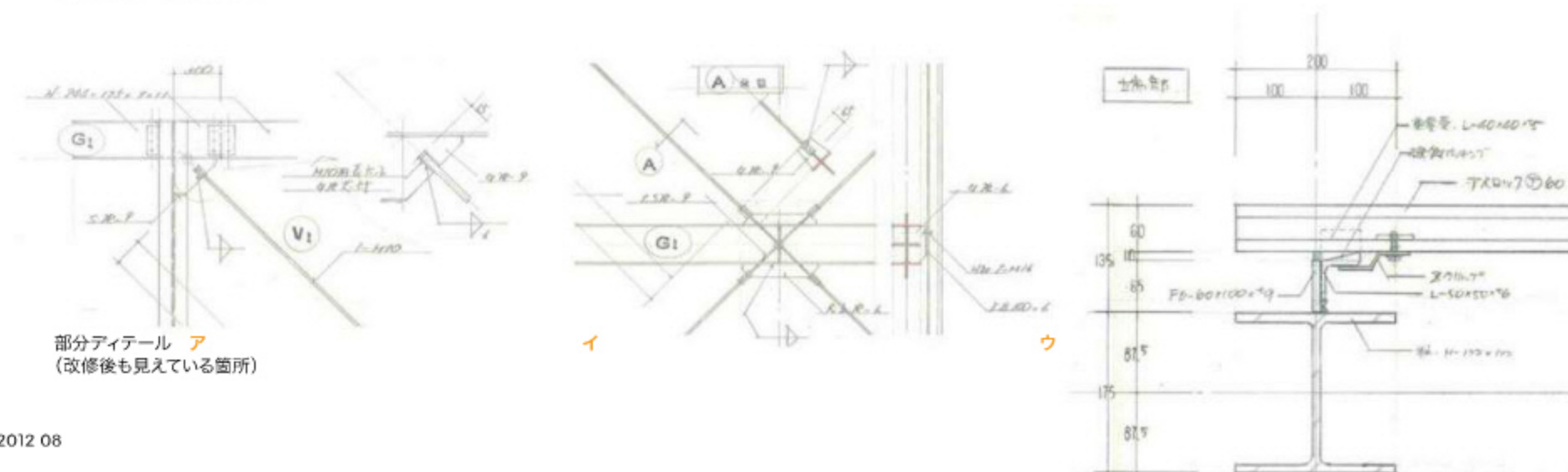
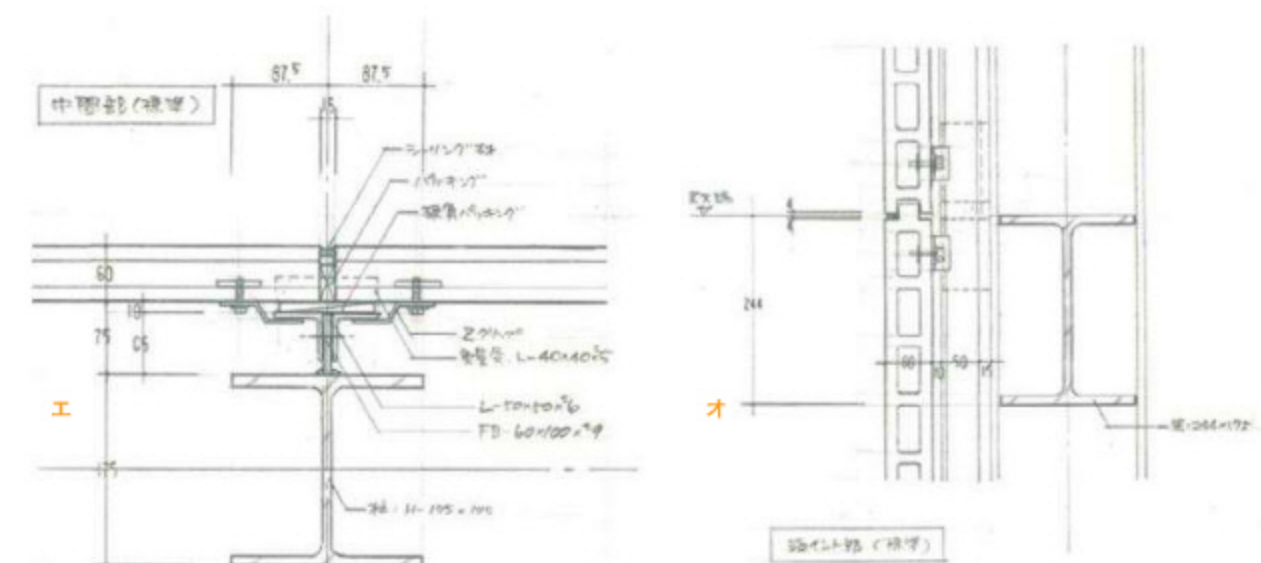
構造体を正確に3分割し、その中央のスパンを「中庭」とするという、厳格に幾何学が支配する「1987年仕様」の断面から、全体を2層吹き抜けの大きな一室空間を基本とし、その後2階部分に外光と空気を導入するテラス、それだけではドラマティックになりすぎるので、手前に帯状のスカイライトを設けて光の入り方を拡散させる。「2011年仕様」の断面への仕様変更である。

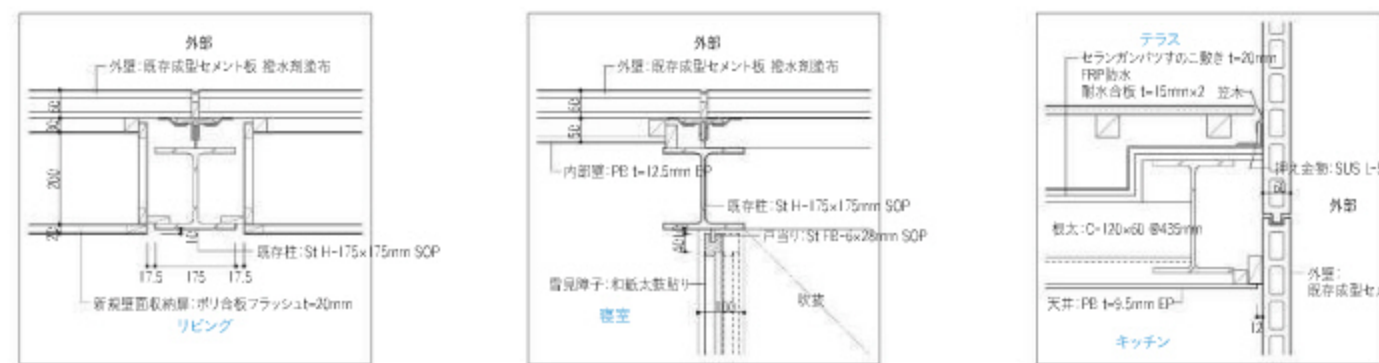
仕上げや色については、成形セメント板そのままの壁に構造も露出、その鉄部も最も「鉄らしい」色としてブルーグレーという塗り色を採用した。これも「強い」組み合わせの「1987年仕様」から、もう少し曖昧でルールのないような仕上げや色彩、光の拡散する白を基本とする「2011年仕様」への変更である。

住宅と倉庫とは同じビルディングタイプだと考えてきた。どちらも内部の使い方はどうとでも変更可能だが、外部とのインターフェイスだけが重要、という意味でだ。

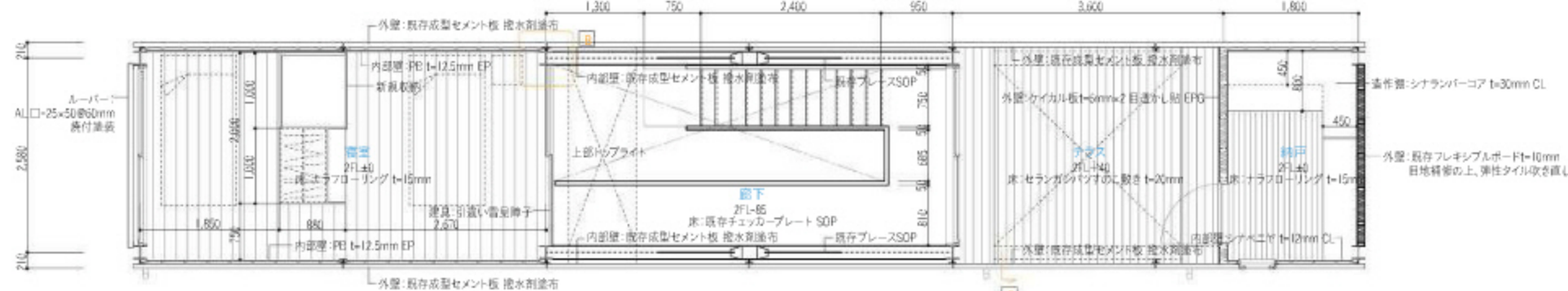
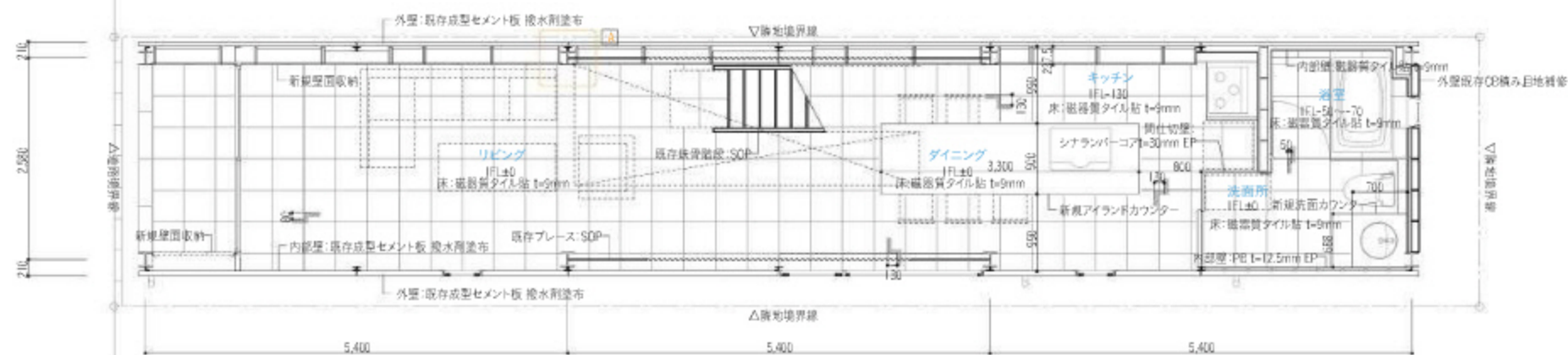
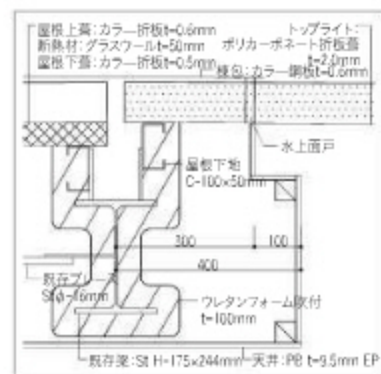
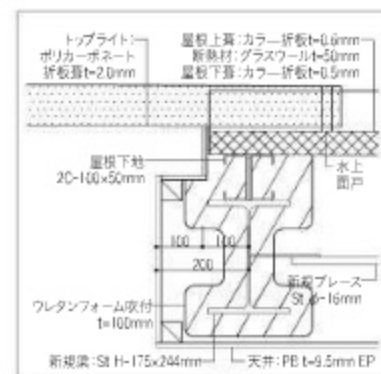
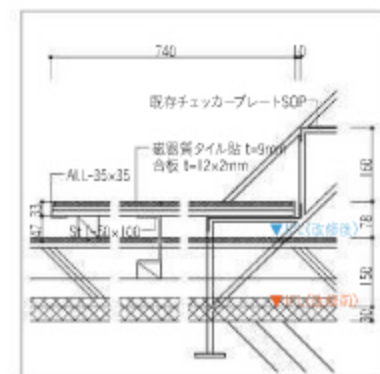
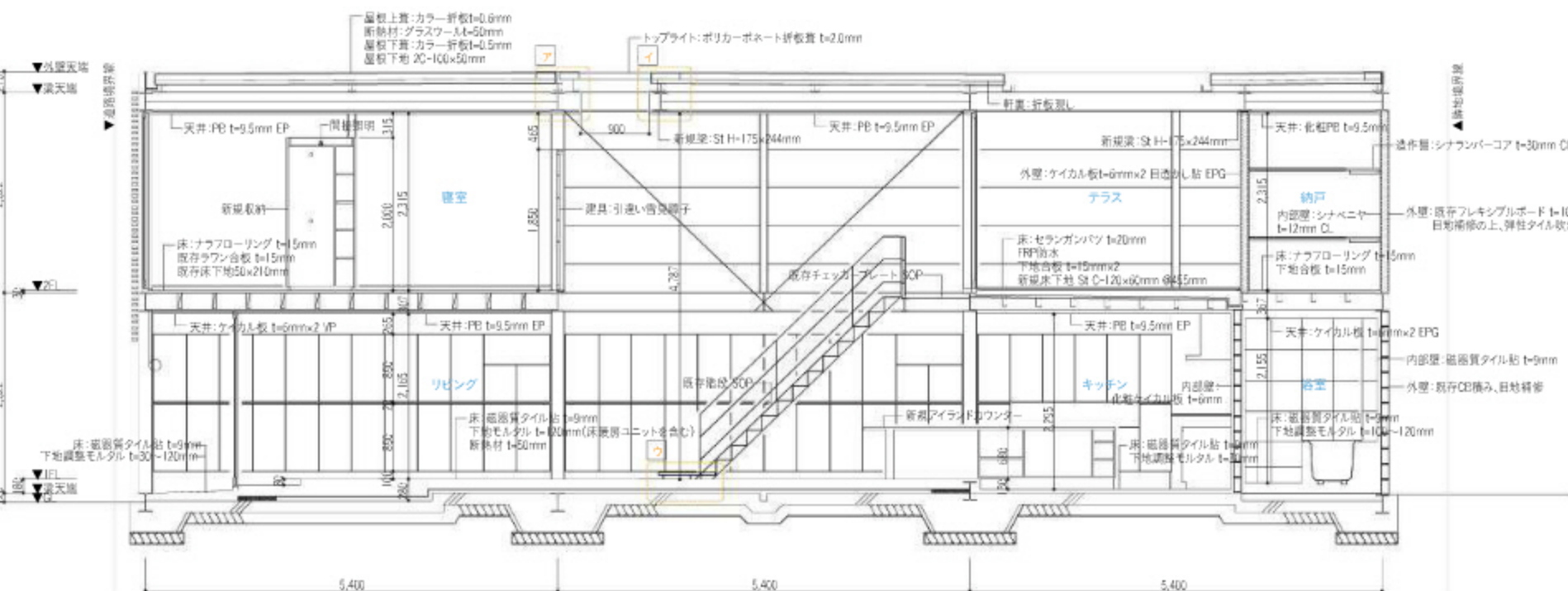
倉庫は閉じていることが基本だし、住宅は外部と内部とを調停する要素、すなわち都市とのインターフェイスである「ファサード」や「中庭」だけを時間を超えても変化しない永続的インターフェイスとしてデザインすること。

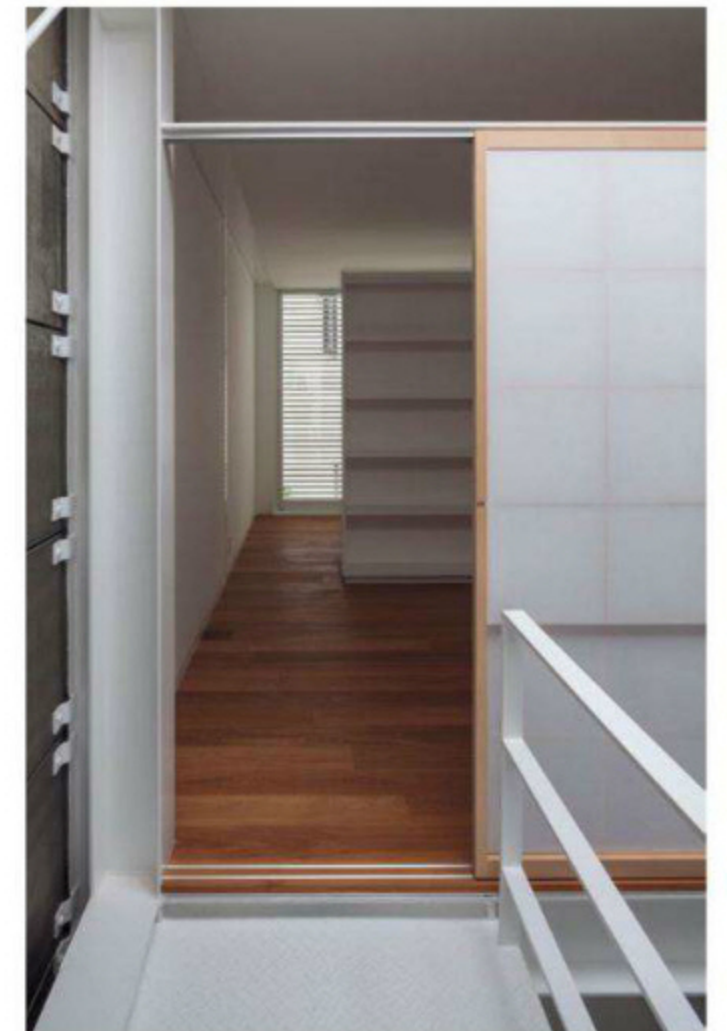
ヨーロッパの歴史建築のように「ファサード」や「中庭」は不変の要素として存在し、内部空間の改装と共に時代の変化が建築に刻印されればいいと考えてきたのだが、それは本当に形式的な議論であり、「ファサード」も「中庭」も時代と共に変化する要素に過ぎないと考えた方が自然だ、ということに気付く。

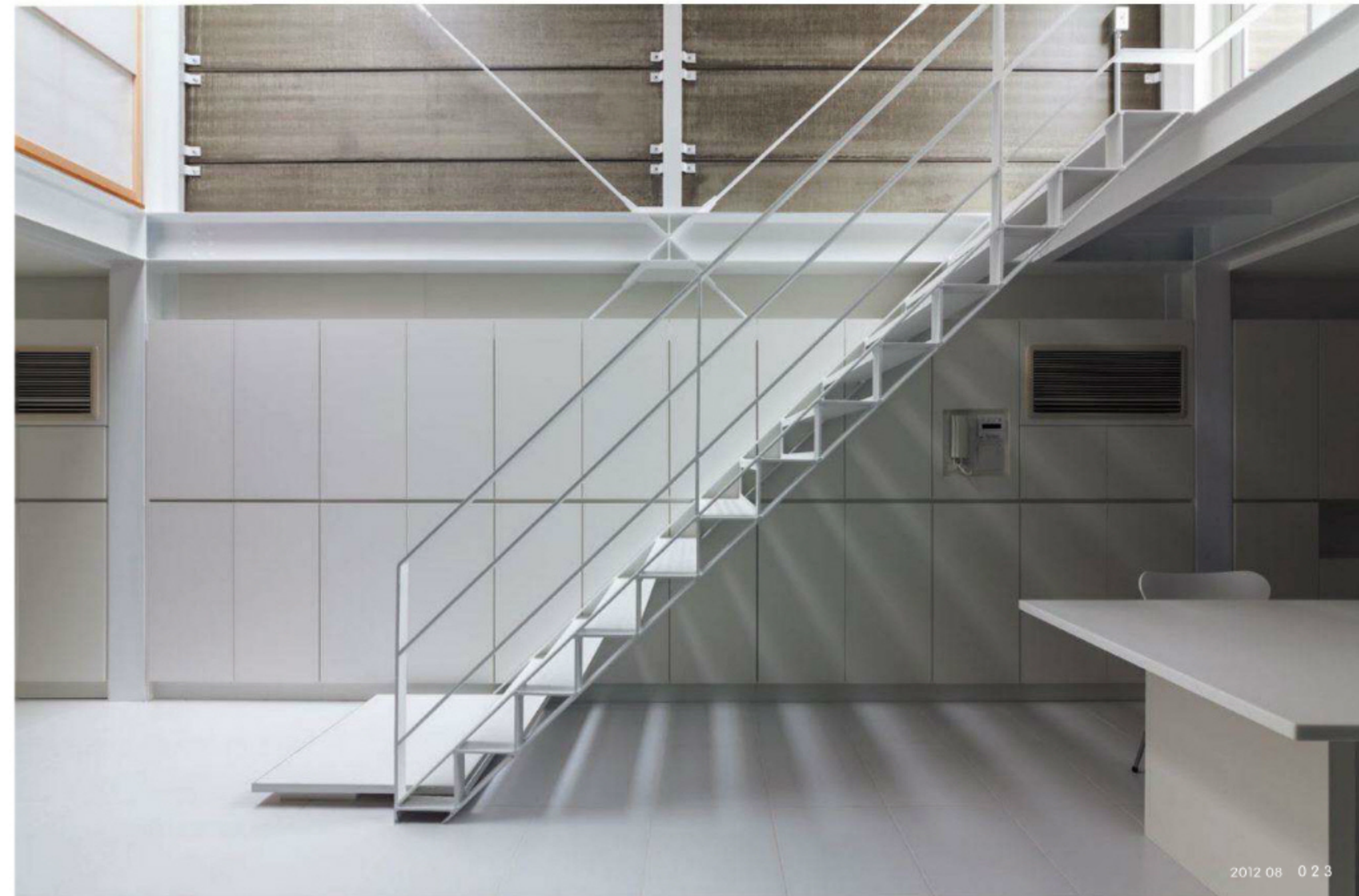
では、時代の経過の中でも変化しない、永続的な建築要素とは一体何なのか。24年の年月の流れの中で変化したことと変化しなかったこと、自分自身の変化も含めて、最も意識的になったのはそのことである。

既存鉄骨階段は、塗り直し。床は400mm角磁器質タイル t=9mm。
左側の壁面には、新規収納（奥行約238mm）を設置している。

2階床は既存チェッカープレート塗り直し。
奥の寝室には引違い雪見障子を新設。

A　1階柱・壁面収納回り詳細図　縮尺1：20

B　2階柱・雪見障子回り詳細図　縮尺1：20

C　テラス床 防水納まり詳細図　縮尺1：20

既存1階平面図　縮尺1：100

既存1階平面図　縮尺1：100

ア　トップライト水上部詳細図　縮尺1：20

イ　トップライト水下部詳細図　縮尺1：20

ウ　階段下部詳細図　縮尺1：20

断面詳細図　縮尺1：100

1階南側の浴室回り。

2階廊下から寝室奥を見通す。

リビングとダイニングの上部は吹き抜けていて、トップライトからの光が落ちる。

街並みを介してのたたずまい。道路側の1,200mmは半外部空間で、住戸への入口は外壁からセットバックさせている。

KIM HOUSE 2011

所在地／大阪市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
岸和郎＋K. ASSOCIATES/Architects
　担当／岸和郎　宮崎梢　山下恭司

施工
美和技建　担当／谷本哲昭
家具工事　KSプランニング
　担当／加藤一則
鋼製建具工事　ビルテック
　担当／岡野慎太郎
金物工事　大吉鉄工　担当／伊丹一郎
内装工事　山本建築　担当／山本康幸
給排水・衛生設備工事　第一工業
　担当／井畑秀司
電気設備工事　戸高電機工業所
　担当／戸高藤康
ガス設備工事　伊丹産業設備
　担当／金田太祐
空調・換気設備工事　サンレイキ
　担当／阿南剛

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,464mm　最高の高さ 5,620mm
敷地面積　69.14m²
建築面積　改修後：47.63m²
　（建蔽率68.89% 許容80.00%）
　改修前：38.03m²
　（建蔽率55.01% 許容60.00%）
延床面積　改修後：74.98m²
　（容積率108.45% 許容200.00%）
　1階　44.10m² ／2階　30.88m²
　改修前：69.07m²
　（容積率99.90% 許容200.00%）
　1階　38.03m²　2階　31.04m²

工程
設計期間　2011年5月〜2011年8月
工事期間　2011年8月〜2011年11月

敷地条件
地域地区　第一種住居地域　準防火地域
道路幅員　北4m

外部仕上げ
屋根／カラー鋼板折板二重葺　トップライト
　部：ポリカーボネート折板葺
外壁／既存成型セメント板 撥水剤塗布
開口部／アルミサッシ　スチールサッシ
テラス床／セランガンバツ t=20mm

内部仕上げ
リビング・ダイニング・キッチン
床／ 400mm角磁器質タイル
壁／既存成型セメント板 撥水剤塗布
天井／ PB t=9.5mm EP
　オーブン／ハーマン DR514C
　ガスコンロ／ハーマン C3WK2RJTL
　換気扇／三菱電機 V-754FR
　家具／アイランドカウンター（製作）、壁面収納（製作）
　シンク水栓金物／ INAX SF-HM451SX
寝室
床／ナラフローリング t=15mm UC
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ PB t=9.5mm EP
家具／収納（製作）
浴室
床・壁／ 400mm角磁器質タイル
天井／ケイカル板 t=6mm×2 EPG
バスタブ／大和重工 TB-120N
シャワー水栓金物／ INAX BF-2146TKM
トイレ・洗面所
床／ 400mm角磁器質タイル
壁／耐水PB t=12.5mm EP
天井／耐水PB t=9.5mm EP
家具／ミラー付収納（製作）、洗面カウンター（製作）
便器／ INAX DV-311GHU
洗面器／ INAX L-2848FC
洗面用水栓金物／ INAX LF-E340SC

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気方式
　その他／温水式床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

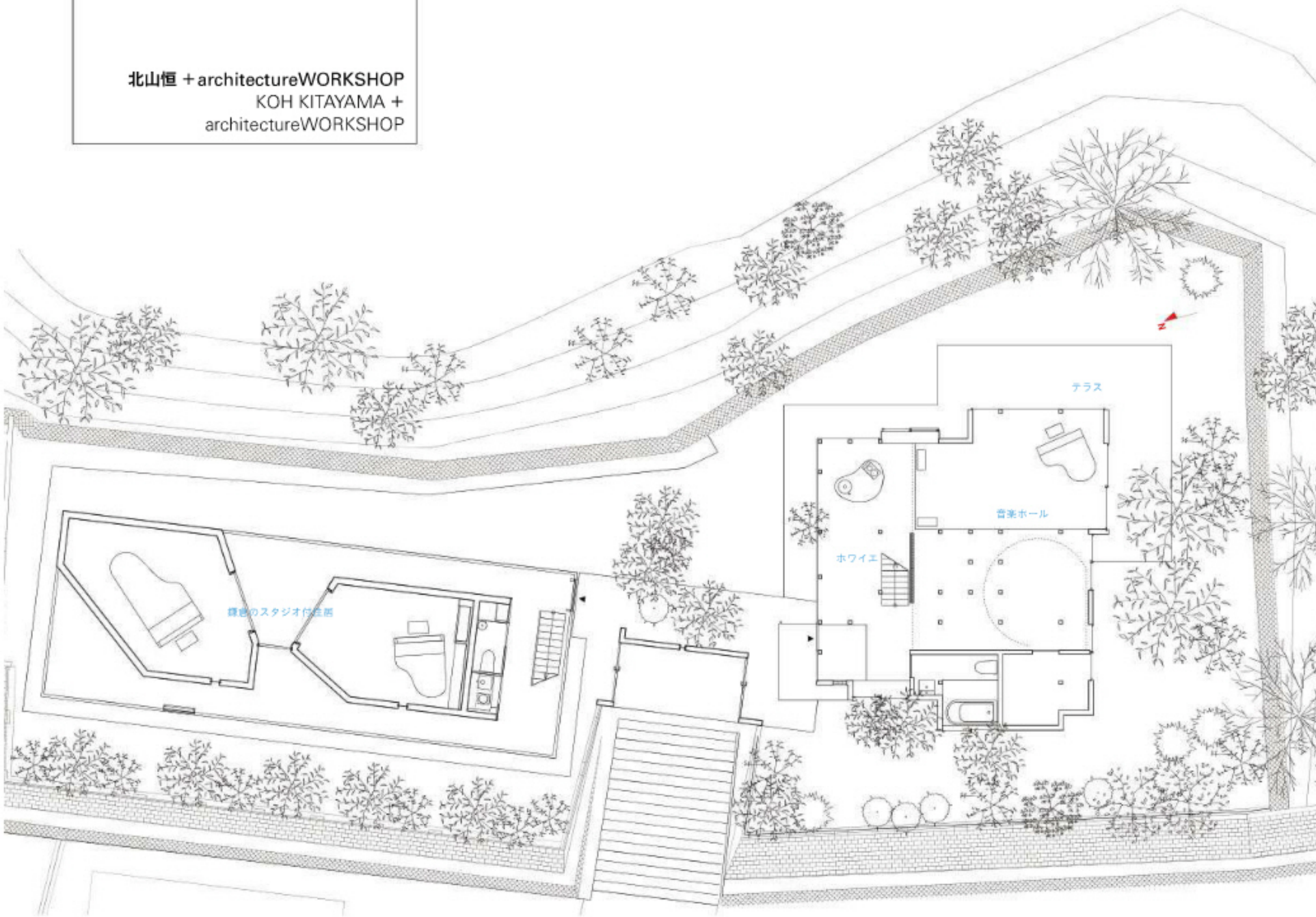
撮影／新建築社写真部
*写真提供：岸和郎+K. ASSOCIATES/Architects

配置図　縮尺1：1,000

テラスから見る住戸の夜景。建具は新設（改修前も同じ位置にFIX＋片開きのアルミサッシ建具が入っていた）。

鎌倉のリノベーション／音楽ホール付シェアハウス

Renovation Project in Kamakura
神奈川県鎌倉市

北山恒＋architectureWORKSHOP
KOH KITAYAMA +
architectureWORKSHOP

全体平面図　縮尺1：200（左は本誌0811掲載の「鎌倉のスタジオ付住居」）。隣り敷地の木造住宅を、音楽ホールとシェアハウスへ改修している。

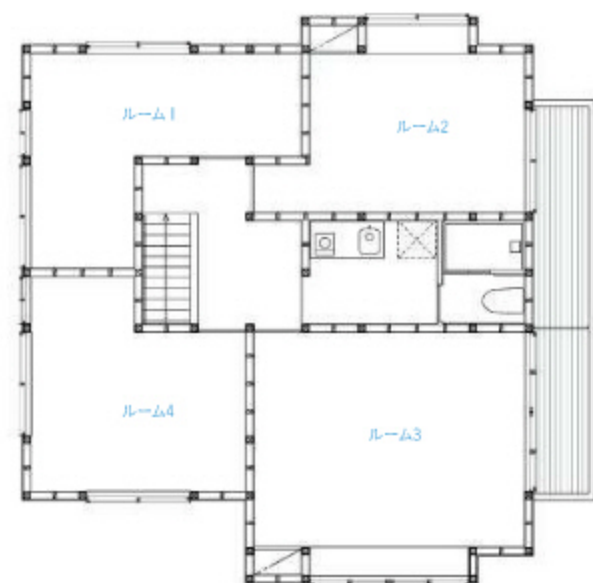
敷地へのアプローチ。高台に上がり右と左にそれぞれ玄関をもつが、内部敷地はつながっている。

改修前の建物。手前の空いている敷地部分に、いまはスタジオ付住居が建つ。*

Renovation Point

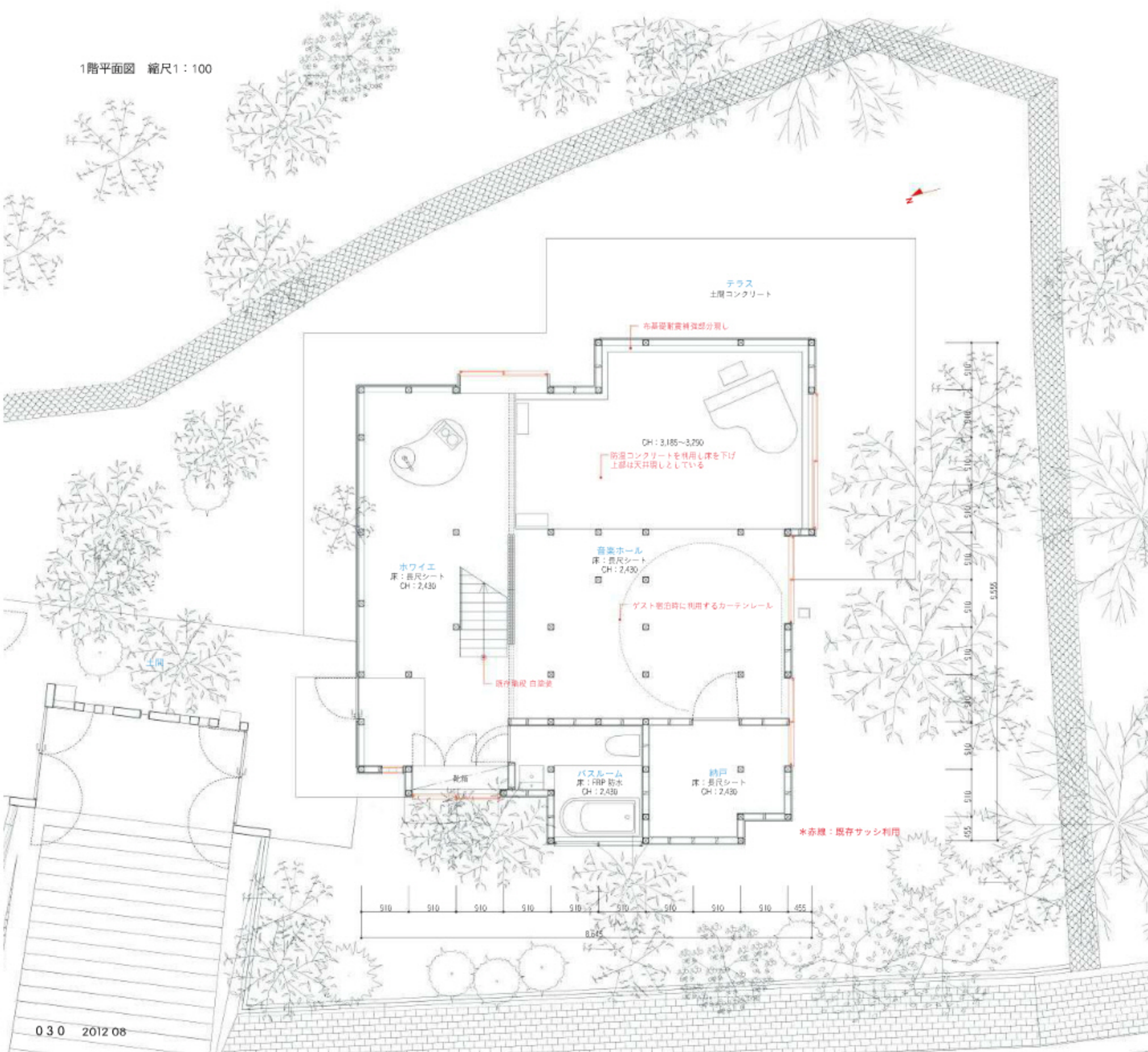
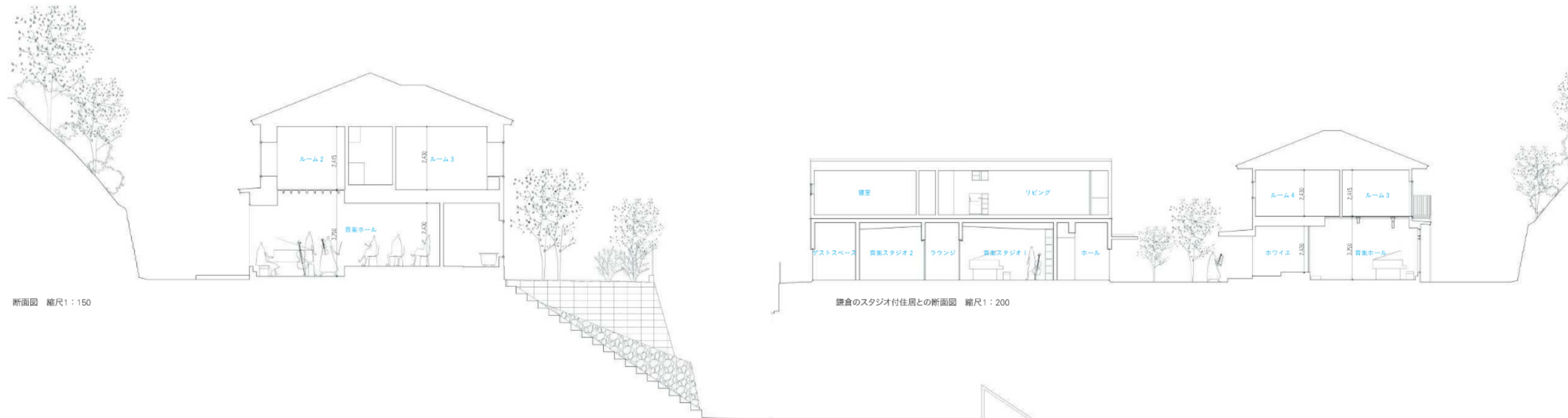
築40年の木造住宅を音楽ホールとシェアハウスへ

スタジオ付住居から、音楽ホール付シェアハウスを見る。
夜になると、地続きに光がつながって内部空間の見えが連続する。

ホワイエから、スタジオ付住居の方向を見通す。ガラス開口部面は、抜けが確保できるディテールが検討された。勾玉型の水廻りは、建主のアイデアから製作している。

2階平面図　縮尺1：150

改修前1階平面図　縮尺1：300

改修前2階平面図

1階平面図　縮尺1：100

1階ホワイエから音楽ホールを見る。ホワイエと音楽ホールの間には仕切り扉があり、開いたり閉じたりすることで、ホールとシェアハウスの使い方をコントロールできる。

断面図　縮尺1：150

鎌倉のスタジオ付住居との断面図　縮尺1：200

玄関から見る。既存階段は白くペイント。既存柱が連立する空間。

鎌倉の高台に建つ、音楽家のオーナーと4人の住人のための木造2階建て家屋の改修計画である。

4年ほど前に設計した、ピアノとバイオリンのためのスタジオをもつ「鎌倉のスタジオ付住居」（本誌0811）の隣地にある古い家屋を、このクライアントが購入したことで相談を受けた。

道路からの高低差が9mある高台に位置し、西側は擁壁と表面保護された法面からなる斜面、敷地を挟んだ東側と南側にはゴロタ石積みの擁壁と雑木林が広がる。周囲から少し隔絶されたようなこのふたつの敷地をひとつの大きな空間としてとらえ計画した。

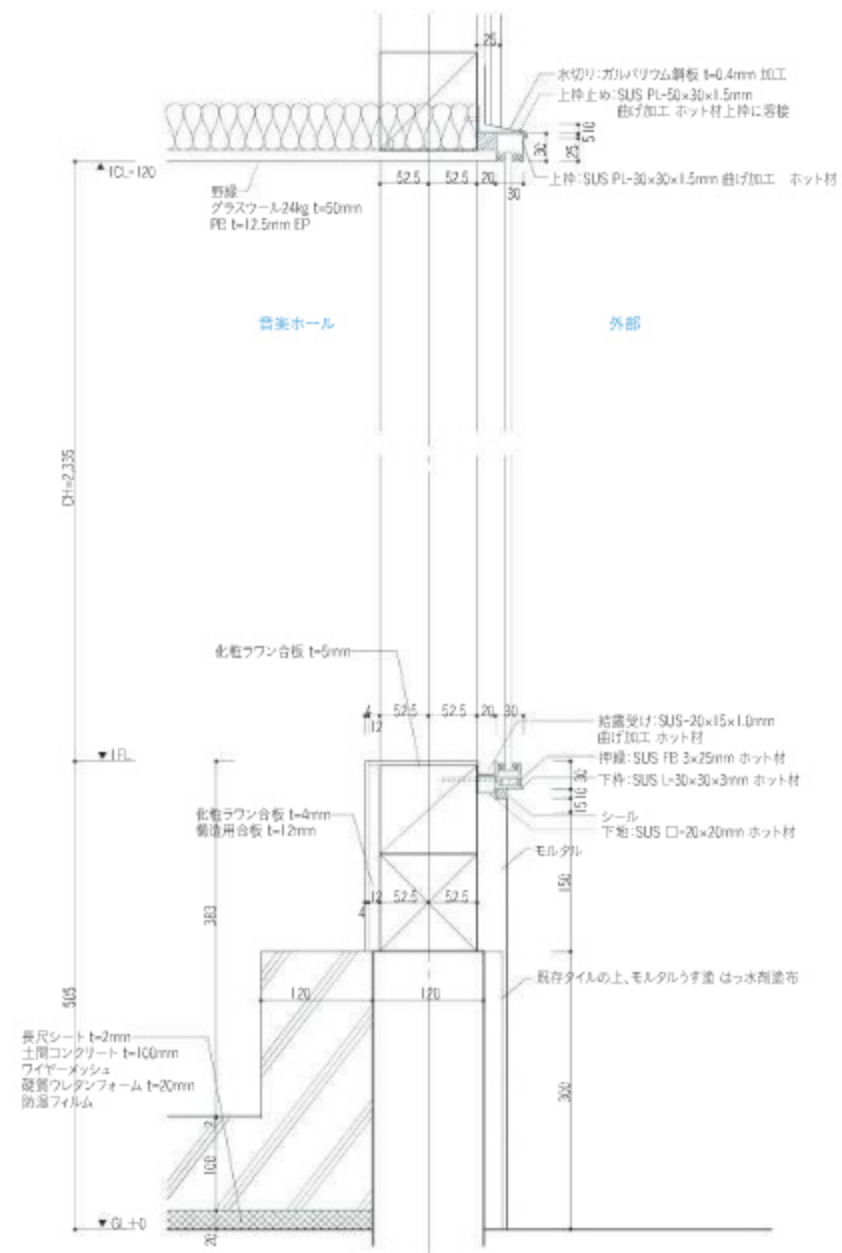
人びとにとって音楽はもっと身近に楽しめるものであってほしいと願うオーナーのお話もあり、1階を音楽ホールとパーティキッチン付きのホワイエ、2階を4人の住人のためのシェアタイプの住宅とした。

家屋は築40年、6LDKのごく普通の木造住宅であった。耐力壁が少なくバランスも悪かった1階は、外壁をほぼ取り払い適宜筋交いを入れ、パブリックな空気が流れるように透明感のある空間とした。隣のオーナー住居の1階部分は、RC壁からなるふたつのスタジオとその周囲に遮音体としての空気層（ホワイエ）をもつガラス嵌め殺しのファサードであるが、向い合わせとなる北面や、庭がつながっていく東面についてはファサードが連続するよう意識した。

内部は、壁を取り払って大きなホールとし、必要に応じて建具で空間を仕切ることができるようにしている。演奏部分については、柱を一部取り、梁をかけて補強し、また、防湿コンクリートを利用して床を下げ、天井も現しとすることで3mの天高を確保した。逆に客席部分については、もともと和室や押入れがあったため既存柱が連立していたが、演奏を聴いている人びとに、リノベーションをした空間であるという痕跡を感じることができるよう、あえてすべて残すこととした。また、模様の入った型ガラス、ガラスブロック、縦格子付きの階段など時を経たマテリアルを残すことで、新旧のコントラストを楽しめる空間とした。

一方、2階は4つの部屋と共有する簡単な水回りを設けたシェアタイプである。2階についてはできるだけ以前のプランを生かした計画とし、外壁や開口部については既存のものをそのまま利用している。1階にあるパーティキッチンとバスルームはゲスト用であるが、通常は2階のシェアタイプの住人も使用できるというプログラムである。

音楽を介して、この豊かな自然の中でさまざまな交流が生まれることを期待している。

（諸橋奈緒／architecture WORKSHOP）

1階音楽ホール開口部詳細図　縮尺1：10

鎌倉のリノベーション／音楽ホール付シェアハウス

所在地／神奈川県鎌倉市
主要用途／シェアハウス+音楽ホール
家族構成／4人+オーナー

設計
architecture WORKSHOP
　担当／北山恒　諸橋奈緒
構造　江尻建築構造設計事務所
　担当／江尻憲泰　佐藤拓真
設備　団設備設計事務所　担当／田中俊雄

施工
前川建設　担当／前川政一
大工　前川建設　担当／桑田昭光
設備　フュージョン・3　担当／安江慎一郎
電気　ハマファクトリー　担当／濱田礼
木製建具　野口建具店　担当／野口正男
金属製建具　横浜ステンレス工業
　担当／西村豊秋
硝子　森商店　担当／森荘一郎
塗装　昭研工業　金子由憲
屋根・外装　日本ウオール建設
　担当／加藤浩
内装　一色　担当／井澤正
家具　プロペラ　担当／前川幸子
カーテン　ダムダムハウス　担当／小倉光晴

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　布基礎

規模
階数　地上2階
軒高 6,275mm　最高の高さ 7,890mm
敷地面積　559.22m^2
建築面積　71.74m^2
（建蔽率12.83％ 許容60.00％）
延床面積　138.35m^2
（容積率24.74％ 許容160.00％）
1階　71.74m^2 ／2階　66.61m^2

工程
設計期間　2010年12月〜2011年9月
工事期間　2011年10月〜2012年2月

敷地条件
地域地区　第一種住居地域　準防火地域
道路幅員　西4m

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板
外壁／リシン吹付
開口部／アルミサッシ　ステンレスサッシ　木製サッシ

内部仕上げ
ホワイエ・音楽ホール
床／長尺シート
壁／ラワン合板
天井／ PB t=12.5mm EP
厨房機器／
　IHコンロ／ AEG HE30200B-B
シンク水栓金物／ Tform T-plus sfg73-0006
バスルーム
床・壁／ FRP防水
天井／ケイカル板t=6 NAD
バスタブ／ INAX YB-1510
シャワー水栓金物／ KVK KF800TMB
便器／ TOTO CS670B
洗面カウンター／サンワカンパニー テオレマアール
ルーム1・2・3・4
床／長尺シート
壁／ PB t=12.5mmの上ラワン合板
天井／ PB t=12.5mm EP
ミニキッチン・シャワールーム
床／長尺シート
壁・天井／ PB t=12.5mm EP

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／自然換気・機械換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部
*写真提供：architecture WORKSHOP

2階のルーム3。壁はラワン合板素地仕上げ。枠を使わずに納めている。

配置図　縮尺1：2,000

2階の廊下を上がったところから見返す。
室内ドア枠の四周にはピンチブロックを設け、シェアハウスとしての遮音性能を上げている。

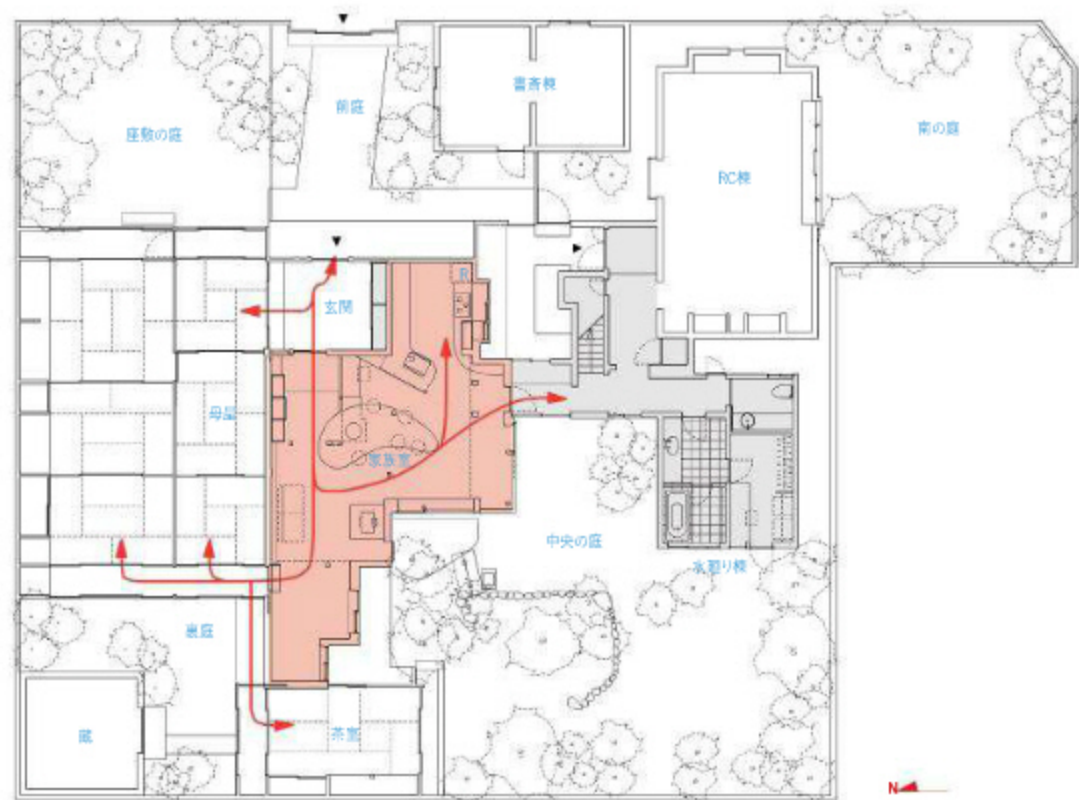
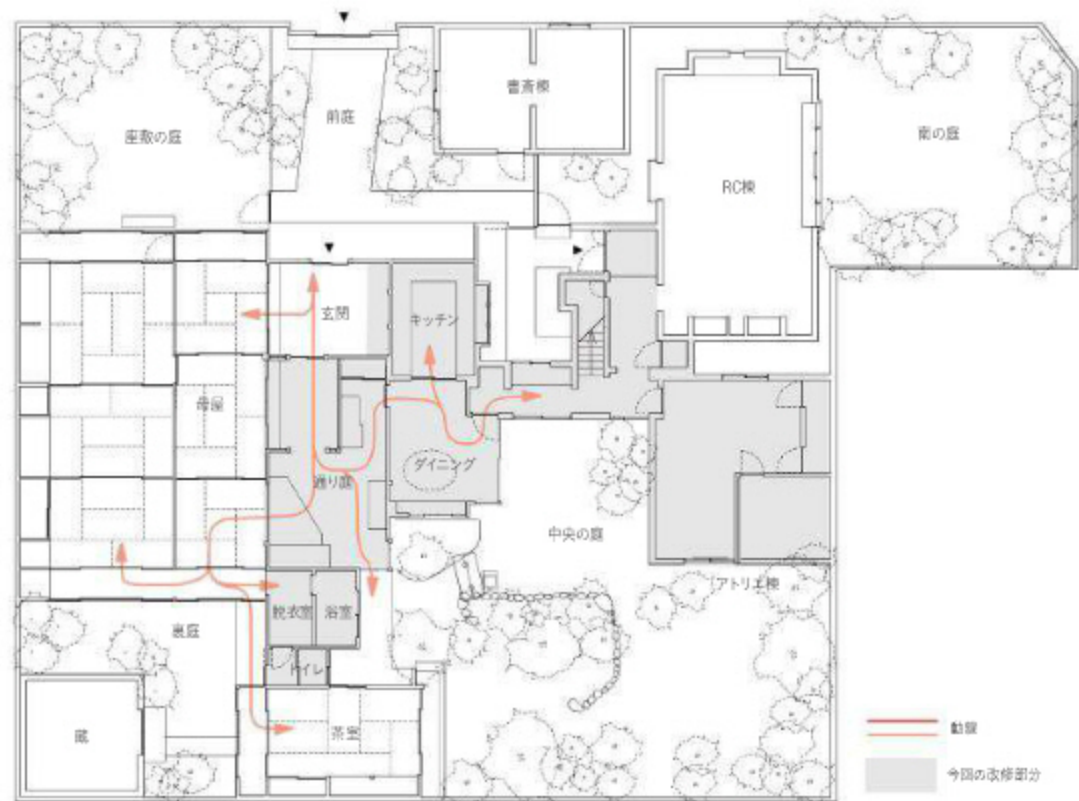
東寺の家

A house in Touji
京都市南区

長坂大／Mega
Dai Nagasaka／Mega

Renovation Point

裏方だった通り庭を家の中心にする

家族室。左が旧ダイニング、右が旧通り庭。壁で仕切られていた空間が、ひとつのテーブルでつなげられている。それぞれ異なる居室が連なっていた接続面を家型とし、3つの家型が集合する。架構は1カ所だけ新しく梁を入れて補強し、その他の構造体は残している。

1階平面図（家族室詳細は右頁）

改修前1階平面図　縮尺1：300

家族室南側から母屋方向を見る。正面奥、かつての通り庭の壁は天井際の開口によって光を採り込めるようになった。

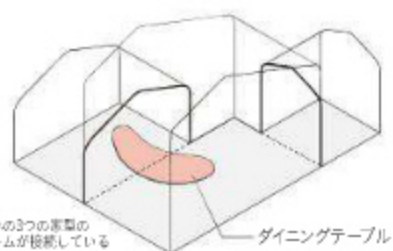
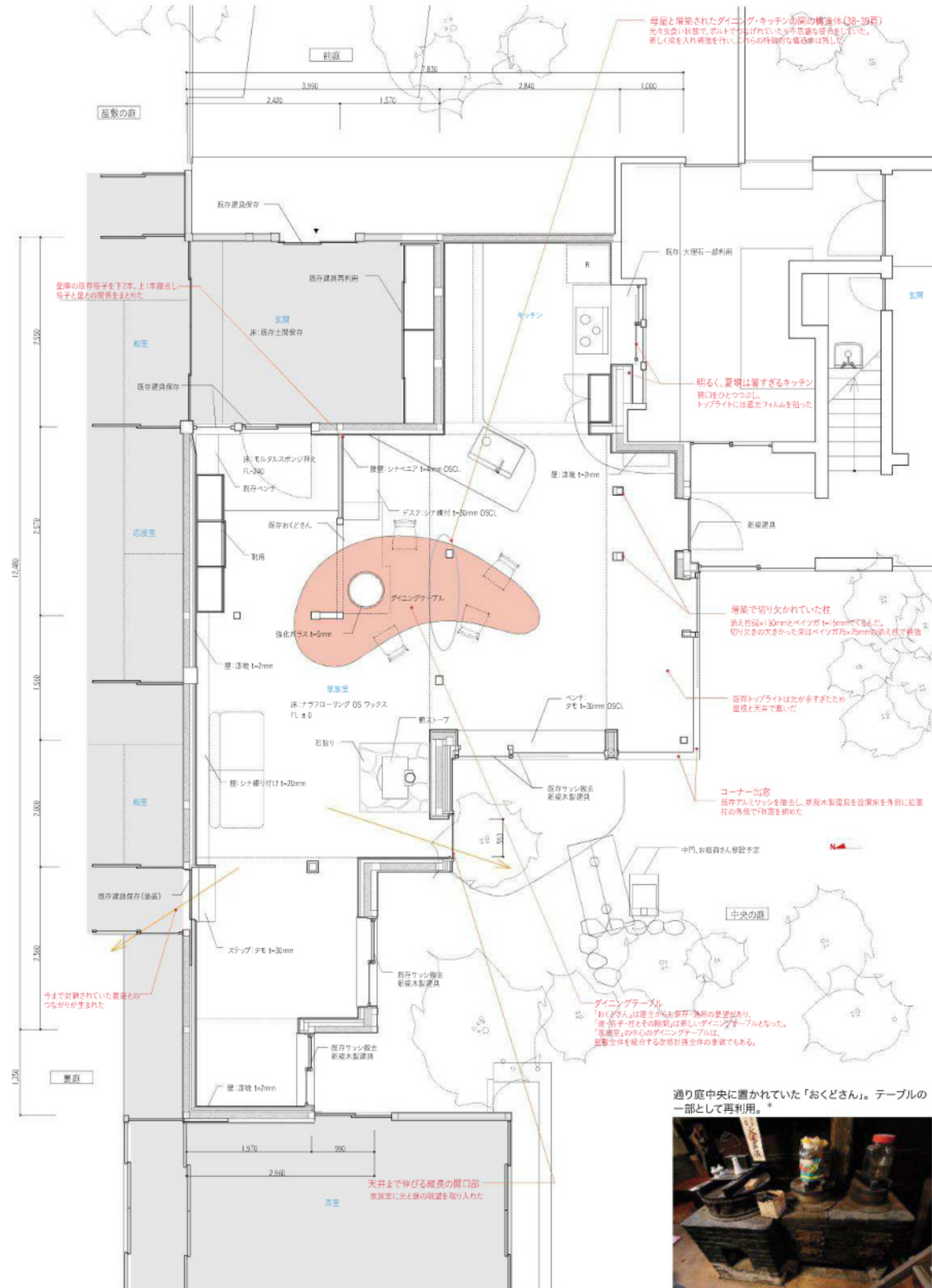
3つの家型 —— 偶然の出会い

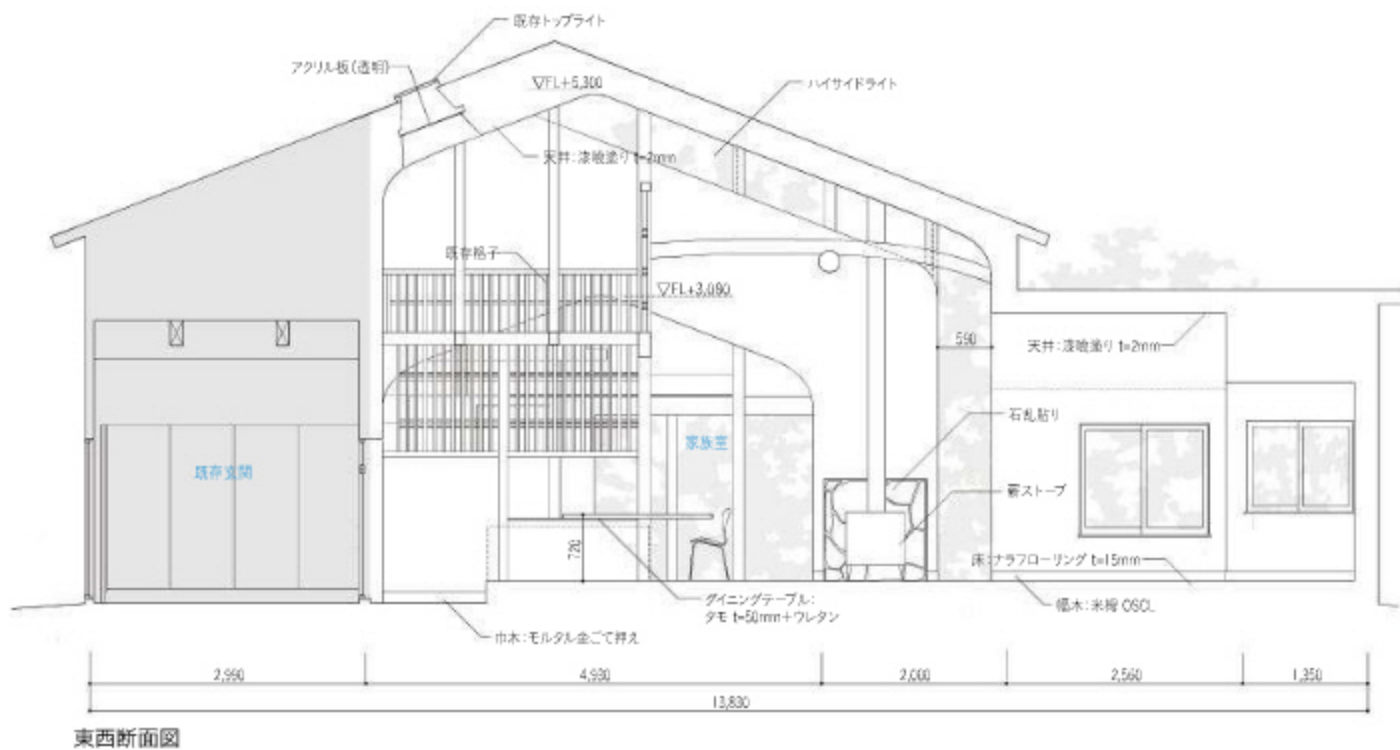
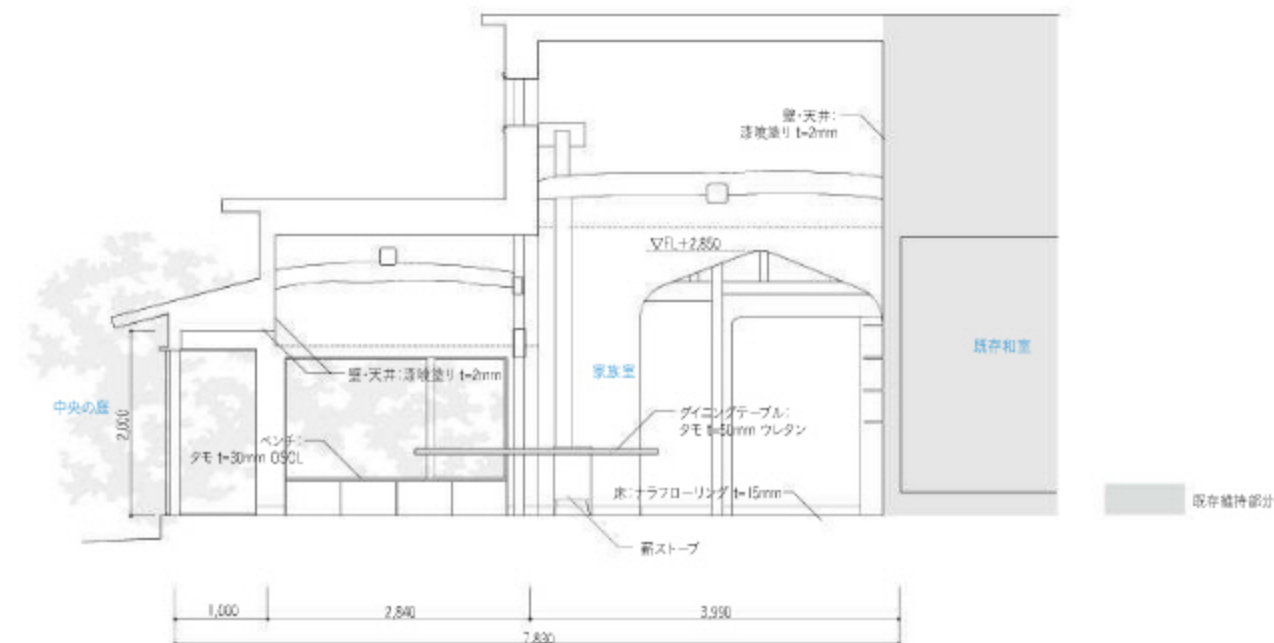
増築が繰り返された既存家屋の延床面積は約400m²。築100年以上の伝統的木造家屋の母屋、蔵、茶室、通り庭を介して増築されたダイニングキッチン、鉄筋コンクリートの増築棟（以下、RC棟）、アトリエ棟、書斎棟、5つの庭。これらを先代から引き継いだ建主にとって、ひとつひとつは誇りであっても全体としては負担でもあった。そもそも稼働していない部屋が多いのだ。

今回の改修では、RC棟1階に介護付きで暮らしている建主ご尊父の生活空間を保全しながら家屋群の一部を改修し、現在敷地外で暮らしている建主3人家族のための快適な住空間を得ることが期待された。

相談の結果、通り庭を除く母屋には基本的に手をつけず、そこを積極的に使う気持ちになる平面を考えることにした。母屋をはじめとする家屋全体が稼働しない原因は主にふたつあり、ひとつは単純に断熱不足でどこにいても寒い、暖房をつけても暖まらない、寒い部屋を通らないと暖かい部屋にいけないという問題。ふたつめは増築を繰り返したために目的室が遠い、肝心なところに開口部があって家具が置きにくいといった、動線と部屋やモノの位置関係の問題。いずれもせっかくの広さがマイナスに働いていた。

既存平面の複雑さとは対照的に、改修方針は単純だった。全体の結節点にあたる「通り庭」と「ダイニングキッチン」、そしてその横の水回りをくっつけて大きな家族室とし、ここを生活の中心とする、というものである。

通り庭はもともと裏方動線だが、今や敷地内に広がる建築群の中央に位置している。しかも、この屋敷全体を束ねる部屋にふさわしい天井高があり、ここに水回りを取り込むことで、中央の庭に南面する絶好の居住空間を得られる。断熱も充実した新しい家族室は、座敷や茶室、RC棟の寝室群、アトリエ棟を直した水回り、そして恵まれた庭の緑を携えて、豊かな日常生活を築いていくだろう。この家族室は、増築の経緯によって3つの家型が偶然出会い、それが結合した空間であることが分かるように表現した。（長坂大）

コンセプト図　3つの家型の偶然の出会い

家族室拡大平面図　縮尺1：75

通り庭中央に置かれていた「おくどさん」。テーブルの一部として再利用。*

東西断面図

南北断面図 縮尺1：100

中央の庭から見る夜景。

家族室から中央の庭方向を見る。既存ダイニングの家型と新しく設けた家型の間に、天井際の開口が設けられた。

東寺の家

所在地／京都市南区
主要用途／専用住宅
家族構成／祖父＋夫婦＋子供1人

設計
長坂大／Mega
担当／長坂大 児島愛

施工
藤木工務店 担当／鈴木重徳
木工事 しもむら 担当／下村竹生
設備 クボタ設備 担当／久保田一雄
電気 オカデン 担当／岡本久彦
左官 丸浩工業 担当／若林隆一
塗装 杉岡塗装 担当／杉岡浩一郎
家具 甲南フィック 担当／奥本卓司
ガラス工事 京都板硝子 担当／小川芳弘

構造・構法
主体構造 木造在来工法 鉄筋コンクリート造
基礎 布基礎(家族室)

規模
階数 地上1階(一部地上2階)
敷地面積 725.00m²
建築面積 360.3m²
(建蔽率49.7% 許容60%)
延床面積 383.2m²
(容積率52.8% 許容200%)
1階 328.6m² 2階 54.6m²

工程
設計期間 2010年12月〜2011年9月
工事期間 2011年10月〜2012年6月

敷地条件
地域地区 準防火地域 第二種住居地域
美観地区
道路幅員 東6m

外部仕上げ
屋根／既存瓦保存
外壁／既存外壁保存 一部焼スギ板 t=12mm
開口部／既存アルミサッシ利用 木製建具
外構／コンクリートスポンジ押え仕上げ

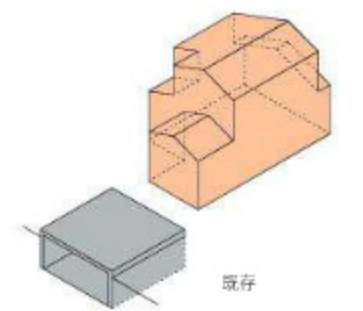
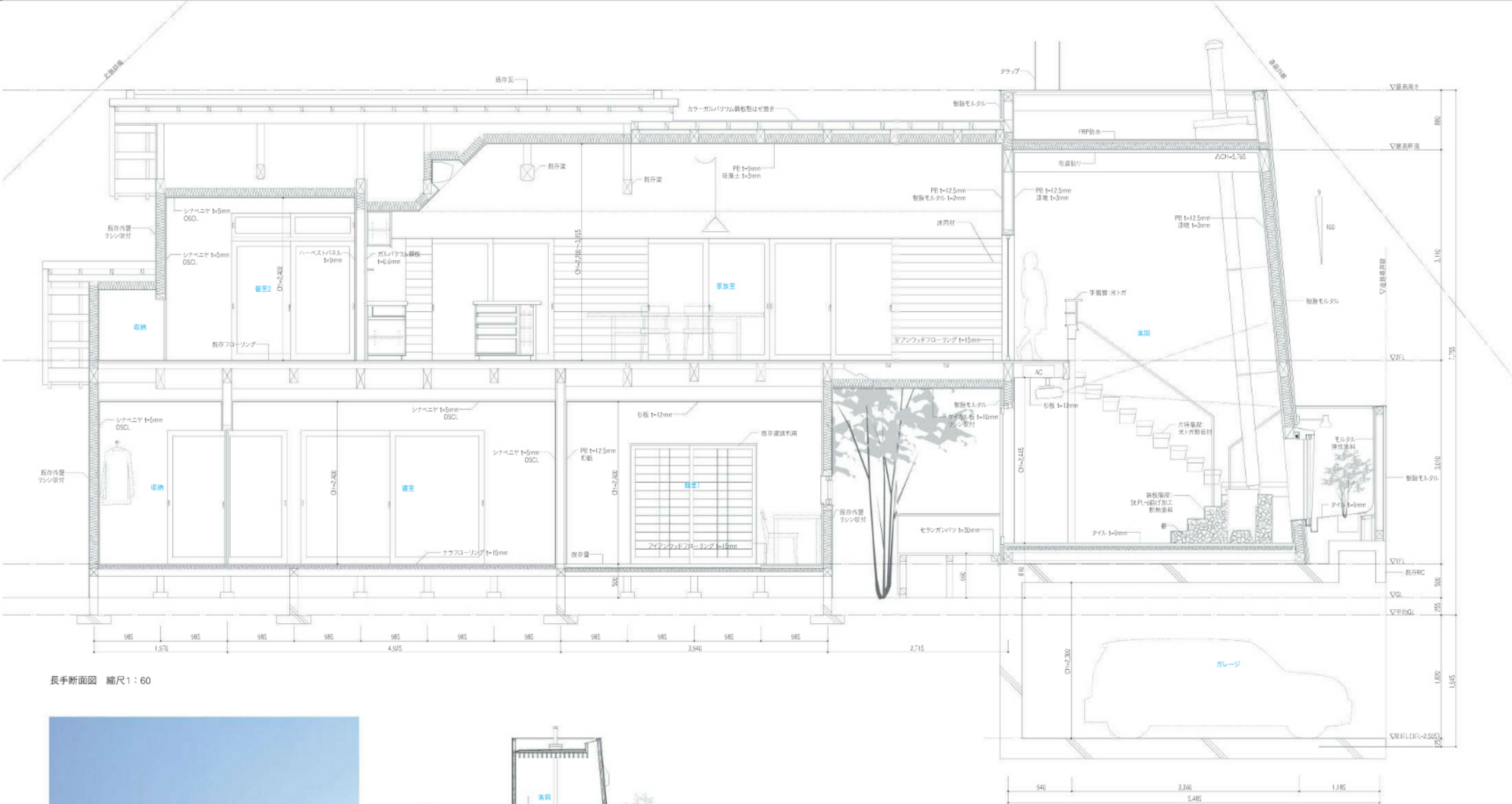
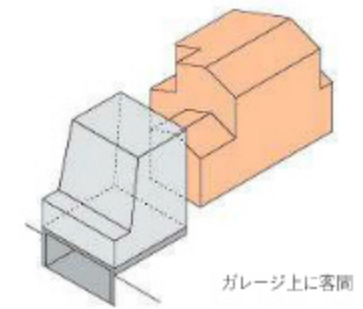
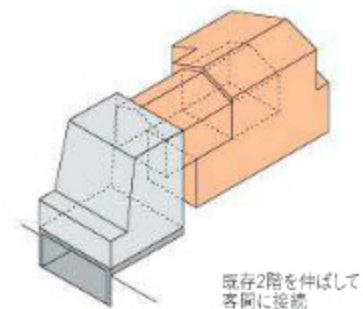
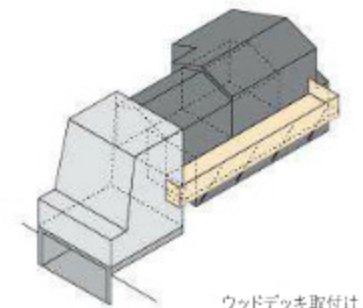
内部仕上げ

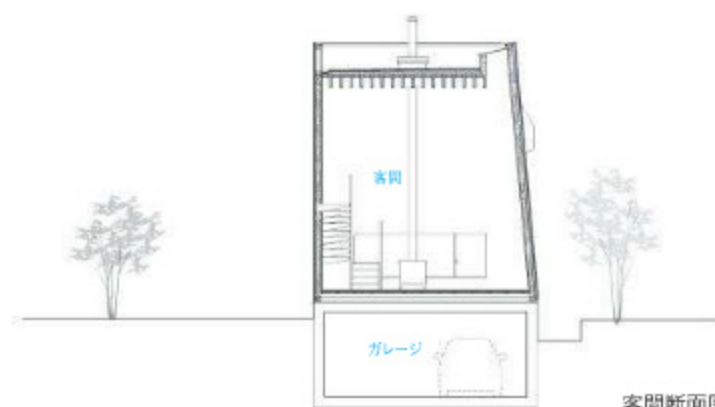
キッチン
床／ナラフローリング t=15mm OS ワックス
壁・天井／漆喰 t=2mm (プラネットジャパン)
厨房機器／
食洗器／リンナイ RKW-600
ガスコンロ／大阪ガス
換気扇(シェード)／サンワカンパニー
製作家具／
キッチンキャビネット 吊り戸棚：シナベニア
フラッシュ t=20mm OSCL
キッチンカウンタートップ：人造大理石
t=12mm加工
照明／ダウンライト MAXRAY
建築金物／シンク水栓金物／TOTO
TKHG32PB

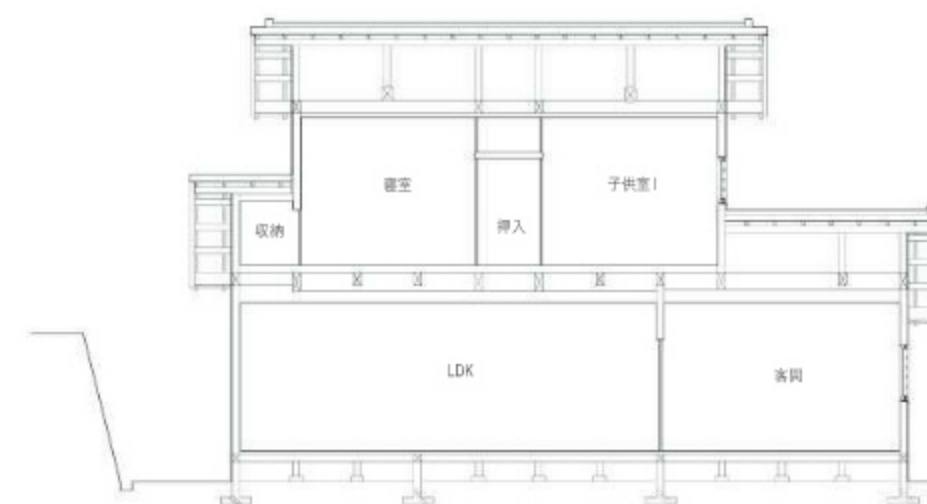
家族室
床／ナラフローリング t=15mm OS ワックス
壁・天井／漆喰 t=2mm (プラネットジャパン)
製作家具／
靴箱：シナベニアフラッシュ t=20mm OSCL
ダイニングテーブル：タモ t=50mm ウレタン
棚：シナ練り付け t=20mm OSCL
吊り戸棚：シナ練り付け t=20mm OSCL
薪ストーブ／ダッチウエスト FA225
照明／ペンダント：パナソニック ペンダント
(小)：ヤマギワ スポットライト：パナソニック

設備システム
空調 暖房方式／ルームエアコン
冷房方式／ルームエアコン
換気方式／パイプファン
給排水 給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道直結
給湯 給湯方式／ガス給湯器

写真提供／Mega
*撮影／Mega

玄関方向を見る。ダイニングテーブルに再利用している「おくどさん」は、通り庭とダイニングを分けていた壁に沿って同じ場所に位置していた。右奥はキッチン。突き当たり奥は既存の木製扉。その奥に母屋の玄関があり、扉は本来その玄関から手前通り庭への入口だった。扉の高さは1,780mm、小扉は1,400mm。

長手断面図　縮尺1：60

北西側から見る外観。既存ガレージの上に客間が増設された。

客間断面図　縮尺1：250

家族室断面図　縮尺1：250

改修前長手断面図　縮尺1：150

南側外観。ガレージ上の増設の他に、既存家屋の改修とウッドデッキを新設。離れていたガレージと母屋をつなげ、アクセス動線をつくりつつ南側の庭を楽しめる。

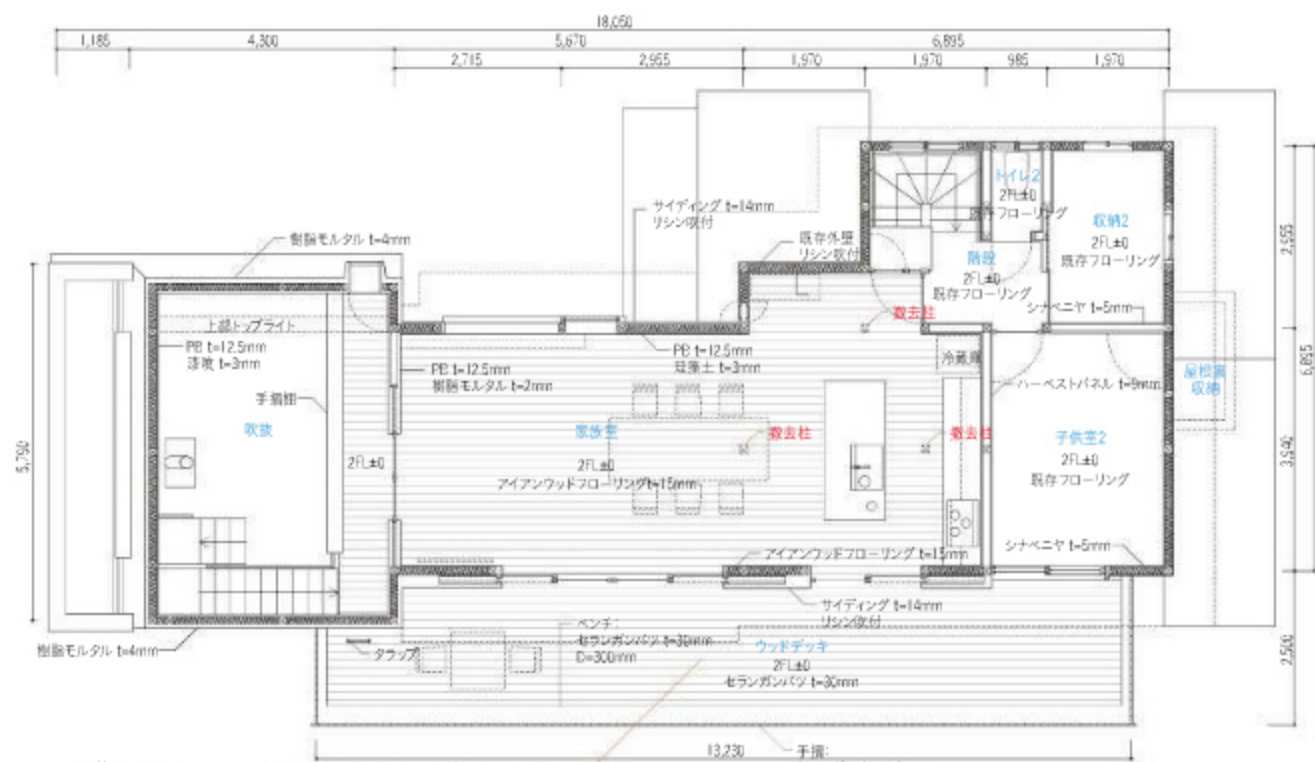
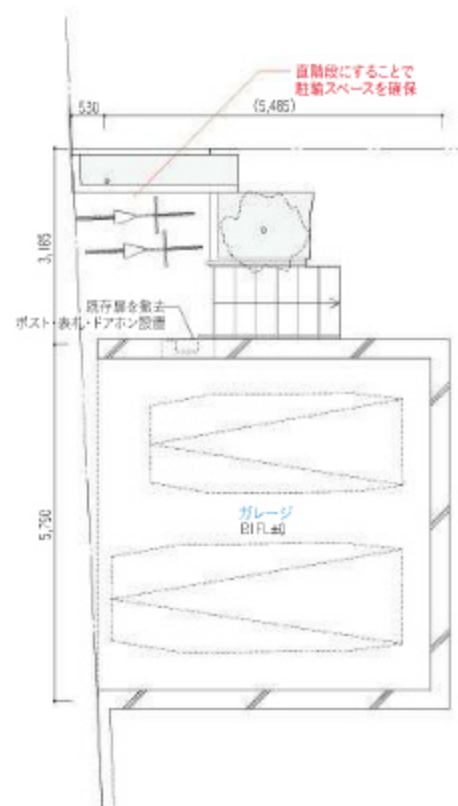
「ガレージ上」のリサイクル

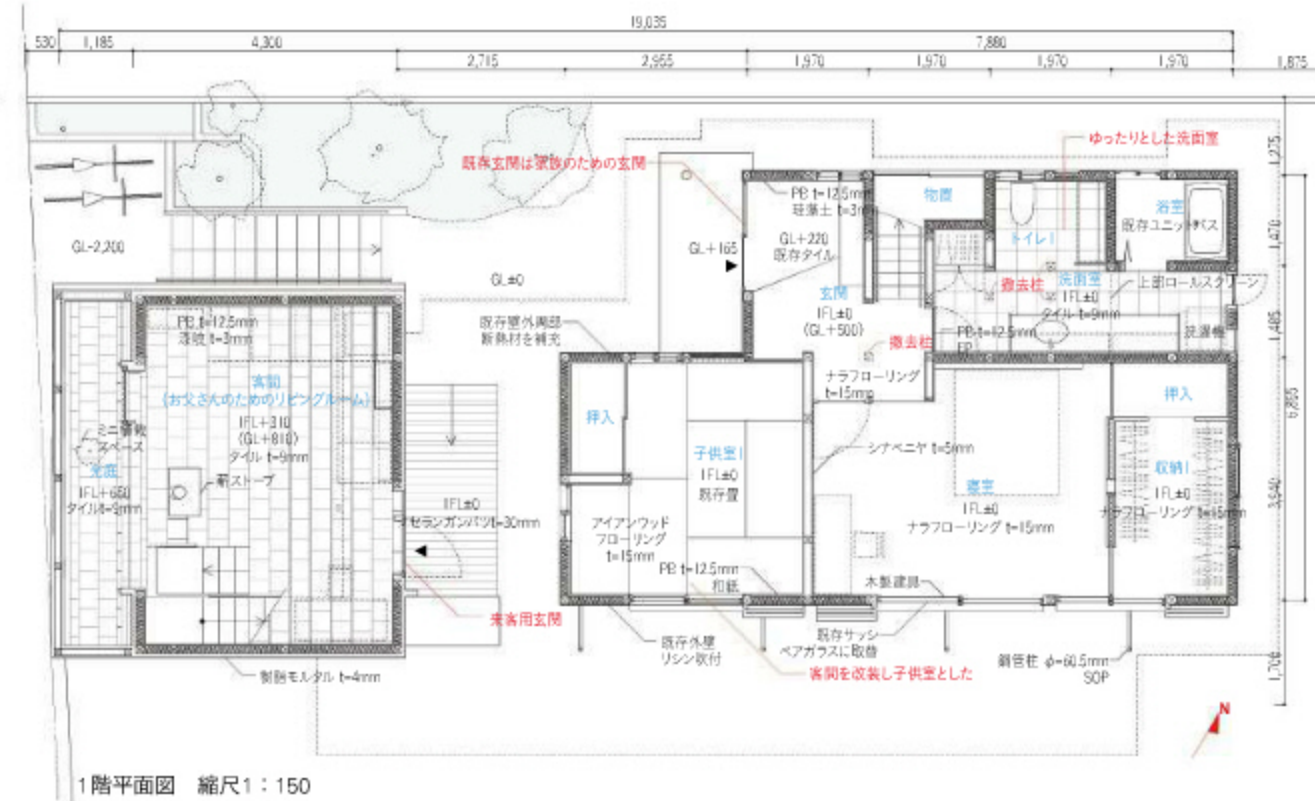
鉄筋コンクリートのガレージ付き住宅の増改築である。建主は3年前に古家（母屋：1990年築、ガレージ：1992年築）付きで敷地を購入し、ふたりの子供の成長を受けて増改築を行うことにした。最終的な計画内容は、既存ガレージの上への増築、既存家屋の改修と2階の拡張、そして大きなウッドデッキの新設である。特にガレージ上の増築は、既存資産であるRCの構造体を基礎構造として再利用することと、敷地内建築物の適性配置というふたつの意味があった。

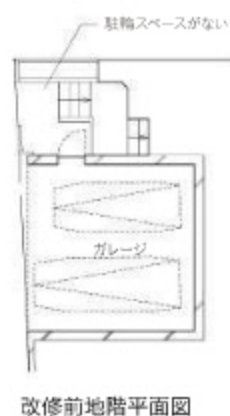
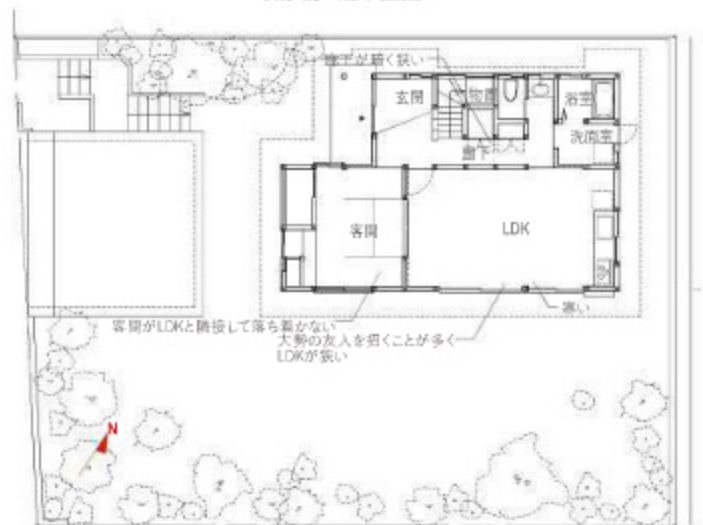
地面から約500mmの高さで出っ張った既存ガレージ上部のコンクリートは、母屋と離れていることもあって殺風景な場所になっていた。ここに増築部分を建てて既存棟につなげれば、新しい住まいは敷地長辺南側の庭をすべて前庭として楽しむことができる。

宅地造成された住宅地の鉄筋コンクリートのガレージは、その上部に木造2階建てが建てられる強度を備えている場合がある。今回のケースでは構造計算書もきちんと保管されており、それにコンクリート試験（コンクリート圧縮強度調査、鉄筋探査調査）の結果を加えて、既存構造物の安全性を確認することができた。

ガレージ上の客間は「お父さんのためのリビングルーム」で、新しい来客用玄関でもある。もちろん子供たちも使うが、家族とは別に友人たちと夜遅くまで賑やかに過ごすこともできる。家族室は、既存の6畳間をガレージ方向に橋懸かりに延ばした部屋で、新築と既存改修部分をつないでいる。アプローチと南の庭は、この家族室の下を通って行き来できる。幅2.4m、全長13mのウッドデッキは、家族室の機能を充実させながら、造形的に新旧ふたつの建築物を結び付けている。　　　　　　　　　　（長坂大）

左右ともに改修前の外観。*／左：42頁の写真と対応。コンクリートのガレージの上は更地だった。／右：上の写真と対応。

2階平面図

地階（ガレージ）平面図

1階平面図　縮尺1：150

改修前2階平面図

2階家族室と、新設されたウッドデッキ。

改修前地階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：300

精華町の家

所在地／京都府相楽郡精華町
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
長坂大／Mega
　担当／長坂大　磯部絵理
構造　下山建築設計室　担当／下山聡
インテリアコーディネート　Mega
　担当／長坂喜代子

施工
担当　ミナミ建設　担当／南栄成
木工事　南工務店　担当／南秀興
設備　菊池設備　担当／上村成敏
電気　共立電業　担当／五反田真一
木製建具　吹ノ戸建具店　担当／吹ノ戸勇
家具　大和家具製作所　担当／高原修治

構造・構法
主体構造　木造在来工法（一部鉄筋コンクリート造）
基礎　既存利用（既存母屋：布基礎　増築部：鉄筋コンクリートガレージ）

規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,875mm　最高の高さ 7,755mm
敷地面積　334m²
建築面積　127.59m²（増築部分：58.72 m²）
　（建蔽率38.21％　許容40％）
延床面積　196.78m²（増築部分：55.77 m²）
　（容積率49.53％　許容60％）
　地階　31.38m²（増築部分：0 m²）
　1階　90.57m²（増築部分：24.60m²）
　2階　74.83m²（増築部分：31.17m²）

工程
設計期間　2011年3月〜2011年9月
工事期間　2011年10月〜2012年3月

敷地条件
地域地区　市街化区域　第一種低層住居専用地域　第一種高度地区　法第22条指定区域
道路幅員　西6m　　駐車台数2台

工事費

建築	22,039,000円
電気	2,439,000円
空調	2,449,000円
外構・造園	3,190,000円
衛生	1,359,000円
製作家具・什器	3,035,000円
その他	2,589,000円
総工費	37,100,000円
坪単価	740,000円

外部仕上げ
屋根／FRP防水　カラーガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪はぜ葺き　既存瓦
外壁／樹脂モルタル 撥水剤　サイディング リシン吹付け　既存外壁 リシン吹付け
開口部／木製建具　既存アルミサッシ（ペアガラスに取り替え）
外構／ウッドデッキ：セランガンバツ

内部仕上げ
客間（お父さんのためのリビングルーム）
床／タイル t=9mm
壁／漆喰 t=3mm
天井／布袋貼り　構造現し
階段／鉄板階段：St.PL t=6mm 断熱塗料
　段板：米トガ無垢材　手摺：St角棒 断熱塗料
薪ストーブ／メトス
照明／スポットライト：DAIKO
　ダウンライト：パナソニック

1階光庭
床／タイル t=9mm
壁／モルタル 弾性塗料 t=1mm
照明／スポットライト：DAIKO

2階家族室
床／アイアンウッドフローリング t=15mm ワックス
壁／珪藻土 t=3mm
　アイアンウッドフローリング t=15mm ワックス
　シナベニヤ t=5mm OSCL
天井／珪藻土 t=3mm　シナベニヤ t=5mm OSCL
ダイニングテーブル／米トガ（製作）
厨房機器／
　食洗器／Miele
　ガスコンロ／リンナイ
　換気扇（シェード）／富士工業
　キッチン用混合水栓／TOTO
照明／ペンダントライト：オーデリック
　スポットライト：DAIKO

玄関
床／ナラフローリング t=15mm　既存タイル
壁／珪藻土 t=3mm　シナベニヤ t=5mm OSCL
天井／シナベニヤ t=5mm OSCL

設備システム
空調　暖房方式／薪ストーブ
　　　タオルウォーマー
　　冷房方式／エアコン
　　換気方式／パイプファン
給排水　給水方式／公共上水道直結
　　排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

写真提供／Mega
*撮影／Mega

増設された客間。天井高を5,765mmとし、閉じていながら広がりのある空間を意図。左の開口は光庭へ、右上の廊下は家族室に接続する。

客間の階段。薪ストーブと同じ断熱塗装の下4段は薪置き場を兼ねている。*

2階リビングからダイニング方向を見る。既存天井をとり小屋組を見せるだけでなくアーチ型とし、スキップフロアでつながる居室に統一感をもたせている。FLの差は570mm。壁は漆喰塗り。

「スキップ・ヴォールト」の部屋

木造2階建て（1980年築、1989年2階一部増築）のリノベーションである。建主はこの古家付きの土地を購入して改修し、学生時代からこつこつと集めていたモダンデザインの家具や照明器具を置いて楽しめるような空間を希望していた。

既存住宅は1階LDKの標準的なプランで、2階南側は眺望がよく、東南角にはそれを意識した出窓が付いていた。その出窓がある2階東側は、もとの持ち主による増築で床が約600mm高く、平面的にも構造的にもさまざまなズレが発生していた。

これらの条件をふまえて2階をスキップフロアのワンルーム・LDKとすることにした。そこから天井高を確保するために既存天井を取り、小屋組を見せ、屋根裏に断熱材を入れるまでは改修工事として必然的だったが、そのまま天井を仕上げた時に生まれる家型断面ではなく、何かもう一歩踏み込んだ表現がほしいと考えた。

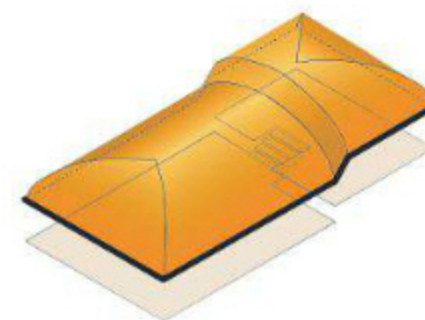
そこで、外観にあったアーチをきっかけに、その曲率と2階の断面形状からサイクロイド曲線に近い断面のヴォールト天井とした。そのアーチを2FL＋1,500mmという低いレベルから始めることで、ヴォールト形がより強く体感できる空間表現となったように思う。それを床と同じようにスキップさせることで「スキップ・ヴォールト」の部屋が誕生した。　（長坂大）

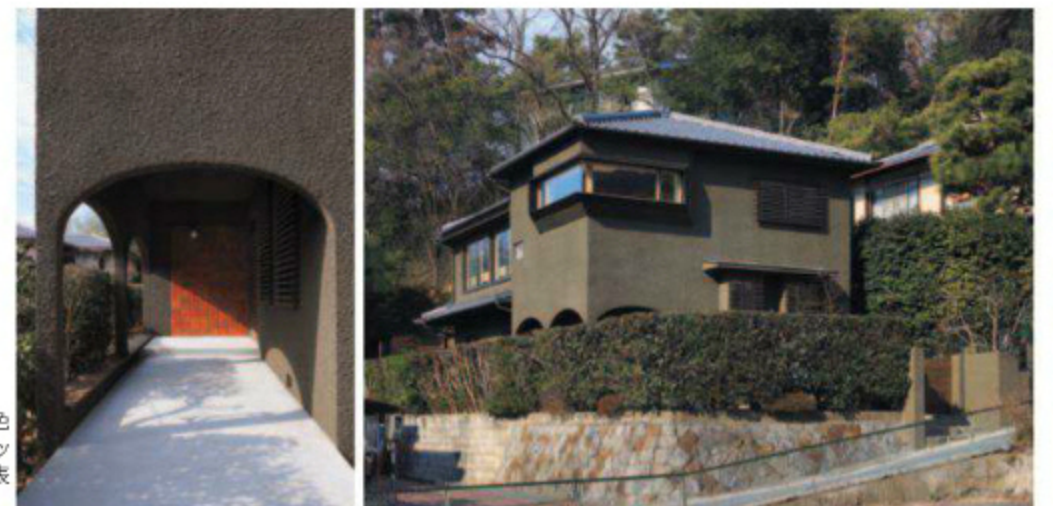
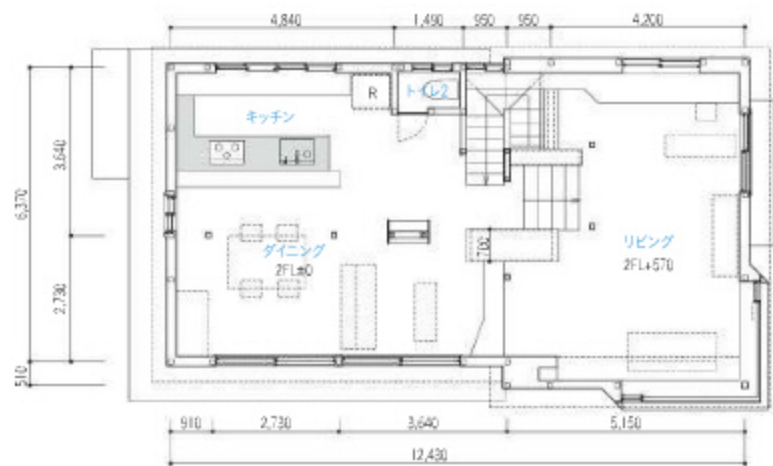
北白川の家

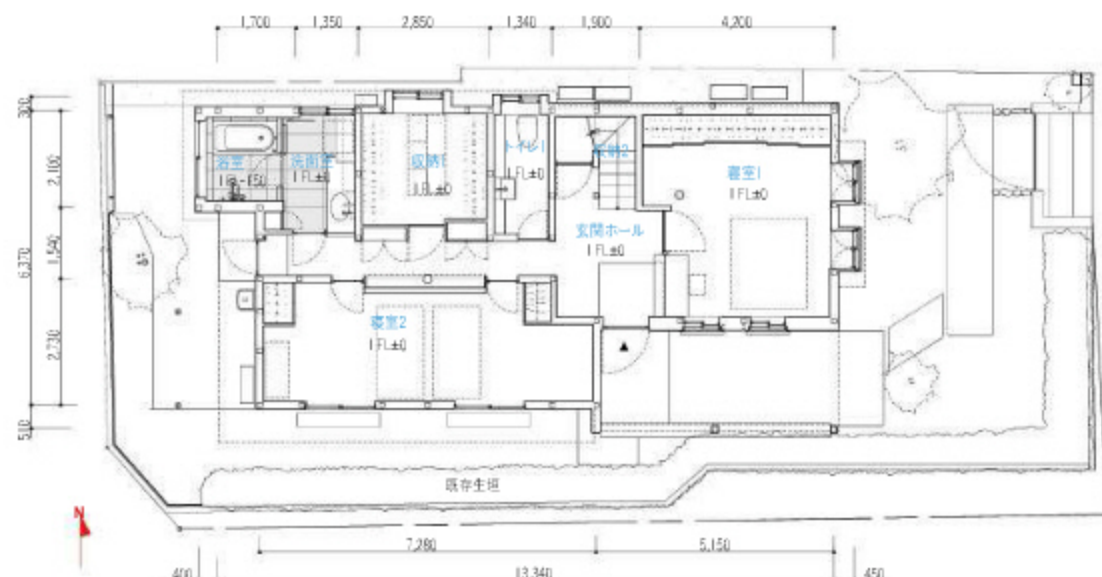
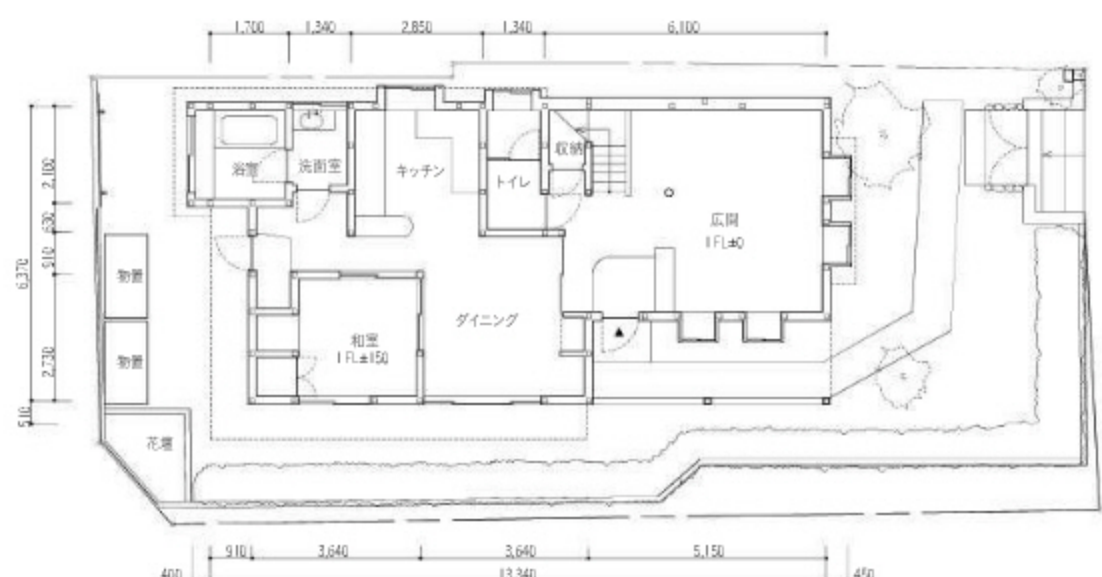
A house in Kitashirakawa
京都市左京区

長坂大／Mega
Dai Nagasaka／Mega

Renovation Point

「スキップ・ヴォールト天井」で空間を包む

コンセプト図　スキップ・ヴォールト

上：改修前の外観。*／右下：改修後外観。南東側から見る。外壁は濃色を吹付け、アルミ格子は木製に交換して雨戸は撤去。出窓回りに新しいエッジを追加、アーチはゆがみを修正。／左下：アプローチを見る。室内の表現は既存のアーチをモチーフにしてつくられた。

2階平面図

改修前2階平面図

1階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

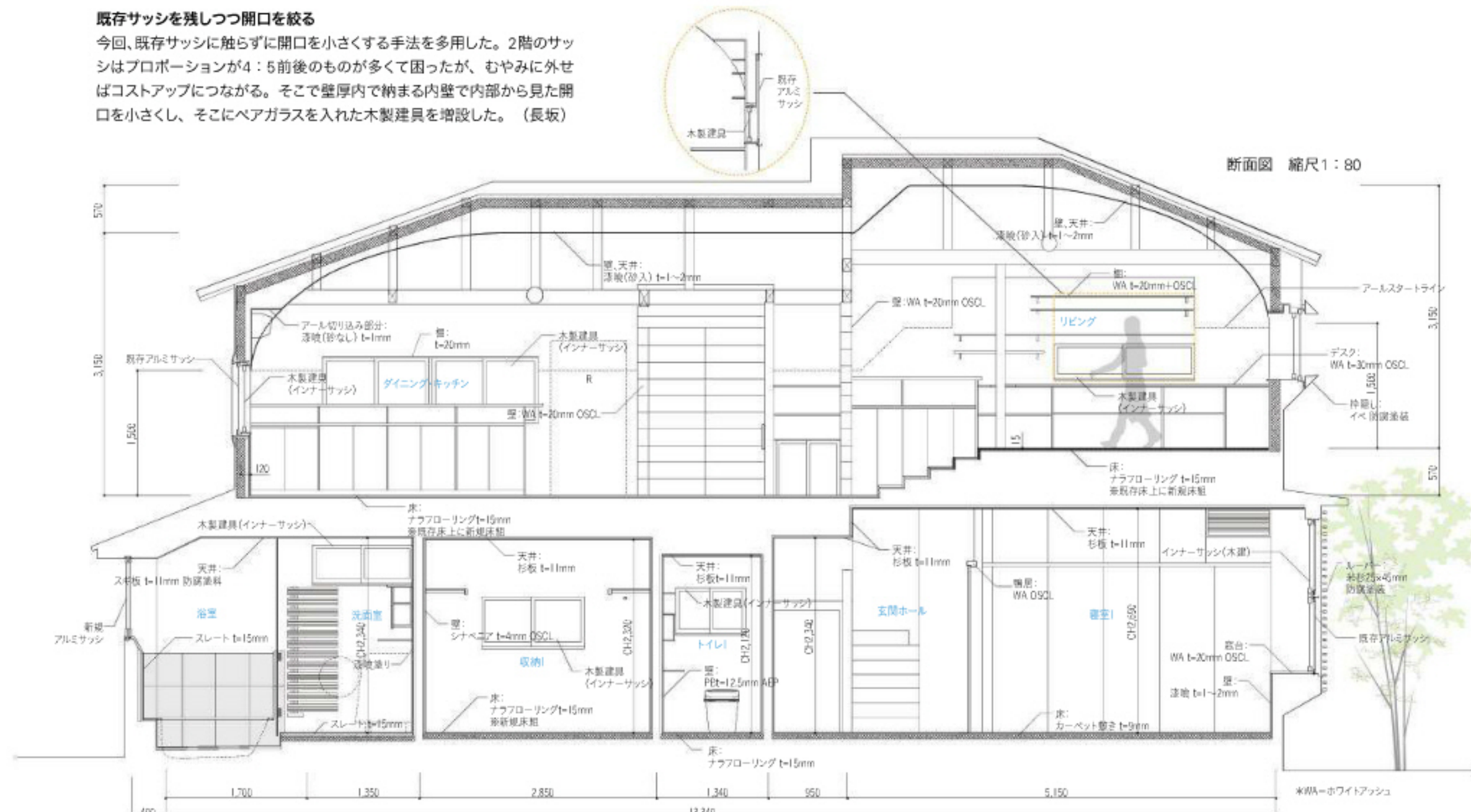
北白川の家
所在地／京都市左京区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
長坂大／Mega
　担当／長坂大　児島愛
施工
サクジエ務店　担当／清水昭　塩川直人
設備　石原工業　担当／石原雅幸
電気　コスモテック　担当／北森照幸
塗装　クリエイト和幸　担当／上野和幸
左官　西浦左官　担当／西浦文敏
造作家具　イチキ　担当／市来英
外構・造園　双葉造園　担当／久保豊
構造・構法
主体構造　木造在来工法
基礎　布基礎
規模
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,480mm　最高の高さ 8,080mm
敷地面積　245.36m²
建築面積　91.62m²
（建蔽率37.3％　許容50％）
延床面積　159.63m²
（容積率65％　許容80％）
1階　75.12m²　2階　85.51m²
工程
設計期間　2011年2月〜2011年6月
工事期間　2011年6月〜2011年12月
敷地条件
地域地区　法第22条地域　第一種住居専用地域　第二種風致地区
道路幅員　東4m
外部仕上げ
屋根／既存瓦保存
外壁／既存外壁 樹脂モルタル吹付け t=10mm
開口部／既存アルミサッシ利用（一部新規アルミサッシに取替）　木製建具
外構／コンクリートスポンジ押え仕上げ
内部仕上げ
キッチン
床／ナラフローリング t=15mm ウレタン塗装
壁・天井／漆喰 t=2mm（ニッシンイクス）
厨房機器／
　食洗器／Miele
　電子コンベック／リンナイ
　ガスコンロ／リンナイ
　換気扇（シェード）／Acca style
　製作家具／キッチンキャビネット：
　　シナベニアフラッシュ t=20mm
　カウンタートップ：SUS t=1mm HL仕上げ
照明／スポットライト：パナソニック
建築金物／
　シンク水栓金物／TOTO
リビング　ダイニング
床／ナラフローリング t=15mm ワックス
壁・天井／漆喰 t=2mm（ニッシンイクス）
製作家具／戸棚：シナベニアフラッシュ OSCL
　t=20mm　天板：ホワイトアッシュ OSCL
照明／スポットライト：パナソニック
　その他施主支給
建築金物／ドアノブ：WEST
寝室1
床／カーペット t=9mm
壁／漆喰 t=2mm
天井／スギ板 t=11mm
製作家具／デスク：ホワイトアッシュ OSCL
照明／東西電気産業 モーガルソケット ボール球
　ペンダント：施主支給
建築金物／ドアノブ：WEST
寝室2
床／ナラフローリング t=15mm ワックス
壁／シナベニア t=4mm OSCL
天井／スギ板 t=11mm
照明／スポットライト：パナソニック
　その他施主支給
建築金物／ドアノブ：WEST
浴室　洗面室
床・壁／スレート（理邦）t=15〜20mm
　漆喰 t=1〜2mm（プラネットジャパン）
天井／スギ板 t=11mm 防腐塗料
製作家具／吊り戸棚：シナフラッシュ t=20mm
照明／パナソニック
建築金物／
　バスタブ／大和重工　CASTIE
　シャワー水栓金物／TOTO
　混合水栓／HANSGROHE
　その他／パネルヒーター：ピーエス工業
設備システム
空調　暖房方式／ルームエアコン
　冷房方式／ルームエアコン
　換気方式／パイプファン
　その他／床暖房
給排水　給水方式／公共上水道直結
　排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

写真提供／Mega
*撮影／Mega

リビング。天井の高さは3,150mm。左右で部屋の奥行きが違うためわざわざ壁をふかした。地窓はふかした効果をさらに生かすための設えとしている。

既存サッシを残しつつ開口を絞る
今回、既存サッシに触らずに開口を小さくする手法を多用した。2階のサッシはプロポーションが4：5前後のものが多くて困ったが、むやみに外せばコストアップにつながる。そこで壁厚内で納まる内壁で内部から見た開口を小さくし、そこにペアガラスを入れた木製建具を増設した。（長坂）

断面図　縮尺1：80

椹木町通の町家

Town House in Sawaragicho

京都市上京区

荒谷省午建築研究所

Shogo Aratani Architect & Associates

Renovation Point

新旧の対比に“図と地”の関係を与える

京都・二条城のすぐ近く、古い町家がいまだ数多く残る地域である。ほかと同様、ここもかなりの歴史を経てきた町家で、築80年にもなる。

これまでにも幾度か改修されてきたようで、クライアントがこの家を手に入れた時にはすでに10年ほど前に大幅な化粧直しが施されており、いわゆる京都の町家としての魅力は封じ込められてしまっていた。それでも狭い間口に長い奥行、そして坪庭という典型的な町家の形式は残されていて、ほぼ手つかずの2階へ上がるとかつての姿を垣間見ることができた。そこでまずは町家としての魅力を取り戻すことが大前提となった。

過去の改修による壁に隠されていた旧い真壁を現し、入口から奥の坪庭までの通り土間を復活させ、かつての町家の姿を踏襲する。そしてこのような古い町家に共通する課題としては、構造の問題がある。ここも例にもれず、解体してみると土台や柱脚は腐り、2階床が波打つほどに梁は垂れ下がっていた。これらの補強方法を空間構成とうまく呼応させることが大きなテーマとなった。

具体的な補強として、損傷の激しい部材は取り替え、基礎は一部打ち直した。また脆弱な軸組については28mmの構造用合板による強固なボックスを内接させている。これによりボックスの壁は耐力壁となり、床や天井は水平剛性面となる。そしてそのボックスの内部は新たな個室として機能する。

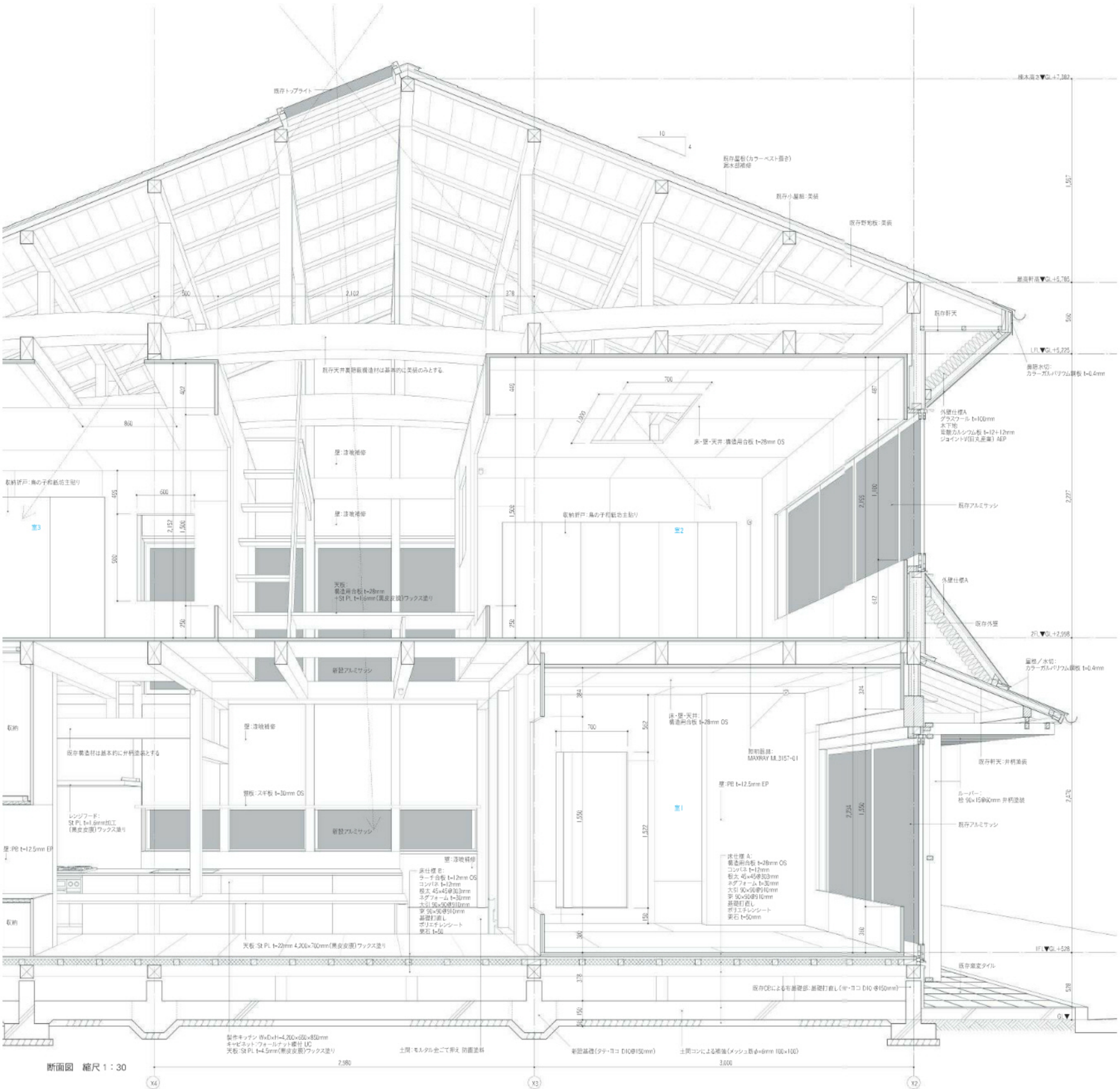
旧来の町家の中に新たなボックスが内包されることにより、パブリックスペースとプライベートスペース、もしくは新旧の対比に図と地の関係をもたらすことを試みた。そしてその関係性は互いに反転する。

既存部分は小舞壁に漆喰塗り、木部は弁柄塗装という伝統的な真壁の設えとなっており、それに対する新設部の素材もできる限り素材そのものがもつテクスチャを用いた。土間はモルタル金ごて押え、大きなテーブルやキッチン天板は黒皮皮膜鉄板、そして前述のボックスは構造用合板のままという具合である。

往年の町家の魅力と新たな技術とが互いに刺激し合うような現代の町家へと蘇らせることができたのではないかと思う。　　　　（荒谷省午）

断面図　縮尺1：30

配置図　縮尺1：1,500

既存外壁に断熱と縦格子を施した南側外観。

右：室3のボックス上部から見下ろす。既存部材の骨組みを補強するように、厚さ28mmの構造用合板でできたボックスを軸組内法に設置。全体を見ると既存部が“地”、新設部が“図”。／下：室2を見る。“地”となるボックス内部からは開口を介し、“図”としての既存部が見える。

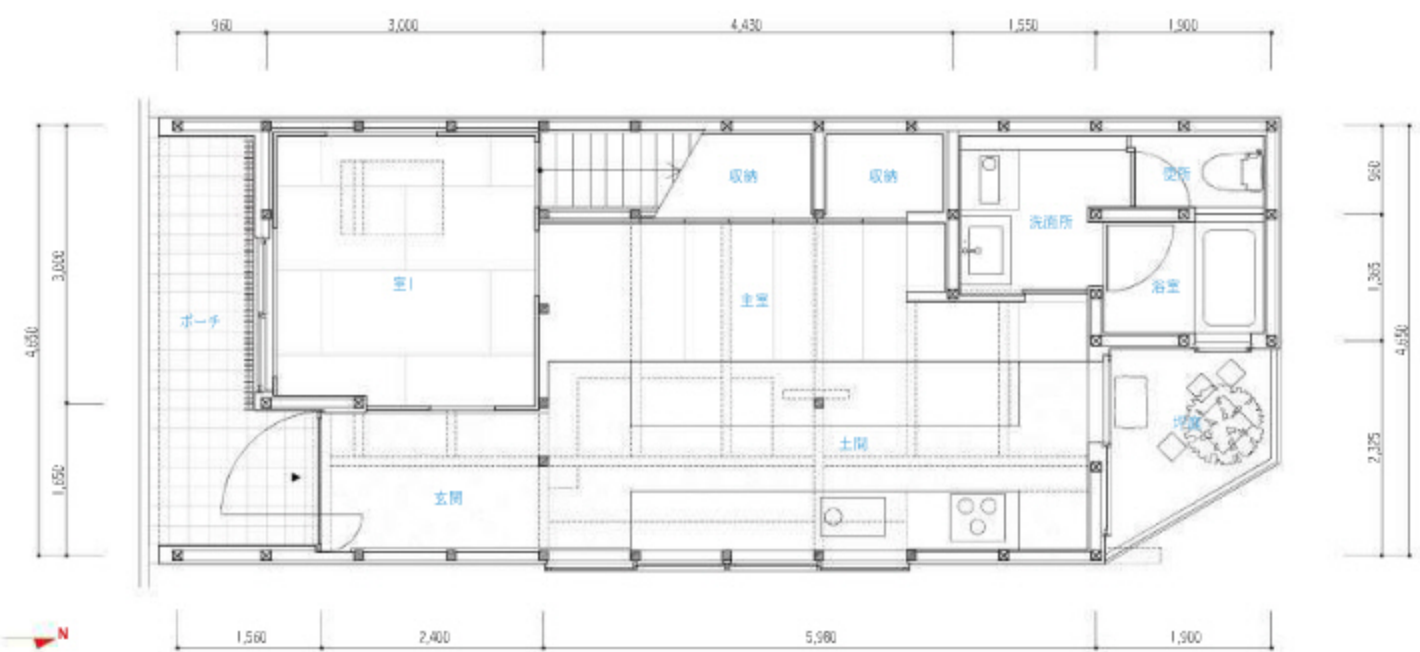
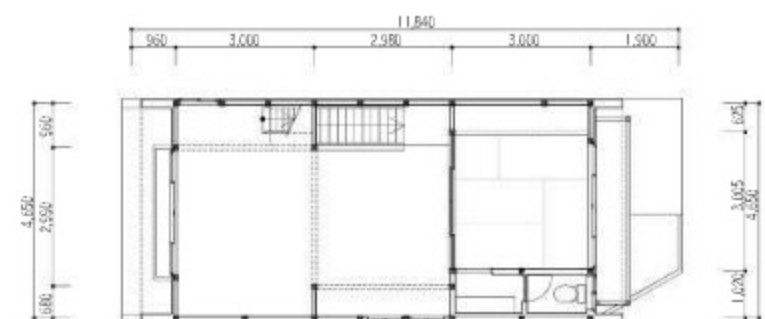
2階廊下。室2と室3のボックスの間に黒皮皮膜鉄板によるテーブルを設置。

新旧部材が総持ちで成立する架構

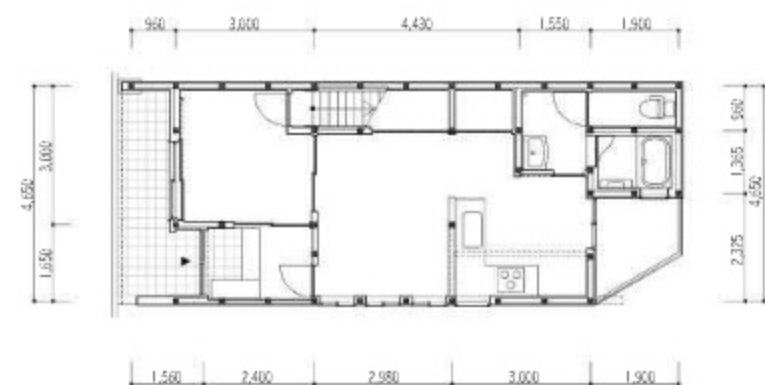
古い骨組の腐食や老朽化は、補強や差し替えなどで手当てすることができた。ただ、部材同士の接合部、とりわけ柱頭と柱脚については、土壁が絡み、基礎が礎石や煉瓦であることなどから、現実には補強は困難であった。

厚さ28mmの構造用合板で構成した強固なボックスを挿入する方法は、そのような古い骨組に負担をかけずに耐震化を図ることが可能である。ボックスの鉛直面は耐力壁、水平面は剛床として働き、ところどころ穿たれた開口は、古い骨組に馴染む適度な柔らかさを付与している。

3つのボックスを釣り合いよく配することに気を配り、年老いた建物にやさしい、全体でしなやかに外力に抵抗する、いわゆる"総持ち"の架構として生まれ変わらせた。　　　　（橋本一郎）

室1から主室方向を見る。もともと小分けされていた1階の間仕切りを取り、北面の坪庭まで視線が通るように改修。ボックスはジョイントコネクターを用いて接合部を隠し、面性の強い箱として施工。

2階平面図

1階平面図　縮尺1：100

改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

通り土間。既存壁を解体して設けた東面開口（写真正面）から、隣家の外壁に反射した光を採り入れる。

室1上部の吹抜けを介して街並みに視線が抜けるように、室2のボックスに開口を配置。

椹木町通の町家

所在地／京都市中京区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
荒谷省午建築研究所　担当／荒谷省午
構造　S[3] Associates　担当／橋本一郎
造園　植物事務所 COCA-Z　担当／古鍛治達也

施工
アムザ工務店　担当／東幸史
大工　井上俊夫
設備・電気　ウェルテクノ　担当／原田英晟
金属　-aizara-ヤマナカ産業　担当／山中博貴
建具・家具　マエダ木工　担当／前田智之
造園　植物事務所 COCA-Z　担当／古鍛治達也

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　布基礎（土間スラブ補強）

規模
階数　地上2階＋小屋裏
軒高 5,785mm　最高の高さ 7,506mm
敷地面積　58.06m^2
建築面積　50.64m^2
（建蔽率％ 許容％）
延床面積　98.70m^2
（容積率％ 許容％）
1階　45.18m^2　2階　33.34m^2
ロフト　20.18m^2

工程
設計期間　2010年10月～2011年2月
工事期間　2011年3月～2011年9月

敷地条件
地域地区　準工業地域　準防火地域
旧市街地美観地区
道路幅員　南4m

外部仕上げ
屋根／既存（カラーベスト葺き）
外壁／ジョイントV（日丸産業）AEP
開口部／アルミサッシ　木製建具
外構／既存（窯変タイル敷き）

土台回りが腐っていた柱は
金輪継ぎによって補修。

内部仕上げ
土間　主室
床／モルタル金ごて押え 防塵塗料
ラーチ合板 t=12mm OS塗装
壁／漆喰補修　PB t=12.5mm EP　構造用合板 t=28mm OS塗装
天井／構造用合板 t=28mm OS塗装
厨房機器／
レンジフード／製作（-aizara-ヤマナカ産業）
家具／製作（マエダ木工）
天板／製作（-aizara-ヤマナカ産業）
照明／ MAXRAY ML3157-01
建築金物／
シンク／サンワカンパニー
水栓金物／支給品
室1　室2　室3
床・壁・天井／構造用合板 t=28mm OS塗装

設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプエアコン
換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

Making points

構造用合板による強固なボックスをつくるにあたり、最も留意すべき点はそれぞれの合板をいかにして一体化させるかであった。
合板は当然ながら積層材であり、小口にビスや釘は効かない。そのためにコーナー部の緊結には、積層方向と直交方向に引張強度を確保するため、家具金物のジョイントコネクターを使用した。また平面方向の連結はボルトによる緊結とし、さらにそれらを同材で埋木処理している。合板の面を揃えながらも壁内での金物の連結が必要となり、造作家具を現場でつくるような精度が求められた。　　　　（荒谷）

上左：ジョイントコネクター金物。／上右：金物用の孔あけ加工。／下左：仮組み・墨出し・孔あけ加工・仮組み・調整・本組みの工程を繰返す。／下右：平面方向の連結。全てのボルトの本締めをしてから埋木処理される。

ボックスの合板結合部のスケッチ

通り土間から玄関を見る。床レベルが380mm異なる主室と土間をまたぐように黒皮皮膜鉄板のテーブルを設置。室1と室2は既存梁を介して設置される。

mina

京都府

木村松本建築設計事務所
KimuraMatsumoto Architects

Renovation Point

大きな屋根で町かどをリノベーションする

改修前外観。何度か改修が行われ、複雑に屋根が架けられた状態であった。

角地の敷地形状に沿った大きな鉄骨屋根を架け、町に対して開放的な外観とし、2階には人びとが訪れる子供服のアトリエ、そしてリビングとしている。東面外観の出窓は子供服を飾るショーウィンドウ。

配置図　縮尺1：2,000

「道のかど」

つくられてから45年を経た2階建ての木造住宅が、L型にクランクする道のかどに建っている。比較的交通量の多い道路から少し入り込んだところにその道はあり、3回折れ曲がり、先はいき止まり、住宅に囲まれたそこには、人びとの生活の場がある。私たちは5人家族のための住宅、そして縫製アトリエとして、その建物を設計した。

計画について

これからの家族の生活にあったプランニングを行っていく。仕切り壁が必要な居室を1階に集めることで構造的な強度を高め、2階は一室で利用するリビングやダイニングやキッチンとした。もうひとつのプログラムである子ども服アトリエは、大きな布が広げられるスペース／テーブルが必要であったためダイニングと兼用にしている。そして1階のプライベートな場所を通ることなく来客を迎えられるように、道のかどから新たに付けた外階段を通って出入りができる玄関を設えた。最後に、これまでの幾度かの増改築によって複雑に掛かった屋根を取り払い、建物全体をまとめて整理するように、鉄骨でできたひとつの大きな屋根を載せた。道のかどからダイレクトにつながる外階段がアプローチとなり、元からあった小さな建物にしては大きなテラスが玄関前の庭となる。外階段と庭／テラスは道とひと続きの子どもたちの遊びの場、そして時折バザーの開かれる立体的に　開した敷地として使用される。

町かどのリノベーション

こうしてでき上がった敷地形状とよく似たかたちの大きな屋根の下が、家族にとっての新しい生活の場となった。そしてそれは同時に周囲に住む人びとが日々歩き、見上げる屋根でもある。私たちは住宅の姿を通り越した開放感をもった場所のこと、ひとつの家だけに完結しない、広がりのある、町かどのリノベーションについて考えていた。　　　（木村吉成＋松本尚子）

テラスからの眺め。軒の出は2,760mm。板張り仕上げの屋根が、室内、北側のテラスへとつながる。

左：創作活動と団欒のかたちに合わせたテーブルが置かれたアトリエ／ダイニング。既存外壁の開口部を、玄関に変更。／右：カーテンを用いて、アトリエとリビングを仕切る。

2階平面図

mina
所在地／京都府
主要用途／住宅＋アトリエ
家族構成／夫婦＋子供3人

設計
木村松本建築設計事務所
　担当／木村吉成　松本尚子
構造　TAPS　担当／田口雅一

施工
コハツ　担当／衣川隆博
大工　安田工匠　担当／片桐誠二
設備　村尾商会　担当／村尾憲昭
電気　有宏電気　担当／平子正弘
カーテン　fabricscape
カーテン縫製　LOVEHEARTS＋アトリエ美唄

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法　一部鉄骨造
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,491mm　最高の高さ 7,044mm
敷地面積　54.80m²
建築面積　42.12m²
延床面積　70.02m²
　1階　40.86m²　2階　29.16m²

工程
設計期間　2010年5月〜2011年9月
工事期間　2011年10月〜2012年3月

敷地条件
地域地区　第一種住居地域　法第22条防火地域　建造物修景地区
道路幅員　南5.0m　東5.0m

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺き
外壁／既存補修の上、モルタル＋弾性塗料吹付け
軒天井／レッドシダー t=9.0mm ウッドワックス
開口部／アルミサッシ　木製建具　鋼製建具
にわ・テラス／既存補修の上、塗膜防水
外部階段・門扉・手摺り／スチール製 常温亜鉛メッキ
外構／コンクリート平板敷き　植栽

内部仕上げ
ルーム1　ルーム2　ホール
床／パインフローリング t=15mm ウッドワックス
壁・天井／PB t=12.5mm AEP
アトリエ　リビング　キッチン
床／パインフローリング t=15mm ウッドワックス
壁／PB t=12.5mm AEP
天井／レッドシダー t=9.0mm ウッドワックス

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／電気給湯器

撮影／多田ユウコ写真事務所

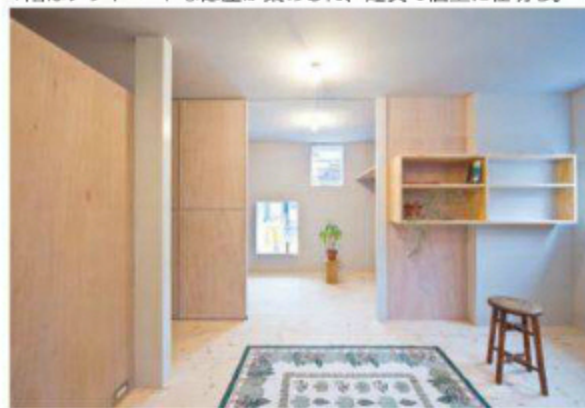
1階平面図　縮尺1：100

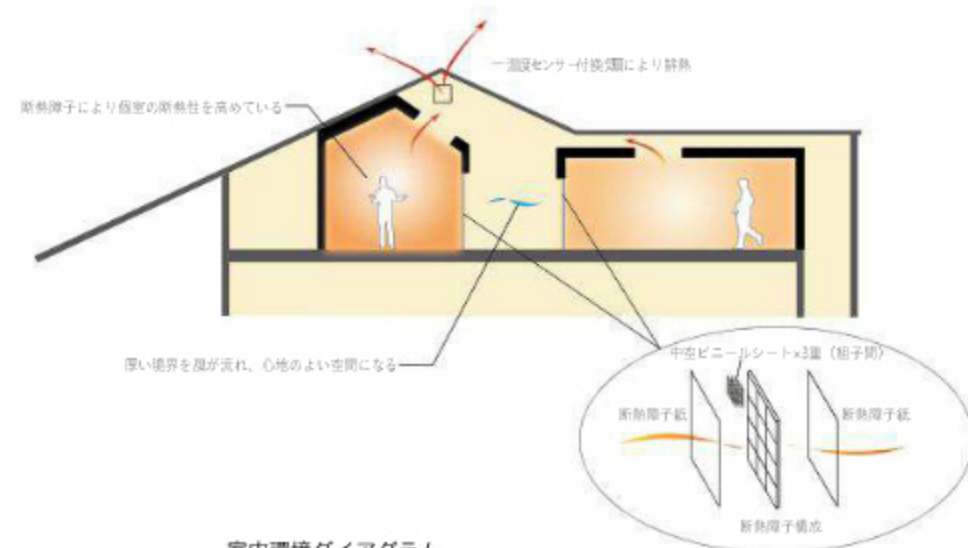
断面図　縮尺1：60

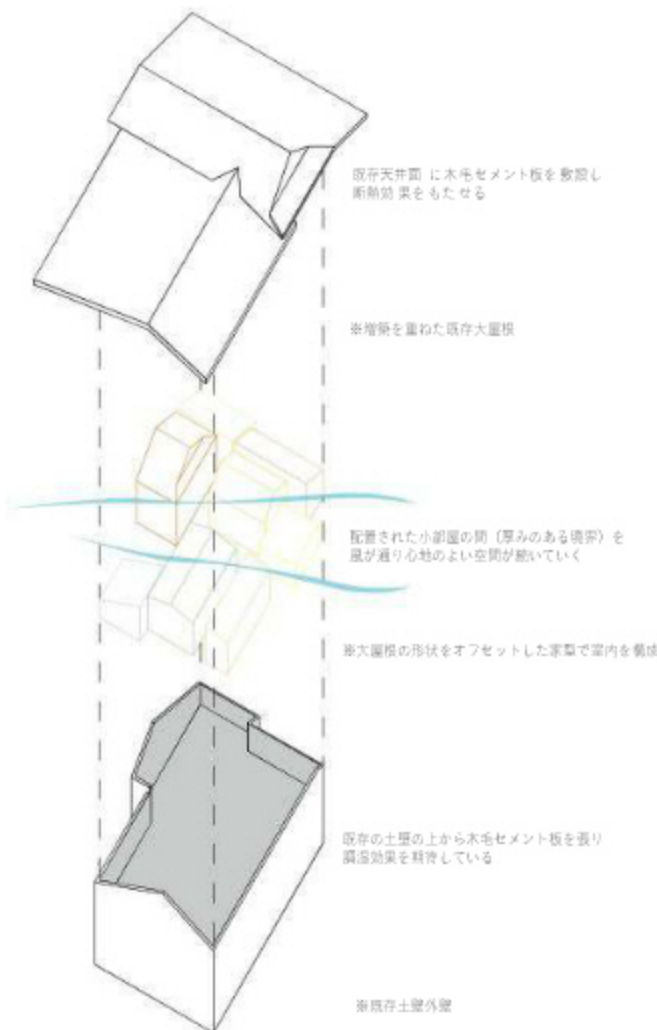
改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

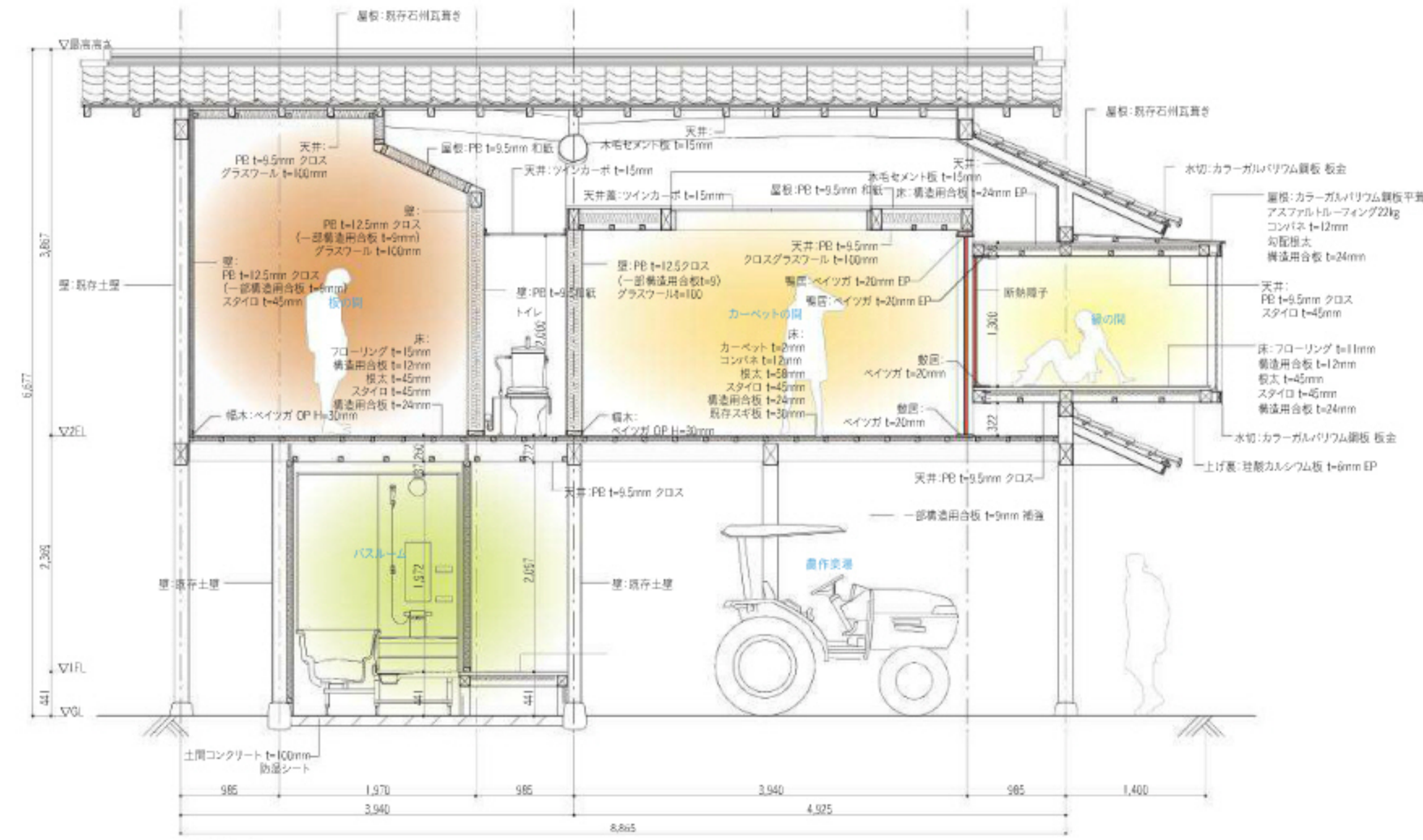
1階はプライベートな部屋が集められ、建具で個室に仕切る。

滑の家

NAMERA House
島根県邑智郡

三宅正浩／y+M design office
Masahiro Miyake／y+M design office

上：広間からカーペットの間越しに縁の間を見る。／下：畳の間上部を見上げる。2階屋根裏に設えた換気扇を回すとトップライトのような開口から排熱される。

室内環境ダイアグラム

家型構成ダイアグラム

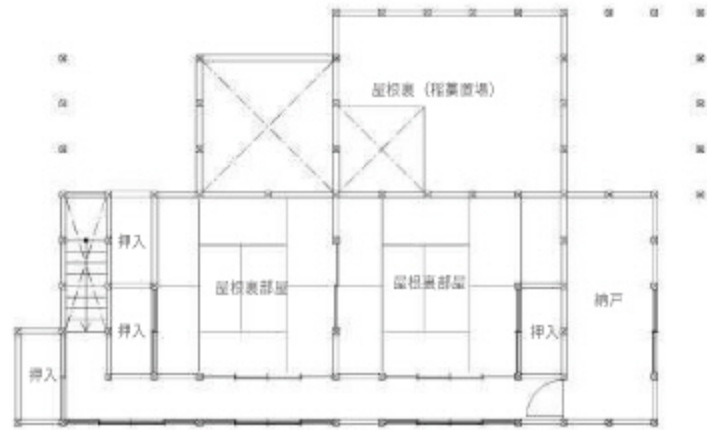
Renovation Point

小屋組を現した大空間と断熱性能の高い切妻の居室

断面図　縮尺1：75

広間。それぞれの居室の照明をつけると行燈のように浮かび上がる。居室の壁仕上げは和紙貼り。

畳の間。鴨居の高さは面するフロアレベルに合わせて北側を1,500mm、東側を1,800mmとしている。天井高は2,000〜2,314mm。

改修前の天井や壁を取り払い、小屋組を現しにしている。屋根裏の天井面には木毛セメントを張り、屋根面の剛性を補うと共に湿度を調整し、建具にも断熱材を仕込んだ断熱性の高い居室を配している。正面の開口部前のフロアと広間のレベル差は300mm。

上：改修前の屋根裏部屋の様子。／中：仕上げを取り払った状態。／下：改修後の外観。縁の間（右）と物干の間が手前に張り出している。

改修前2階平面図　縮尺1：200

2階平面図　縮尺1：100

中国山地の積雪地域である石見地方に建つ築約70年の民家のリノベーション。冬期の冷え込みが激しい場所で、老夫婦ふたりが暖かく安心して暮らすための家であると同時に、頻繁に帰ってくる子供や孫たち（息子は農作業のために毎週、娘はその手伝いに毎月、孫家族は毎年2～3回）をゆったりと迎えることができる家を希望された。

改修前の建物は老朽化により柱は傾き、床が陥没している箇所もあり、屋根裏部屋は天井高さが2mをきっているため使われていなかった。また一度に4～5家族が帰省するにもかかわらず、客間は1室しかなかった。

1階はバスルームなどの水回りを改修すると共に農作業場にも耐震壁を配置し、屋根裏部屋であった2階には、家族が泊まれるように増築が繰り返された複雑な屋根をオフセットし、小部屋を配置した。それによりスペースの確保と同時に耐震性を向上させた。また天井面に張られた木毛セメント板は屋根面の剛性を補完し、湿度調整の役割も担う。

小部屋ひとつひとつをしっかり断熱し、既存外壁や天井には軽めの断熱を施すことで広間と名付けた「分厚い境界」が生まれ、空間の広がりと透明感、使い方の自由度を得ることができた。断熱障子紙の太鼓貼りでサンドイッチした3枚の中空ビニルシート入り断熱障子により、小部屋の開放性と断熱性を両立させている。夏は通風さえ確保できればエアコンは不要な気候であるため、広間の風通しと棟付近の温度センサー付き換気扇からの排熱により快適な室内環境となる。冬は帰省した家族が使用する部屋だけを暖房することができるだけでなく、断熱障子を開放すると2階全体を親戚一同の談話スペースとして利用できるようにした。

広間を通して仕上げの違う小部屋と石見地方の雄大な自然が溶け合い、これまで家屋を支えてきた構造材とこれから住まいを支える小部屋とが混在する気持ちのよい空間。集まった大家族がひとつ屋根の下で心地よい時間を共有する手助けになればと思う。　（三宅正浩）

物干の間を白く仕上げ、腰壁の上部にベンチを設えることで内部と外部を緩やかにつなぐ空間としている。

物干しの間のベンチ。床と共に仕上げはヒノキ。外部には水田と石見地方の山々を望む。

滑（なめら）の家

所在地／島根県邑智郡
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計

y＋M design office
　担当／三宅正浩　吉本英正

施工

坂根住宅　担当／坂根俊昭
設備　高橋設備サービス　担当／高橋博之
電気　邑智電気工事　担当／柘植勝弘
鋼製建具　林商事　担当／勝部進
内装工事　インテリア幹　担当／三浦幹雄
板金工事　佐々木金属工業　担当／鳥居明弘
木製建具　小笠原木工　担当／小笠原清徳
塗装工事　ペイントアートISA　担当／三宅勲

構造・構法

主体構造　木造在来工法
基礎　既存延べ石基礎

規模

階数　地上2階
軒高 5,810mm　最高の高さ 6,677mm
敷地面積　1,260m²
建築面積　337m²（建蔽率26.75%）
延床面積　447m²（容積率35.48%）
　1階　330m²　2階　117m²

工程

設計期間　2010年5月～2011年1月
工事期間　2011年2月～2011年5月

敷地条件

地域地区　都市計画区域外
道路幅員　南西5m

外部仕上げ

屋根／既存屋根：石州瓦　新設屋根：ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 平葺き
外壁／既存外壁：漆喰　土壁　焼スギ　亜鉛メッキカラー鉄板　新設外壁：無塗装サイディングの上弾性塗料
開口部／アルミサッシ

内部仕上げ

広間

床／パーケットフローリング t=15mm（サンワカンパニー FL08451ナチュラル）
壁／ PB t=12.5mm 和紙　一部木毛セメント板 t=15mm
天井／木毛セメント板 t=15 mm（垂木間）
照明／ブラケット照明 KS-50＋E26　ϕ=50mm 40形（笠松電機製作所）
建具／断熱障子（製作）
家具／洗面台（製作）
換気扇／温度センサー付換気扇（三菱電機 V-12PTSD5）

縁の間　カーペットの間　畳の間　板の間　物入れの間

床／縁の間：ラーチフローリング乱尺（東京工営）　カーペットの間：タフテッドカーペット ムーヴァ MU1601（東リ）　畳の間：縁なし畳（丸イグサ）　板の間：バーチ・ユニフロアー ホワイト色（東京工営）　物入の間：スギフローリング（梅江製材所）
壁・天井／ PB t=12.5mm クロス
照明／ペンダント照明 KP-0980＋E26　ϕ=70mm60形（笠松電機製作所）
建具／断熱障子（製作）

物干の間

床／ FRP防水の上 ヒノキ材 t=30mm　オスモカラー
壁・天井／無塗装サイディング t=12mm EP
照明／ダウンライト（パナソニック HEW6203E）

納戸1・2

床／構造用合板の上ワックス
壁・天井／ PB t=12.5mmクロス
照明／ペンダント照明 KP-0980＋E26　ϕ=70mm60形（笠松電機製作所）
建具／シナフラッシュ（製作）

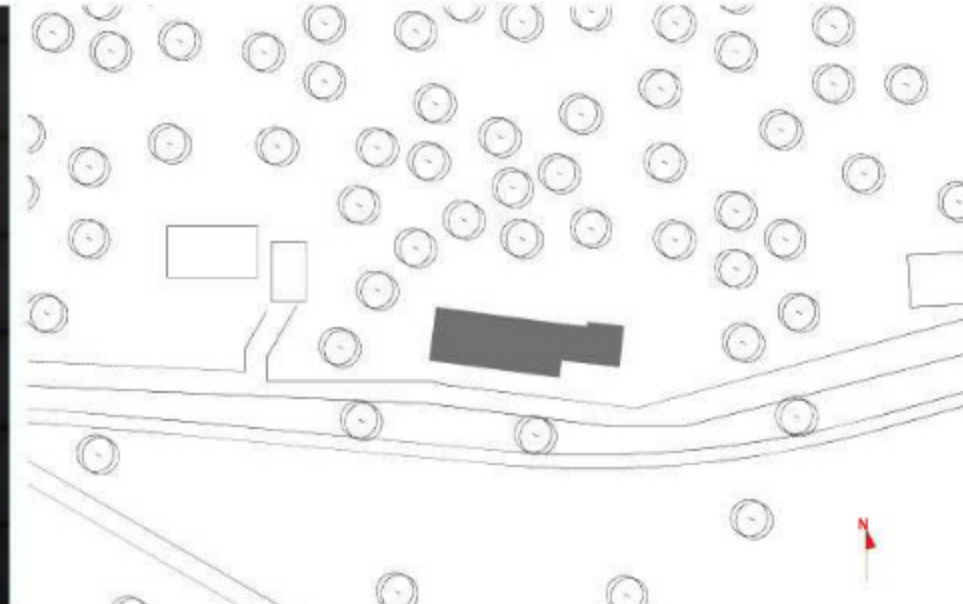
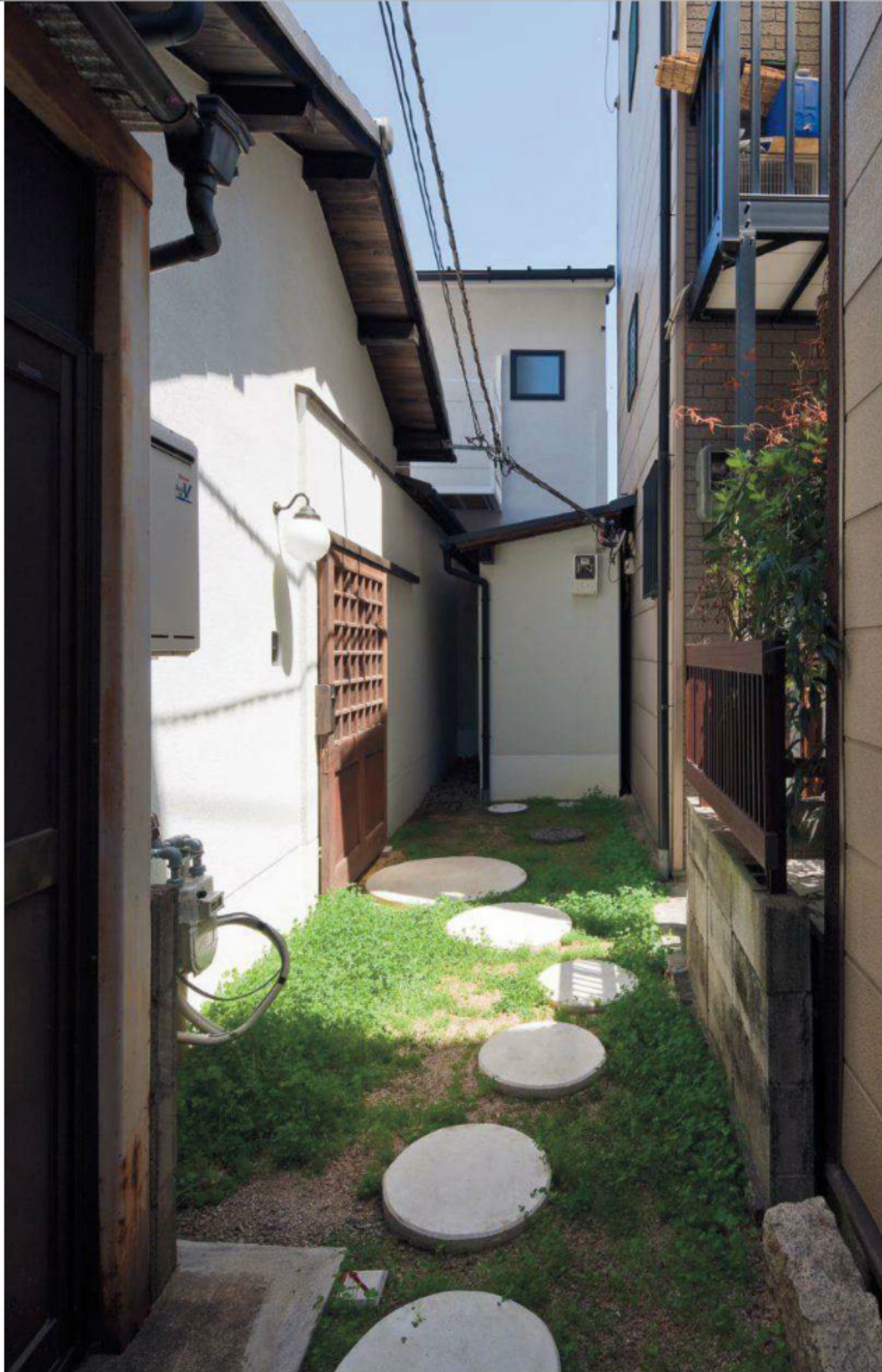
トイレ

床／パーケットフローリング t=15mm（サンワカンパニー　FL08451ナチュラル）
壁／ PB t=12.5mm 和紙　一部木毛セメント板 t=15mm
天井／ツインカーボ（旭硝子）t=4mm クリア
照明／ペンダント照明 KP-0980＋E26　ϕ=70mm60形（笠松電機製作所）
建具／シナフラッシュ（製作）

設備システム

空調　冷暖房方式／電気システムマルチエアコンビルトイン型式（ダイキン）
　換気方式／第三種換気　温度センサー付換気扇（三菱電機）
給排水　給水方式／水道直結方式
　排水方式／合併浄化槽
給湯　給湯方式／ヒートポンプ給湯機

写真提供／ y＋M design office

広間。67頁下の写真の昼景。洗面台下部にエアコンが組み込まれている。

配置図　縮尺1：2,000

路地奥に位置する3棟の長屋を改修し、1棟にまとめている。

頭町の住宅

A House in Kashira-cho

京都市左京区

魚谷繁礼／魚谷繁礼建築研究所

Shigenori Uoya Architects and Associates

配置図　縮尺 1：2,500

幅：約1.2m　奥行き：約16m

路地奥に建つ３軒の住宅

路地を取り込んだ１軒の住宅

敷地の活用に関するダイアグラム

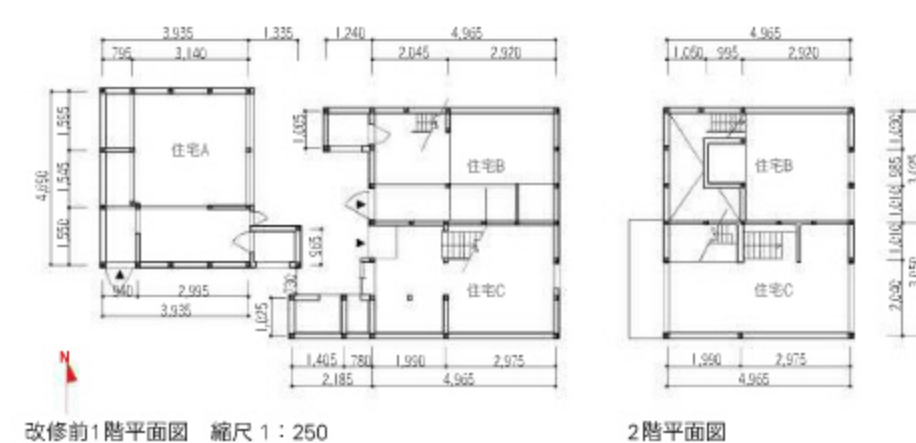
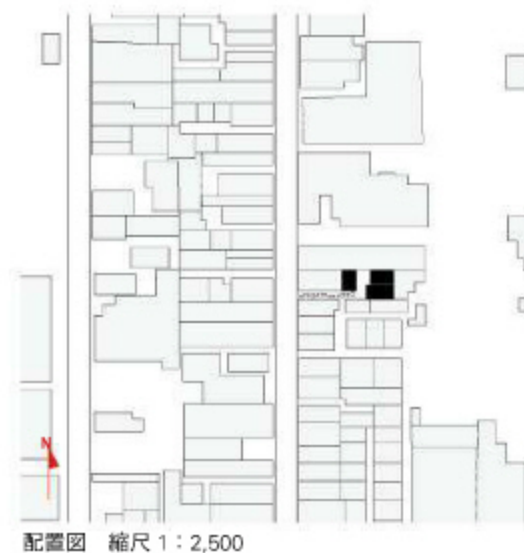
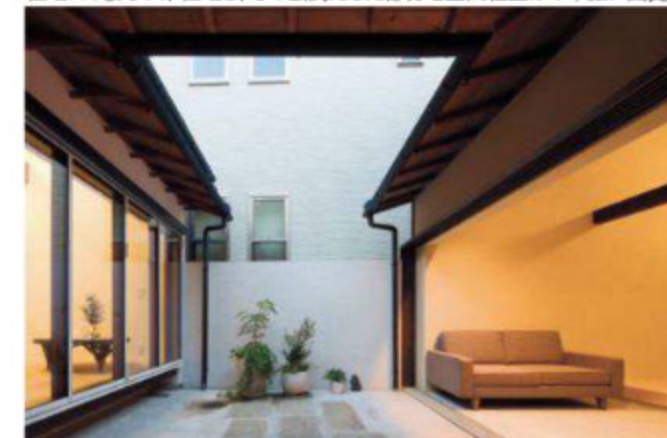
Renovation Point

路地奥の3軒長屋を改修し、京都特有の地割を保全する

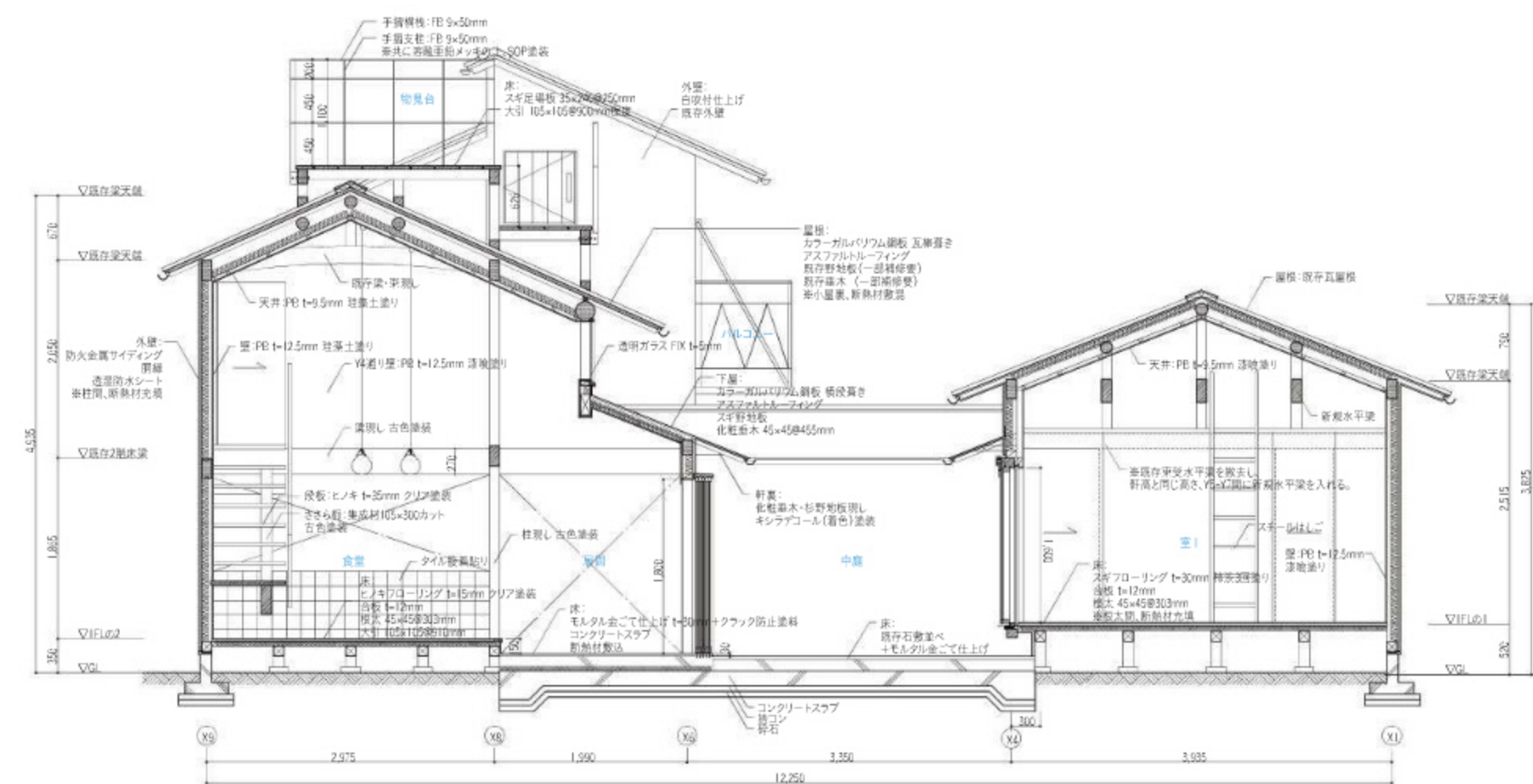
2階平面図　縮尺 1：150

1階平面図　縮尺 1：75

改修前1階平面図　縮尺 1：250

2階平面図

住宅Aの勝手口、住宅B、Cの玄関だった部分を土間仕上げの中庭に変更。

食堂から中庭を介し、室1を見る。北側外壁（写真右手）は、既存壁の内側に柱を抱かせて構造補強と傾きを修正している。室内に現した軸組は既存部材を使用。もともと2住戸に分かれていた食堂、居間のあるヴォリュームはその切り替え部で白の漆喰と黄の珪藻土に塗り替えている。

室内に明かりを取り入れるために、開口部上端にも軒裏の見える開口を設置。改修前の住宅Bの床、天井は撤去し、気積の大きな食堂に変更。

左：食堂から室2へ向かう。／右：室2はラワン合板に拭きうるし塗り仕上げ。室内に700mmの段差を設け、高い部分は布団敷きスペースとしての利用を想定。写真中央部の梯子から物見台に、写真左手の扉からバルコニーに出る。

断面図　縮尺1：75

アプローチからの眺め。既存床の高さに揃え、室1は土間から350mm床が上がる。

頭町の住宅
所在地／京都市左京区
主要用途／専用住宅
事業主／八清　担当／浜田真以子　木村隆一

設計
魚谷繁礼建築研究所
　担当／魚谷繁礼　魚谷みわ子

設備　電機　外構・造園　魚谷繁礼建築研究所

施工
藤井工務店　担当／藤井哲史　人見忍
大工　久門田建設　担当／久門田勝
設備　大伸工業　担当／宮内純
電気　恵美電工　担当／田中真吾
外構・造園　黒松造園　担当／黒松俊彦
漆芸　東端制作所　担当／東端唯
家具　アルク・インターナショナル
　担当／藤本清春
　フィンガーマークス　担当／矢野雅也

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　独立基礎

規模
階数　地上2階
敷地面積　87.72m^2
建築面積　54.85m^2（建蔽率62.53%）
延床面積　67.90m^2（容積率77.41%）
　1階　53.30m^2　2階　14.60m^2

工程
設計期間　2010年8月～2011年3月
工事期間　2011年4月～2011年10月

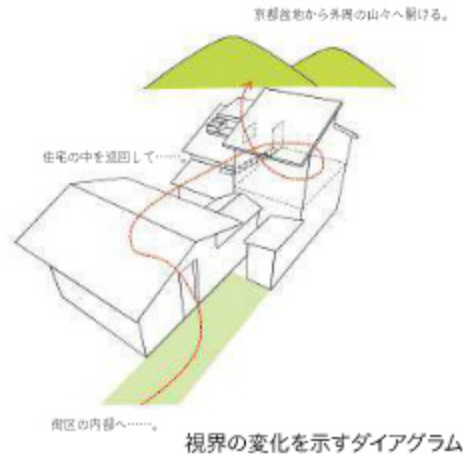
敷地条件
地域地区　近隣商業地域　準防火地域
　15m第三種高度地区　旧市街地型美観形成地区
道路幅員　西5.5m

外部仕上げ
屋根／瓦棒葺き　カラーガルバリウム鋼板
外壁／アクリル樹脂系吹付け（白）　珪藻土塗り
開口部／木製建具　アルミサッシ

内部仕上げ
室1
床／スギ板張り t=30mm 柿渋3回塗装
壁・天井／漆喰塗り
照明／ KOIZUMI ADN650202
開口部／木製サッシ（キマド）
居間
床／モルタル金ごて仕上げ
壁・天井／珪藻土塗り　漆喰塗り
照明／ KOIZUMI SE540169
食堂
床／ヒノキ板張り t=15mm
壁・天井／珪藻土塗り　漆喰塗り
家具／造作
照明／ヤマギワ P3018 φ205
厨房
床／モルタル金ごて仕上げ
壁・天井／漆喰塗り
厨房機器
ガスコンロ／リンナイ RD640STS
シンク／エクレア S213
換気扇（シェード）／富士工業 BFR-3C-751RW
照明／山田照明 DE-2597
シンク水栓金物／ INAX SF-E546S
室2　上段
床／スギ板張り t=15mm 拭き漆塗り
壁・天井／ラワン合板張り 拭き漆塗り
家具／造作
照明／遠藤照明 EP-9383N

設備システム
空調　冷暖房方式／エアコン
　換気方式／第三種機械換気
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

室1から玄関を見る。室1の天井は既存束と新たに取り替えた梁を現している。

視界の変化を示すダイアグラム

左：「頭町の住宅」は狭い路地奥に位置する。再建築不可の敷地に建つ長屋を改修することで京都の街並みを特徴付ける路地も保存する。／右：物見台からの眺め。

京都における町家改修の意味

魚谷繁礼

事業物件としての町家改修

「壬生東檜町の住宅」と「頭町の住宅」は共に、建築基準法制定前に伝統的軸組構法により建築された町家や長屋を不動産事業者が購入し、改修を施して一般に販売する事業物件である。京都では一昔前から町家の改修による利活用が盛んである。しかし、それをはるかに上回る勢いで数多くの町家が取り壊されている。ここで、建築家と事業者との協働が有意になる。建築家の役割はモデル事例の構築である。事業者の役割はスピードの速さと量の多さである。協働によりモデルを構築し、そのモデルをアレンジしつつ早く多く供給する。建築当時の面影のほとんど残らない町家は、復元にこだわらず、もとの建築のプランを活かしつつも現代の生活様式に応えるプランに適度な費用で改修し、そこでだからこその暮らしを広く一般に提案し、新しい需要を創出する。

事業物件の特徴は仕上がったものを販売することにもある。一見とても改修再生も、さらには販売もできそうにない腐朽物件を、改修により再生させた姿で販売できるようにする。

建築家と事業者との協働により、京都という都市に数多く残る木造建築ストックの活用が、質量の両面において実現されることが期待される。

木造の改修

改修を繰り返して長期に渡り建築を活用するには、構造材が腐朽しやすい木造よりも、鉄筋コンクリート造の方が適していると思われがちである。しかし、木造の伝統的軸組構法では、いったんすべての壁を取り払い軸組だけの状態にしたうえで、自由な位置に壁を新設することが比較的容易である。さらには、たとえ木の柱が腐っていても、腐った箇所だけ新材と取り換えることが可能である。改修プラン上、邪魔な柱がある場合は、それを取り除いて、梁せいを大きくするなり、構造耐力上代わりとなり得る別の箇所に柱を新設するなりして対応できる。つまり、木造においては壁のみならず柱梁といった構造材までもが可変となり得る。

頭町の住宅

京都に数多く残存する路地奥の長屋は老朽化が甚だしい。しかも街路から専有の路地を入っていった奥にある敷地は、たいていの場合において建築基準法の定める接道義務を果たしておらず、再建築ができない。著しく老朽化した建物と再建築不可の敷地は、共に不動産価値が著しく低く市場にも出回りにくい。このような路地奥のウラ敷地は、接道したオモテ敷地と合体し、再建築可能な大きな敷地にすることでしか活用できないのが現状である。ウラ敷地がオモテ敷地に回収されるかたちで合体してオモテ敷地となることで、京都特有の都市空間構成要素である路地は消失する。そして実際、京都の路地は減少し続けている。京都では、町家の減少などに伴う景観の悪化が問題視されているが、地割という目に見えにくい部分においても急速な変化が進行中である。

「頭町の住宅」は、路地奥で廃墟化した長屋の改修プロジェクトである。ここでは、路地奥の3棟の長屋を1棟にし、路地の一部を中庭化した。3棟を1棟にすることで、空き家の玉突き現象を抑制することができる。また、将来的に再度住居を3分割し、中庭を路地に還元することも可能である。これにより、路地とウラ敷地という地割は生き永らえ、不動産価値の低い再建築不可の敷地と廃墟化した長屋は、一般的な選択肢のひとつとなり、市街地で快適に居住することを可能にする。

壬生東檜町の住宅

京都市下京区の高辻通に面して建つ町家を改修するプロジェクトである。すでに増改築が繰り返されており、建築当初の面影をあまりとどめていない。

町家では各階においてオモテの街路からウラの街区中央へと空間が抜けるが、ここでは1階のオモテから2階のウラに向けて立体的に抜けを取ることで、1階と2階とをつなぎ、空間の抜けに上昇感を加えることを図った。斜め張りにされた内部仕上げの合板が、空間のさらなる上昇感を演出する。

大きな家型の中に浮かぶ箱が寝室に、大きな階段の下部が水回りに、残りのスペースが玄関・厨房・食堂・居間に充てられる。　（魚谷繁礼）

左：「壬生東檜町の住宅」は既存構造体と新設の土間コンクリートをスタイロを噛ましてて縁を切り、建物全体を固めすぎないようにしている。／右：北側接道面外観。

Renovation Point

京町家特有の抜けを立体的に展開する

断面図　縮尺１：60

既存タイル貼り外壁をモルタルで薄く均した上に白く塗装。元の目地がうっすらと浮かび上がる。玄関から土間が室内へと連続する。

壬生東檜町の住宅

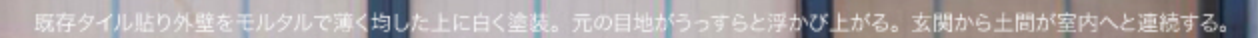
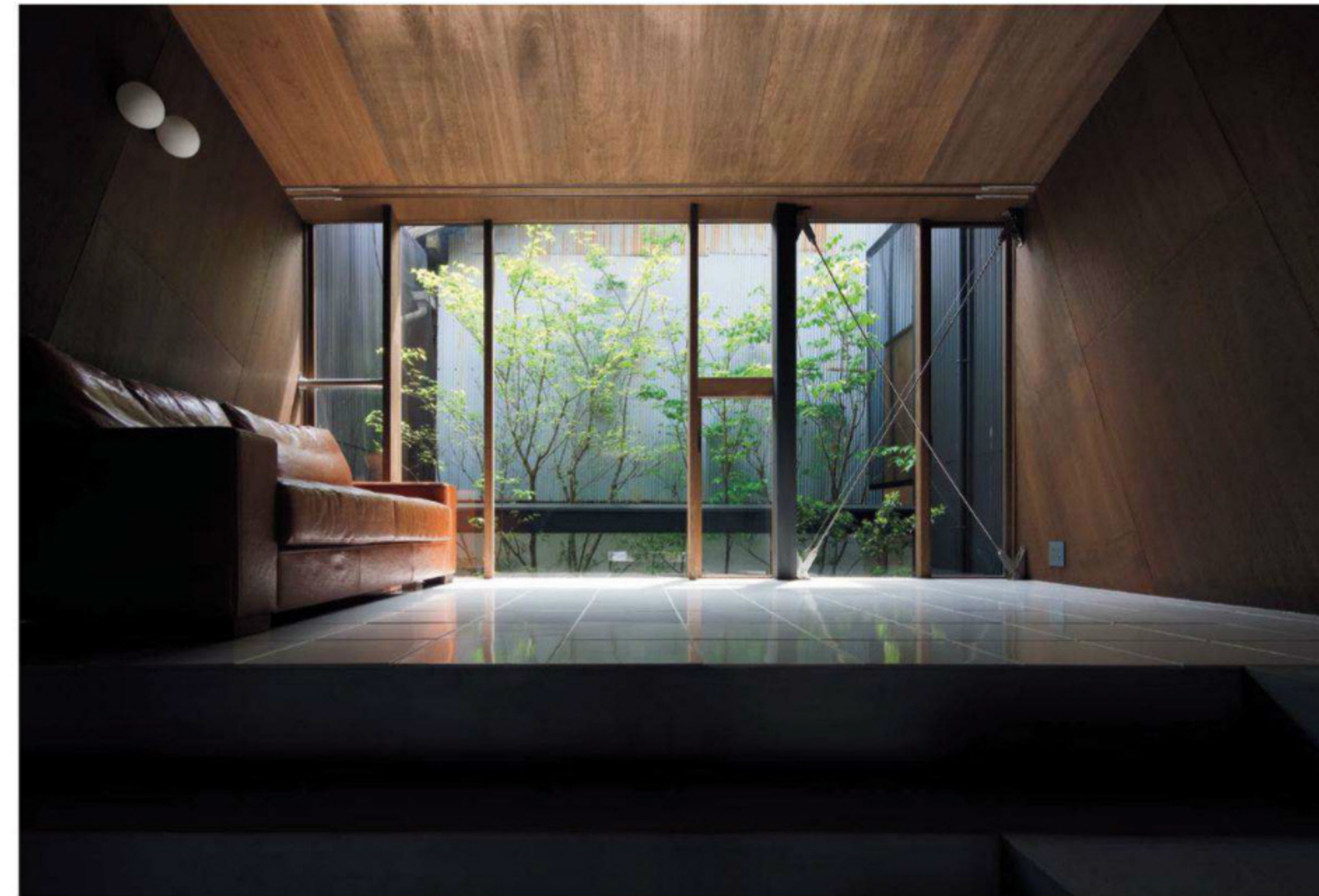
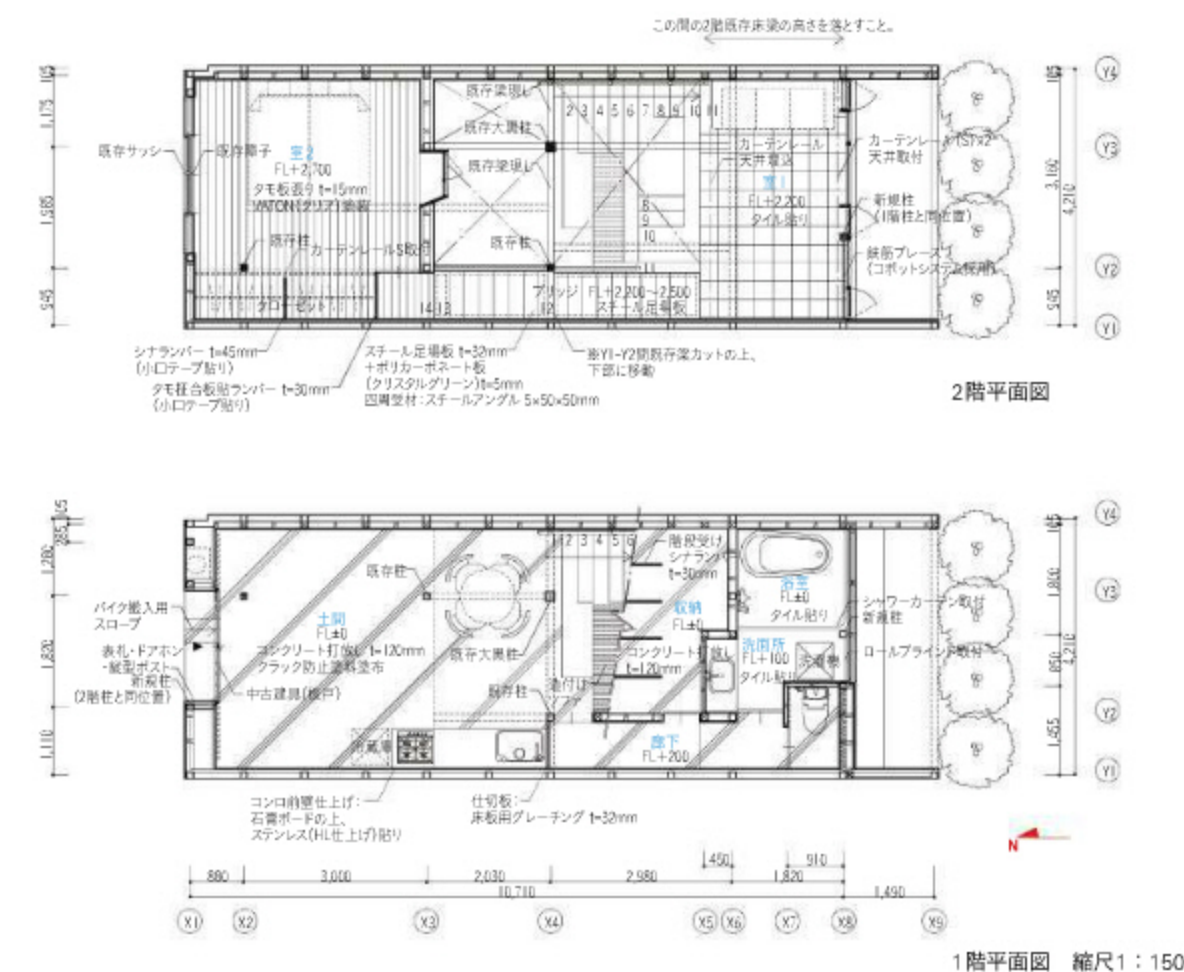
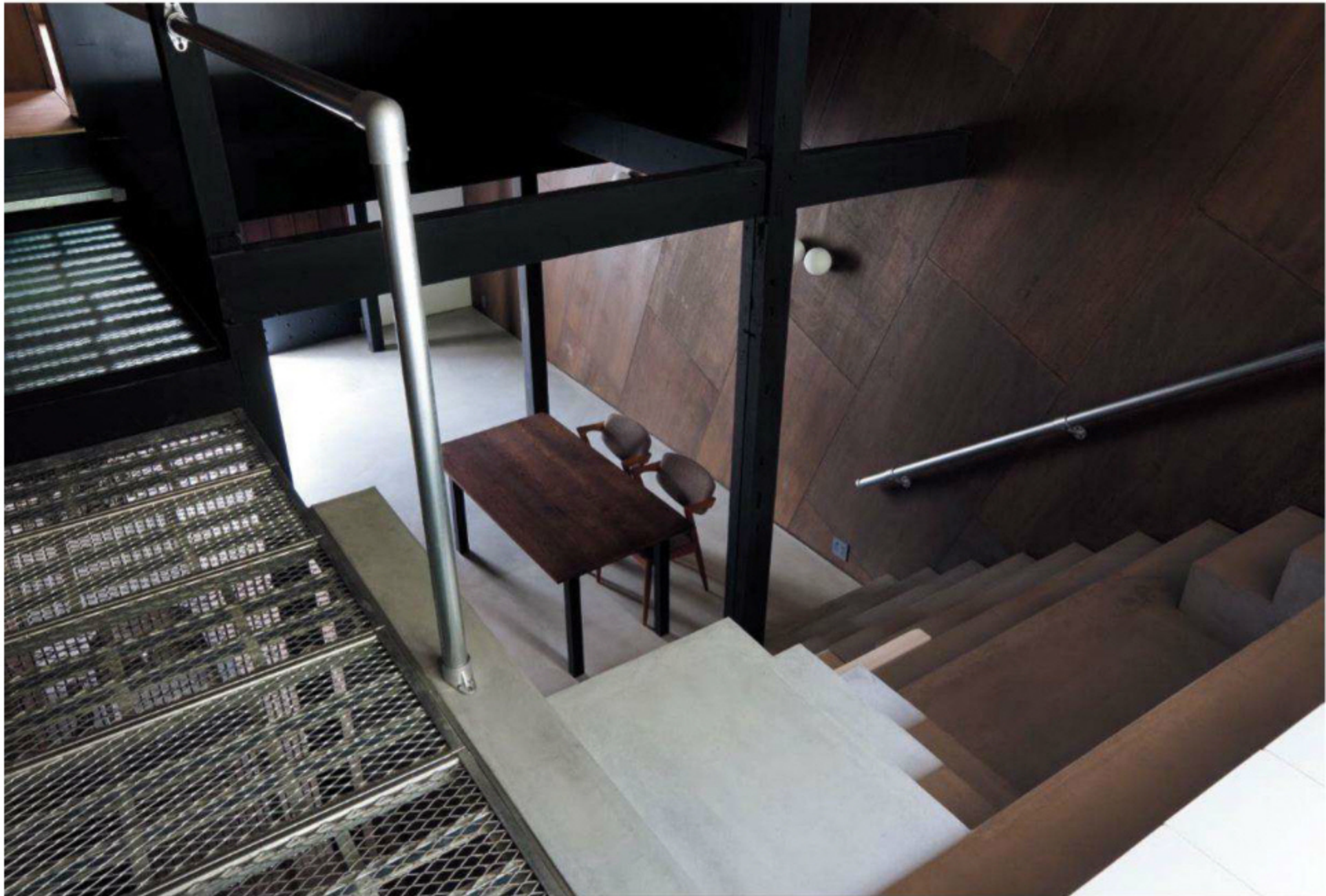
A House in Mibuhigashihinoki-cho

京都市中京区

魚谷繁礼／魚谷繁礼建築研究所

Shigenori Uoya Architects and Associates

細かく仕切られていた室内を立体的につなぐ。

既存断面図　縮尺１：200

町家特有の南北への空間の抜けを立体的に展開した室内。内壁はラワン合板を斜め張りして上昇感を演出。

南面外壁を全面開口に変更し、室内に光を採り入れる。

南側に設けた庭に面する浴室。

床仕上げは土間から室1にかけてだんだんと明るい色へと変化させている。
室1からはブリッジを渡り、室2へ向かう。ブリッジはスチール足場板にポリカーボネート板を載せた仕上げとし、1階に光を落とす。

室1から土間方向を見る。既存床および天井を撤去し、高さ6,390mmの吹抜け空間へと変更。

壬生東檜町の住宅

所在地／京都市中京区
主要用途／専用住宅
事業主／八清　担当／田中淑久　波多野哲也

設計
魚谷繁礼建築研究所
　担当／魚谷繁礼　魚谷みわ子　仲本兼一郎
設備　電気　外構・造園　魚谷繁礼建築研究所

施工
藤井工務店　担当／藤井哲史　人見忍
大工　刀禰工務店　担当／刀禰庄蔵
設備　大伸工業　担当／宮内純
電気　恵美電工　担当／田中真吾
外構・造園　黒松造園　担当／黒松俊彦
家具　フィンガーマークス　担当／矢野雅也

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　独立基礎

規模
階数　地上2階
敷地面積　56.72m²
建築面積　43.60m²
　（建蔽率 76.87%）
延床面積　73.80m²
　（容積率130.12%）
　1階　43.60m²　2階　30.20m²

工程
設計期間　2011年3月～2011年5月
工事期間　2011年6月～2011年11月

敷地条件
地域地区　準工業地域　準防火地域
　20m第三種高度地区　市街地型美観形成地区
道路幅員　北10.8m

外部仕上げ
屋根／瓦棒葺き　カラーガルバリウム鋼板
外壁／既存レンガタイルの上、モルタルこすり
　＋白塗装
開口部／木製建具　既存アルミサッシ　アルミ
　サッシ

内部仕上げ

土間
床／コンクリート打放し
壁／ラワン合板張り
天井／ウレタン（黒）塗装　ラワン合板張り
厨房機器
　ガスコンロ／リンナイ RD640STS
　シンク／エクレア S406
　換気扇（シェード）／サンワカンパニー 6040S
照明／笠松電気製作所 CK-W771
　ヤマギワ P3021 φ185
仕切り板／カワグレ 床板用グレーチング
　t=32mm
シンク水栓金物／ INAX JF-6450SX（JW）

洗面所・浴室
床・壁／タイル貼り オザワモザイクワークス
　SA-18
天井／ラスカット＋下地モルタルの上、防カビ
　（白）塗装
バスタブ／ TOTO PHS1508C#SN1
照明／笠松電気製作所 KS-891
建築金物
　シャワー水栓金物／ INAX BF-E146TEM
　洗面水栓金物／カクダイ 2ハンドル混合水栓
　（壁付）＋クロスハンドル7940

室1
床／タイル貼り（美濃タイル MON-B-1 MON-
　300 モノ）
壁／ラワン合板斜め張り　漆喰塗り
天井／ラワン合板張り
照明／ヤマギワ P3021 φ185

室2
床／タモ板張り t=15mm
壁／ラワン合板斜め張り
天井／ラワン合板張り
照明／ ODELIC OD062530L

設備システム
空調　冷暖房方式／エアコン
　　　換気方式／第三種機械換気
　　　その他／床暖房
給湯　給湯方式／ガス暖房給湯器

撮影／新建築社写真部

左：室2を見る。室2には既存梁を隠すため厚くなった壁を使用して、出窓を設置。ガラスはこの住宅で使用されていたものを活用。／右：吹抜け部分は既存軸組をそのまま現している。

Renovation Point

長く保存するための修復工事

「惜櫟荘」は岩波書店の創業者である岩波茂雄が熱海に建てた別荘である。設計者は吉田五十八、竣工したのは昭和16年（1941年）である。その後昭和46年（1971年）に、吉田五十八立ち会いのもとで浴室、屋根の一部、北側の塀が改修されている。この時、浴室は壁を大理石からヒノキの羽目板に変更し、浴槽から溢れた湯の排水方法を改め、開口部の欄間を廃止している。この計画に係わることになってほぼ20年振りの再会であったが、わずか30坪のこの別荘は雁行する平面計画、巧みな屋根のかけ方、建具を引き込み式にした開口部など全体から細部におよぶ吉田五十八独特の意匠によって、竣工後70年近い年月の隔たりを感じさせない新鮮さと豊かな内容を備えた建築であり、20年前の印象と何ら変わるところはなかった。この惜櫟荘の新しい主となった小説家の佐伯泰英氏の要望は吉田五十八の設計を尊重して、この別荘を長く保存できる手立てを講じたいということであった。そこで保存のために、建物を全解体して復元することになった。

しかし当時の図面は100分の1の平面図、立面図、数枚の伏図、その他若干の補足的な図面しかなかったので、現況調査と並行して実測を行った。現況調査では浴室周辺の不同沈下、無筋コンクリートの基礎に複数のクラック、北側の土台の一部の腐食、その他、全体的に汚れ、傷、劣化、外壁のクラックなどが確認された。復元であるから旧材を再用するのが原則であるが、実際には再用に耐えない材料もあった。解体の結果、女中室北側と玄関土台に腐食があった。柱では和室外部の北山杉の磨き丸太の足下内部が腐食していた。土台、柱で腐食がある材はすべて新材に取り換えた。軒先は広小舞と淀、破風には登り淀に腐食した部材があった。これらは補修できるものは補修して再用し、補修不可能なものは新材に取り換えた。その他に再用できなかった材料は屋根瓦の一部、浴室の石材、外壁のリシン掻き落し、台所の仕上げ材、調理台、女中室の漆喰壁、居間南側の雨戸が主なものであった。その他の構造材、造作材、仕上げ材、建具は必要な補修を施してすべて再用した。木工事の主要な新規材料と補充した屋根瓦には平成23年度修理と記した。

解体の過程では思いがけない発見もあった。居間と和室の外部に面する開口部の小壁の中に軒桁と内法の楣の間で小屋筋違いのように部材を組んであったこと*1（平面図参照）と居間の西側と東側の大壁の中で軸組を上下2段に分割して襷がけの筋違いが設けてあったこと*2、そして居間南側下屋の軒桁にジベルを用いた合わせ梁がかかっていたこと*3である。

造園工事では建物の腰貼りに用いられた自然石は解体時の破損分は補充したが、他の軒内、雨落ち、玄関ポーチの石畳は旧材で復元できた*4。

設備に関しては、竣工当時は居間、和室、便所に温水ラジエーターによる暖房設備があった。温泉の湯を利用したためと思われるが、早い時期に機能しなくなったようである。その後、時期は不明であるが居間と和室にエアコンが設置されていたが、今回はこれを隠ぺい式に改め、吹出し口や吸込み口は目立たないように処理した*5。室内の照明器具のうち竣工当時のものは補修して再用している。給排水衛生設備は新規とし、浴槽に対する給水給湯方式は改めざるを得なかったため浴槽のかたちは若干変更した。

その他基本方針に反するが変更した部分がある。それは居間北側から台所西側の屋根に軒樋を設けたことと、中庭を囲う塀に通風用に虫籠窓を開けたことである*6。これはこの辺りに屋根の雨水が集中して湿気と外壁の汚れがひどかったためだ。外構工事では台所西側にあった小屋を撤去して、その跡にブドウ棚を移した*7。北側の塀は木造であったが耐久性を考慮してコンクリートブロック造に改めた*8。表門はすでにもとのかたちはなく、図面もなかったので竣工時の写真を頼りにつくり直した*9。家具もほとんどが竣工当時のものであるから木部は塗装し直し、椅子の皮は張り替えた。

今回の工事は解体復元であるから、現行の建築法規や静岡県の条例などに対応したものでなければならない。基礎と耐力壁の設計、地震時のフレーム解析による安全の確認は梅沢建築構造研究所に協力を仰いだ。

「惜櫟荘」は吉田五十八の大壁式の意匠に不可欠な壁の塗り回しやハッカケが多用されている建築である。惜櫟荘を設計していた頃は伝統的和風建築の線の煩雑さを嫌い、線を整理することによって和風建築の明朗さを追求していた。惜櫟荘の居間では小壁の下端に無目はない、鴨居も見付けが見えないように壁を樋端まで塗り回しているのである。壁の出隅、入隅にも柱はない。伝統的な和風建築と比べるとあるべきところにあるべきものがないような建築である。大壁部分にある枠に対しても壁はチリなしで塗ることを求めている。自己の表現に不要な線はことごとく排除しようという姿勢である。私が身近に見ていた昭和30年代後半以降の吉田五十八の意匠と基本的な考え方は共通しているが、この当時は後年よりはるかに原理原則に拘っていたのがよく分かる。ここまで踏み込み、拘ることによって吉田五十八は独自の作風を確立して和風の世界を大きく広げたのである。　（板垣元彬）

＊「惜櫟荘」の竣工当時の姿は『建築世界』昭和18年1月号と『新建築』（4303）で見ることができる。

敷地北側から見る。西側の崖地（写真右手）に対し、必要とされた高さ1mの鉄筋コンクリートによる塀を、西側外壁の基礎を1m立ち上げることで対応している。もともと小屋が建っていたキッチンの出窓前にブドウ棚を移設（写真手前）。屋根は谷隅のみに防水紙を敷き、その他は通気を取るためにスギ板を土居葺きにしている。

平面図　縮尺1：100（赤字は文章中と対応）

惜櫟荘（旧岩波別邸）
SEKIREKISOU
静岡県熱海市

設計：**吉田五十八**
Isoya Yoshida

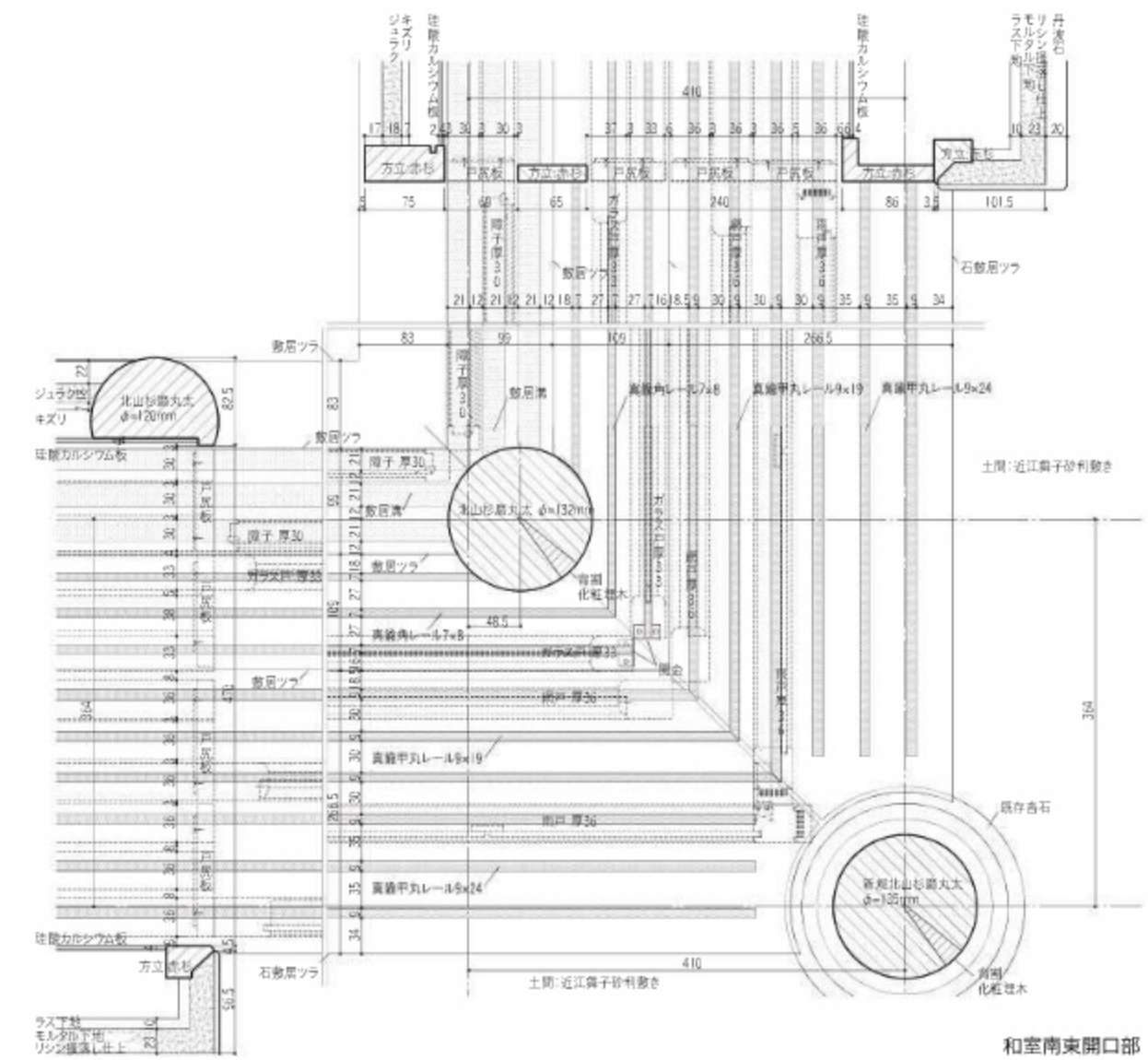
解体復元：**板垣元彬建築事務所**
M.ITAGAKI ARCHITECT

南側外観。写真左手の古木は作品名の由来（「櫟（くぬぎ）を惜しむ」）でもある櫟の木。
既存材料はできるかぎり修復して使用。外部の化粧材は和室外部角の北山丸太（写真右手）と便所上部の屋根化粧垂木1本を新材に変更。
また広小舞、淀、登り淀の一部を補修、または新材に取り替えた。

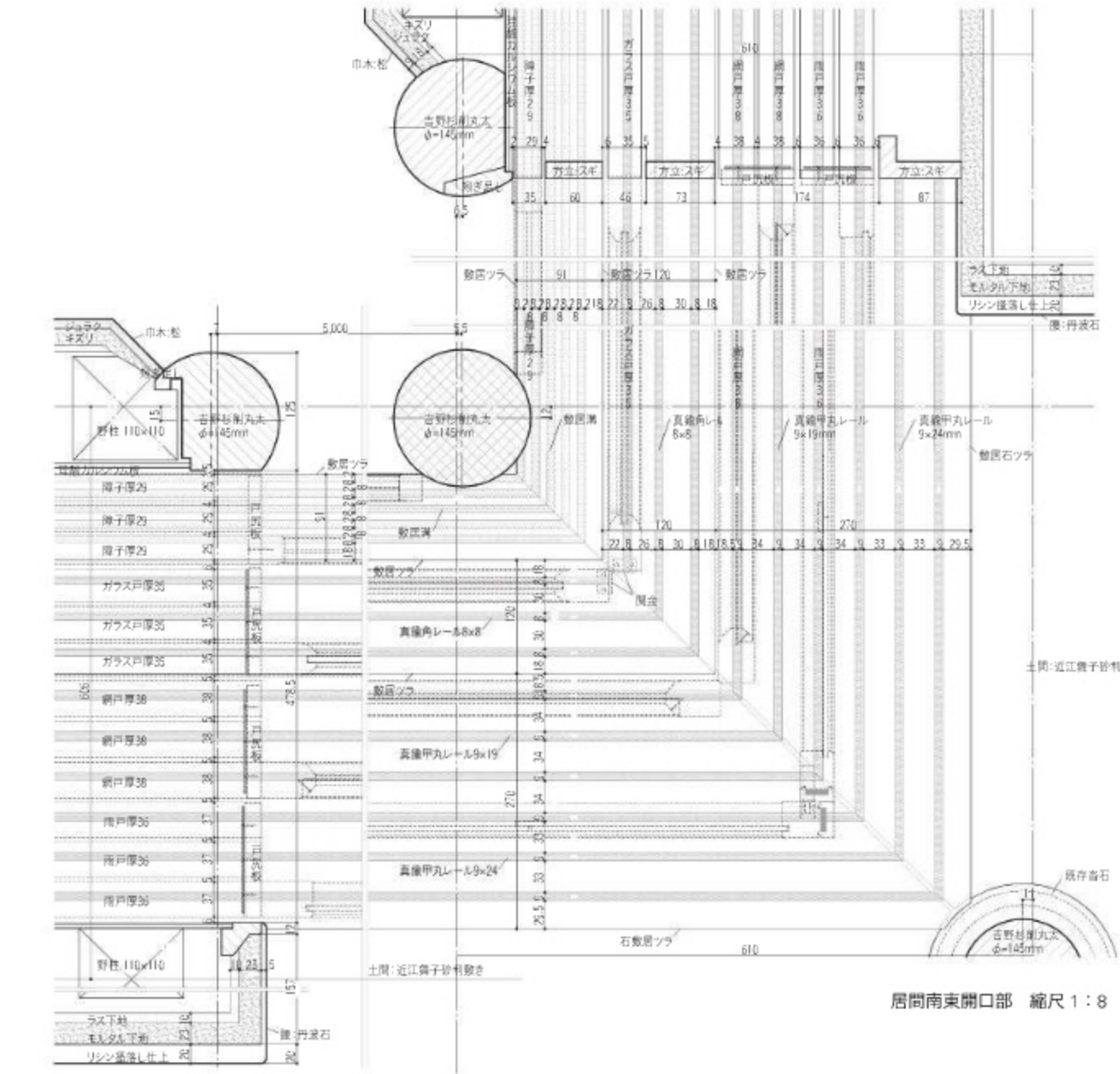
居間からは相模湾が臨める。建主の岩波氏はこの眺めに対し、建具すべてが壁に引き込める納まりを希望し、他の設計者によって設計図ができていた状態から吉田五十八に設計を依頼した（詳細は本誌1004 118頁参照）。開口部は鴨居の見付けを聚楽で塗り込め、できるだけ線を消した納まりにしている。解体時、合計12本の建具が納まる開口上部の軒桁と梱の間に筋違いが架けてあることが分かった。

和室開口部は障子とガラス戸、網戸と雨戸で高さを違え、室内から見た時に鴨居、敷居の存在感を弱めている。
戸袋壁下地の木軸は土間まで下り、下端部が腐食していたため、今回の改修にあたり、うす基礎を打ち、腐食を防ぐ納まりに変更（96頁の水澤工務店による原寸図写真参考）

左：和室からの眺め。天井高3,020mmの居間に比べ、和室は2,380mmに抑えている。和室南東角の柱は根元に腐食があり新材に変更。／右：次の間から庭を介し、浴室を見る。次の間の地袋上の落天井と小壁はハッカケの納まり。

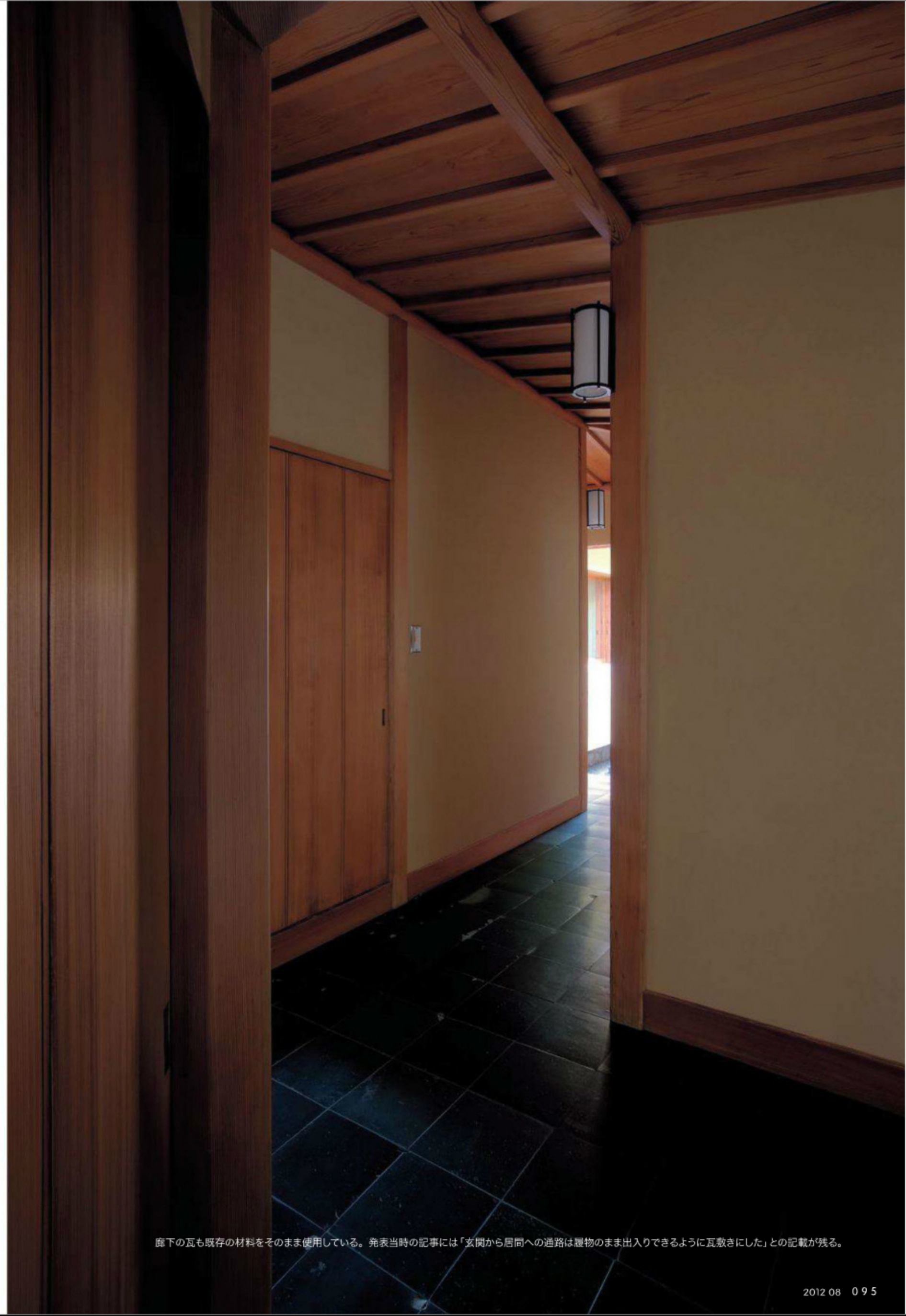
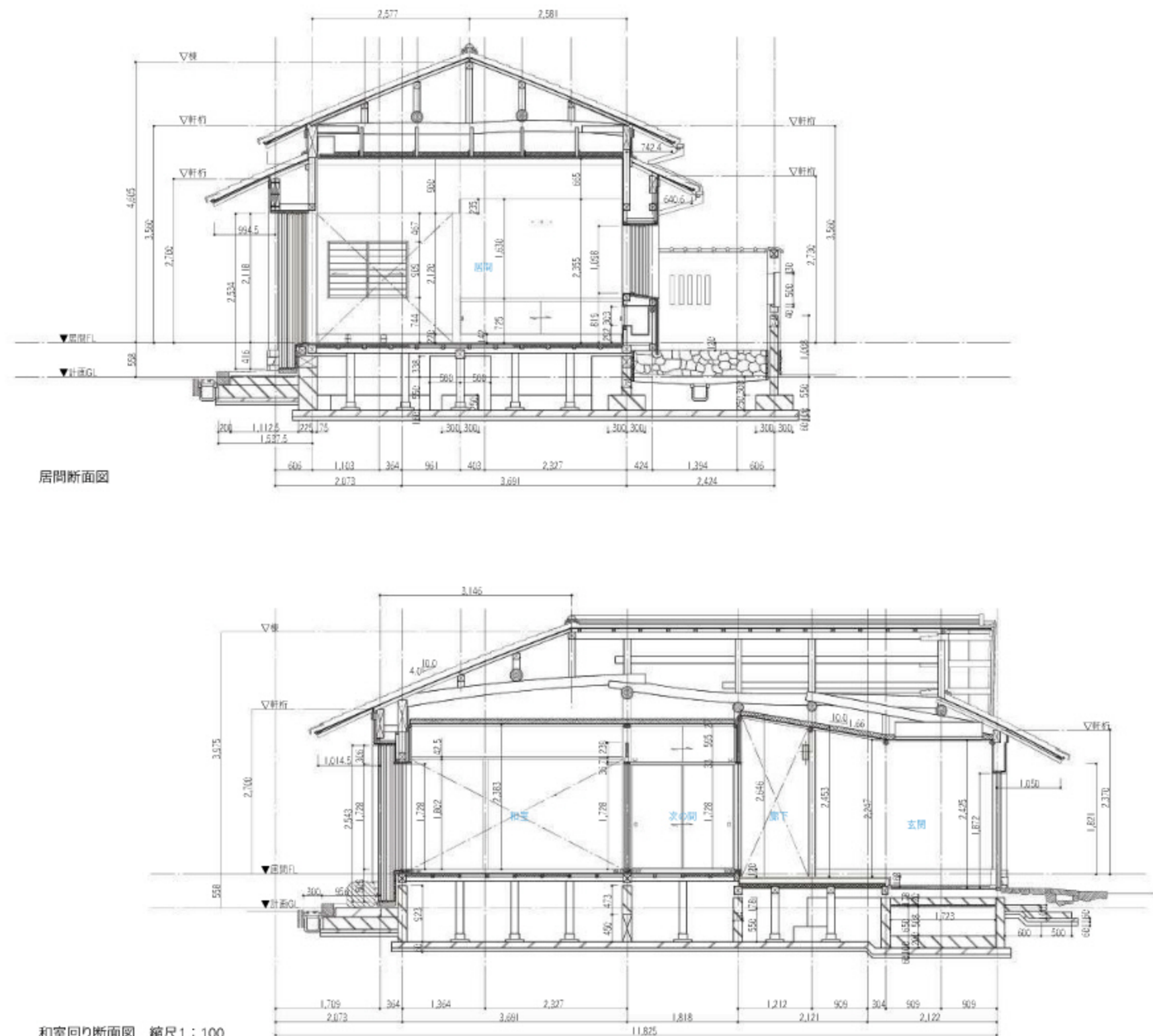
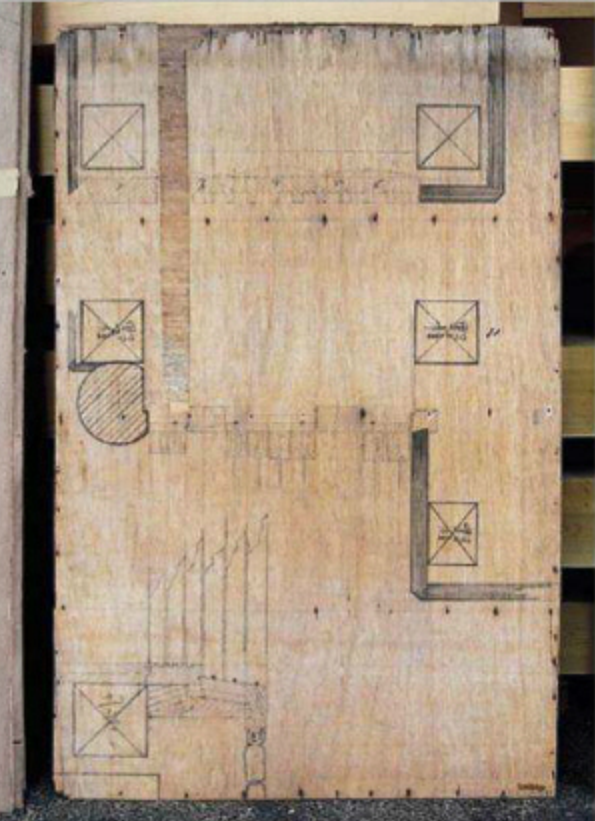
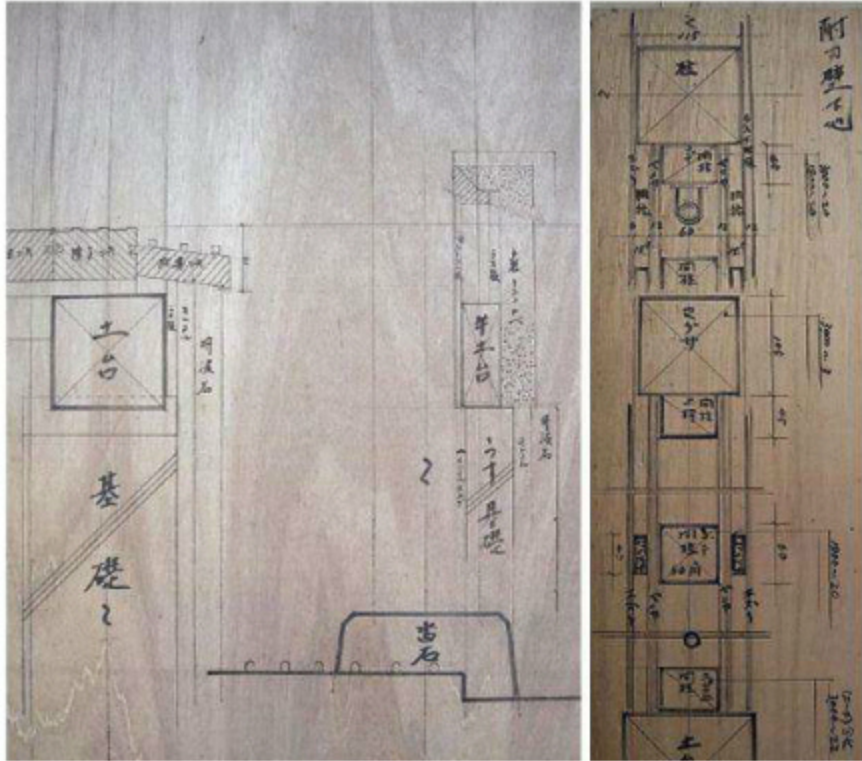
和室南東開口部　縮尺1：8

＊左記図面は現況調査の後、水澤工務店によっておこされた原寸図を8分の1に縮尺したもの。その他の図面は、今回の修復工事に合わせて描かれた図面は合計273点に及ぶ。

一般図：51点　原寸図：86点　建具図：72点
構造図：24点（担当／梅沢建築構造研究所）
石工事：15点　金物工事：8点
キッチン工事：2点　造園工事：1点
設備工事：14点（空調設備／テーテンス事務所）

居間南東開口部　縮尺1：8

居間南東面開口部。居間は障子を閉じると隅柱が室内に現れるのに対し、和室は隠れる納まり（左詳細図参照）。戸袋壁沿いにはスギ丸太の付柱を付加した「大壁真壁」。

左：居間北面開口部下にあった旧ラジエーターボックスの竹格子は空調吸込み口に変更し、南面開口側の天井と壁の間に吹出し口を設置。書斎西側開口下部の壁を利用して崖に対する防土壁代わりに基礎を1m立ち上げた。／右：中坪の北側壁には虫籠窓を開け、通気を確保。また軒樋を設置した。

居間断面図

和室回り断面図　縮尺1：100

廊下の瓦も既存の材料をそのまま使用している。発表当時の記事には「玄関から居間への通路は履物のまま出入りできるように瓦敷きにした」との記載が残る。

解体時に発見されたベニヤ板に描かれた居間東面開口部の原寸図。断面詳細図（上下）、平面詳細図（中）。12本分の鴨居の割りが検討された後が残る。

左：和室東面開口部の引き込み部の二重大壁。土間まで下ろした戸袋壁木軸の根元が腐食していたため、改修に合わせてうす基礎を打ち土台を載せている。／右：改修にあたり基礎までアンカーボルトを落とし、またベニヤ板で間柱を両面から挟むなどの構造補強が行われた。
（上記2点共に水澤工務店が現場で描いた原寸図）

「明朗さ」の背後にあるもの ──吉田五十八「惜櫟荘」70年目の解体復元

青井哲人（建築史家）

吉田五十八の惜櫟荘（岩波別邸）を訪ねる機会を2度いただいた。1度目は保存修復工事に入る前、2度目は竣工から1年後。いずれも今回の設計者・板垣元彬氏と、工事を担当した水澤工務店の栢沼正樹氏が丁寧にご案内くださり、編集部の皆さんとも一緒に和室に座り、また庭に立って、いろいろな議論をした。板垣氏は1963～77年に吉田五十八研究室に勤務されていたし、栢沼氏は大学時代に吉田五十八を研究したというから、竣工から70年の後に「師」の設計を解体して組み直す作業は、おふたりにとっても得がたい、もうひとつの「復元」でもあったろう。

最初の訪問は2010年2月18日。太平洋を見下ろす斜面地に閑静な屋敷とマンションが混じる。松樹と石垣と石畳の風景に向かって降り、敷地を固める石垣を鉤の手に巻いて上昇するアプローチをいくと玄関に至る。褐色のリシンで仕上げられ瓦屋根の軒で抑えられた水平に長い大壁に、白い障子のパネルが際立つ。外桟のないこの障子戸を引いて玄関に入ると、土間は青石の四半敷きで、上り框が低く抑えられているために敷瓦の硬質な廊下へとそのまま連続していく。進路を右手に取る──黒い床と角柱がつくる静かに引き締まった空気がまだ身体を包んでいる──ところが、その先のドアを開けた瞬間、海へのパノラマが開けた。高い天井。大らかな居間だ。廊下とは対照的な明るい聚楽の面がつくる空間。逆光を浴びてかすかにジグザグの陰影を浮かべる矢筈張りの床面が、迫り上がるような海面と呼び合う。

満州産青石による玄関。

居間から沓脱へと足先を下ろし庭へ出る。振り返ると、この家は驚くほど簡明でソリッドな姿をしている。居間から和室へと雁行して折れる特殊リシンの無言の壁面が、居間でも和室でも、それぞれ左端と上部小壁からなる逆L字型を残してくり貫かれたような構成だ。スレンダーな軸組の透明性と、歴史的規範を踏まえた豊饒な差異で魅せる従来の数寄屋とはまるで異質だ。吉田五十八という建築家が数寄屋に出発して数寄屋を遠く離れていったという頭では知っていた事実がこうして身体的実感となり、それがさらなる技法や構成の解読へと駆り立てる。

吉田五十八が探求し獲得した「新興数寄屋」とは何だったか。「吉田流」ともいわれるその独特の様式の特徴については、よく引用される伊藤ていじの6か条を参照されたい（＊資料）。吉田にとって、西欧に比肩しうる近代の日本建築は「明朗性」という言葉に沿って探求されるべきものだったが、彼はそのために構造と意匠を分離するという、一般的なモダニストの教義とは反対の途を選んだ。すなわち、真壁を基本とする本来の数寄屋から「多すぎる」「うるさい」線を消去し、かつ伝統的な木割の支配から脱するために、吉田は大壁を多用して構造上の軸組を隠し、そのうえで化粧材を付加して意図に適う構成を実現しようとした。のちの吉田事務所の所員たちはこれを「大壁真壁」とも称したという。吉田流では建具が極端に大型化し、しかも桟の数が切り詰められるが、これも同様の「明朗さ」のためである。大壁に関連して特徴的なのは「押込戸」、つまり障子・ガラス戸・網戸・雨戸などの建具の一切を戸袋へ押し込んでしまう手法で、こうすれば建具の線が残ることのない完全な「開口」が得られる。戸袋といっても、中空にした分厚い大壁の間に敷居・鴨居がそのまま延長され、そこへ建具をまっすぐ滑らせて消してしまうのであるから、そもそも建具が構造上の柱筋上を走ることはできない。つまり、構造と建具の関係もズラされている。

こうした独特の様式を、吉田はおおむね1930年代半ばには確立した。その探求の過程に、岡村仁三という京都出身の大工棟梁との、緊張感に満ちた相互批判的な協働があったことを、中谷礼仁らは小林古径邸の解体工事を報告しながら説得的に解き明かしている（注1）。「継承的技術者」としての岡村と、数寄屋を脱出して独自の「近代建築」を獲得しようとする吉田。1926年にはじまる岡村との批判と触発の入り交じる格闘は1935年の吟風荘を最後に終わる。吉田五十八を理解するうえで、1935年は重要な節目である。

惜櫟荘の設計が始まったのはおそらく1940年であり、吉田流確立後の標本ともいうべき仕事である。岩波の気に入りの別荘となったこの建物は、吉田自身も好きな作品はと聞かれて指を折ることがあった。板垣氏は、先にふれた岡村との協働時代の作品・小林古径邸（1933年竣工）について「古さ」が明らかだとおっしゃる。逆に、惜櫟荘にはある種の「徹底」と「乱暴さ」があるとも。古径邸は、細部には吉田流確立への布石となる実験が見られるものの全般にいまだ伝統的であり、逆に惜櫟荘はどんなに小さくともすべての開口部を徹底して押込戸とするなど手法がドライブしている感が確かにある。

ちなみに岩波茂雄は、まず堀口捨巳に相談して清水組に設計案をつくらせた後、吉田流の新興数寄屋の存在を知り、堀口＝清水のプランを踏まえた設計を吉田に依頼したという経緯がある。プランの大枠は踏襲されているだけに、かえってその修正点に吉田の意図が鋭く読み出せるのだが（注2）、ここでは筆者なりに居間南側の大開口に集中して観察してみる。

この南面を開け放つためには、12枚（!）の建具を南東角からから北および西へと押し込むための分厚い戸袋、すなわち中空の大壁が必要である。そのうち北側の戸袋は隣の和室側に食い込み、それが八畳間に二間幅という伸びやかな床の間に適度な分節を与えるのだが、他方の西側ではスクエアな居間の輪郭から戸袋部分を突出させ、その背後に書斎スペースをアルコーブ状に張り出させることでプランに吸収している。そして、この中空大壁が、普通の戸袋のように壁面から箱状に飛び出すようでは「うるさい」から、雨戸は土間レベルに敷かれたレールを走る特大の板戸とし、戸袋の壁を土間まで下ろしているのだ。庭から振り返る外観の、あの簡明でソリッドな構成はここからきている。

さて、戸袋となる中空の大壁は2尺5寸（約75cm）ほどの分厚い壁に見えるわけだが、実は柱筋を二重にしてつくられている。芯々で約2尺（約60cm）のピッチだ。居間南東角に2本、対角線上に北山杉の丸柱を立てているのもこれに対応しており、つまり建具のすべてがこの二重化された柱筋の間を走るのである。南東角の丸柱のうち1本は外部の土間上、ほかの1本は内部の床上にそれぞれ独立するが、室内意匠の観点から、後者の丸柱に対応させるべく西と北の戸袋の入口にあたる箇所に化粧の丸柱を添え、これに壁を斜めに当てて柱を視覚化する技巧が施されている（93頁詳細図参照）。

すでに述べたように、通常の障子や襖と違って、押込戸とするなら建具は柱筋から外れていなければならないが、いま注目している居間の南面開口では、建具12枚が走る幅に基づき柱筋を二重にするという「構造的解決」さえもが（かえって）要請されていることに注意しよう。しかもこの2尺のギャップが小屋組の架構ではいわゆる身舎と庇の関係となって現れるのだから驚かされる。庇部分の小屋を連続させるかたちで和室の屋根を決め、そこから風呂や玄関回りの屋根を導く。何という緻密な操作の連鎖だろうか。興味深いのは、構造と意匠、構造と建具とが分離された後に、しかし取り留めのない放縦に陥るのではなく、たしかに緊張漲る別様の統合へと到達していることだ。それはむろんトップダウンのシステム的統合ではなく、「明朗性」という命題から導き出された押込戸のような“部分のルール”を、グリッドシステム／開口回り矩計／小屋架構／内外の立面構成／部屋と部屋の相互関係といったものの間を次々に連鎖的に往還しながら徹底させ整合させていくような思考と手の躍動だ。だから写真ではいかにも安定して見えるだろう惜櫟荘はその背後にざわざわとした揺らぎを潜在させているのだが、吉田はそれを手なずけ支配下に置く感覚をきっと体得したのだろう。

2012年5月19日。2度目の惜櫟荘訪問。板垣氏の設計により、ユーティリティのアップデート、中庭の一部改変、今後の維持や制度上の要請を踏まえた基礎回りの改善などのほかは、惜櫟荘オリジナルが忠実に蘇っている。2年前の記憶ともまったく違和感がない。板垣氏にご案内いただいた後、解体修復工事の過程で得られた新たな知見をうかがうことにした。さまざまな金物の使用、居間の天井位置を現場で切り下げる修正をした痕跡……など、興味深い事実ばかりであった。居間南側の16.5尺（約5m）の無柱大開口についていえば、その上部の小壁の中身は、柱上に載る成50cmほどの桁材から、その下に渡る内法の楣材を束で吊り、その間に斜材をいくつもタスキにかけるという、思いもよらぬ大がかりな構造であった。大断面の桁に対して楣を固め、楣の下面に幅50cmにもなる鴨居（5つのピースを実矧ぎとし蟻桟で留めたもの）を取り付けていたのである。

このほか、居間南側のいわば“建築化された戸袋”の内に張られていたベニヤ板の裏面に、原寸図が描かれていたのが見つかった。開口回りを含む矩計を原寸で確認するために大工が描き、その後に資材として見えない部分に使用したのだろう。新木場の水澤工務店に保管されていると聞き6月22日に訪れた。そこには今回の保存修復工事のために大工が描いた多数の板図と共に、半ば偶然に数点だけ残され発見された70年前の板図とが並べられており、それを睨みながら板垣氏と栢沼氏の説明や解釈をうかがった。原寸を読み込むと、あらためて吉田五十八の力技の洗練というべき尋常でないバランスのありようが実感されてくるのだった。

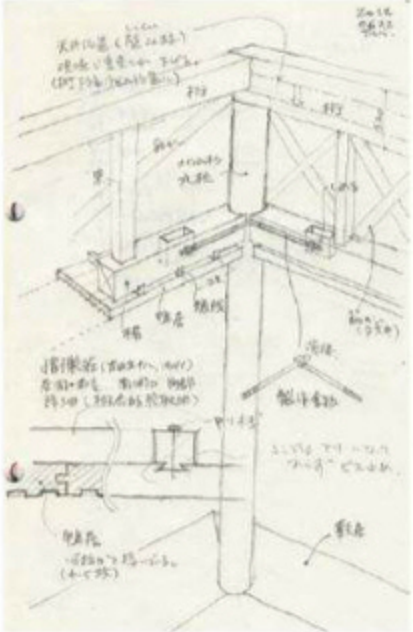
左：南面および東面開口部のまぐさをつないでいた製作金物。使用部位については97頁下の青井さんのスケッチを参照。／2：居間南東面開口上部の幅105mmの材を用いた筋違い。下屋の軒桁に合わせ梁が用いられていることが分かった。／3：12本の建具が納まる鴨居。写真奥には居間東面大壁の中の襷がけの筋違いが見える。／4：和室南面開口上部の筋違い。／5：木場にある水澤工務店に保管されたベニヤ板に描かれた原寸図。

板垣さん、栢沼さんの話を元に青井さんのスケッチした居間・和室の南開口上部の納まり（概念的見取図）

＊資料　伊藤ていじによる吉田流「新興数寄屋」の定式化（『吉田五十八作品集』1980年、新建築社）

1：大壁造りによる構造と意匠の分離・整理～木割からの解放
2：鴨居の吊り束の廃止と吹き抜けの小壁
3：荒組・横桟の障子
4：押込戸の考案
5：工場生産の新しい材料の積極的な利用
6：レベル差のある部屋、椅子式の導入
（筆者注：なお、惜櫟荘では小壁は吹き抜けでなく聚楽の大壁であり（居間・和室ほか）、また和洋式の床レベルによる調停は主たるテーマとなっていない）

＊注

1：中川武監修『数寄屋の森』（1995年、丸善）
2：真鍋修「吉田五十八設計の「岩波別邸」について」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2007年8月）

＊その他の関連文献

・吉田五十八「近代数寄屋住宅と明朗性」（『建築と社会』1935年10月号）
・『吉田五十八建築作品集』（1949年、目黒書店）
・『現代日本建築家全集3吉田五十八』（1974年、三一書房）
・『吉田五十八作品集』（1976年、新建築社、改訂版1980年）
・磯崎新『建築の一九三〇年代─系譜と脈絡 ─』（1978年、鹿島出版会）
・吉田五十八『饒舌抄』（1980年、新建築社）
・『数寄屋造りの詳細 ─ 吉田五十八研究』（1985年、建築資料研究社）
・砂川幸雄『建築家吉田五十八』（1991年、晶文社）
・『吉田五十八建築展（図録）』（1993年、吉田五十八建築展実行委員会）
・『吉田五十八とその流れ』（1993年、学芸出版社）
・青井哲人「吉田五十八：新しい普遍的日本建築を求めて」（黒田智子編『近代日本の作家たち』より、2005年2月、学芸出版社）

惜櫟荘（旧岩波別邸）

所在地／静岡県熱海市
主要用途／別荘

設計

吉田五十八（1941年）
解体復元：板垣元彬建築事務所
担当／板垣元彬
構造　梅沢建築構造研究所
担当／梅沢良三　五十嵐有紀（元所員）
冷暖房換気設備　テーテンス事務所
担当／村瀬豊
電気・給排水設備　水澤工務店
担当／野島捷司　鈴木保明（共に元社員）
造園　岩城　担当／川村善之

施工

建築　水澤工務店
担当／吉野延秀　栢沼正樹　広野勉
冷暖房換気・電気・給排水　平和エアテック
担当／日吉慎次
造園　岩城　担当／西田浩行
家具　高島屋スペースクリエイツ　担当／三村淳

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎／鉄筋コンクリート布基礎

規模

階数　地上1階
最高の高さ 5,157mm
敷地面積　822.41m²
建築面積　114.93m²（建蔽率13.93%）
延床面積　111.49m²（容積率13.55%）

工程

設計期間／2008年9月～2010年1月
工事期間／2010年3月～2011年5月

敷地条件

地域地区　第二種住居地域，防火指定なし
第一種高度地区
道路幅員　南4.8m

外部仕上げ

屋根／瓦葺き
外壁／リシン掻き落し
開口部／木製建具

内部仕上げ

玄関

柱／スギ大面取り
床／満州産青石四半敷き
壁／聚楽
天井／スギ中杢板棹縁天井

廊下

柱／スギ大面取り
床／敷瓦
壁／聚楽
天井／スギ中杢板棹縁天井

浴室

床／花崗岩 J&W仕上げ
腰壁／花崗岩本磨き
壁・天井／ヒノキ羽目板張り
浴槽／花崗岩本磨き
シャワー水栓金物／TOTO TMH40CCR

居間

柱／スギ削り丸太
床／チーク矢筈張り
壁／聚楽
天井／聚楽　梁型スギ　目地棒スギ

和室

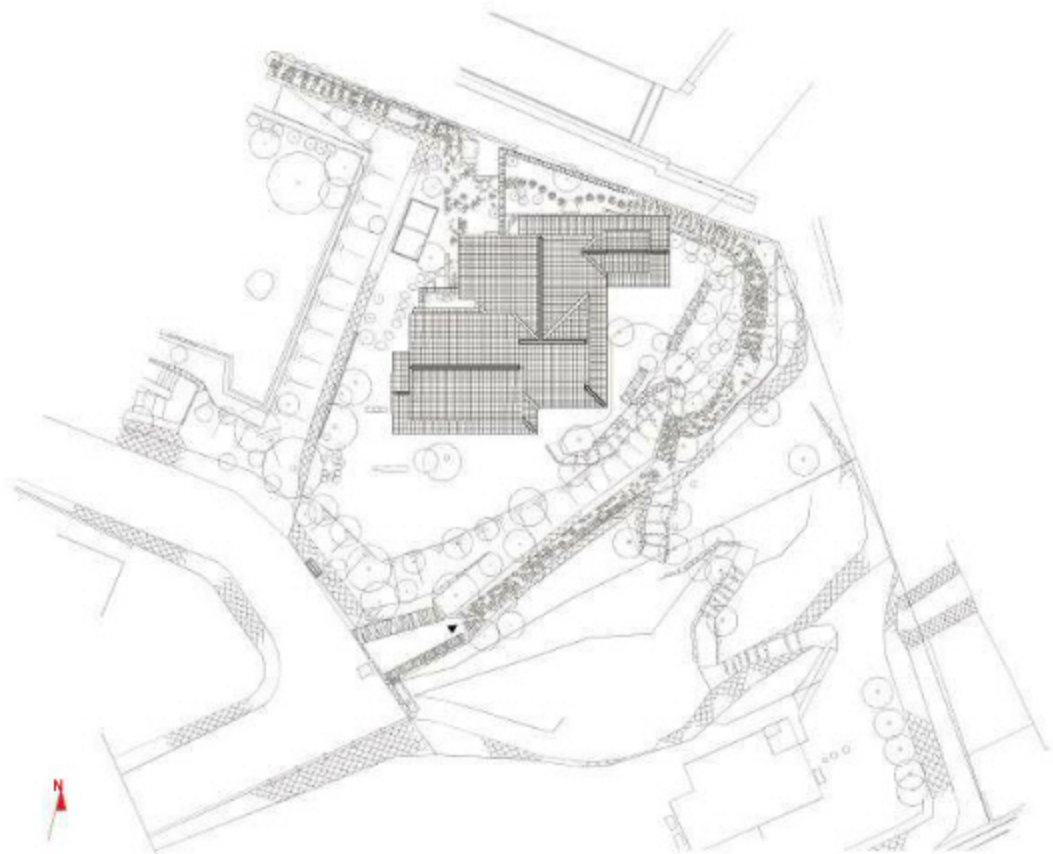
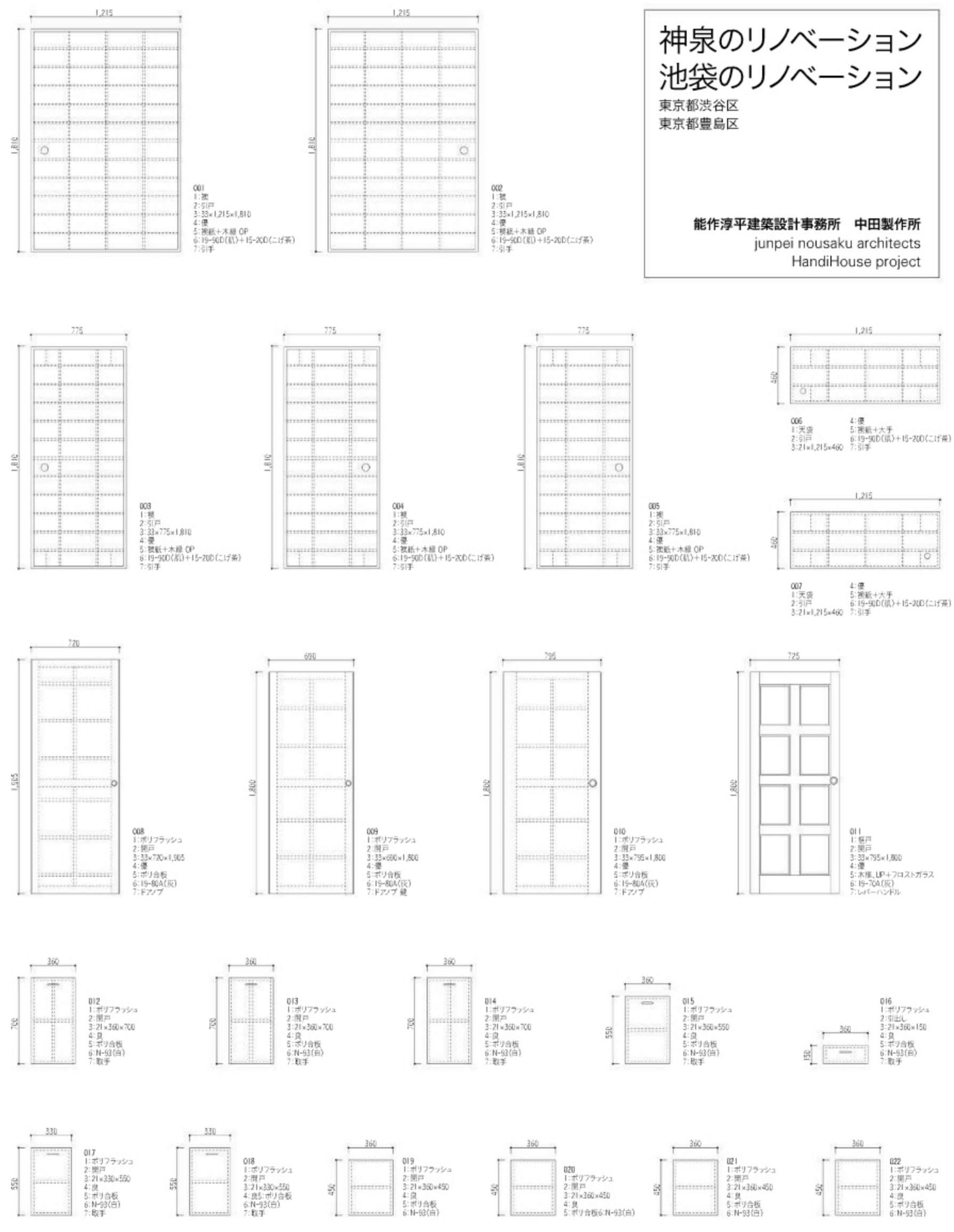
柱／北山丸太　床柱アカマツ削り丸太
床／畳　床の間地板脂マツ
壁／聚楽
天井／スギ柾板棹縁天井

設備システム

空調　冷暖房方式／個別エアコン
熱原電気熱源空冷HP直膨式
換気方式／自然換気　機械換気
その他／電気床暖房
給排水　給水方式／水道直結給水方式
排水方式／合併処理浄化槽
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

右：表門から石垣沿いに建物にアプローチする。／99頁：玄関ポーチの石畳は改修前の配置のまま別の場所で保管し，復元された。玄関脇の塀は今回の改修にあたり木造からコンクリートブロックへと変更。

竣工時の写真を頼りにつくられた表門（配置図▲マーク部分）。高さは1,800mm。

配置図　縮尺1：600

神泉のリノベーション
池袋のリノベーション

東京都渋谷区
東京都豊島区

能作淳平建築設計事務所　中田製作所
junpei nousaku architects
HandiHouse project

既存材リスト　縮尺 1：80（100頁「神泉のリノベーション」）　縮尺 1：40（101頁「池袋のリノベーション」）

※神泉のリノベーション（100頁）
部材番号
1：部位
2：寸法
3：部材の状態
4：仕上げ
5：色番号
6：樹種

※池袋のリノベーション（101頁）
部材番号
1：種類
2：機巧
3：寸法
4：部材の状態
5：仕上げ
6：色番号
7：金物

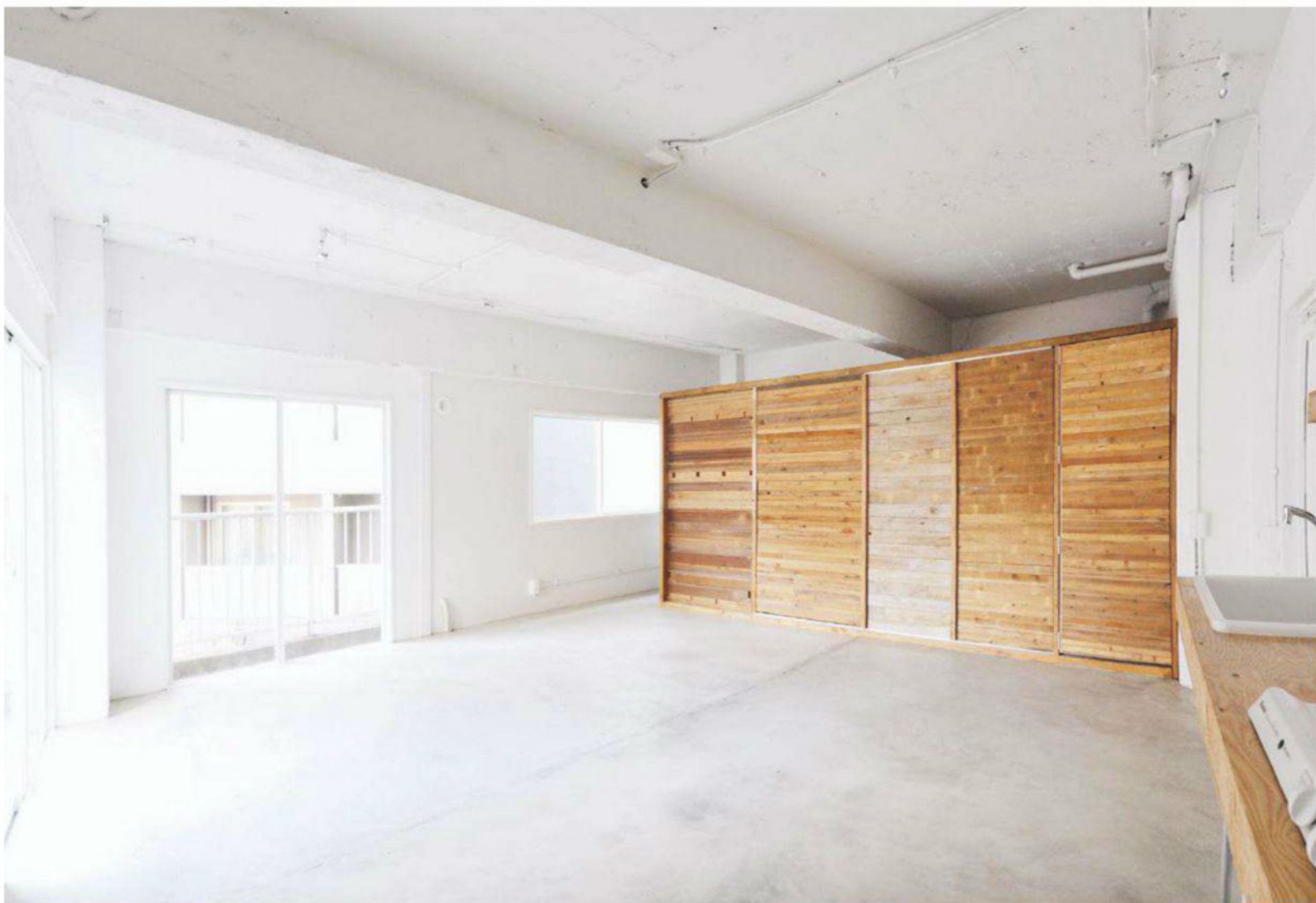
「神泉のリノベーション」

東日本大震災の影響で、一時的に建築資材の入手が困難な状況での計画であった。そこで既存の部屋の柱、梁、根太、野縁などの木材を再利用することにした。解体して材料を確認しながら、どのように利用するか、検討を進めた。（能作）

「池袋のリノベーション」

既存の部屋にある建具や間仕切りを再利用する。建具の中には襖やポリフラッシュ戸、ガラス框戸など、さまざまな種類があった。仕上げ材や金物に手を加えて、もう一度使えるようにし、どのように建具を並べるかを検討していく。（能作）

Renovation Point

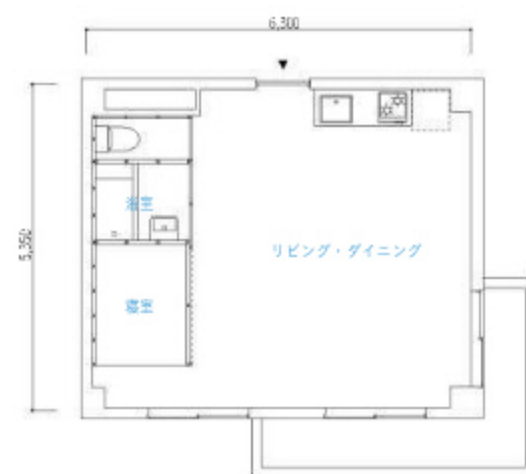
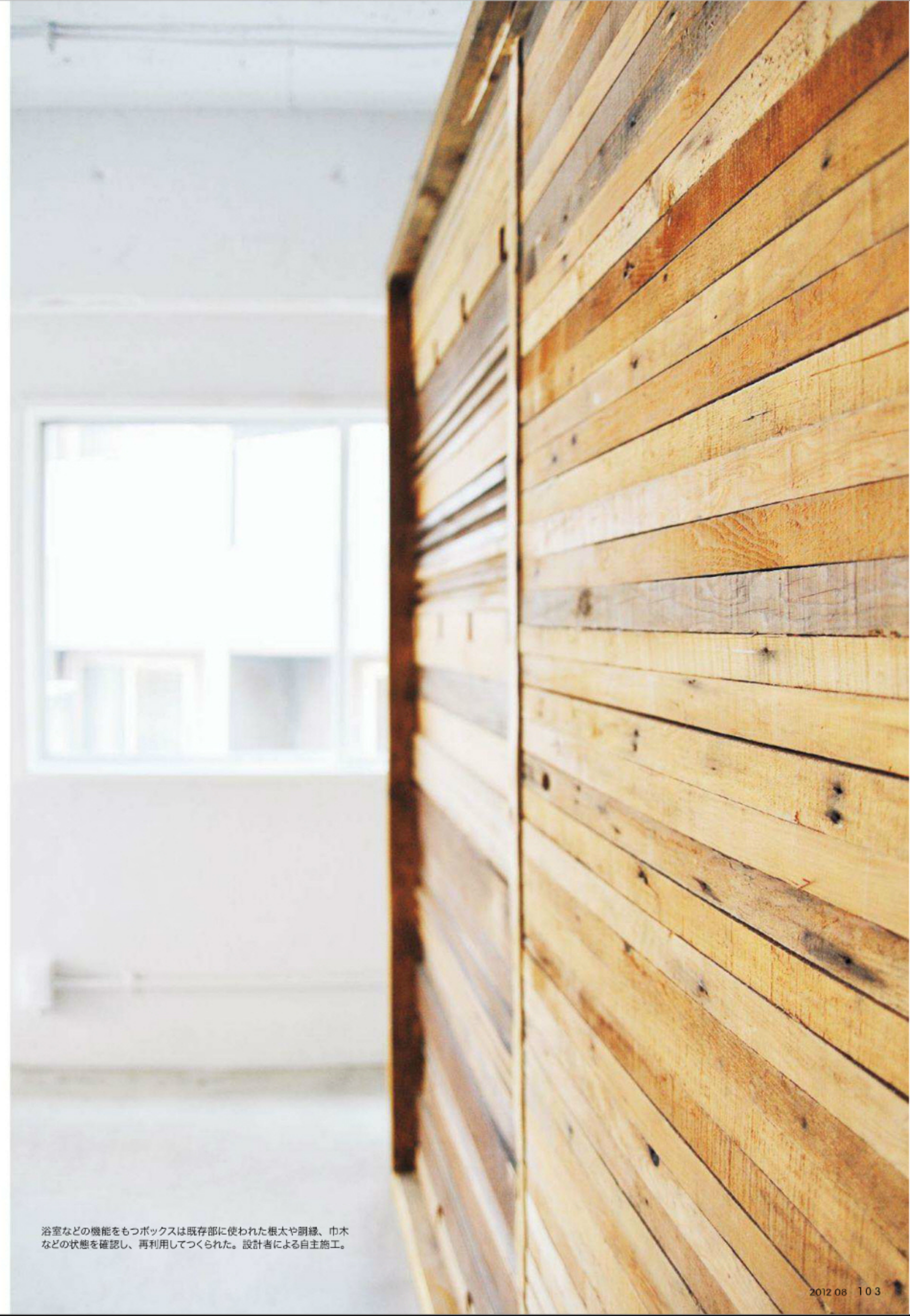
その場にあるものを組み直す

「神泉のリノベーション」内観。既存の間仕切り壁を撤去して、ワンルームに変更。床はフローリング、下地を剥がしたのち、モルタル仕上げ。既存部に用いられた材料でつくったボックスが室内に配置される。

神泉と池袋のふたつの物件は集合住宅の一般的なサイズである4畳半と6畳の部屋でつくられた2DKの間取りであった。また共通して、建主は若いカップルであったため、新たに間仕切りをつくり、個室数を増やすというよりは、間仕切りを取り払うだけで、なるべく広々としたスペースにするという経済的な改装を提案した。
また、取り払った間仕切りから木材や建具などの部材を取り出し、再利用することにした。そうすることで、材料代だけでなく、運搬費や廃棄代も抑えることができる。これによって改装費用は通常の半分程度にまで抑えることができる。
「神泉のリノベーション」では既存の木材を組み直して水回りやベッドなどが入るボックスを、「池袋のリノベーション」では既存の建具を1列に並べて、ベッドも入る壁面収納をなるべくコンパクトにまとめ、大きなワンルームの中に置いた。
空間の数ではなく、空間のサイズを大きくすることで、住む人の使い方や身振りも大きくなる。たとえば、この部屋だと、たくさんの人が集まって料理や食事をしたり、映画や音楽を楽しんだりすることもできる。
間取りが使い方や使う人数を限定してしまうのではなく、なるべく住む人がのびやかに、さまざまな使い方を想像しながら暮らすことができればと思う。　（能作淳平）

ボックスはw=4,050×h=1,900×d=1,620mm。寝室は床レベルが1,250mm高く、下部を収納として利用。

6,300
5,350
浴室
寝室
リビング・ダイニング

平面図　縮尺1：150

浴室
ダイニング・キッチン
リビング
寝室

改修前平面図

浴室などの機能をもつボックスは既存部に使われた根太や胴縁、巾木などの状態を確認し、再利用してつくられた。設計者による自主施工。

1 築35年のマンションの1住戸のリノベーション。30㎡の2DK

2 壁、天井、床の仕上材を取り除く。

3 下地材を取り出し、30㎡のスケルトンにする。

4 運び出した木材は合計121本。ここから再利用可能なものを選ぶ。

5 仕分けの様子。121本中109本が再利用可能。

6 既存の木材をもう一度組み立て、ボックスをつくる。

7 重い木材は構造部分に、軽い木材は建具部分に使用。

8 扉を開けると中は浴室になっている。

1 池袋に建つマンションの1住戸のリノベーション。40㎡の2DK

2 床、壁、天井を解体する。

3 建具以外の間仕切を取り除く。

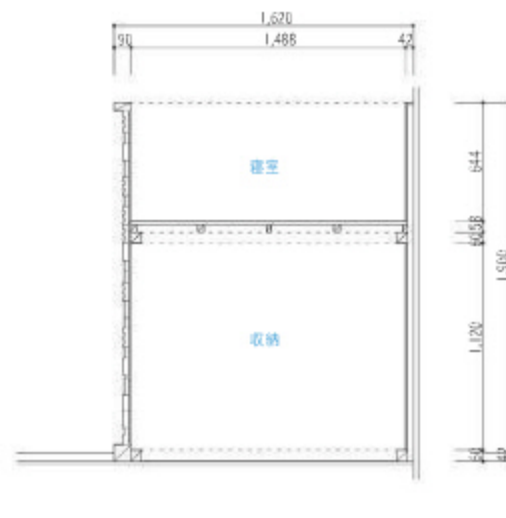
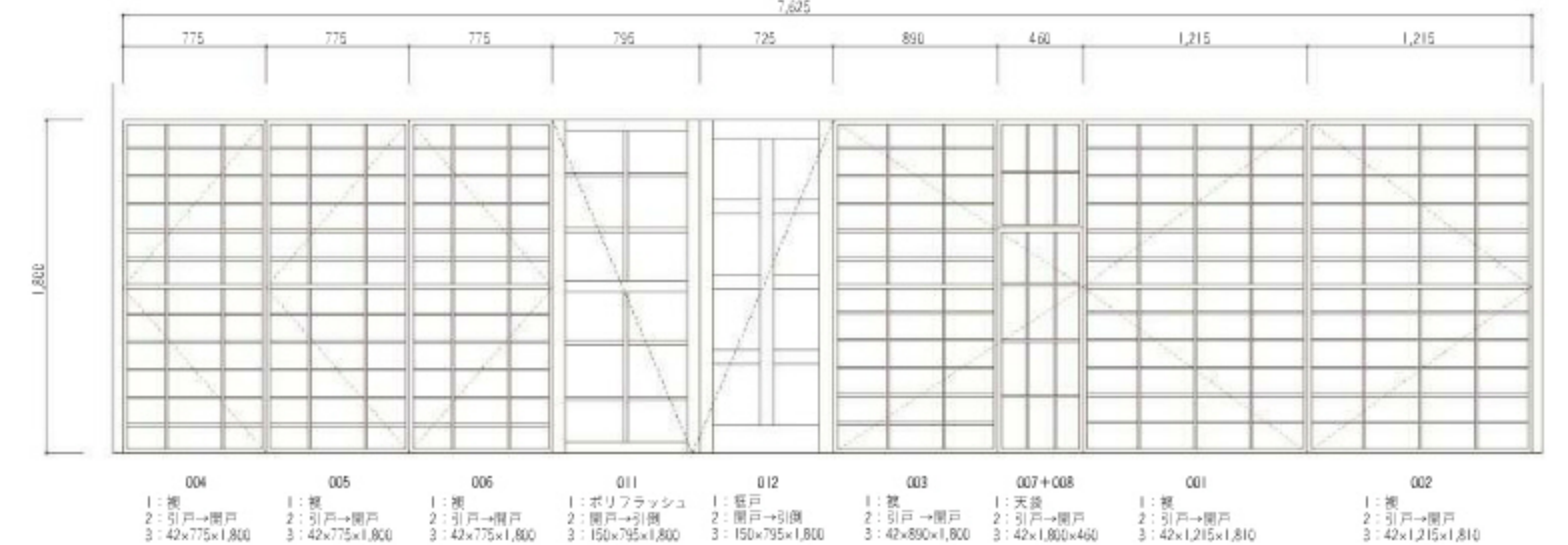
4 建具を取り出し、40㎡のスケルトンにする。

5 建具の種類ごとに分類する。

6 建具を1列に並べる。工期は7週間。

7 既存の建具でつくった壁面収納。

8 収納の一部はベッド台になっている。

ボックス立面図　縮尺1：50（図面下部番号1：既存部で使用されていた部位、2：使用本数、3：部材の大きさ）

ボックス断面図　縮尺1：50

壁面収納立面図　縮尺1：50（1：既存部で使用されていた部位、2：建具の用途転用、3：サイズ）

神泉のリノベーション
所在地／東京都渋谷区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦2人

設計
能作淳平建築設計事務所　中田製作所
　担当／能作淳平　中田裕一

施工
中田製作所＋HandiHouse project
　担当／中田裕一
設備　大明設備
　担当／小曽根唯喜　小曽根健一郎
電気　共成電気
　担当／及川勇

規模
天井高　2,500mm
専有床面積　33.03m²

工程
設計期間　2011年2月〜2011年4月
工事期間　2011年5月〜2011年6月

内部仕上げ
キッチン
床／モルタル t=40mm 金ごて押え ワックス
壁・天井／既存コンクリートの上、AEP
浴室
床／モルタル t=50mmの上、FRP防水 トップコート仕上げ
壁／ラワン合板 t=12mmの上、FRP防水トップコート仕上げ
天井／ラワン合板 t=12mm パテ仕上げ UP
バスタブ／ FRP防水で製作

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／ガス温水式床暖房
給湯　給湯方式／ガス給湯

池袋のリノベーション
所在地／東京都豊島区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦2人

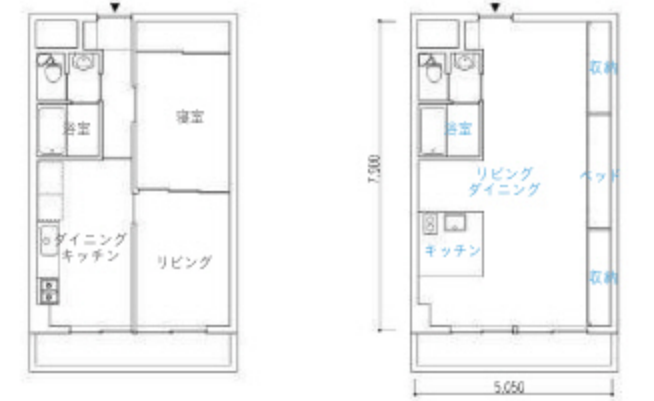
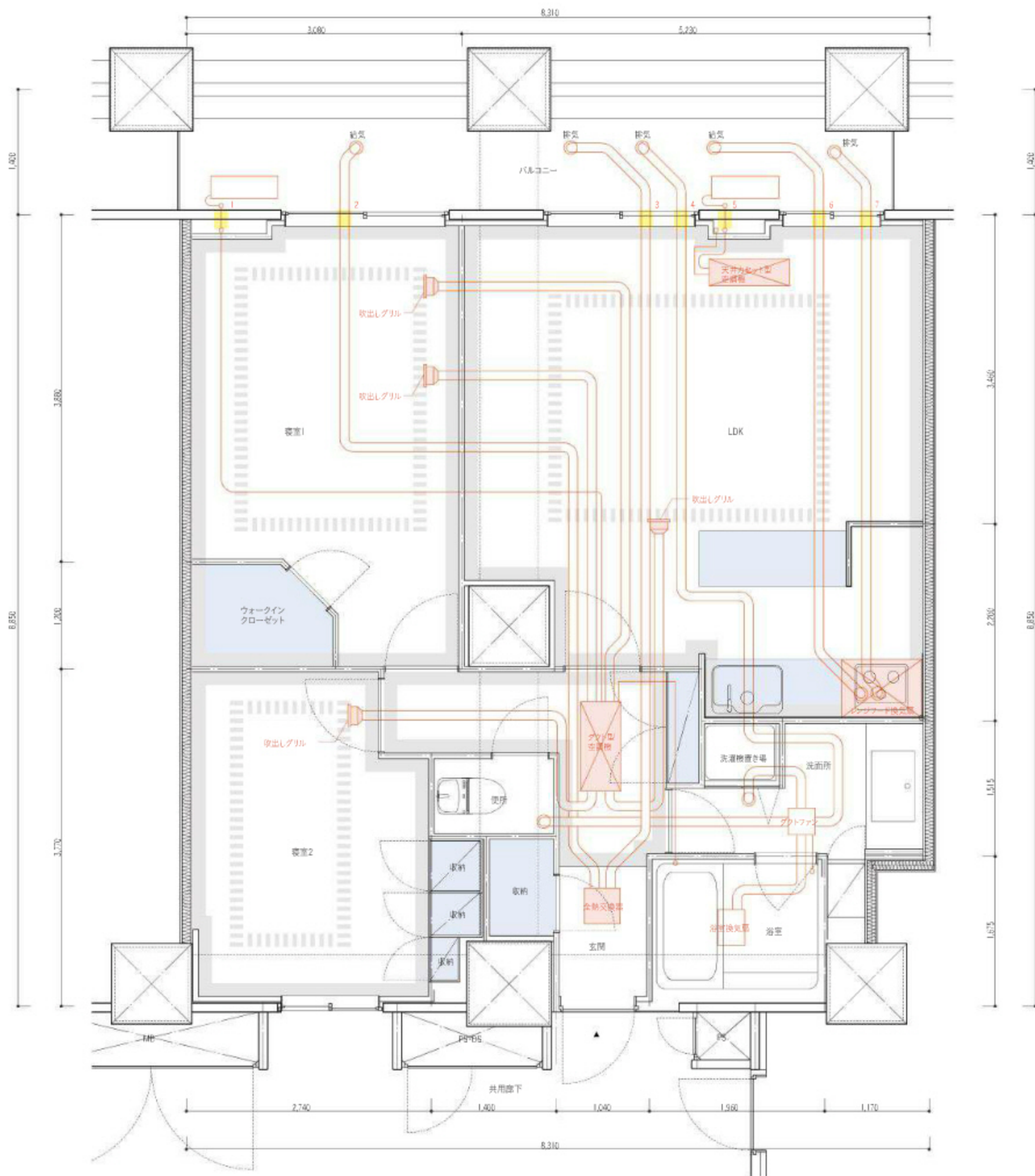
設計
能作淳平建築設計事務所　中田製作所
　担当／能作淳平　中田裕一

規模
天井高　2,700mm
専有床面積　38.96m²

工程
設計期間　2012年5月〜

撮影および写真提供（2作品）／能作淳平建築設計事務所

改修前平面図　縮尺1：150

平面図

新浦安の住宅

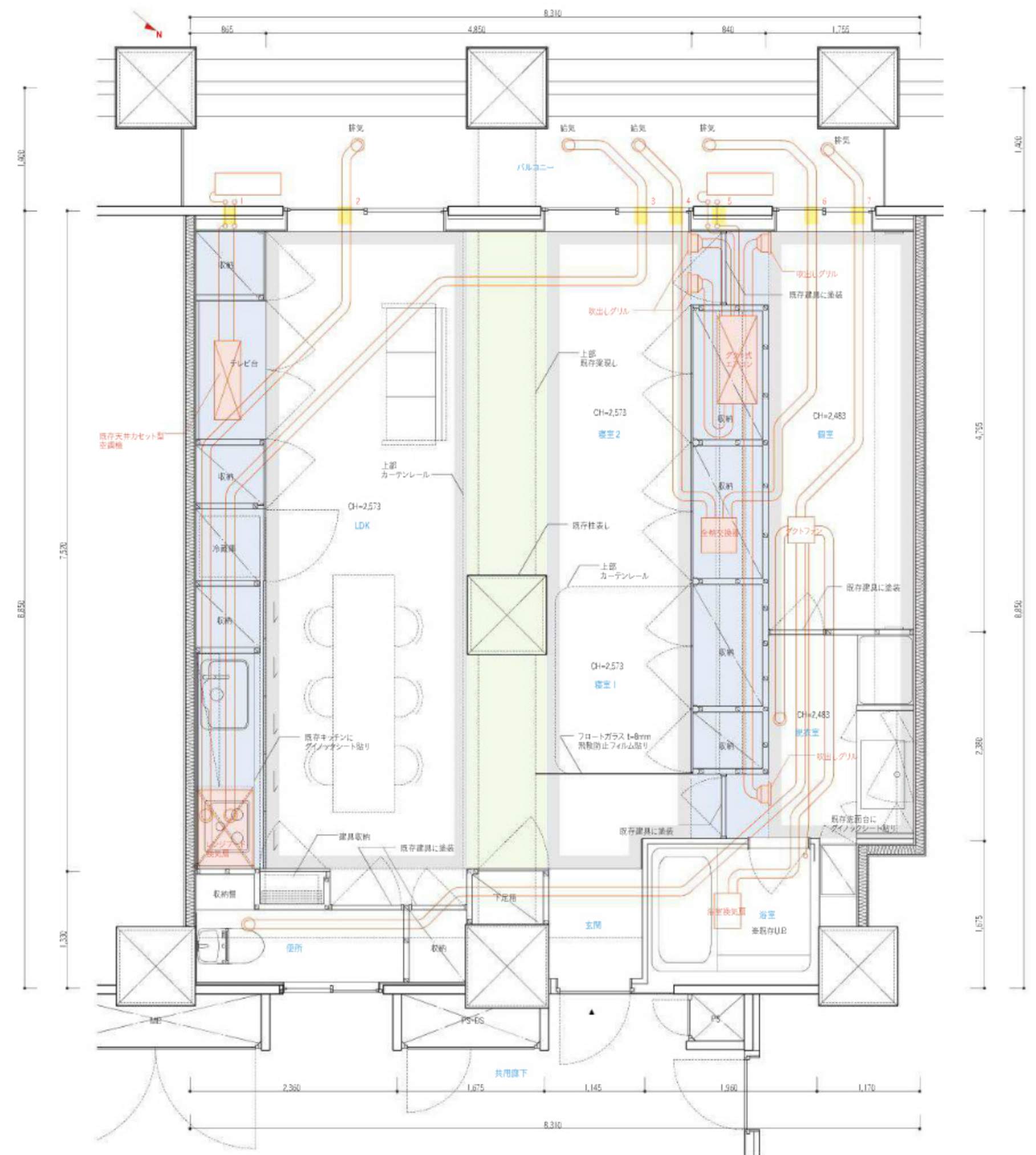
House in Shinurayasu
千葉県浦安市

メジロスタジオ
Mejiro Studio

改修前設備図兼平面図　縮尺 1：60

設備図兼平面図

Renovation Point

設備配管のリ・プランニングと空間リノベーション

改修にあたっての主なポイント

* スリーブはすべて既存のものを使用
* プランスタディとダクト経路の最適化を、同時並行で検討
* 天井懐の必要な既存設備機器を収納内に納め、フラットな天井を実現
* すべての部屋の眺望と十分な設備・収納スペースの確保を並列的に検討
* 設備・収納／部屋／既存躯体をシンプルにみせる帯状のプラン
* 部屋のカタチと天井のカタチを一致させる

タワーマンションの一戸を改修する、ということ

JR新浦安の駅前にそびえ立つ築8年のタワーマンションの改修である。建主からは白を基調としたシンプルな空間を低コストで実現することが求められた。計画の途中で先の震災が起き、新浦安の街は液状化により大きな被害を受けたが、計画建物は幸いにもほぼ無傷であった。

超高層建築物では空調系統などの設備はハイスペックな機器が導入されているため、コストを抑えるには既存機器の再利用が必須である。その際、通常のリノベーションとは異なる超高層ならではの制約をクリアしなければならなかった。

まず、空調設備ダクトを外部に貫通させる既存躯体スリーブは変更できないため、プランスタディとダクト経路の検討を同時並行で行う必要があった。また十分な天井懐が必要な大型の既存機器を、どのように納めるかが大きな課題となった。ここでは懐が必要なすべての設備機器を収納内の天井に納めることで、メンテナンスや更新への対応を図りつつ高さを確保したフラットな天井を実現したいと考えた。そうしてすべての部屋の眺望と、十分な設備（収納）スペースの確保を並列にスタディした結果、奥行方向に　開する帯状のプランニングが導き出され、部屋のカタチと天井のカタチが一致した、シンプルで抽象度の高い空間を獲得することができた。

住戸内の柱についても隠蔽せずに現し、空間を規定する重要な建築的要素として再利用している。超高層ならではのヒューマンスケールを超えた大きな柱、梁といった構造体が、抽象度の高い空間の真ん中でむき出しになることで、今回の強烈な地震力と日常の強大な風圧力が地上へと伝達される事実が露わになる。日常生活の中で、既存躯体が拠りどころとなって地上とつながっているという現実にリアリティを与えるのである。3.11以降、超高層の住戸が地上の世界から縁を切られたものではなく、日常と地続きである感覚を獲得するべきだと考えている。

今後このようなタワーマンションの改修需要が増えると考えられるが、住戸価格が高額なこともあり、改修費用は修繕程度に抑えられる場合が多い。そうした中で、古くなった躯体を安価で購入し、費用をかけて空間を一新するようなリノベーションの設計とは違う、設備・構造・意匠（プランニング）の関係性を輻輳させる総合的な設計力が必要になると考えている。　　　（メジロスタジオ）

バルコニー側から見る室内。収納はすべて建具（キッチンは可動式）の奥に設けて見えないようにしている。この収納内部の天井に、懐の必要なすべての設備機器を納めることで、居室では天井をフラットに統一し高さも確保。居室、構造、収納を帯状に配置したシンプルなプランを実現し、抽象的なワンルームにしている。左側の扉上部には空調吹き出しユニット×2が納められている。

右頁上：LDKからバルコニー方向を見る。ダイニングテーブルはタモ集成材による製作。／右頁下：キッチン方向を見る。キッチンは可動パーテーションの内側に納めることができる。LDKと寝室はカーテンでゆるやかに仕切る。右の凹みはテレビ台で、上部は天井カセット型空調機。

断面図　縮尺1：60

24階平面図　縮尺1：600

新浦安の住宅

所在地／千葉県浦安市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦2人＋子供2人

設計

メジロスタジオ
設計担当／古澤大輔　馬場兼伸　黒川泰孝　許光範*（*元所員）
監理担当／古澤大輔　許光範*

施工

ルーヴィス
担当／福井信行　松井志磨*　安食拓*

構造・構法

主体構造・構法　鉄筋コンクリート造（既存建物）
基礎　杭基礎（既存建物）

規模

既存建物
階数　地下1階　地上32階
軒高110.65m　最高の高さ111.95m
建築面積　8,458.60m^2
改修対象住戸
住戸位置　地上24階の1住戸
専有面積　73.07m^2

工程

設計期間　2011年1月～2011年5月（実施設計）
工事期間　2011年6月～2011年8月

内部仕上げ

LDK　寝室1　寝室2　個室
床／既存フローリングの上複合フローリング t=12mm
壁／PB t=12.5mmの上クロス貼り（一部AEP塗装）　フロートガラス t=8mm 飛散防止フィルム貼り
天井／PB t=9.5mm　クロス貼り

脱衣室
床／既存フローリングの上長尺塩ビシート t=2mm
壁／PB t=12.5mm　クロス貼り
天井／耐水PB t=9.5mm　クロス貼り

浴室
既存ユニットバス再利用

キッチン　その他
厨房機器／既存キッチンにダイノックシート貼り
ガスコンロ・レンジフード／既存機器再利用
洗面台／既存洗面台にダイノックシート貼り
照明／ミニクリプトン球 DAIKO DDL-50994E
それ以外は既存DL再利用
製作家具／ダイニングテーブルオリジナル製作
建具／キッチン可動パーテーションおよび収納建具以外は既存建具再利用の上EP

設備システム

空調　空調方式／天井埋込型エアコン（ダクト式）　壁吹出ユニット（可変風量型）
換気方式／天井埋込型全熱交換器
天井埋込型換気乾燥機　中間ダクトファン
給排水　給水方式／ポンプ圧送給水　受水槽
排水方式／貯溜槽　ディスポーザー
給湯　給湯方式／ガス給湯器（個別方式）

撮影／関尚道

左：個室。奥の開口左側の垂れ壁内に吹き出しグリルが納められている。ダウンライトは既存を再利用。
右：玄関回り。左の扉は脱衣室へつながり、上部に吹き出しグリルを隠している。扉は既存建具を再利用。

Renovation Point

2×4住宅特有の壁と分節を活用する

弘明寺の住宅

HOUSE IN GUMYOJI
横浜市南区

山口誠デザイン
MAKOTO YAMAGUCHI DESIGN

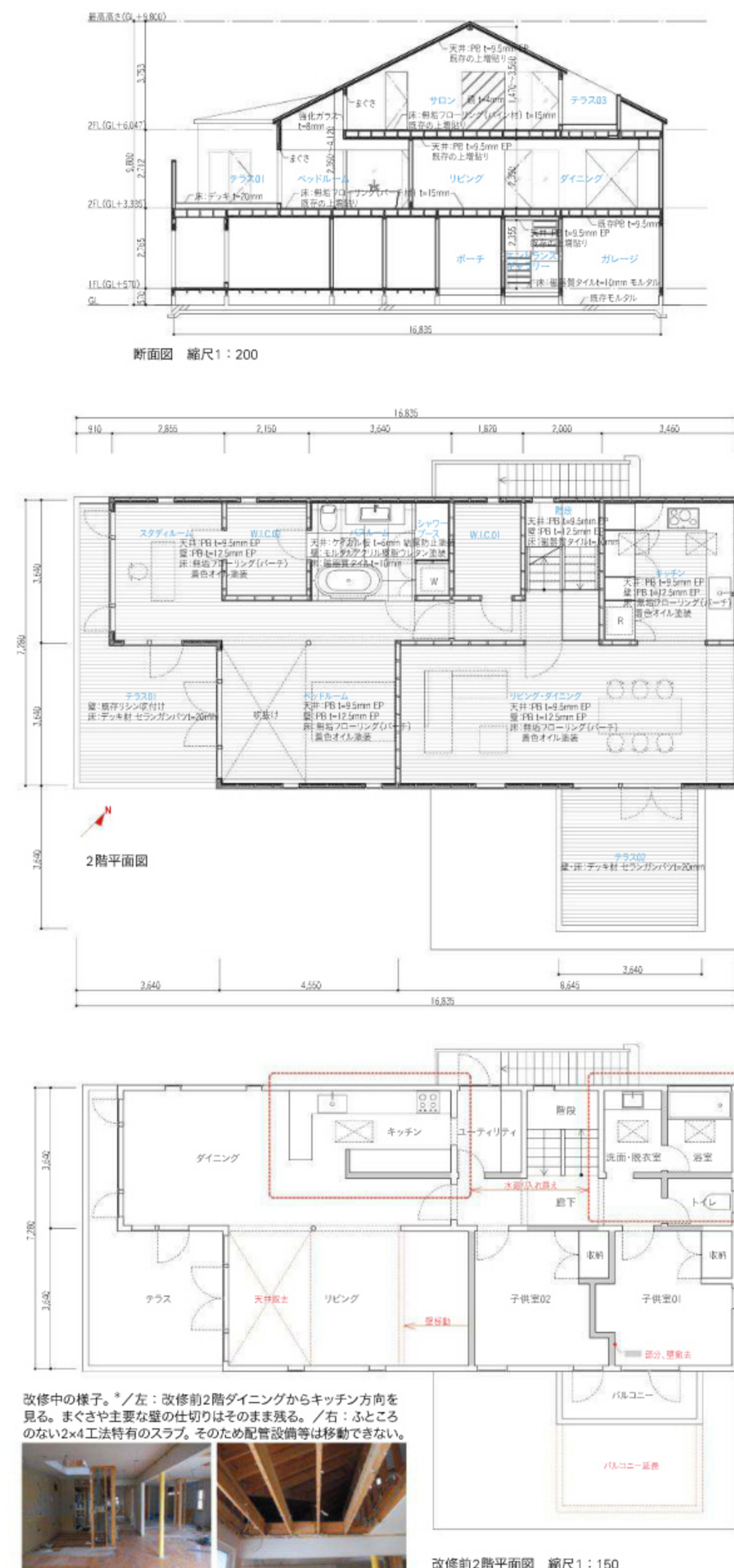
2階リビング・ダイニングから階段室、キッチン方向を見る。2×4住宅では既存から壁の構成を大きく組み直すのが難しいため、ふたつの子供室をリビング・ダイニングにキッチンと浴室を入れ替えるなどの用途変更による空間の転換を試みている。壁で仕切られたハコの分節を明快に感じられるように、部屋同士の接続部分にはガラスドアを使用。

2階ベッドルームから見る。左はもともとキッチンだった場所に位置する浴室。上部に現れる撤去不能のまぐさが、各部屋をつなげる門型フレームをつくり出す。ベッドルームでは一部吹抜け空間を実現。3階も壁を撤去して家型の一室空間にしている。

断面図　縮尺1：200

2階平面図

改修中の様子。*／左：改修前2階ダイニングからキッチン方向を見る。まぐさや主要な壁の仕切りはそのまま残る。／右：ふところのない2×4工法特有のスラブ。そのため配管設備等は移動できない。

改修前2階平面図　縮尺1：150

2×4工法で生まれるハコの接続

一般に木造・鉄筋コンクリート造・鉄骨造などの構造形式にかかわらず、その構造と空間の完成形の関係は意外に曖昧である。その余裕分を活かして、改修時には既存と大きく異なる新たな空間構成ができる場合が多い。構造材を残しながら今まで壁だったところを開口にしたり、といったことである。しかし今回のような2×4工法では、ハコとしての構造体が文字どおりそのまま部屋となっており、設備配管も構造内部に組み込まれるため、全体として非常に無駄がない。いい換えれば余裕なくつくられているわけだが、今回の改修計画でも当然の判断として、もとの部屋の構成はそのままのかたちで残すことになった。

その一方で、まず部屋の用途を置き換えた。リビングルームだったところは広いベッドルームに、バスルームとキッチンは入れ替えるなどといったことである。そうして新築時と改修時で異なる住まい方に対応させているのだが、単に部屋の用途を置き換えるだけでは細かい不都合も生じてしまう。そこで部分的に新たな壁や開口部を加えたりと、いくつか要素を調整した。たとえば階段を軽やかなデザインのものに交換することで、陽の光が入らない駐車場であったエントランスホールを明るくすることができた。

そもそも2×4工法はハコを連ねるという、そのつくられ方からすれば必然的な結果の気もするが、改修前の現地で各部屋は壁にしっかりと囲まれ、それぞれがはっきり分節されているように感じた。それは工法上で壁面を連続させるために必要なまぐさの存在も効果として大きい。そのことがとても興味深いと感じたので、ハコとハコとの接続部分（＝ドア）をガラスにしようと考えた。ガラスドアで仕切られた各部屋は、不透明な壁によって囲まれたハコの感じが強まり、ガラスを通してハコの外を眺めるような印象をもつ。結果として、各部屋どうしの視線のつながりが生まれ、2×4工法らしいはっきりした部屋の分節と合わせて、既存にはなかった深い奥行を室内全体につくることができたと思う。　（山口誠）

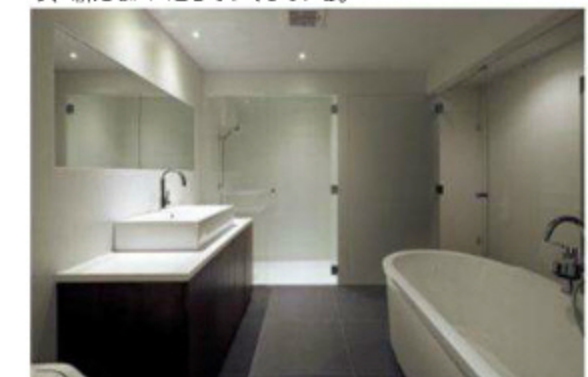
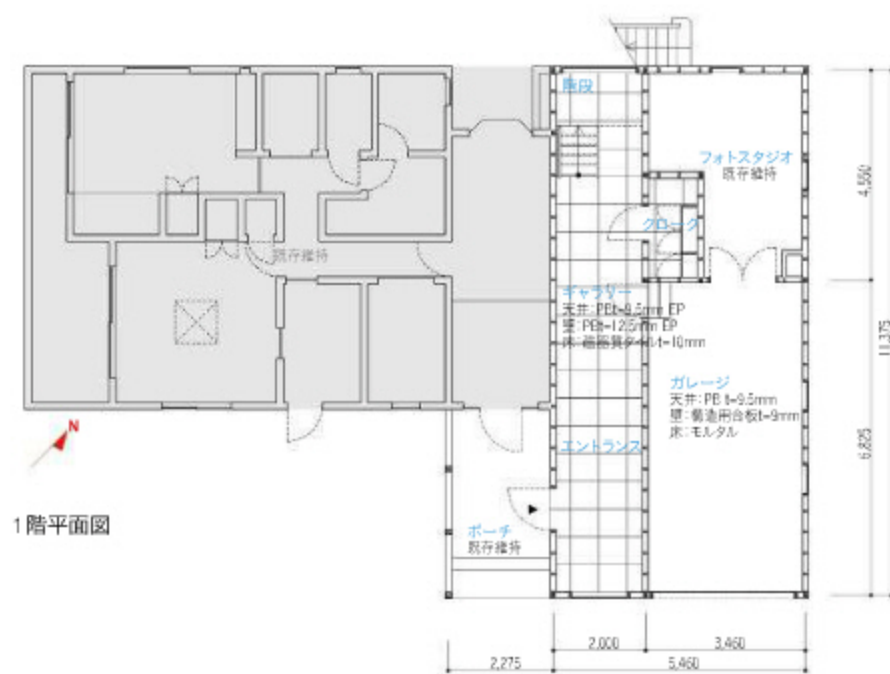
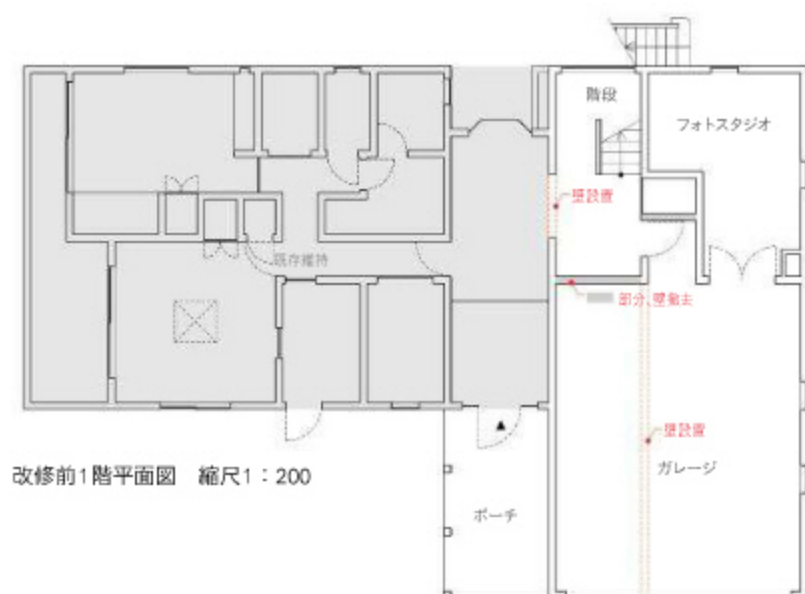
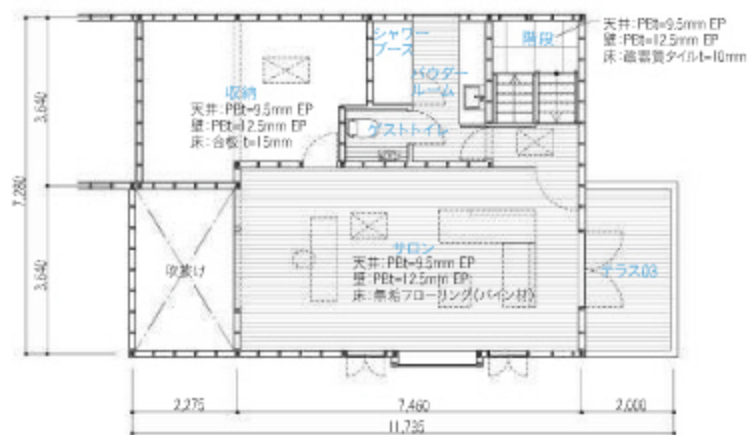
バスルーム内部。奥のシャワーブースをガラスとまぐさで仕切り、新たなハコとしてつくっている。

1階平面図

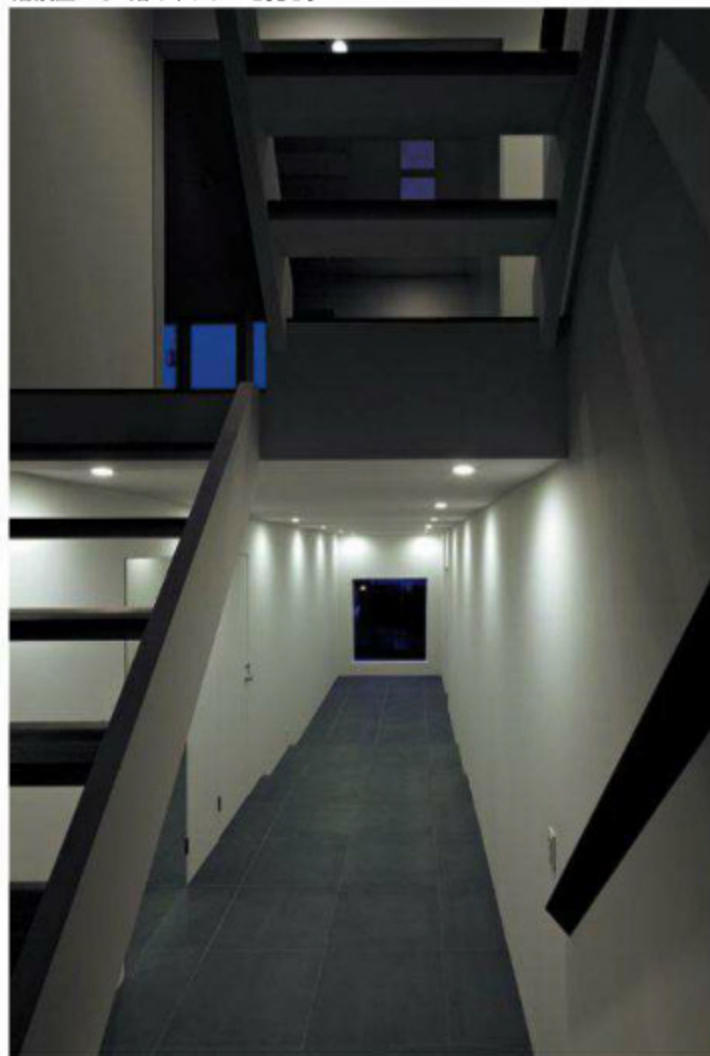
3階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

改修前3階平面図

階段室から1階ギャラリーを見る。

弘明寺の住宅
所在地／横浜市南区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
山口誠デザイン
　担当／山口誠　岩寄慶子
照明　Luxie　担当／近藤真由美
施工
スリーエフ　担当／斉藤恵一
設備　石井エンジニアリング　担当／石井良実
電気　ウスイ電機　担当／碓井正己
構造・構法
主体構造・構法　枠組壁工法（2×4）
基礎　布基礎
規模
階数　地上3階
軒高 6,300mm　最高の高さ 9,800mm
敷地面積　343.03m²
建築面積　148.88m²
　（建蔽率43.4% 許容60%）
延床面積　244.67m²
　（容積率71.2% 許容200%）
　1階　100.36m²　2階　106.00m²
　3階　37.71m²
工程
設計期間　2011年1月〜2011年4月
工事期間　2011年6月〜2011年8月
敷地条件
地域地区　第一種住居地域　準防火地域
　第四種高度地区
道路幅員　南6.0m　駐車台数1台
外部仕上げ
屋根／既存スレート瓦
外壁／既存リシン吹付け
開口部／アルミサッシ
内部仕上げ
エントランス　ギャラリー　クローク
階段踊り場
床／磁器質タイル t=10mm
壁／PB t=12.5mm EP
天井／PB t=9.5mm EP
キッチン　ダイニング　リビング　ベッドルーム
スタディルーム　WIC01、02
床／無垢フローリング（バーチ材着色オイル塗装）t=15mm
壁／PB t=12.5mm EP
天井／PB t=9.5mm EP
厨房機器／
　食洗器／Miele
　オーブン／AEG
　IH・バーベキューグリル／GAGGENAU
　換気扇／三菱電機
バスルーム　シャワーブース
床／磁器質タイル t=10mm
壁／モルタル アクリル樹脂ウレタン塗装
天井／珪酸カルシウム板 t=6mm 結露防止塗装
ドアノブ／フォンテトレーディング
サロン　納戸　パウダールーム　ゲストトイレ
床／無垢フローリング（パイン材）t=15mm
壁／PB t=12.5mm EP
天井／PB t=9.5mm EP
全室共通
バスタブ・シャワー水栓金物・洗面器水栓金物／フォンテトレーディング
ドアノブ／フォンテトレーディング　WEST
便器／パナソニック
設備システム
空調　空調方式／エアコン
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
　排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／鳥村鋼一
*撮影／山口誠デザイン

東側から見る夜景。正面のエントランス・ギャラリーはガレージだった場所を屋内化してつくられ、開口部を設置。エントランスへは左側の玄関からアクセスする。

Renovation Point

12個の区画を住宅やオフィスとしてフレキシブルにシェアする

8ビル
8building
大分市中央町

塩塚隆生アトリエ
TAKAO SHIOTSUKA ATELIER

RC造3階建ての単身者用アパートの改修工事である。6畳のワンルームが各階4戸・計12戸が入った建物を、オフィスやギャラリー・住居などが混ざった建物へとコンバージョンする。建物は中心市街地のビルが密集している場所に立地している。まず、建物に付随しているベランダや庇などを取り除き、採光や通風など敷地内の環境を改善した。内装は躯体を残して取り除き、コンクリートの壁を一部開口とすることで、同一フロアの各室へ行き来できるようにした。同じサイズの住戸が連続する集合住宅の形式、つまり12個の区画とふたつの階段室の組み合わせで、居住者の用途や必要面積の変化に追従できる多様さをもった建築に変えようとした。たとえば、3階の住宅を拡張する時は2階の区画を住居として使ったり、1階のオフィスのスペースが足らなくなれば2階のいくつかの区画をオフィスにあてたり、各階をそれぞれひとつの家族が使うことで3家族の共同住宅になり得たり、2階の4つの区画をそれぞれオフィスやショップとしてシェアをするなど、時間軸における使い方の変化を呑み込む建築にしたいと思った。　　　（塩塚隆生）

右：1階は新聞集配所が入っていたため、前面道路に面してW3,000×H2,150mmの開口があり、現在はフィックスガラスを入れている。内部は仕上げを剥がし、補修をせずにそのまま躯体のテクスチャーが現れるように白く塗装している。

配置図　縮尺1：2,000

南側立面。

3階リビング。西側にあった居室を仕切るRC壁を一部取り払い、長手方向に貫通させている。

3階水回り。廊下よりフロアレベルを200mm上げカーテンで仕切っている。

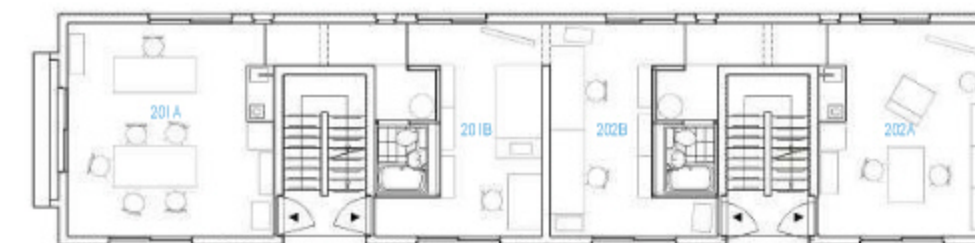
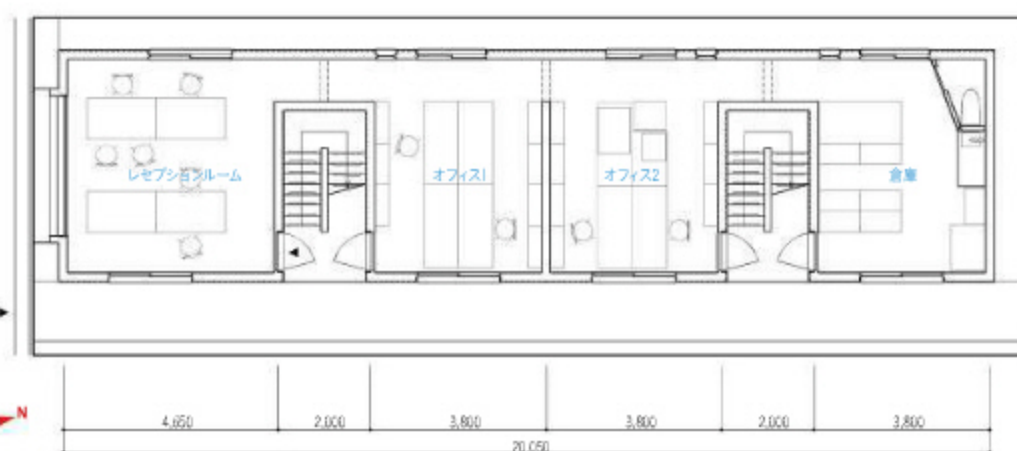
地に敷いている写真は1階レセプションルームの解体時壁の近景。仕上げを剥がした荒々しさは塗装をしてもそのまま浮かび上がってくる。*
*写真提供：塩塚隆生アトリエ

改修前3階平面図

改修前2階平面図

改修前1階平面図　縮尺1：200

躯体撤去
バルコニー
内装撤去

3階平面図

2階平面図

1階平面図　縮尺1：200

8ビル
所在地／大分市中央町
主要用途／共同住宅
家族構成／２人（3階住居）

設計
塩塚隆生アトリエ
　担当／塩塚隆生　古庄恵子
施工
ナカノス建設工業　担当／佐藤二郎
設備　但馬設備工業　担当／安部一正
電気　大和電業社　担当／山本晋
構造・構法
主体構造　鉄筋コンクリート造壁式構造
規模
階数　地上3階
軒高 8,000mm　最高の高さ 8,700mm
敷地面積　158.69m²
建築面積　96.24m²
延床面積　288.72m²
　1階　96.24m²　2階　96.24m²
　3階　96.24m²
工程
設計期間　2010年6月〜2010年7月
工事期間　2010年8月〜2010年10月
敷地条件
地域地区　準防火地域
道路幅員　南6.0m
外部仕上げ
屋根／シート防水
外壁／弾性吹付けタイル
開口部／アルミサッシ　スチール
外構／コンクリート金ごて押さえ　砕石敷き
内部仕上げ
ダイニングキッチン　リビング　寝室
床／既存コンクリート 薄塗りセメント 防塵塗装
壁／既存コンクリート AEP
天井／既存コンクリート現し
照明／ MAXRAY ML30082-40-91（ダイニングキッチン）　パナソニック NL56212K（リビング　寝室）
浴室
床／モルタル金ごて押さえ 防塵塗装
壁／既存コンクリート AEP
天井／既存コンクリート現し
照明／パナソニック AW56536
バスタブ／カルデバイ SANIFORM PLUS FREESTAND
シャワー水栓金物／ HANSGROHE CPHG88001-SET-B
洗面器／ TOTO L710C
設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプエアコン
　換気方式／換気扇
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／電気給湯器

撮影／矢野紀行

3階の躯体の仕上げとRC壁一部撤去時の様子。

4色の仕上げと既存の木製枠で印象を変える

501号室平面図　縮尺1：200　501号室展開図　縮尺1：120　それぞれの居室四周の仕上げや木製枠の構成

クサバアパートメント

KUSABA APARTMENT
大分市田室町

塩塚隆生アトリエ
TAKAO SHIOTSUKA ATELIER

改修前の様子。壁、天井は一律にプリント合板仕上げで、居室間には建具が入っていた。*
*写真提供：塩塚隆生アトリエ

503号室のリビング1からダイニングキッチンを見る。隣り合う居室で床の仕上げを変え、木製枠の小口を残すことで印象の異なる空間を緩やかにつないでいる。

503号室のホールとダイニングキッチンの間は建具が取り払われ木製枠のみ残されている。左手に隣り合う寝室の床はグレーのシートが貼られている。

RC造5階建て、同じ間取りの3DKが30戸入るアパートの改装である。このアパートでは退去で空いた住戸を順次改装をして、長期計画でアパート全体をリノベーションしていこうとしている。また、その時々に合わせて異なるコンセプトで改装することで、同じ間取りでありながらバリエーションのある全体をつくり出そうとしている。今回の計画対象は5戸で、既存の間取りや仕上げをなるべくそのままに印象を変えることを求められた。そこで隣接する各室が必ず異なる色をもつように、白・グレー・チャコールグレー・シルバーの4色を各室の仕上げ（モルタル・砂壁・プラスターボード・プリント合板・タイルなど）の状態を見極めながら配していった。床のビニルシート・壁の塗装・クロスなどがそれぞれひとつの部屋の中では同色になるように材料を選んだ。また、室内の建具を取り外しその木製枠の小口のみ木肌を現すことで、室の切り替わりや複数の部屋が集まっていることを意識させようとした。それは、室の向こうに室があるといった、空間に奥行をつくり出すことにつながっている。同時に天井のコンクリートスラブを現し、躯体と仕上げとの関係が見て取れるようにすることで、表面にも奥行をつくり出そうとした。　　（塩塚隆生）

各室平面図　縮尺1：150

クサバアパートメント

所在地／大分市田室町
主要用途／共同住宅
家族構成／1人もしくは2人

設計

塩塚隆生アトリエ
　担当／塩塚隆生　村本有佳理
プロデュース　新大分土地　担当／石橋真

施工

大分メンテナンス　担当／山本信幸
電気　大和電業社　担当／清成広和

構造・構法

主体構造　鉄筋コンクリート造壁式構造

規模

階数　地上5階
軒高 14,350mm　最高高さ 14,800mm
延床面積　1,738.80m²
計画対象床面積　54.00m²／戸

工程

設計期間　2011年11月〜2012年2月
工事期間　2012年3月（1ヵ月）

敷地条件

道路幅員　南西12.00m

内部仕上げ

ダインングキッチン

床／長尺ビニルシート t=2.0mm
壁／既存モルタル・砂壁 AEP アクリル樹脂塗装
天井／コンクリート現し
厨房機器／
　本体／サンワカンパニー PLAIN-K petit W1200
　照明／東芝 IB30115
　MAXRAY OP0723-89

リビング1・2　寝室

床／長尺ビニールシート t=2.0mm
壁／既存モルタル・砂壁 AEP アクリル樹脂塗装
天井／既存コンクリート現し
照明／ MAXRAY OP0723-89

ホール

床／長尺ビニールシート t=2.0mm
壁／既存プリント合板 ビニルクロス
天井／既存吹付け塗装 AEP
照明／東芝 IG20069

設備システム

空調　冷暖房方式／ヒートポンプエアコン
　　　換気方式／換気扇
給排水　給水方式／受水槽方式
　　　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／矢野紀行

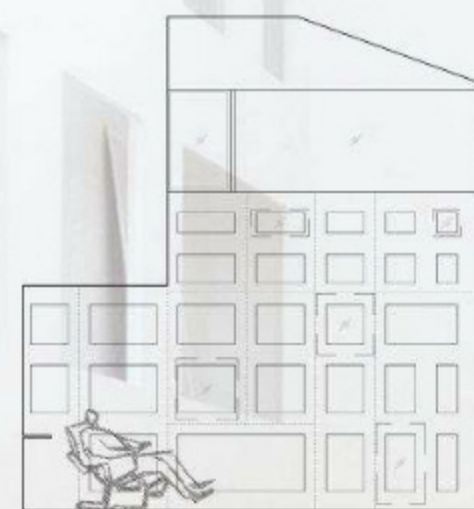
501号室。床は黒のシート貼り、壁はプリント合板の上にクロスを貼っている。

Blanks

茨城県つくば市

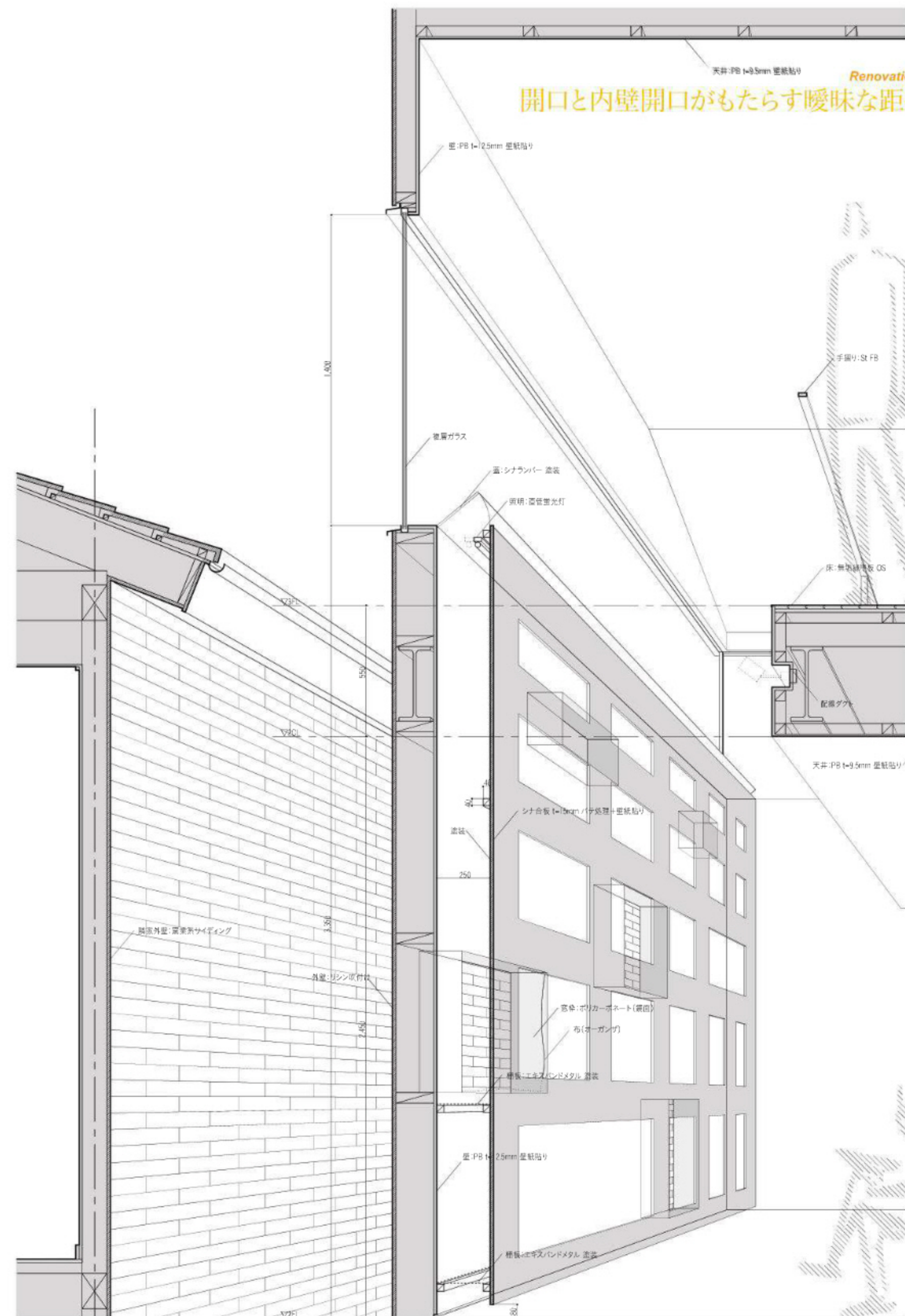
稲垣淳哉＋佐野哲史＋永井拓生＋堀英祐／
Eureka
Junya Inagaki＋Satoshi Sano＋
Takuo Nagai＋Eisuke Hori ／ Eureka

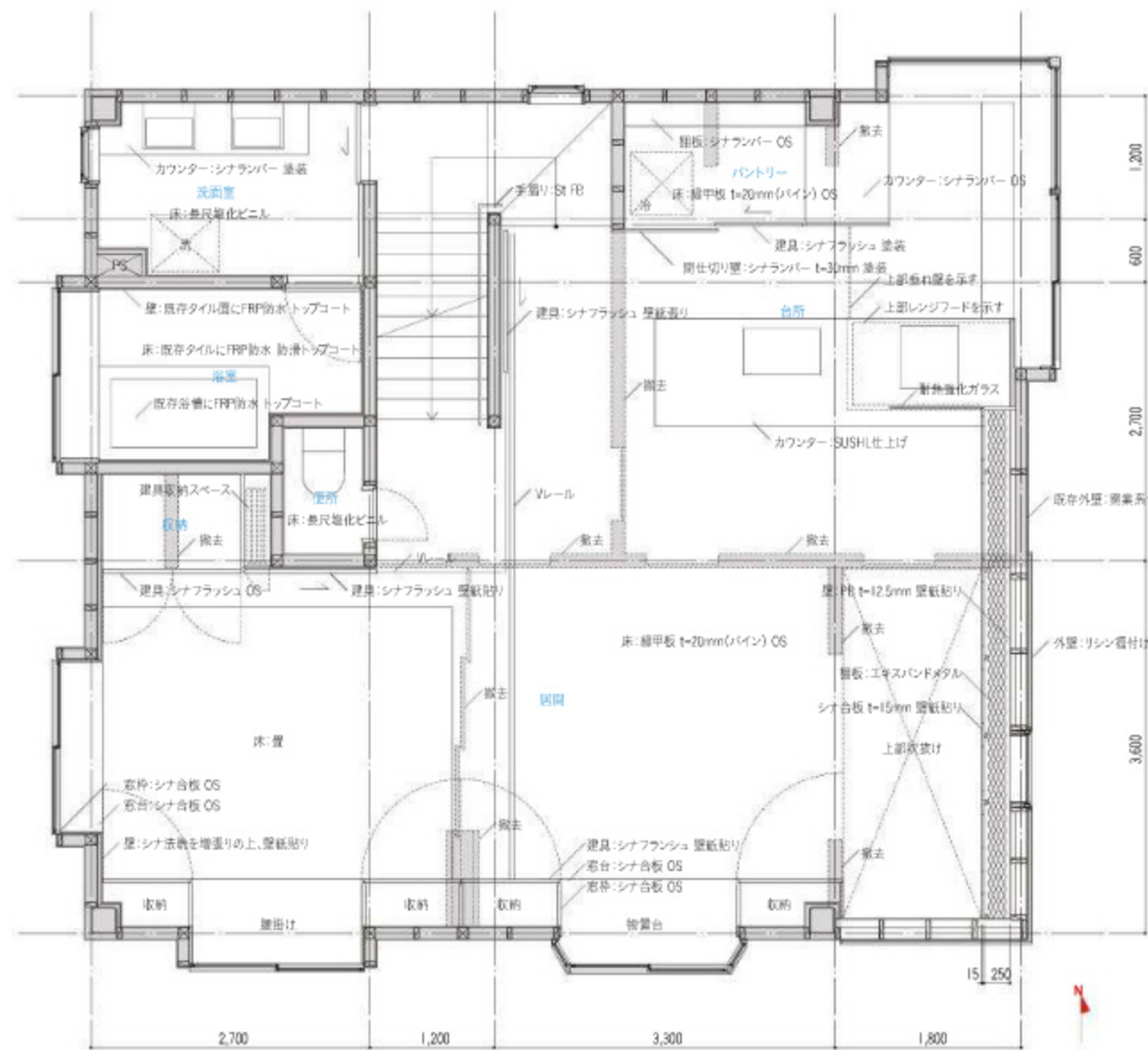
2階開口と内壁開口の関係をつくるスタディ模型。*

*写真提供：Eureka

2階東面内壁展開図　縮尺1：100

事務所兼用住宅であった3階建ての建物の専用住宅への改修。主階となる2階は、階段室と浴室からなる北西角のコア部分を除くすべての間仕切り壁を撤去してワンルームとした。
南側と西側は隣地の庭が借景となる良好な環境であったが、東側は隣家が近接しており、既存開口部はただ隣家の壁面が見えるだけであった。そこで、条件のよい南・西側の外壁には手を付けず、条件の悪い東側の外壁を改修することで環境の向上を図った。
外部に対して開くのでも閉じるのでもなく、隣家との隙間を利用しながら「ぼんやりとした外部への拡がり」をつくれないかと考えた。隣家との間の屋外の余白に対して屋内側にも余白をつくり、余白をふたつ重ねることで、外部が屋内に浸透し、また逆に屋内が外部に延長していくような、奥行をもった境界面とすることを試みている。
具体的には、外壁の屋内側に250mmの間隔を空けて合板1枚の薄い内壁を設け、その内壁に多数の開口を穿っている。内壁の開口を外壁開口部よりも小さくすることで、屋外から入ってくる光を外壁と内壁との間でバウンスさせ、「余白」が間接光で満たされるようにした。屋内外の境界に挿入されたぼんやりと明るい余白によって、室内は曖昧な距離感をもって屋外とつながることができる。さらに、内壁開口部の大きさをグラデーショナルに変化させることで、遠近法による固定された距離感ではなく、視点によって室内での距離感を変化させることを試みている。室内の距離感が変化すると、余白の向こうの屋外への距離感もそれに伴い相対的に変化する。こうして生まれるぼんやりとした移ろいが、この家での生活にほのかな安らぎをプラスしてくれればと考えている。　（佐野哲史）

Renovation Point

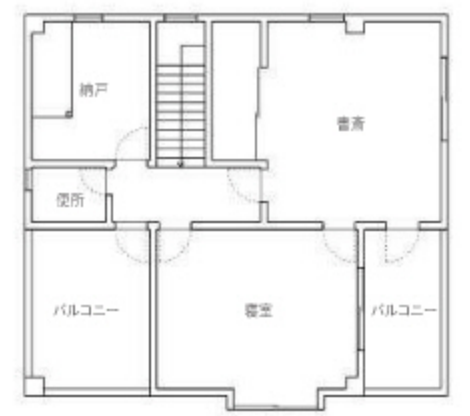
開口と内壁開口がもたらす曖昧な距離感

隣家の外壁から内壁までの関係を見る断面パース　縮尺1：20

2階は既存の仕切り壁を階段室と浴室以外すべて撤去し、ワンルーム化している。東面は隣家が迫っているため外壁の屋内側250mmに多孔な内壁を設け、物と光によって曖昧な奥行をつくり出している。

2階平面図　縮尺1：80

改修前1階平面図　縮尺1：150

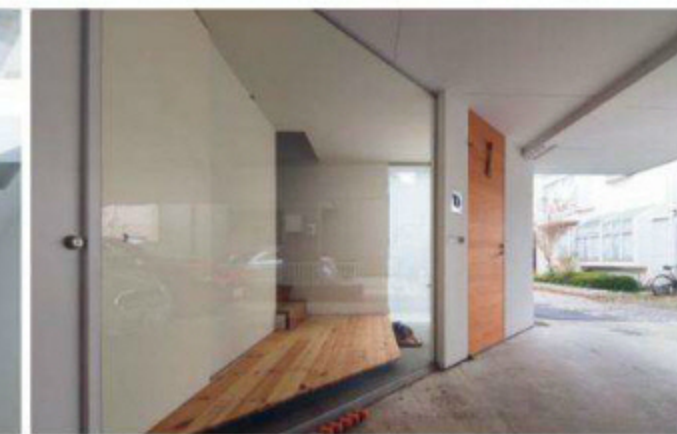
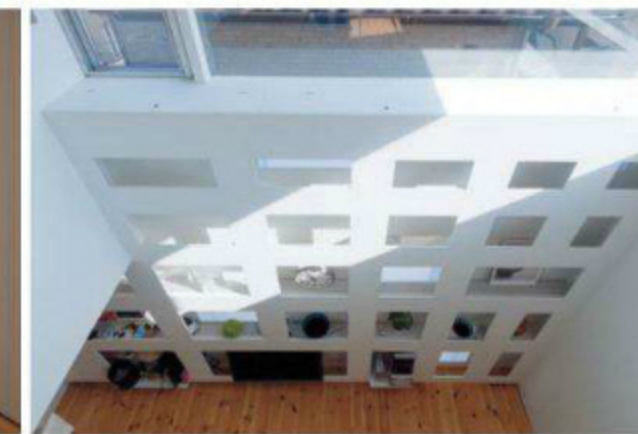
改修前2階平面図

改修前3階平面図

1階平面図　縮尺1：150

2階平面図

3階平面図

3階寝室。改修前はバルコニーだった空間を内部化し2階からつながる吹抜けとしている。

左：2階居間兼食堂。／中：3階から吹抜けを見下ろす。／右：1階玄関。

Blanks

所在地／茨城県つくば市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
Eureka　担当／稲垣淳哉　佐野哲史
　永井拓生　堀英祐　中村祥子（元所員）
構造　永井構造計画　担当／永井拓生
設計協力　鈴木（阿瀬）真由香　本瀬あゆみ

施工
小川共立建設　担当／合田吉郎
設備　島田管工　担当／佐藤吉則
電気　佐伯電気　担当／佐伯修

構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
基礎　布基礎

規模
階数　地上3階
軒高 8,450mm　最高の高さ 9,950mm
敷地面積　182.42m^2
建築面積　72.25m^2
（建蔽率39.61％ 許容60%）
延床面積　190.60m^2
（容積率104.48% 許容200%）
1階　61.14m^2　2階　72.24m^2
3階　57.22m^2

工程
設計期間　2009年4月～2009年10月
工事期間　2009年11月～2010年3月

敷地条件
地域地区　第二種住居地域
道路幅員　北6m　駐車台数2台

外部仕上げ
屋根／コロニアル葺き（既存）
外壁／窯業系サイディング（既存）を塗装
　一部リシン吹付け
開口部／既存アルミサッシ（ガラス交換）
　一部樹脂サッシ　一部アルミ製作建具

内部仕上げ
居間　台所　パントリー　寝室　書斎
床／縁甲板 t=20mm（パイン）OS　一部畳
壁／壁紙貼り　一部珪藻土
天井／壁紙貼り
家具／現場製作
照明／遠藤照明 ED-4119WA
厨房機器／
　食洗器／パナソニック NP-45MD2S-S
　オーブン／パナソニック
　NE-WB761P
　ガスコンロ・IHコンロ／リンナイ
　RD321G10S
　換気扇（シェード）／現場製作
　家具／現場製作
シンク水栓金物／ TOTO TKN34PBS
玄関
床／モルタル金ごて押え
壁・天井／壁紙貼り
照明／パナソニック SAL-D2-850F
建築金物／スガツネ LH2-BO11-H-R-32-SS
浴室
床／ FRP＋防滑トップコート
壁／ FRP＋トップコート
天井／塗装
バスタブ／既存浴槽にFRP＋トップコート

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
　その他／電気式床暖房
給排水　給水方式／水道直結
　排水方式／公共下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

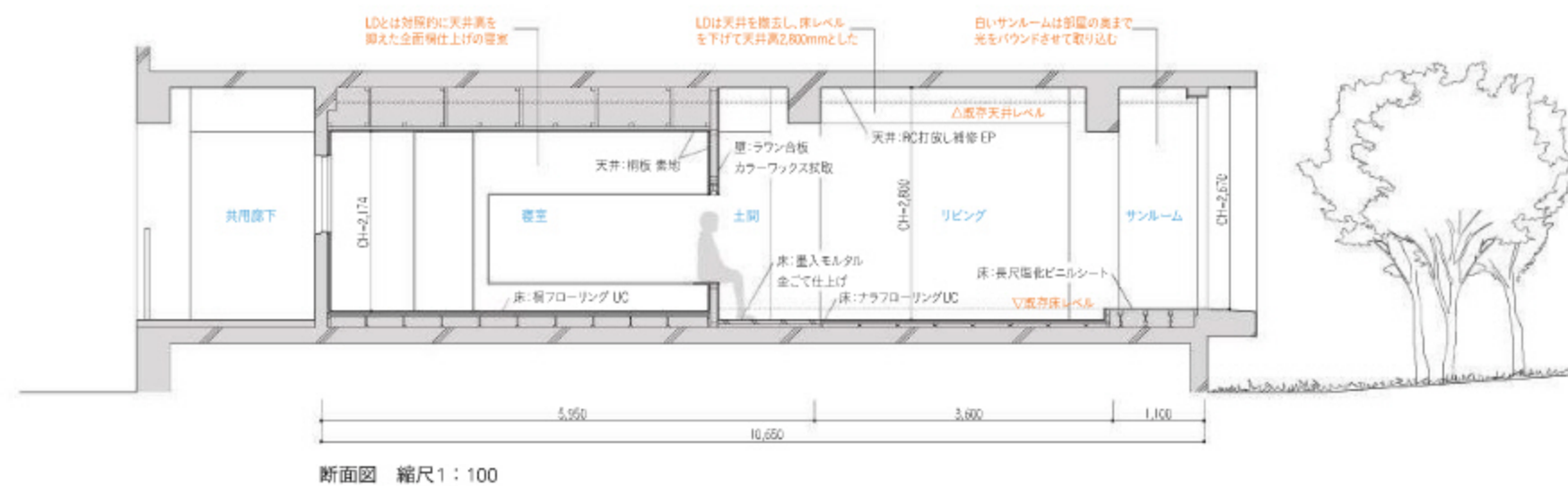
撮影／大倉英揮

御殿場の別荘

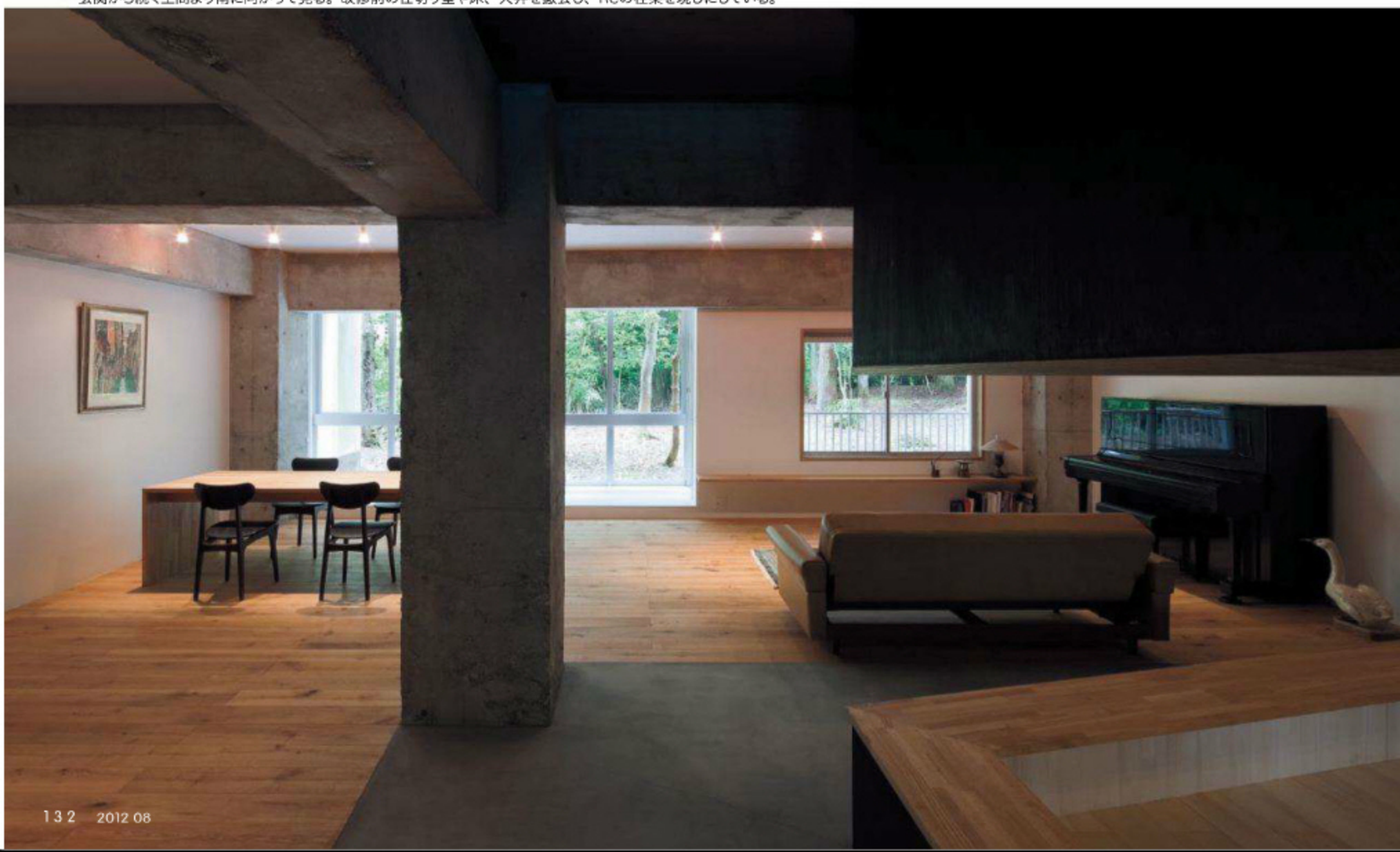
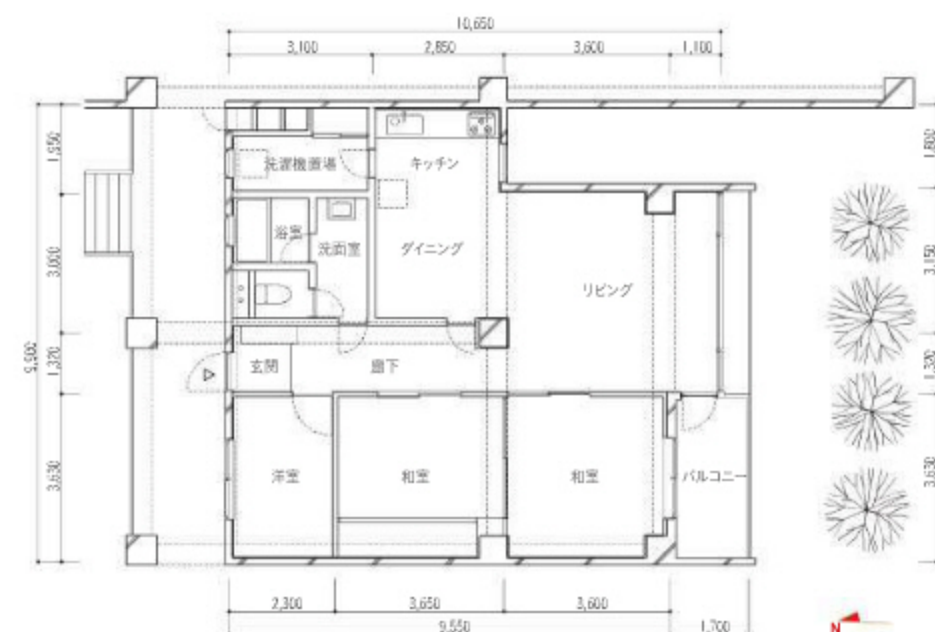
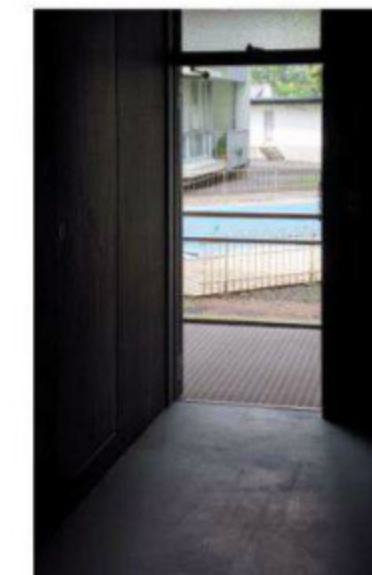
Summer House in Gotenba
静岡県御殿場市

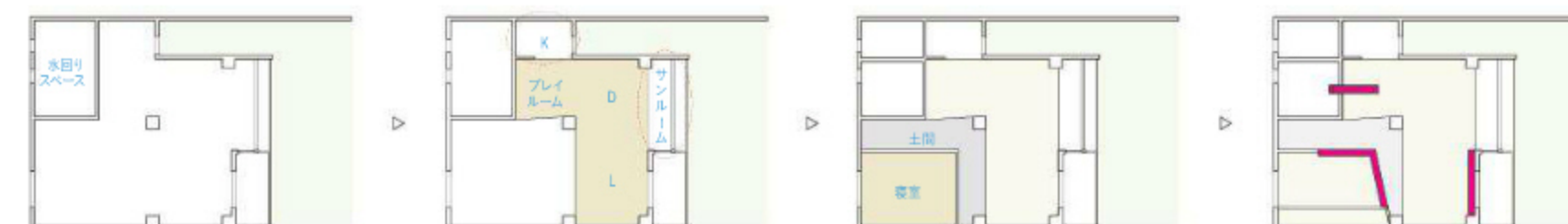
石崎哲也＋石崎瑠美子／石崎建築設計
Tetsuya Ishizaki + Rumiko Ishizaki / Ishizaki Architects

左上：改修前のリビング。小部屋に区切られていた。／右上：リビングから南側の森を見る。／左下：北に向かって見る。仕上げや仕切り壁を取り払った状態。／右下：北西より見る。　写真提供：石崎建築設計

断面図　縮尺1：100

玄関から続く土間より南に向かって見る。改修前の仕切り壁や床、天井を撤去し、RCの柱梁を現しにしている。

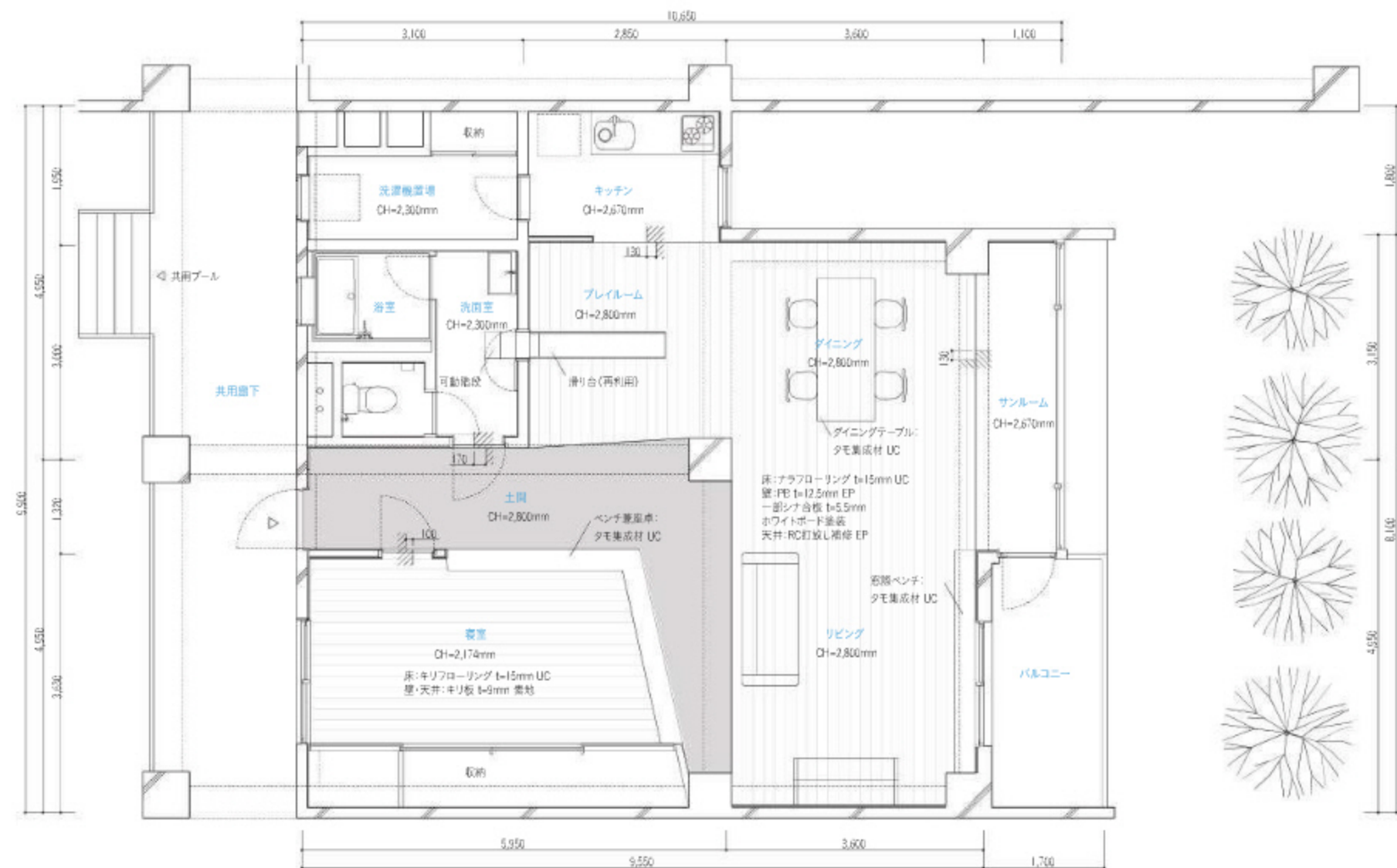
Renovation Point

600mm角のRC柱とL型の仕上げで領域をつくる

改修前平面図　縮尺1：200

土間から玄関越しに共用プールまで見通す。

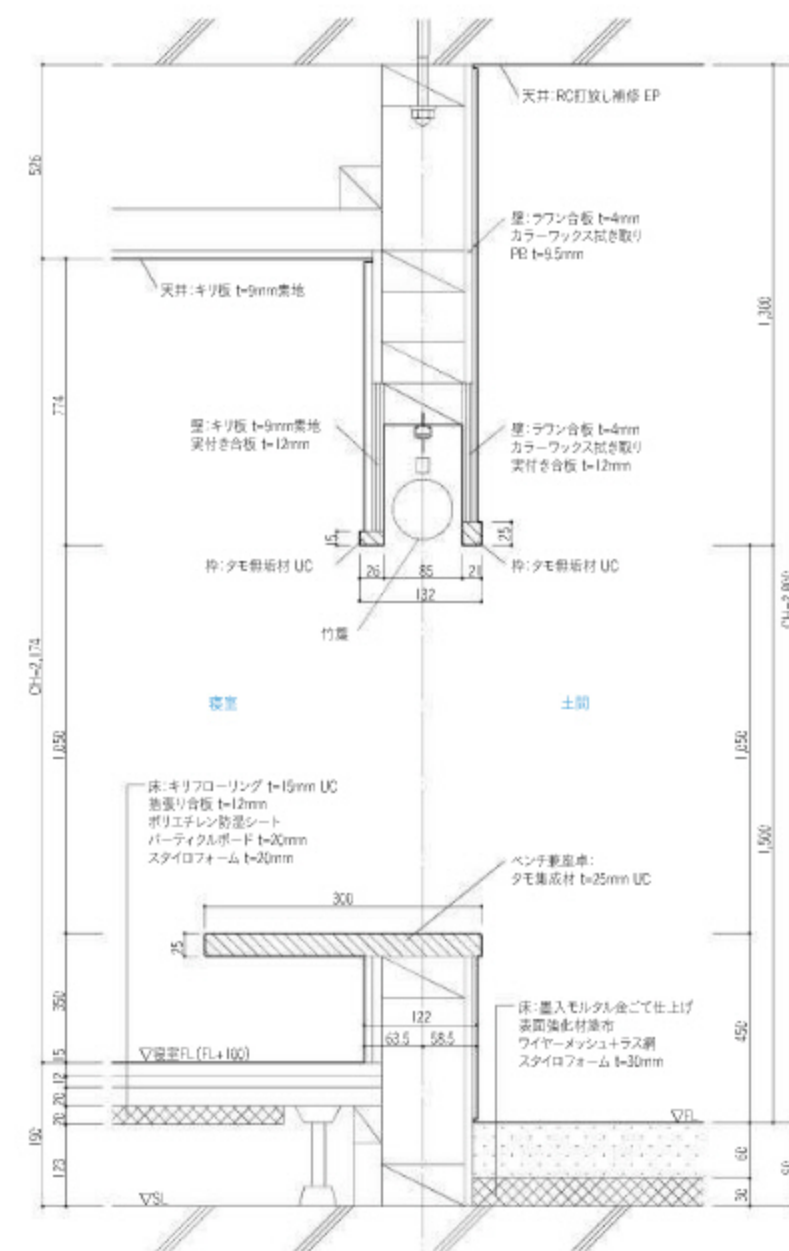
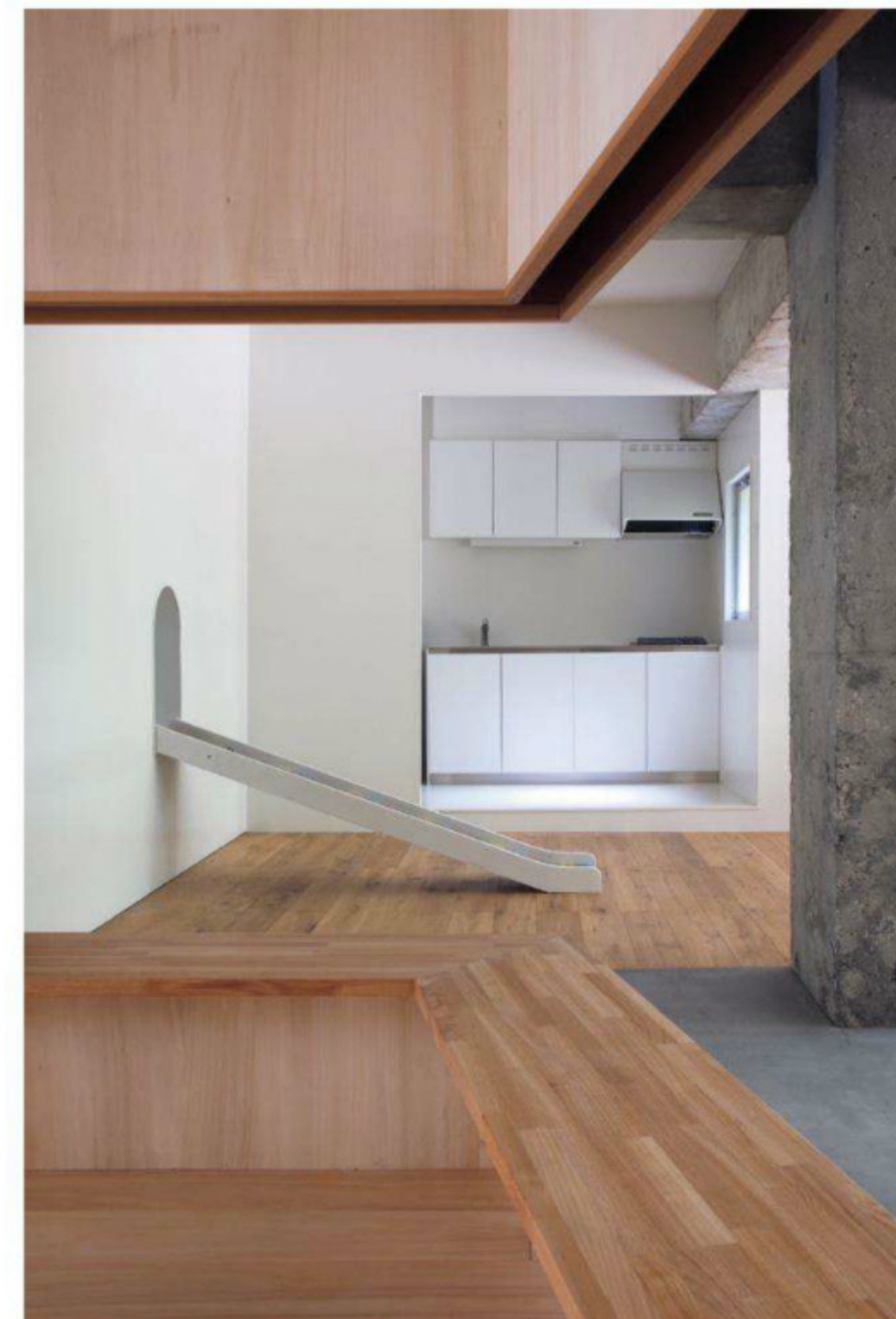
平面計画の変遷ダイアグラム

水回りのコンクリートブロック壁を残し、劣化した既存の間仕切壁や床・天井を撤去。凹凸のある特徴的なかたちをした広いワンルーム。中心にあるRC柱により求心的な空間。

RC柱の求心性を弱めるように南側の明るい場所にL型のLD・プレイルームを計画。これによりできた独立性の高い凸部分を明るいサンルーム、キッチンとする。

寝室を北側の静かな場所に配置。寝室とLDの間には土間をつくる。寝室はRC柱梁から距離を取った「はなれ」のような落ち着いた場所となる。

外部と内部、部屋と部屋をつなげるようにベンチ兼座卓や滑り台、窓際ベンチをつくり境界面を豊かな居場所とする。

平面図　縮尺1：100

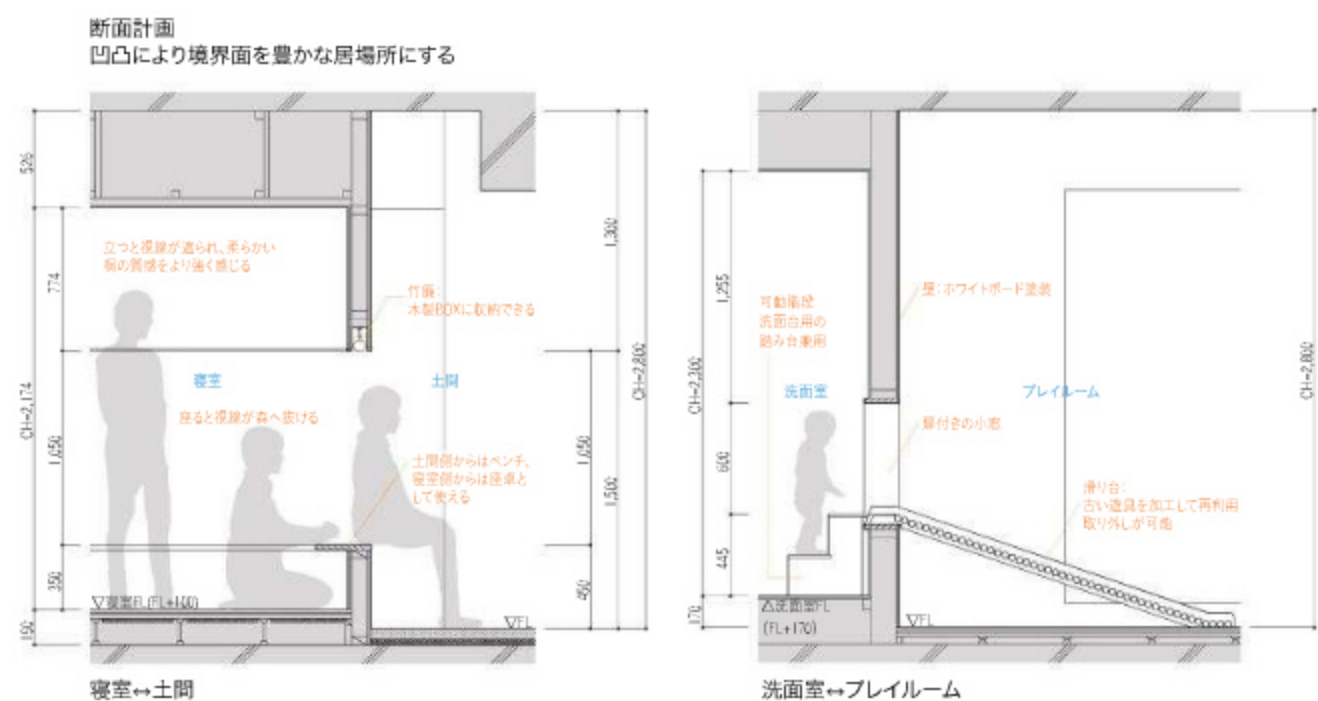
左手前から寝室、土間、LD・プレイルームとL型に領域が広がっていく。中央の600mm角のRC柱が強くなりすぎないように土間に含まれるよう領域を分けている。左手のプレイルームの壁はホワイトボード塗装。滑り台は建主が昔使っていた遊具を加工して再利用したもの。

箱状の寝室。腰壁の上部350mmの高さに幅300mmの台を設え、寝室側では座卓として、リビング側ではベンチとして利用される。床・壁・天井とも仕上げはキリ。

寝室開口部断面詳細図　縮尺1：10

寝室開口部越しにプレイルーム、キッチンを見る。水回りが納まるコアは既存のコンクリートブロック壁を残している。

寝室垂れ壁内に納められた竹簾を下ろした状態（上）と壁内に収納した状態（下）。

断面計画
凹凸により境界面を豊かな居場所にする

寝室⇔土間

洗面室⇔プレイルーム

御殿場市に建つ築40年RC造4階建てリゾートマンション一室の改修である。建物は森の中にひっそりと建ち、御殿場特有の湿気により外壁にうっすらと苔が生えた独特の佇まいをしている。家族が特別な時間を過ごした思い出深い別荘だが、ここ20年使われなくなり内装材の劣化が進んでいた。家族が増え、再び多世代が集える別荘となるように計画した。

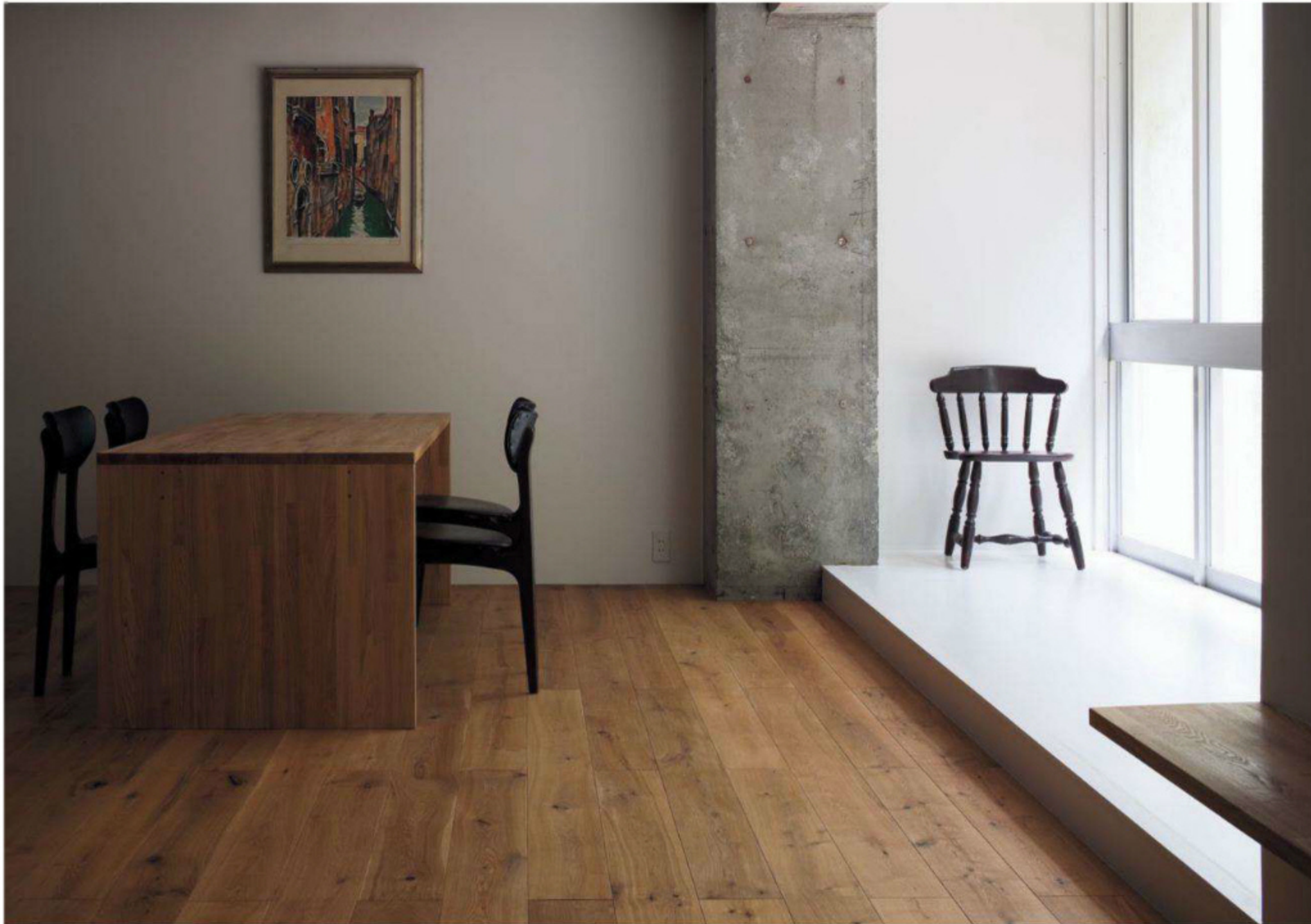
対象住戸は1階にあり、南に森が広がり、玄関前に共用プールがあるという恵まれた環境にある。一方、背の高い木々に囲まれ、部屋が小割りされているため、光が奥まで届きにくく風通しが悪いという問題点があった。そこで、水回りのコンクリートブロック壁を残したうえで湿気により劣化した間仕切り壁や床・天井を撤去し、新設の床レベルを既存の高さから下げて天井高をできるだけ確保したインテリアとした。また、既存の骨格であるRC柱梁は仕上げを剥がして現しとし、歴史を刻んだ建物ならではの非日常的な雰囲気を感じられる別荘を計画した。

平面は森への視線と風が抜けるワンルームとし、それを複数のL型に分割する構成とした。異なるスケールのL型の連続は、一続きの空間にさまざまな奥行をつくり出す。既存のRC柱梁を基準にしながらも、それとは変則的にL型を配置することで、単調ではないワンルームとなるように意図した。

それぞれの場所は、共用プールから水着のまま上がれる黒い土間スペース、天井が高く広いリビング・ダイニング・プレイルーム、反射光を部屋の奥まで届ける白いサンルーム、天井高を抑えた「はなれ」のような桐仕上げの寝室といったように、異なる天井高や素材、色によって特徴付けられる。

部屋と部屋の境界面には、長いベンチ兼座卓や再生した滑り台、ホワイトボード塗装の壁、窓際ベンチといった、コミュニケーションを促すものを配置することで、多世代をつなぐ「きっかけ」となる空間になればと考えている。

（石崎哲也＋石崎瑠美子）

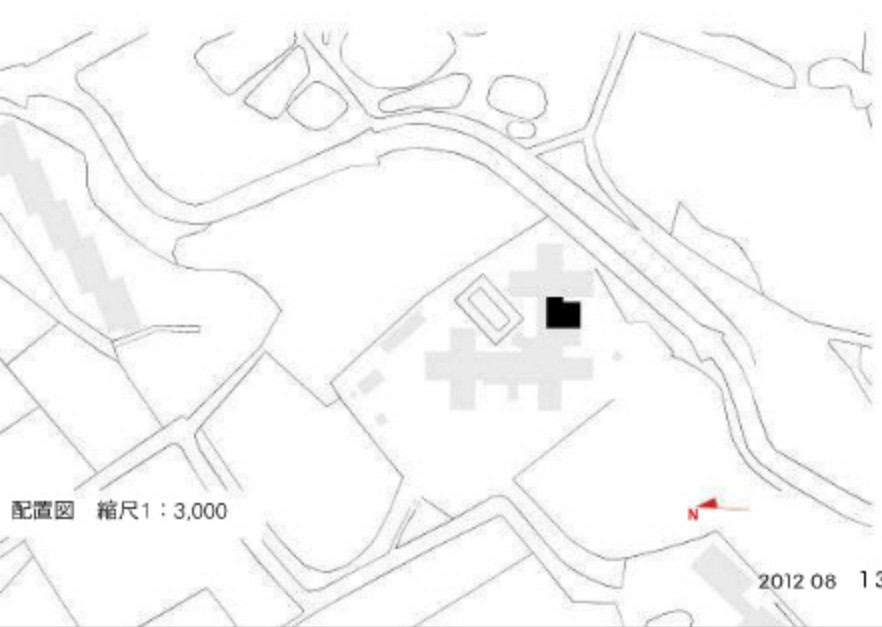
プレイルーム裏手の洗面室より森まで見通す。LD・プレイルームは壁、天井とも白く仕上げ、
床にはナラのフローリングを張っている。正面のダイニングテーブルはオリジナルデザイン。

内外をつなぐサンルームはLDより130mmフロアレベルを上げ、床・壁・天井とも白く仕上げている。

御殿場の別荘
所在地／静岡県御殿場市
主要用途／別荘
家族構成／３世代で共同利用

設計
石崎哲也＋石崎瑠美子／石崎建築設計
　担当／石崎哲也　石崎瑠美子
施工
宝永抜建　担当／小野田求
大工　天野建築　担当／天野和彦
家具　木内木工所　担当／木内喜一郎
塗装　セイケン塗装　担当／青木博
左官　石田左官　担当／石田秀明
電気　清和電気工事　担当／小尾賢治
給排水　杉本住宅設備機器　担当／杉本浩一郎
構造・構法
主体構造　鉄筋コンクリート造（既存）
規模
階数　地上4階の1階部分
延床面積　93m²＋バルコニー 6m²
工程
設計期間　2011年1月〜9月
工事期間　2011年9月〜12月
工事費
建築　5,640,000円
電気　460,000円
給排水　200,000円
総工費　6,300,000円
坪単価　223,000円
内部仕上げ
土間
床／墨入モルタル金ごて仕上げ 表面強化材塗布
壁／ラワン合板 t=4mm カラーワックス拭取り
　（オスモカラー）
天井／鉄筋コンクリート打放し補修 EP
照明／パナソニック LGB56011指定色塗装
LD　プレイルーム
床／ナラフローリング t=15mm UC（ナカムラ・
　コーポレーション）
壁／ PB t=12.5mm EP
　一部シナ合板 t=5.5mm ホワイトボード塗装
　（IdeaPaint）
天井／鉄筋コンクリート打放し補修 EP
ダイニングテーブル／タモ集成材 t=30mm UC
　（製作）
滑り台／古い遊具を加工の上塗装
照明／ DAIKO DSL-2588XWE
　パナソニック LGB56010指定色塗装
寝室
床／キリフローリング t=15mm UC（タシロ産業）
壁・天井／キリ板 t=9mm 素地（タシロ産業）
建具／キリ板 フラッシュ戸
照明／パナソニック HGA1310CE指定色塗装
サンルーム　キッチン
床／長尺塩化ビニルシート t=2mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ RC打放し補修 EP
システムキッチン／サンワカンパニー プレーンK
　プティ
照明／ DNライティング SAL-D2-850F
洗面室
床／長尺塩化ビニルシート t=2mm
壁・天井／ビニルクロス貼り
可動階段／シナ共芯合板 t=18mm UE（製作）
照明／既存移設
設備システム
空調　換気方式／第三種換気システム
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：3,000

高田のいえ

Takada no Ie
岐阜県養老郡

三澤文子／Ms建築設計事務所・MSD
Misawa Fumiko／Ms Architects・MSD

コラム補強部基礎断面図　縮尺1：20

断面詳細図　縮尺1：50

Renovation Point

木造建築病理学に基づく改修1—築120年の住宅

1.詳細調査

2010年8月25日調査開始。調査員は19名。／1：現況図面を作成するための採寸。／2：小屋裏調査では小屋伏図、小屋断面図作成のための採寸、接合状況、雨漏れの有無などを調査する。／3：地盤調査ではスウェーデン式サウンディング試験を行う。床下調査のための進入口を利用して室内ポイントも試験できる。

2.改修前の状況

1：道路側外観。壁はなくすべて無双窓。内側にはアルミサッシが取り付けられている。瓦は50年以上葺き替えられていないことを確認。／2：床下の玉石基礎。蟻害跡も発見された。換気は十分で床下環境は良好。／3：座敷・仏間回りはすべて襖で壁はない。

3.基礎改修

1：玉石基礎に乗る柱を切って土台を差し込む。柱の下には鋼板プレートとコラムでつくった柱脚支持部材をセット。／2：柱は土台に大入れでずれ止めとし、柱脚支持部材横にはホールダウン金物をセット。／3：柱脚支持部材に絡めて配筋。この後型枠を設置しコンクリートを打設する。／4：基礎ができて、軸組み躯体の建ておこしを行う。

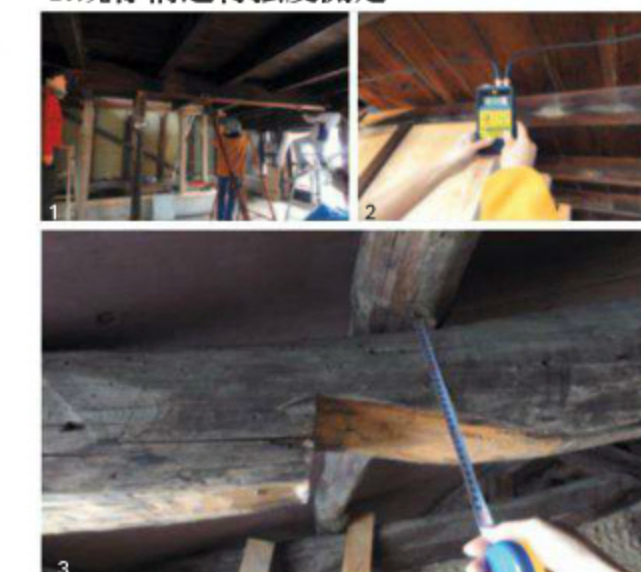
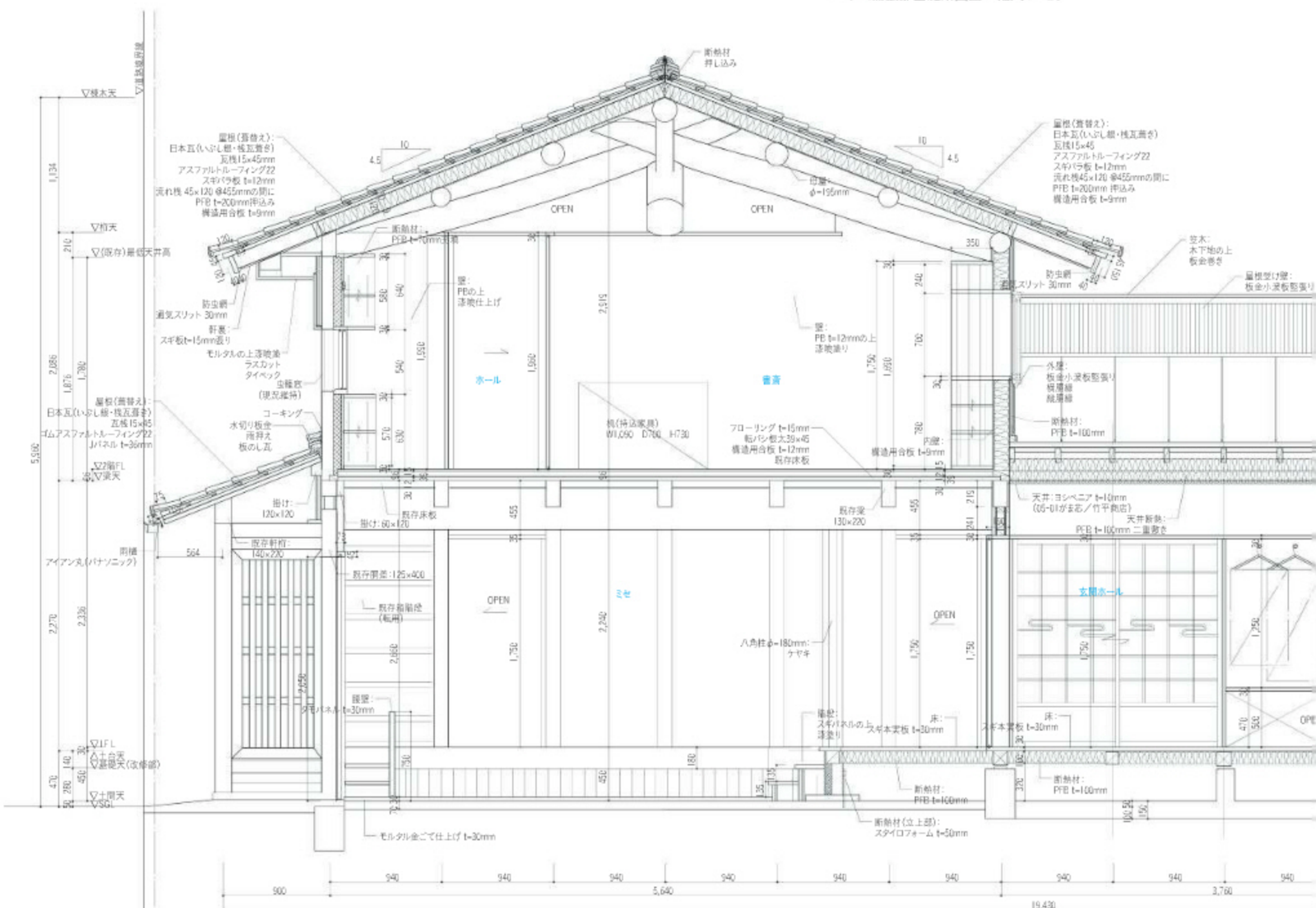
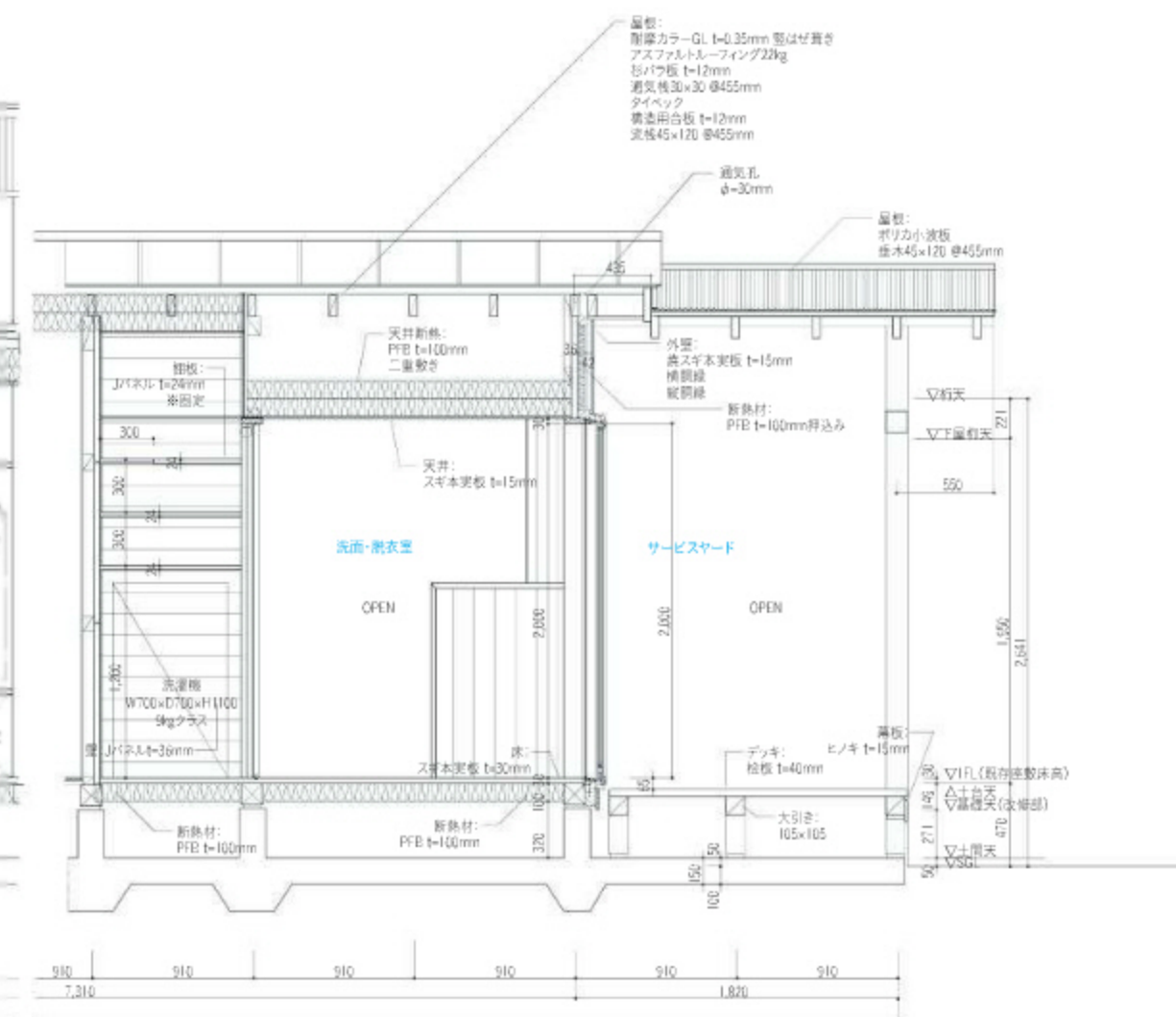
6.耐力壁・水平構面を設け同時に断熱化する

1：外観を既存のままとして内部から耐力壁をつくる。ポリエスチル充填式断熱材（70mm）を押し込んだうえ、構造用合板を打ち付ける。／2：2階床は既存床板の上に構造用合板を打ち付け水平構面を固める。／3：床下地と野地ができて2階の空間が整った状態。2階床、野地板とも水平構面として固まった。／4：野地板も構造用合板。あらかじめ煤ベンガラで塗装しパネル加工したうえで小屋組みに載せ留め付ける。野地板に取り付いた120mm×45mmの部材でできる隙間に断熱材（200mm）が充填される。／5：座敷、仏間には2階が載らないので、構造用合板の野地板で固め、天井上に断熱材（200mm）を載せる。

5.軸組み補強

1：強度測定を行ったうえで独立柱の位置を確定した。新規独立柱はケヤキ。／2：そのほかスパン間距離が3間ある梁には新規柱を設置して2間までとする。／3：強度測定で虫食いが発見された上り梁の横に新規上り梁を設置する。／4：すべての構造部材を補助金物で留め付ける。小型で高性能の金物は仕上げに隠れ見えてこないように納めることができる。

140～141頁写真提供：Ms建築設計事務所・MSD

4.既存構造材強度測定

1：ミセにある大梁は3間のスパンがある。撓みもあるため独立柱を入れ負担を減らす計画であるが、その位置確定のために強度を測定する。／2：応力波法測定法で行う。組まれたままの状態でヤング係数が計測できる。／3：2階の上り梁の一部に天井をつくるための大きな断面欠損があった。補強の必要性があるかどうかを判断するためにヤング係数を計測しようとしている。材内部に虫食いによる空洞があることも分かった。

南側外観。明治15年に建てられた当初の原型をほぼそのまま留めている。

治す力──木造建築病理学に基づく調査診断と改修設計

私たちは、住宅設計者こそが多くの問題を抱える既存住宅の現状を正確に把握し的確な改修設計を行うことができるという信念から、「治す力」を有した「住宅医」の育成に力を注いでいる。住宅医の活動を通し、適切な改修によって既存住宅の快適性・耐震性を高め、住み継ぎを可能にすることで住文化の継承や町並み景観保存の実現を目指している。

影響を受けたのは住宅の耐用年数が長い英国での「建築病理学」という実践的教育である（注1）。そこで英国レディング大学のカリキュラムを参考に2006年から「木造建築病理学」が岐阜県立森林文化アカデミーで開講。2009年には国土交通省の長期優良住宅先導事業に採択されたことから住宅医を育成する「住宅医ネットワーク」が組織化された。

既存建物の調査・診断においては、現在、性能評価10項目のうちの6項目において調査診断を行っているが（注2）、今回掲載の「高田のいえ（築130年）」、「垂水の家（築30年）」（150頁参照）は、築年の違いによって診断内容・改修方法に、その特徴が顕著に表れている。

既存住宅の改修技術は、すなわち「治す力」である。治すこととつくることは性格がまったく異なり、数段難しい。ただ難しいからこそ面白く、そして価値があると思うのだ。　（三澤文子）

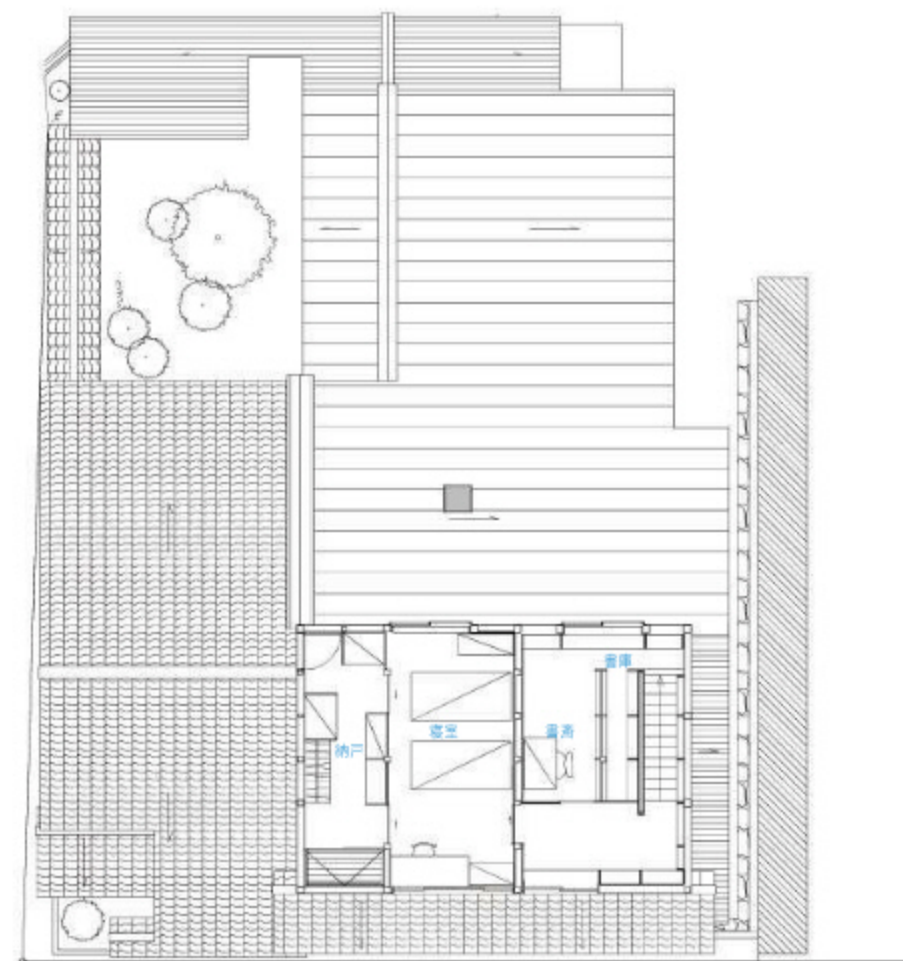
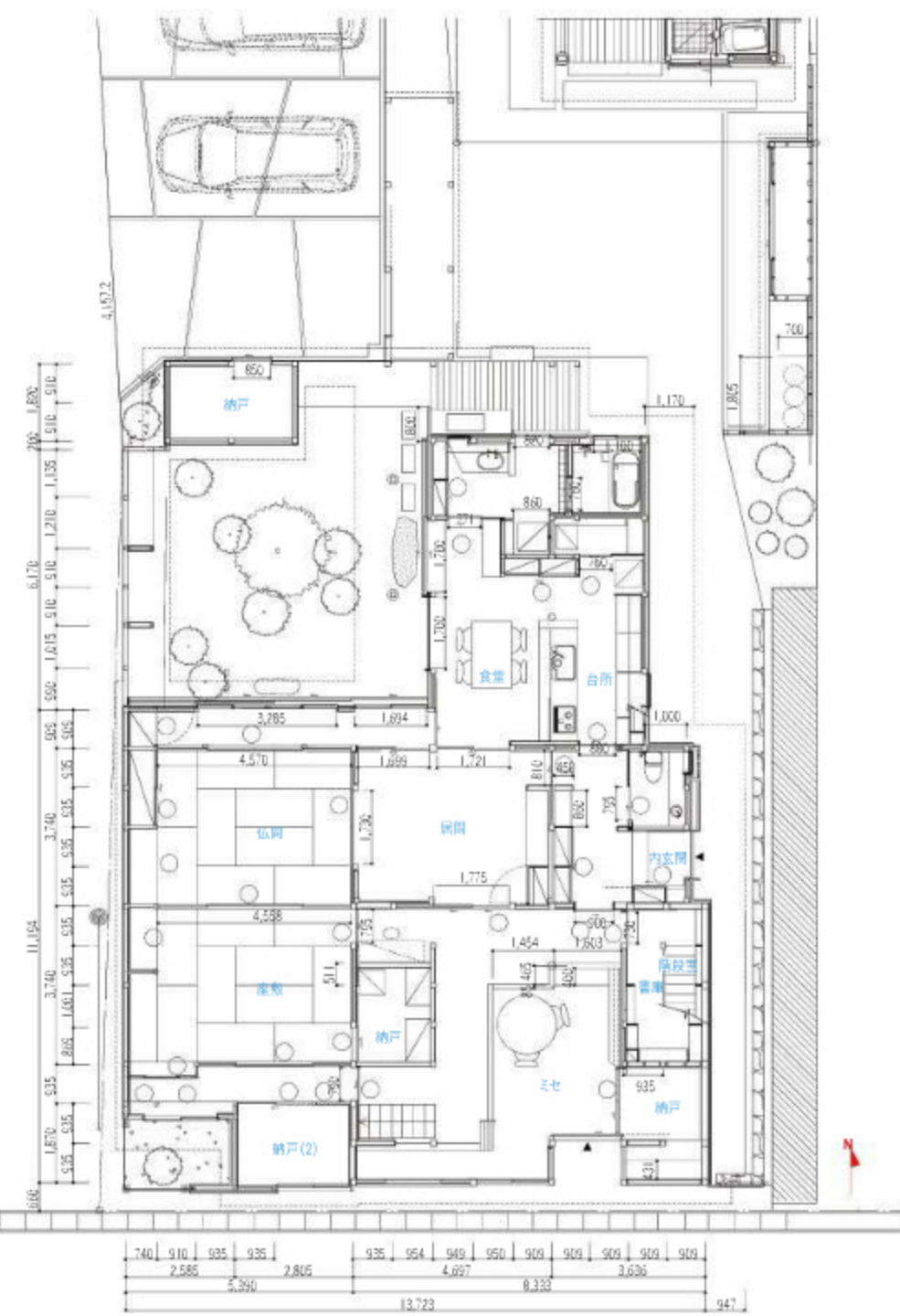
注1　関東学院大学中島正夫教授が　雑誌『住宅と木材』（2004年6月号）に英国の建築病理学教育に関する報告を寄稿した。

注2　長期優良住宅認定基準である5つの項目に、火災時の安定を加えた6つの項目が、既存住宅の性能把握に特に重要であるという判断から、以下の6つの住宅性能 項目を中心に調査・診断を行っている。①劣化診断、②耐震診断、③維持管理診断、④温熱環境診断、⑤バリアフリー診断、⑥防耐火診断。

西側道路に面して駐車スペースと通用口がある。

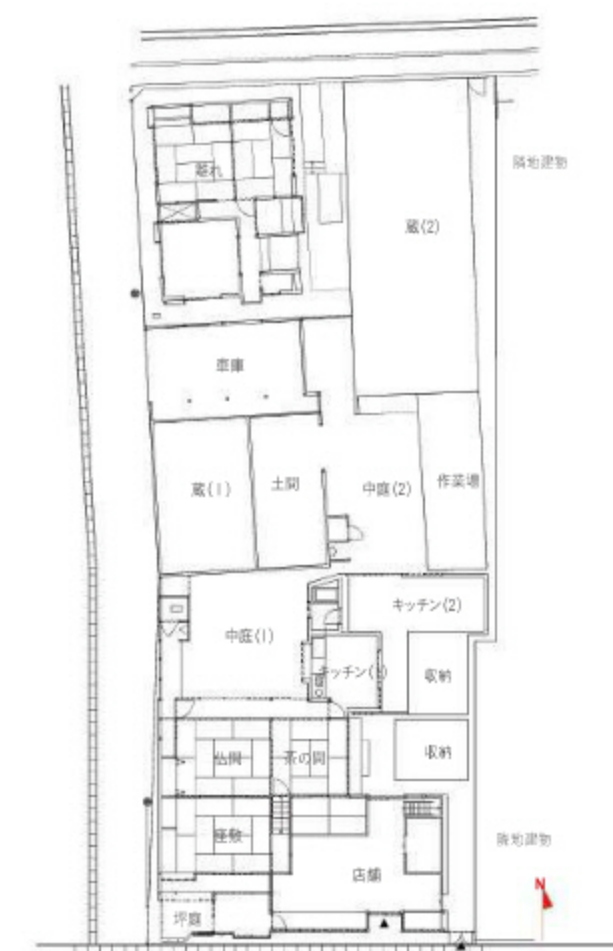
ミセの土間（かつては味噌屋であった）。右手入口はアルミサッシの引き違い戸を縦格子の片引き戸にして開口幅を広くした。
永い間使われていなかった右正面の大戸は納戸の入口に転用。上部中央を横断する大梁は左手のケヤキ八角柱で補強している。

食堂から居間、さらにはミセまで見通す。今まで生活の中で目に触れることのなかった庭が台所の正面に見える。

座敷から仏間越しに庭まで見通す。既存の欄間が光を受けて浮かび上がる。仏間の天井は新しくつくりかえた吉野スギの竿縁天井。

2階平面図　縮尺1：200

1階平面図　縮尺1：200

130年前の原型を残し基礎から新設する

岐阜県養老町高田の街道沿いの、明治15年に建てられた住宅である。

玉石基礎、土壁、土葺き瓦。築年として標準的な構法であり、詳細調査では耐震性能、温熱性能ともきわめて乏しいことが分かった。また時代を経て家族も変化したことで改修や増築が行われており、特に昭和40年代以降に改修された部分は材料・工法もそれ以前に比べ大きく見劣りのするものになっていた。詳細調査をまとめた「住まいの診断レポート」では、それらを住まい手に分かりやすく説明した。特に高齢者の住まいでもあったため、外部にあるトイレや脱衣室の位置の問題なども指摘した。そこで、改修方針は130年前に建てられた原型を残し、その後大きく改修・増築された部分は取り除いたうえ、改修およびJパネル工法での増築。耐震性能と温熱性能、同時に高齢者に負担のない生活動線の整理とした。具体的には、改修部分は耐震性能を確保するために耐震壁をつくると同時に断熱材を充填し温熱性能も確保。耐震壁に必要なRC造新設基礎は建物を浮かした状態での基礎改修方法で、今までの実績もあり自信もあったが今回はさらに工法の改良などができ、よりよい改修基礎工事となった。　（三澤）

改修前1階平面図　縮尺1：300

左：食堂からは隣の寺の鐘楼が見える。／右：屋根上部に立ち上がったうだつ。瓦屋根と金属屋根の仕切りの機能。

2階寝室から書斎を見る。／右：小屋組の近景。野地板には煤ベンガラで塗装した構造用合板を用いている。

高田のいえ

所在地／岐阜県養老郡
主要用途／専用住宅
家族構成／母＋夫婦

設計
Ms建築設計事務所　MSD
　担当／三澤文子　棄賀伸子
構造　MSD　担当／田畑勝

施工
高橋建設　担当／森誠
大工　棟梁／久保田正博
設備　田中ポンプ
電気　大指電気設備
外構・造園　造園　神足庭園
瓦　細野瓦店
屋根・板金　所共同板金
左官　山口業務店
建具　林建具製作所
上げ家　太豊工業
基礎・外構　若園建設
ガス　伊藤商店
構造材・長良杉パネル　白鳥林工協業組合
　Jパネル　協業組合レングス
漆塗装　沢幸漆店　担当／澤田欣也
照明BOX　安田建具店
カーテン・ロールスクリーン　イロハ
暖簾・タペストリー　安藤染工場

構造・構法
主体構造　木造在来工法
基礎　布基礎 防湿コンクリート

規模
階数　地上2階
軒高 4,826mm　最高の高さ 5,960mm
敷地面積　708.14m²
建築面積　195.99m²
　（建蔽率36.43% 許容60%）
延床面積　225.56m²
　（容積率40.61% 許容200%）
　1階　178.35m²　2階　47.21m²

工程
設計期間　2010年11月〜2011年5月
工事期間　2011年5月〜2012年4月

敷地条件
地域地区　市街化区域　建築基準法第22条
　指定地域
道路幅員　南5.91m　　駐車台数3台

外部仕上げ
屋根／一文字瓦葺き 大摩カラー t=0.35mm
　竪はぜ葺き
外壁／焼スギ板 t=9mm　板金小波板
　既存土壁の上漆喰塗り
開口部／アルミサッシ（三協立山アルミ）
　木製建具
外構／モルタル刷毛引き仕上げ

内部仕上げ

キッチン
床／スギ本実板 t=30mm
壁／ Jパネル t=36mm 現し
　キッチンパネル（サンワカンパニー）
天井／ PB t=9mm EP
厨房機器／
　ガスコンロ／ビルトインコンロ
　（リンナイ RS71W8B11R-BL）
　換気扇（シェード）／ダクト用換気扇
　（三菱電器）
家具／ベースキャビネット（CUCINA）
照明／モーガルソケット＋電球（MOK）
建築金物／
　シンク水栓金物／先端開閉式ミキシング混
　合栓（TOTO TKF51PR）

ミセ
床／土間コンクリートの上カラクリート仕上げ
壁／スギ本実板 t=15mm
　PBの上 漆喰塗り
天井／既存根太天井
家具／胡桃丸テーブル
照明／蛍光灯（パナソニック HA4134GL1）
　照明カバー（大工造作）　モーガルソケッ
　ト 電球（MOK）照明BOX（製作）
構造材・小階段／漆塗り仕上げ

居間
床／スギ本実板 t=30mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／スギ本実板 t=15mm
家具／ TV台（大工造作）
照明／モーガルソケット 電球（MOK）　照明
　カバー（大工造作）

座敷
床／ワラ床畳敷き（既存畳表替え）
壁／ PBの上漆喰塗り　既設土壁の上漆喰
　塗り
天井／既存竿縁天井のまま
照明／モーガルソケット 電球（MOK）照明カ
　バー（製作）

仏間
床／ワラ床畳敷き（既存畳表替え）
壁／ PBの上漆喰塗り
　既設土壁の上漆喰塗り
天井／竿縁天井（新規）
照明／モーガルソケット＋電球（MOK）＋照明
　カバー（大工造作）

食堂
床／スギ本実板 t=30mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／ヨシベニア（がま芯丸／竹平商店）
照明／モーガルソケット 電球（MOK）
　照明カバー（大工造作）

2階書斎　寝室
床／スギ本実板 t=15mm
壁／ PB t=12.5mm EP
天井／構造用合板の上柿渋＋ベンガラ塗装
照明／モーガルソケット 電球（MOK）

設備システム
空調　暖房方式／壁掛けルームエアコン
　冷房方式／壁掛けルームエアコン
　その他／床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯機（エコジョーズ）

撮影／新建築社写真部

階段室回りの書庫。

垂水の家

House in Tarumi
神戸市垂水区

トヨダヤスシ建築設計事務所
Yasushi Toyoda Architects Studio

1. 既存建物の耐震診断

築30年の住宅。改修するにあたり、木造建築病理学に基づき詳細な調査が行われた。調査結果は定量化され、改修前後で一覧表にまとめられている。（157頁参照）／左：改修前の北側外観。／右：改修後の玄関前。玄関扉に加えガラリを仕込むことで防犯と通風を確保している。

2. 既存建物の小屋組診断と基礎補強

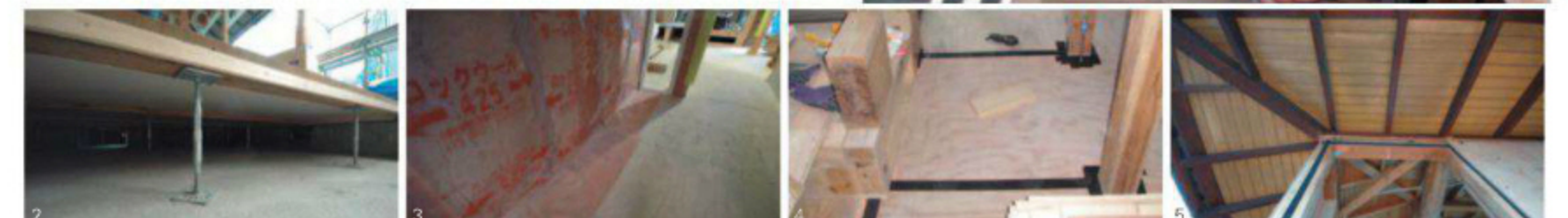
1：梁桁の仕口には羽子板ボルトを使用されていた。／2：小屋梁と小屋束・母屋と小屋束はかすがいで留められていた。／3：火打ち梁の固定は引きボルトが使用されていた。／4：垂木、桁との接合部はひねり金物で接合されていた。／5・6：基礎の補強。

3. 水平構面と耐力壁の補強

左：屋根水平構面は金物（コボット）で補強。／中上：平屋部分の屋根は1階から構造用合板12mmで補強。／中下：耐力壁の外部から構造用合板12mmを張っている。／右：耐力壁に用いたグラスロック12mmは床勝ち仕様とした。

既存を残す場合の結露リスク

最近の住まいには通気層が取られ、防露対策した屋根・壁面構成となっているが、築30年の住まいには、ほとんど通気層はない。このため屋根・外壁を残したまま内装・断熱材までを新しく取り替える場合は、結露診断を行う必要がある。通気層の施工を省略できる条件として透湿抵抗比が規定値以上である必要があり、既存を残す場合は、特に室内側の防湿層の選定に注意が必要となる。また外壁の塗り直しを行う場合は、通気性が悪くなることを考慮して、壁の構成を決める必要がある。　（豊田）

4. 断熱・気密・防露

1：増築部の屋根の断熱と気密パッキン貼り。／2：床断熱ネオマフォーム30mmだったが、震災の影響で押出法ポリスチレンフォーム50mmに変更。／3：壁断熱グラスウール10K 75mm（真壁）は震災により同等性能のロックウールに変更。／4：床の気密テープ貼り。／5：外壁の気密パッキン貼り。

断面図　縮尺1：100

1：土台の劣化対策として水切りが必要。外壁をやり変えない場合は等級1のままとなる。／2：外壁合板も該当するので防蟻措置をしている。／3：1階の外壁のみをやり直す場合は通気層の有無・見切りに注意する。

5. 外壁・軸組等の防腐・防蟻措置

150〜151頁写真提供：トヨダヤスシ建築設計事務所

6. 段差の解消を確認

左右：1・2階合わせて14カ所あった出入り口等の段差はすべてなくし、バリアフリーとしている。

7. 浴室の防水・防湿措置

右：浴室壁は、ポリエチレンフィルムt=0.2mmにより防水措置を行っている。／左：床下はべた基礎が防湿措置となり、湿度が低く腐朽もなく健全であった。

通風シミュレーションの効果を得るには

シミュレーションで通風効果を発揮できていても、入居後に同様の効果を得られるかというと、眉唾ものである。この住まいは春や秋の通風、夏の深夜に外気を取り入れることができるように、北面の開口部に木格子を、玄関には格子網戸を取り付けている。こうすることで、外出時や就寝時にも防犯対策をしながら通風効果を得ることができる。大切なのは、「常に開放した状態にできるかどうか」である。　（豊田）

フリースペースからダイニングを見る。左手に増築した趣味室はフロアレベルを300mm上げ、床下収納としている。趣味室との境に立つ壁は、2階の外壁が直上にあるため、力を伝える耐力壁として新たに設けた重要な壁である。またリビング天井に見える補強梁も同様であり、2階の外壁の荷重を受けるため補強を行っている。

住まいの状態を定量化する「診断と治療」

敷地周辺は、大手不動産会社の分譲地であり、同形状の住宅が200棟ほど建っている。これら住宅のほとんどが築30年を迎えたこともあり、不動産会社から「そろそろ改修してはどうか?」と提案されたことが、改修を行うきっかけとなっている。

改修といっても、まずは現在の家族の状況や住まいの変遷、建物がどういった状態なのかを知るべく、木造建築病理学に基づく詳細調査を行うこととした。ここで重要なのは、住まいの状態を把握し性能を定量化したうえで、どこをどのように治療する必要があるのか優先順位を決めてリフォームを行うことであった。

詳細調査は、岐阜県立森林文化アカデミーと住宅医スクール、建築実務者の総勢16名の有志により行った。この住まいは、兵庫県南部地震の震源地付近に建っており震度6の揺れが襲っている。そのため、被害の痕跡が多いかと思われたが、建物の傾きやクラックの状況、腐朽蟻害、雨漏り等を調べてみても、震災の影響と思われる被害はほとんどなく健全であった。住まいを隅々まで調査・診断できるのは稀であり、その要因としては、点検口が存在したこと、床下・小屋裏空間が確保されすべての範囲に進入して調査できたことが大きかった。

この住まいは、鉄筋入りのべた基礎であり、屋根の改修も行う必要がなかったため、特別な工夫が必要なリフォームではなく、改修前後の状態や性能を「定量化」することが重要なポイントであった。耐震性を例にとると、診断時は0.5だが、治療によって1.0や1.5にするといった定量化が必要であるように、治療後は、断熱性や省エネ性、防露性、蓄熱性など定量的に整理し、表示できるように設計を進める必要がある。特に、既存住宅をリフォームする場合は、BEFORE「診断」・AFTER「治療」を明確にすることで、住まい手の不安を取り除き安心してリフォームに挑むことができる。

これからの次代は、安易に壊して建て替えるという選択をするのではなく、住まいをより長持ちさせるために診断・治療をしていくことが大切であり、それを発信することが建築家に課せられた使命のひとつだと感じる。　　　　（豊田保之）

暖冷房負荷を低減するため、フリースペースとリビングを仕切ることができる。

玄関戸には防犯を兼ねた格子網戸を設け、深夜・外出時でも通風効果が得られるようにしている。

改修前1階平面図　縮尺1：250

改修前2階平面図

1階平面図　縮尺1：150

2階平面図

左：キッチンを拡張し、玄関・水回りとリビングを直接つなぐ動線を確保しつつアルコーブのようなリビングスペースをつくり出している。／中：趣味室からフリースペースを見返す。／右：2階の間取りの変更はせず、収納を確保しつつ引き戸で各室をつなげている。

ダイニングからの見返し。南面の集熱開口部面積を改修前後で約10%大きくして冬の日射熱を多く取り込み、フローリングに蓄熱させている。

垂水の家

所在地／神戸市垂水区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦2人＋子供2人

設計
トヨダヤスシ建築設計事務所
　担当／豊田保之
構造　TE-DOK　担当／河本和義

施工
アトリエ・エイト　担当／藤永壮彦
設備　ムラカミ　担当／村上博
電気　フジワラ　担当／坂部公彦
外構・造園　尾崎春蒼園　担当／尾崎進夫
キッチン　OGUMA　担当／大橋朋晃
家具　楽住工房　担当／森本照明

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 6,112mm　最高高さ 7,185mm
敷地面積　195.88m²
建築面積　84.08m²
　（建蔽率42.92％ 許容50％）
延床面積　125.07m²
　（容積率63.85％ 許容100％）
　1階　81.60m²　2階　43.47m²

工程
設計期間　2010年12月～2011年3月
工事期間　2011年3月～2011年9月
　（実質4.5カ月）

敷地条件
地域地区　市街化地域　第一種低層住居専用地域
道路幅員　北6.0m　駐車台数1台

外部仕上げ
屋根／既存：瓦葺き　増築部：塗装 亜鉛メッキ鋼板
外壁／リシン掻落仕上げ リシン吹付け
開口部／アルミ樹脂複合サッシ Low-E複層（断熱・遮熱）　既存サッシ：スペーサーのうえLow-e複層（断熱・遮熱）
外構／デッキ：レッドシダー敷き

内部仕上げ

キッチン
床／ナラフローリング張り t=15mm
壁／スチール焼付塗装 珪藻土スタイロこて仕上げ
天井／月桃紙貼り
厨房機器／CUCINA　OGUMA Original
　食洗器／パナソニック NP-45MD5SAA
　オーブン／施主所持品
　ガスコンロ／TOSHIBA BHP-M631S
　換気扇（シェード）／富士工業 SSR-3S-905W　SEIHO
照明／パナソニック
　シンク水栓金物／INAX SF-B452SX

浴室
床／ハーフバスルーム
壁／25mm角タイル貼り
天井／スギ本実板張り t=15mm オスモ
照明／パナソニック（HEW6011WKE）
バスタブ／TOTO（PYP1600）
シャワー水栓金物／INAX（BF-M146TW）

リビングダイニング
床／ナラフローリング張り t=15mm オスモ
壁／珪藻土スタイロこて仕上げ
天井／月桃紙貼り
照明／パナソニック　IKEA

趣味室
床／畳敷き t=15mm
壁／珪藻土スタイロこて仕上げ
天井／鋼板サンドイッチパネル t=35mm 月桃紙貼り

設備システム
空調　冷暖房方式／ヒートポンプ式エアコン（ダイキン）
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／さや管ヘッダー方式
　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／さや管ヘッダー方式
　潜熱回収型ガス給湯器（大阪ガス）

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：1,000

北側外観（手前から2軒目）。近隣には同形状の住宅が建ち並ぶ。

住宅性能達成度判定表　改修前　BEFORE

工事名称	竹内邸
判定表作成者	豊田保之
資格	一級建築士　登録第320411号
判定表作成年月日	2011年6月7日
特記事項	
温熱診断 熱損失係数	4.68 W/㎡K
温熱診断 夏季日射取得係数	0.068
建築防災協会 一般診断 総合評点	0.46
2階 X方向	0.62
2階 Y方向	0.49
1階 X方向	0.50
1階 Y方向	0.46
改修前評点	**0.32**

劣化対策 0.44／耐震性 0.03／維持管理 0.40／省エネルギー性 0.67／バリアフリー性 0.29／防耐火性 0.67

性能項目	達成度 既存評点	評価項目	改修レベル	改修前評点	現状の概要、改修工事に関する所見
1 劣化対策（目標レベル 劣化の軽減：等級3＋α）	0.44	1. 外壁の軸組等の防腐・防蟻	等級1	0.00	外壁廻りを改修するのであれば、通気工法にするのが良い。又、同時に防腐防蟻措置を講じるのが良い。浴室は、在来湿式であるため、配管等の点検、取替えが可能とするのが良い。小屋裏換気は、屋根の形状のこともあり確保しにくいが、可能な限り換気ができる状態にしておくのが良い。
		2. 土台の防腐・防蟻	等級1	0.00	
		3. 浴室・脱衣室の防水	等級1	0.00	
		4. 地盤の防蟻	等級3	1.00	
		5. 基礎の高さ	等級1	0.00	
		6. 床下の防湿・換気	等級3	1.00	
		7. 小屋裏換気	等級1	0.00	
		8. 点検口の設置（＋α基準）	等級3	1.00	
		9. 床下内法高さ（＋α基準）	等級3	1.00	
2 耐震性（目標レベル 耐震等級（倒壊等防止）：等級2）	0.03	1. 壁量 2階 X方向	等級0	0.00	壁の構成が不確かなので、壁量、壁配置、床倍率は、等級0としている。阪神淡路大震災時に屋根の瓦がずれ落ちた程度の被害であったため、耐震性はそこそこあると思われるが、改修時に明確な耐力壁を配置し、計画するが良いと思われる。又、解体後、既に取り付いている既存金物の品質を確かめつつ、耐力壁の増強にあわせ、金物の取り付けを行うのが良い。
		2階 Y方向	等級0	0.00	
		1階 X方向	等級0	0.00	
		1階 Y方向	等級0	0.00	
		2. 壁配置 2階 X方向	等級0	0.00	
		2階 Y方向	等級0	0.00	
		1階 X方向	等級0	0.00	
		1階 Y方向	等級0	0.00	
		3. 床倍率 2階 X方向	等級0	0.00	
		2階 Y方向	等級0	0.00	
		1階 X方向	等級0	0.00	
		1階 Y方向	等級0	0.00	
		4. 接合部 2階	等級0	0.00	
		1階	等級0	0.00	
		5. 基礎	等級1	0.50	
		6. 横架材	等級0	0.00	
3 維持管理・更新の容易性（維持管理への配慮：等級3）	0.40	1. 配管方法の基準	等級1	0.00	既存配管が地中埋設されている箇所は、取替えのしようがないため、床下内の配管の取替えが可能な場所は、できるかぎりヘッダー等取替えがしやすい配管とするがよい。
		2. 地中埋設管の基準	等級1	0.00	
		3. 配水管の基準	等級1	0.00	
		4. 配水管清掃のための措置基準	等級3	1.00	
		5. 配管点検口	等級3	1.00	
4 省エネルギー性（目標レベル 温熱環境：等級4）	0.67	1. 床・基礎の断熱	等級2	0.50	全体的な断熱性の向上を行うと良い。既存サッシを利用する箇所は、ペアガラスにするか、2重サッシとするのが良い。
		2. 壁の断熱	等級2	0.50	
		3. 屋根の断熱	等級2	0.50	
		4. 開口部の断熱	等級3	0.75	
		5. 防露措置	等級3	0.75	
		6. 日射遮蔽	等級4	1.00	
5 バリアフリー性（目標レベル 高齢者等への配慮：等級3）	0.29	1. 部屋の配置	等級3	1.00	基本的に改修を行う箇所は、等級が少しでもあがるように計画、工事を行うのがよい。建具枠周りの段差が目立つため、フロアをやりかえるなら、段差を解消するのが望ましい。
		2. 段差の解消	等級1	0.00	
		3. 階段の安全性	等級1	0.00	
		4. 手すりの設置	等級1	0.00	
		5. 通路・出入口の幅員	等級1	0.00	
		6. 特定寝室の大きさ	等級3	1.00	
		7. 浴室・便所の大きさ	等級1	0.00	
6 防耐火性（建築基準法同等）	0.67	1. 火災警報器	等級0	0.00	火災警報器が取り付いていなかったので、取り付けを行う必要がある。
		2. 壁の防火改修	等級1	1.00	
		3. 屋根の防火改修	等級1	1.00	
		4. 開口部の防火改修	対象外	対象外	

改修前後の住まいの状態を定量的に評価している。たとえば省エネルギー性は改修前の評点0.67が改修後は0.83に向上したことを示し、性能が約23%アップしたことが分かる。要因は、部位（床・壁・屋根・開口部）の断熱性の等級が1ランクずつアップしたため。評価された各性能は、レーダーチャートで示され、改修前後の性能を比較することができる。（豊田）

住宅性能達成度判定表　改修後　AFTER

工事名称	垂水の家	
判定表作成者	豊田保之	
資格	一級建築士　登録第320411号	
判定表作成年月日	2011年6月7日	
改修後延べ床面積	115.10 ㎡	
劣化対策改修床面積	81.60 ㎡	按分比 0.71
耐震改修床面積	115.10 ㎡	按分比 1.00
温熱改修床面積	115.10 ㎡	按分比 1.00
バリアフリー改修床面積	115.10 ㎡	按分比 1.00
特記事項<合理的な改修工事と判断した理由>	家ができてから一度もリフォームをしたことがなく、そろそろ全体的なメンテも含めて行おうと思ったのがきっかけ。耐震だけではなく、断熱・段差等その他バランスよく改修することで家全体が快適になるのであればと、予算を確保してもらえた。1階は全面的な改修で、性能を向上させることができ、2階は、下屋との取り合いがあるため、耐震性、断熱、バリアフリーを主とし改修を行っている。	
	増築部分は、改修ではないので上記改修面積から除外とした。	
温熱診断 熱損失係数	2.41 W/㎡K	
温熱診断 夏季日射取得係数	0.032	
建築防災協会 一般診断 総合評点	1.05	
2階 X方向	2.58	
2階 Y方向	1.91	
1階 X方向	1.11	
1階 Y方向	1.05	
総合評点	**0.71**	
改修部分評点	0.71	
未改修部分評点	0.33	

劣化対策 0.59／耐震性 0.78／維持管理 0.60／省エネルギー性 0.83／バリアフリー性 0.57／防耐火性 1.00

性能項目	達成度 総合評点	評価項目	改修レベル	改修部分評点	未改修部分評点	按分率	建物全体総合評点	改修の概要 今後に関する所見
1 劣化対策（目標レベル 劣化の軽減：等級3＋α）	0.59	1. 外壁の軸組等の防腐・防蟻	等級2	0.50	0.00	0.71	0.35	①、1階外壁のみ通気工法を採用。2階外壁は工事対象外。外壁の軸組みに防蟻・防腐措置を行った。A13断面図参照。③浴室は、ハーフユニットを採用し、防水措置を行い点検・配管の取替えを容易にしている。CD01給排水衛生設備図参照。
		2. 土台の防腐・防蟻	等級1	0.00	0.00	0.71	0.00	
		3. 浴室・脱衣室の防水	等級3	1.00	0.00	1.00	1.00	
		4. 地盤の防蟻	等級3	1.00	1.00	0.71	1.00	
		5. 基礎の高さ	等級1	0.00	0.00	0.71	0.00	
		6. 床下の防湿・換気	等級3	1.00	1.00	0.71	1.00	
		7. 小屋裏換気	等級1	0.00	0.00	0.71	0.00	
		8. 点検口の設置（＋α基準）	等級3	1.00	1.00	0.71	1.00	
		9. 床下内法高さ（＋α基準）	等級3	1.00	1.00	0.71	1.00	
2 耐震性（目標レベル 耐震等級（倒壊等防止）：等級2）	0.78	1. 壁量 2階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	①、壁量に関しては、令46条に基づく耐力壁を設け、等級2を確保した。②、壁配置については、1．壁量の等級2を確保するとともにバランスよく配置し、等級2を確保した。③、床倍率についても、1．壁量の等級2を確保した上で、必要床倍率に対して水平構面の補強を行い、等級2を確保した。④、接合部、⑤、基礎については、基礎補強を行わないため、等級0であるが、建築防災協会の一般診断に準拠して、接合部補強を行ない、適切な低減を行い、一般診断で評価した。⑥、横架材については、1階と2階の外壁ラインがずれているため、南側2階外壁ライン下に梁を入れ補強した。図面B02～B05構造図参照。
		2階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		2. 壁配置 2階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		2階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		3. 床倍率 2階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		2階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 X方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		1階 Y方向	等級2	1.00	0.00	1.00	1.00	
		4. 接合部 2階	等級0	0.00	0.00	1.00	0.00	
		1階	等級0	0.00	0.50	1.00	0.00	
		5. 基礎	等級1	0.50	0.50	1.00	0.50	
		6. 横架材	等級0	0.00	0.00	1.00	0.00	
3 維持管理・更新の容易性（維持管理への配慮：等級3）	0.60	1. 配管方法の基準	等級1	0.00	0.00	1.00	0.00	①ヘッダー工法を採用し、配管の借り換え等配慮した。③配水管の内面が平滑で、たわみ、抜け、その他の変形はない。CD01給排水衛生設備図参照。
		2. 地中埋設管の基準	等級1	0.00	0.00	1.00	0.00	
		3. 配水管の基準	等級3	1.00	0.00	1.00	1.00	
		4. 配水管清掃のための措置基準	等級3	1.00	1.00	1.00	1.00	
		5. 配管点検口	等級3	1.00	1.00	1.00	1.00	
4 省エネルギー性（目標レベル 温熱環境：等級4）	0.83	1. 床・基礎の断熱	等級3	0.75	0.50	1.00	0.75	①～④バランスよく、全体的に断熱性能をあげている。熱損失係数（Q値）判定書参照⑤結露計算書参照。⑥夏期日射取得係数（μ値）判定書参照。
		2. 壁の断熱	等級3	0.75	0.50	1.00	0.75	
		3. 屋根の断熱	等級3	0.75	0.50	1.00	0.75	
		4. 開口部の断熱	等級4	1.00	0.75	1.00	1.00	
		5. 防露措置	等級3	0.75	0.75	1.00	0.75	
		6. 日射遮蔽	等級4	1.00	1.00	1.00	1.00	
5 バリアフリー性（目標レベル 高齢者等への配慮：等級3）	0.57	1. 部屋の配置	等級3	1.00	1.00	1.00	1.00	⑤通路・出入り口の幅をっ確保した。⑦浴室便所の大きさを確保した。A6、A7平面図参照。②等級はあがらないが、段差の解消も行っている。
		2. 段差の解消	等級1	0.00	0.00	1.00	0.00	
		3. 階段の安全性	等級1	0.00	0.00	1.00	0.00	
		4. 手すりの設置	等級1	0.00	0.00	1.00	0.00	
		5. 通路・出入口の幅員	等級4	1.00	0.00	1.00	1.00	
		6. 特定寝室の大きさ	等級3	1.00	1.00	1.00	1.00	
		7. 浴室・便所の大きさ	等級5	1.00	0.00	1.00	1.00	
6 防耐火性（建築基準法同等）	1.00	1. 火災警報器	等級3	1.00	0.00	1.00	1.00	①火災警報器を取り付けている。電気設備図参照。
		2. 壁の防火改修	等級1	1.00	1.00	1.00	1.00	
		3. 屋根の防火改修	対象外	対象外	1.00	1.00	1.00	
		4. 開口部の防火改修	対象外	対象外	対象外	1.00	対象外	

福岡建築見学会＋ARCH(K)INDY　開催レポート

福岡で味わう、建築のフルコース

馬淵健太・清原昌洋・井上聡

左：「下川歯科医院」の見学風景。／右：アーキンディ会場に展示されたSUEPの作品模型。

●ARCH(K)INDY第10回「九州と東京で建築をつくること」
講師　末光弘和＋末光陽子／SUEP
会場　清星幼稚園（福岡県福岡市）
日時　2012年6月2日（土）
URL　http://sites.google.com/site/archkindy

●建築ツアー第2回「SUEPの作品を巡る」
対象作品　「地中の棲処」「向日居」「葉陰の段床」「下川歯科医院」ほか

一組の建築家を徹底的に掘り下げる

去る6月2日、SUEPの末光弘和氏、末光陽子氏を迎え、福岡県内の同氏の建築を貸切バスで巡る建築見学会と、ARCH(K)INDY（以下、アーキンディ）というレクチャーシリーズを行った。早朝から深夜まで、丸1日ほぼ休みなしのスケジュールであったが、見学会65名、アーキンディ90名の参加という盛況のうちに終了した。

アーキンディは通常の時間制限や段取りに則らず、「体力が続くまで」レクチャー、トークを行うイベントである。清星幼稚園（清原昌洋設計）を会場に、これまでも島田陽氏、長谷川豪氏、中山英之氏、五十嵐淳氏などを迎え、今回は10回目の開催となる。

アーキンディと建築見学会は、もとは別々のイベントであったが、今回は特別にこれらを「ジョイント企画」とした。建主がすでに日常生活を送っている一連の住宅を建築家本人と共に見学し、その実体験に基づいて議論をする場までが用意されるという企画は、誌面では分かりづらい、各作品に通底する建築家の意志や「くせ」のようなものをつぶさに見ることができる。さらにオープンハウスでは知り得ない、建主による住宅の使いこなしや、設計がどのように時間の経過を受け入れているかを知ることができる非常に貴重な機会であった。また1日で巡れる範囲にSUEPの作品が多くあったのも福岡ならではといえる。

見学会の対象となった作品は「地中の棲処」（本誌1007）など5カ所である。参加者は福岡県内の社会人、学生が中心であったが、東京、滋賀、広島など遠方からの参加者も含まれていた。見学に際してわれわれがリクエストしたすべての作品の建主が今回の申し出を快諾してくださったが、これも末光氏と建主との良好な関係性があったからこそだろう。

九州と東京で建築をつくること

見学会終了後、会場に戻って行われた末光氏によるレクチャーは「九州と東京で建築をつくること」と題され、休憩を取りつつ約2時間半に及んだ。見学した建物はもちろん、東京の作品や最新プロジェクトである「嬉野市立塩田中学校＋社会文化体育館」などの設計の端緒から詳細なテクノロジーの解説までを網羅した、分かりやすく幅の広いレクチャーであった。

末光氏は九州と東京の違いとして、コンテクスト（条件）の密度が異なることを挙げ、今回の見学作品である「地中の棲処」「向日居」のように、九州においては未造成のがけ地や一面のキウイ畑などの「自然」と向き合って設計に必要なコンテクストを引き出すことが多いと述べた。末光氏はこれらの向き合うべき自然を「野生の自然」、都会の鉢植えや生垣などを「飼いならされた自然」と呼んで対比し、九州（地方）と都市の自然との対峙の仕方の差を明らかにしてくれた。

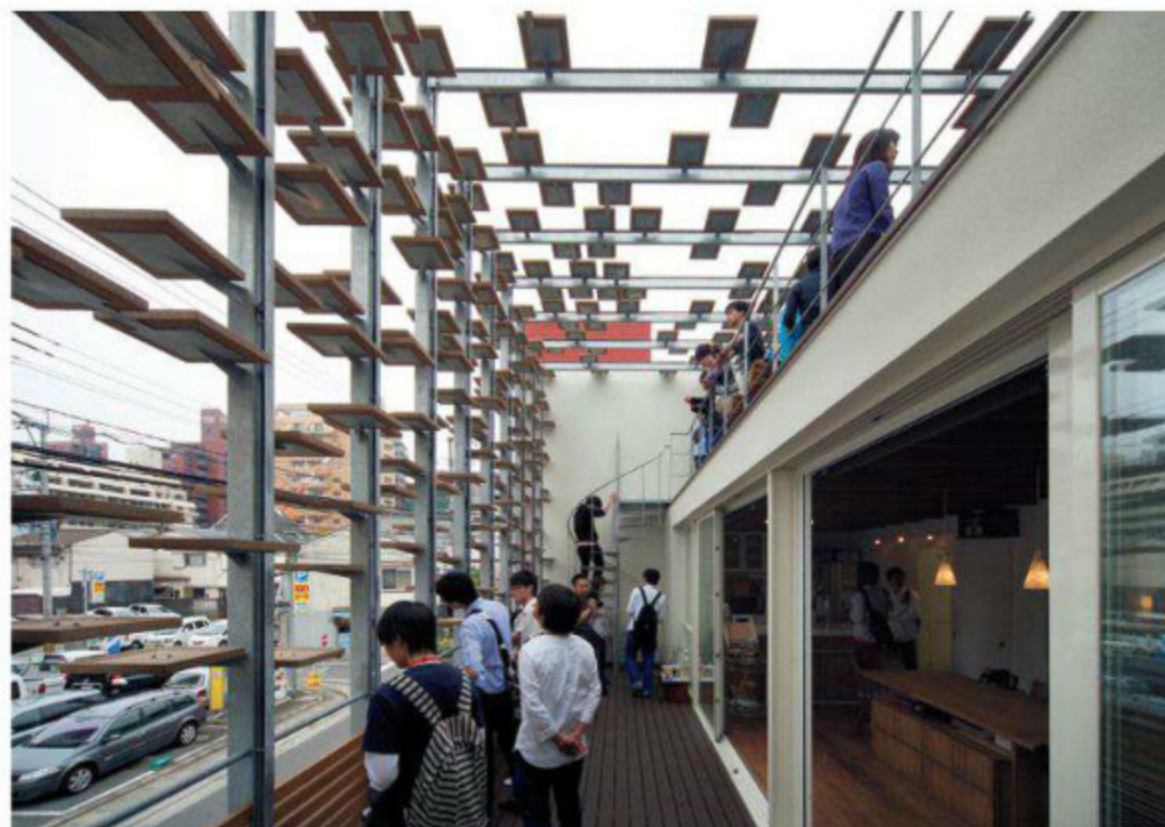
会の後半では、各人の見学会の感想や、建築に組み込まれた技術的なシステムと実際の空間との関係性などを主題にしたトークを行った。レクチャー内で語られた「風景をつくる」「人に寄り添う建築をつくる」など、それぞれのプロジェクトに与えられたシンプルな目的と、それらを実現するための徹底的な技術的裏付けが一体となってSUEPの建築はつくられている。実際に訪れ、ごく自然にその場に佇んでいる建築を体験した時、はじめて完全に理解できるものであったと思う。ほかの参加者もそのことが深く実感できたのではないだろうか。

以下に末光氏と参加者からのコメントを記す。

建築ツアーにて「地中の棲処」を見学している。

アーキンディにて。レクチャー終了後のトークタイム。講師と参加者が一緒になってとことん語り合う。*　*写真提供：馬淵健太

スープとレシピ

美味しいスープのような建築をつくる。普段からそんな風に考えている私たちにとって、今回のイベントは、昼の見学会で私たちのつくった建築を大勢の方に味わってもらい、夜の講演会で、そのレシピをお話するとても面白い機会だった。できたての澄んだスープを味わってもらうオープンハウスとは違い、この見学会は、住まい手が生活し、濃厚な味が出てきたスープの味を知るといった方が正しいかもしれない。 私たちの建築には、土地の特選具材と別に、光や風、熱といった調味料が入っているので、体験してもらってはじめてその味が伝わると思っている。さまざまな調理法により、レシピは高度で複雑なものでも、でき上がるスープはよりシンプルな感動を与えるものでありたい。（末光弘和＋陽子）

建築ツアーにて「葉陰の段床」を訪れる。セラミックパネルのスクリーンにルーバーに這わせた散水装置で水をまき、気化熱を利用して涼しい微気候をつくり出す。

参加者からのコメント

よい街をつくるのに半分は地元の力、半分はソトの力が必要なのではないかと考えている。ソトの力は地方に刺激を与えてくれる。いったりきたりする末光夫妻がソトとはいえないかもしれないが、今回九州がもっている優位性をたくさん伝えてくれた。次はそれを受けて私たちが何を伝えることができるのかを真剣に考えなければならない。　（古森弘一／古森弘一建築設計事務所）

人や環境に寄り添う建築は「おおらかさ」という評価軸がよく似合う。多様な暮らしをどんどん詰め込んでも建築の強度は落ちないばかりか一層豊かになっていた。住まい中の住宅を快く開放する住人たち、レシピをとことん開放する建築家、それを全身で享受する未来の建築家たち、どれを取っても福岡のこれからに目が離せない。

（谷村仰仕／広島国際大学講師）

東京をベースにする自分にとって、福岡の建築と建築人に出会う大変に貴重な機会だった。いま福岡、ひいては九州が生み出す文化の力には、すさまじい勢いがある。今回出会った方々から、建築においてもこの土地から新しい波が起こる予感を確かに感じている。

（神谷修平／隈研吾建築都市設計事務所）

見学会での最大の収穫は、建築家と施主の関係を間近で見ることができたことである。施主の幸せそうな表情を見ることで、そこに建築の「やりがい」を見付けることができた。この体験は、建築を学ぶうえで大きな糧になるだろう。

（黒岩翼／九州工業大学3年）

アーキンディ会場風景。

特記なき撮影：針金洋介／TechniStaff

右：13mmの鉄骨角パイプによる11種のフレーム底面にガラスを設置したショーケースが31個積み上がる。構造設計は高田雅之さん、製作はイノウエインダストリィズ。*
本頁*撮影：本誌編集部　特記なき写真：新建築社写真部

AGC studio Exhibition No.05
12組の若手建築家による未来の建築を感じる模型展 「新しい建築の楽しさ」展 開催中

会期　8月11日まで
会場　AGC studio1階エントランス ギャラリー（東京都中央区）
URL　http://www.agcstudio.jp/project/

会場全景。ガラス張りの会場の光景が街を行く人びとからも伺える。このショーケース群は青木さんのプロジェクトの5分の1模型でもある。

山のようなかたちに積まれたショーケース、そこに置かれた模型を前に、近付いたり離れたり、しゃがみ込んだり歩き回ったり……そんなふうに身体を介し、コンセプト段階の模型を通して新たな建築を想像する　覧会である。出　者は次代を担う若手建築家12組。会場には地域独自の住宅形式を用いた地域再生計画やバングラディッシュに建つサイクロンシェルターなど、実に多様なプロジェクトが並ぶ。これら12個のプロジェクトからは独自の視点で現代社会を見通し、建築をつくることでいかに社会に向き合うかという意気込みが感じられ、わくわくした気持ちを憶える。
そんな体験へ誘導するのは、青木弘司さんによる会場構成だ。ショーケースの山裾には縮尺を落とした、またアイレベルには縮尺を上げた模型を配し、来場者が実感をもって建築空間を追体験できるよう計画された。
建築をつくることをただ単純に「楽しい」とはいい切れない現代において、建築の楽しさをどう伝えるのか。その問いにユニークな提案を投げかけている。

「杉本博司 ハダカから被服へ」開催

会期　3月31日～7月1日
会場　原美術館（東京都品川区）
URL　http://www.haramuseum.or.jp/

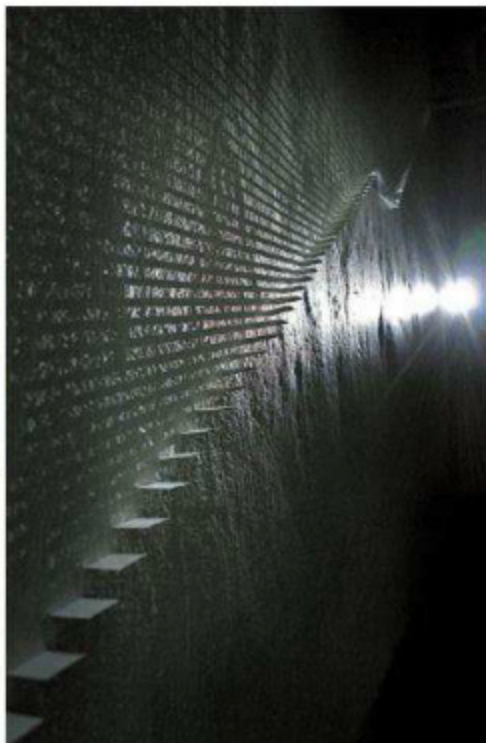
原美術館に相応しい　示を、とのことで作品が選ばれた杉本氏の個　は、20世紀を代表するデザイナーによるファッションを撮影した「スタイアライズド スカルプチャー」シリーズを中心に構成された。
会場には、その時代に理想的とされたマネキンに纏わせた美しい洋服の数々の写真が、曲面を描く壁の上に浮かび上がった。またサンルームには本　のためにつくられたオブジェ「負の定曲率曲線　双曲型の回転面」が設えられ、その背景に広がる庭には室外機を150本の竹箒で囲った「アートのほうき　かえりな垣」や庭手前に移動させてきた手水鉢を望む。
屋上へと続く螺旋階段には作品にも登場するドレスを纏ったマネキンを佇ませたりと、内外に鏤められた　示は建物と呼応してお互いを引き立て合い、居心地のよい空間をつくり出していた。

左上：サンルームの「負の定曲率曲線　双曲型の回転面」と背景の庭左手に「アートのほうき　かえりな垣」。／右上：エルザ・スキャパレリのドレスを纏ったマネキン。／左下：1階ギャラリーの展示風景。／右下：「ルーシー」。衣服と人類の歴史がほぼ同じくらい古いことに着目した「ハダカから被服へ」展はこの写真から始まる。すべての写真に添えられたコメントは杉本氏自身によるもの。

高山正樹展
「建築のかたち」開催

会期　6月25日～7月7日
会場　巷房・2　巷房・階段下（東京都中央区）
URL　http://ameblo.jp/etre-design/

銀座・奥野ビルの地下にあるギャラリーで、これまで高山正樹さんが手がけてきた建築のさまざまなシーンが飾られている。ここでは自身で撮影した工事現場を主とする写真を、木、コンクリート、スチールといった構造に着目しつつ遠景・近景を織り交ぜながら　示。施工段階のモノクロ写真は、1960年代の写真かと見まごうほどの力強さがある。そして同ビル6階のエトルデザインの事務所に向かうと、カラーの竣工写真が置かれ、工事中とはまったく違う表情に驚くという“種明かし”が待っていた。
写真の印刷にはUVインクジェットプリンタを用いており、影の黒だけでなく、ハイライト部分にも白インクをのせることで、通常のプリントとは異なる奥行や陰影が感じられる。また同じ階段下のスペースを利用したペーパーアート「階段の彼方」では、360度回転するLEDライトによって、壁に取り付けられた100段の階段が刻一刻と表情を変えていた。特殊な　示室ならではの、小さい空間を巧みに利用した　示だった。

右：「階段の彼方」。**ペーパーアートは伊藤航さんと共同製作。暗いスペースの中で回転するライトの光に階段が照らされる。／左上：会場風景。**各作品の大判の写真が並ぶ。／左下：パネルのひとつ「池を臨む家 流山 K house」の庇。*左がスチールによる構造体を写しており、右は竣工後のカット。**撮影：高山正樹

幻想都市風景
——建築家・光嶋裕介ドローイング集

光嶋裕介 著

（四六判／144頁／3,045円／羽鳥書店）

処女作「凱風館」（本誌1206）の設計者である著者が、これまで描いてきた数々のドローイングを、小口部分の紙を切らず一部折りの状態を残した独特の製本の下にまとめている。9割以上がドローイングである意図については、著者が自身の思考を解説する数頁のテキストで明らかにされる。設計とドローイングは切っても切れない関係であり、ヨーロッパを日々旅して一時は暮らしていた経験からも、建築家はスケッチブック片手に旅に出ないといけないといい切る。本書は1999年から年代順に進み、初期は世界各国の建物が柔らかく描かれているが、年を経るごとに迷いのないシャープな線となっていく。最後は架空の「まだ見ぬ空間」のドローイングへ飛び立ち「凱風館」へと向かう。巻末に「凱風館」建主である文筆家・内田樹氏が、建主の立場から、著者をひとりの人間として分析しているのも面白い。

エコハウスのウソ

前 真之 著

（A5判／224頁／2,100円／日経BP社）

本書は建築環境の専門家である著者が、日経アーキテクチュアで綴った同名の連載をもとに再構成されたもの。エコハウスについて人びとが思い描くイメージを明らかにし、その真偽を検証する。「ウソ」とタイトルにあるように、イメージと現実は幾分かけ離れていることに気付かされる。夏本番を控え、エアコンこそが節電の要、ともいいがたく、むしろエアコンの利用を前提とした仕切られた居室の必要性や、通風効果を過信することの問題点など、「エコに配慮した」設計や生活の落とし穴を浮き彫りにする。また断熱の考え方をダイエットに例えたり、高気密の効果と心理的な違和感など、既成概念をもつ読者に寄り添い分かりやすく解説される。冬場の暖房タイプ別効果や太陽エネルギー、さらにはHEMSといった最先端のシステムにまで話はおよび、広範な視点から身の回りをとらえることができる。

建築と言葉
日常を設計するまなざし

小池昌代　塚本由晴 著

（B6判／232頁／1,365円／河出書房新社）

詩人であり小説家の小池昌代さんと建築家の塚本由晴さんが日常にある住まいや都市を語り合う。言葉でもって日常を取り巻くものたちにつながりを生み出す詩人と、言葉を加えることで空気や光などの物質を柔軟に解釈し得る存在へと変化させ、人の振る舞いと共にひとつのかたちをつくり出す建築家。一見すると異なる世界にいるふたりだが、読み進めるうちに両者に共通するキーワードである「言葉」の存在が浮かび上がる。ふたりの対話は、空気中に舞うほこり、家の中で耳にする雨や風の音、声が行き交う飲み屋街の風景……など、文学に描かれた日常の様子から、日本特有の風景のあり方、ひいては塚本さんの唱える東アジアに共通するだろう「山水主義」へと通じていく。ふたりのものに対する洞察力に、工学的な視点だけでなく、歴史学や文学からも多様に語り得る建築の魅力を再認識する。

藻谷浩介さん、経済成長がなければ僕たちは幸せになれないのでしょうか？

藻谷浩介　山崎亮 著

（四六判／200頁／1,470円／学芸出版社）

さまざまな地域でコミュニティデザイナーとして活躍する山崎亮さん。本書は、彼と『デフレの正体』著者で全国の地方自治体を実際に巡る地域経済アナリストの藻谷浩介さんの対談集。タイトルに対して「成長がなくても幸せになれる」そのように漠然と思う人も多いだろう。経済的には決して豊かではない島根県海士町や兵庫県姫路市家島などでの自身の活動経験をもとに話す山崎さんと、経済を理論的かつ現実に即して分析する藻谷さんの対話からは、経済成長をどうとらえるか、個人の幸せを実感できる社会のあり方のヒントが示され、漠然とした思いを具体的な理解へと導いてくれる。軽妙ながらも知的なふたりのセッションは臨場感に溢れている。「時代の節目という面白い時を生きている」。私たちを勇気付けてくれる一冊である。

AR HOUSE 2012発表

イギリスの建築雑誌『Architectural Review』が主催する世界各国の住宅を対象としたAR HOUSE 2012が発表され、去る6月26日にロンドンで表彰式が催された。次点に当たるRUNNERS UP賞（HIGHLY COMMENDED）5作品のうち、2作品を保坂猛氏の「川口邸」（本誌1111）と岡田公彦氏の「戸田邸」がそれぞれ受賞した。大賞には「House For All Seasons in Shaanxi Province」（中国、設計：John Lin）が選ばれた。
その他COMMENDED賞に、日本では「森のすみか／ nest」（前田圭介／UID）、「Dig In The Sky」（本誌1205、竹口健太郎+山本麻子／アルファヴィル）が入選している。
http://www.arhouse.co.uk/

RIBA Awards 2012 発表
——「yotsuya tenera」が国際賞受賞

去る6月21日、王立英国建築家協会（RIBA）は2012年の国際賞を発表。12作品の受賞建築物のひとつに東京都新宿区の集合住宅「yotsuya tenera」（設計：小山光+キー・オペレーション、『新建築』1102）が選ばれた。
同作品では住宅密集地の限られた条件の中で狭苦しさを感じさせず、統一性がとれている点、部屋につながる階段には日光と風が抜け、プライバシーを損なうことなく、階段で住人同士の交流を促そうとしている点が評価された。

「yotsuya tenera」。　撮影／新建築社写真部
アンジェロ・マンジャロッティ氏逝去

去る6月30日、イタリアの建築家・工業デザイナーであるアンジェロ・マンジャロッティ氏が逝去された。享年91。氏は1921年ミラノ生まれ。1948年にミラノ工科大学を卒業し、1953〜54年にかけてシカゴの“ループ”地区コンペに参加するなどアメリカで活動。1960年代から今日に至るまで多くの日本人スタッフと協働したほか、イリノイ工科大学、ヴェネチア建築大学、ローザンヌ工科大学、ミラノ工科大学など世界各国で教鞭を執るなど、教育活動も精力的に　開した。
氏は、普遍的な創作がすべての者にそのもの本来の使用目的を認識させるというセオリーの下、各々の物がもつ固有な性質を際立たせるよう目指した。デザイン部門もしくは建築構築部門にて、さまざまな賞を受賞。
晩年に至るまで現役で活動を続け、東京都千代田区のイタリア文化会館で、6月14〜30日の会期で　覧会「アンジェロ・マンジャロッティの哲学とデザイン」が開催されていた（『新建築』1207）。

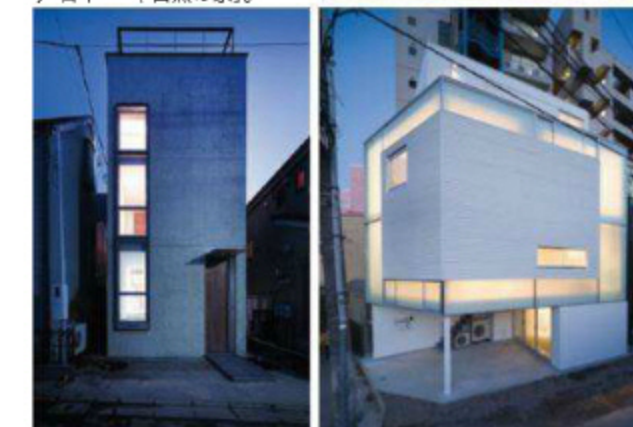
復興支援・住宅エコポイント打ち切り
被災地は引き続き、本年10月末まで受付予定

国土交通省は、去る7月4日午前9時到着分をもって、東日本大震災の被災地以外の地域について、復興支援・住宅エコポイントの予約申し込みの受付を終了したと発表した。予想を上回るペースで申請があり、予算額を鑑みて予定を約4カ月前倒した。被災地については従来予定されていた本年10月末までを目処に、引き続き申し込みを受け付ける。
復興支援・住宅エコポイントは、住宅の省エネ化、住宅市場の活性化、東日本大震災の被災地復興支援のため、エコ住宅の新築またはエコリフォームをした場合にポイントが発行され、そのポイントを被災地の商品やエコ商品などと交換できる制度。2011年10月21日（リフォームの場合は11月21日）から2012年10月31日に着工・着手したものを対象に、本年1月から実施していた。

第38回 東京建築賞発表

東京都建築士事務所協会は、第38回東京建築賞を発表し、東京都知事賞には「欅アパートメント」（『新建築』1102）が選ばれた。同賞は戸建て住宅、共同住宅、延床面積3,000m²未満の一般一類とそれ以上の二類の4部門において、それぞれ最優秀賞、優秀賞、奨励賞を設けている。今回は2009、2010年に竣工した関東甲信越地方の建物を対象とし、応募総数は74点。鈴木博之氏が審査委員長を務めた。
戸建て・共同住宅の受賞は以下の通り。

【戸建て住宅部門】
▷最優秀賞「ナガヤネ」（本誌1012）＝group-scoop　▷優秀賞「太子堂の家」＝FISH+ARCHI-TECTS　▷奨励賞「中目黒の家」（本誌1111）＝林順孝建築設計事務所
【共同住宅部門】
▷東京都知事賞・最優秀賞「欅アパートメント」＝吉富興産　▷優秀賞「フレンシア玉川田園調布」＝竹中工務店
▷奨励賞「法政大学向坂逸郎記念国際交流会館」＝石本建築事務所

上：「ナガヤネ」撮影／堀内広治。／左下：「太子堂の家」。／右下：「中目黒の家」。

岸和郎　Waro Kishi

1950年神奈川県生まれ／1973年京都大学工学部電気工学科卒業／1975年同大学工学部建築学科卒業／1978年同大学院修士課程建築学専攻修了／1981年岸和郎建築設計事務所を設立／1993年K.ASSOCIATES/Architectsに改組／1981〜93年京都芸術短期大学／1993〜2010年京都工芸繊維大学／2003年カリフォルニア大学バークレー校客員教授、2004年マサチューセッツ工科大学客員教授／現在、京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授

K.ASSOCIATES/Architects　〒604-8115 京都市中京区雁金町366ユタカビル4階　tel.075-213-0258　fax.075-213-0259
mail@k-associates.com　http://k-associates.com/

北山恒　Koh Kitayama

1950年香川県生まれ／1976年横浜国立大学建築学科卒業／1978年ワークショップ設立（共同主宰）／1980年横浜国立大学大学院修士課程修了／1995年architecture WORKSHOP設立／2010年第12回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナー／現在、横浜国立大学大学院Y-GSA教授、日本女子大学非常勤講師

北山恒＋architectureWORKSHOP　〒106-0046 東京都港区元麻布2-14-21-BF　tel.03-5449-8337　fax.03-5449-4822
aws@archws.com　http://www.archws.com/

長坂大　Dai Nagasaka

1960年神奈川県生まれ／1982年京都工芸繊維大学住環境学科卒業／1985〜89年アトリエ・ファイ建築研究所／1990年Mega設立／1989〜2002年京都工芸繊維大学造形工学科助手／2003〜07年奈良女子大学人間環境学科准教授／現在、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授、工学博士／1990年「神戸北町CPプロジェクト」でSDレビュー鹿島賞受賞／1992年「ダムのある美術庭園計画」で環境芸術大賞受賞／1996年ふるさとの顔づくり設計競技建設大臣賞受賞／2009年「おざわ歯科」（『新建築』0904）で第54回神奈川県建築コンクール一般部門優秀賞受賞／2010年「富士見町の家」（本誌1005）で第55回神奈川建築コンクール住宅部門優秀賞受賞

Mega　〒606-8102 京都府京都市左京区高野清水町71　tel. 075-712-8446　fax. 075-712-6489
info@mega71.com　http://www.mega71.com

荒谷省午　Shogo Aratani

1971年大阪府生まれ／1996年徳島大学工学部建設工学科卒業／1996〜2000年無有建築工房／2000年荒谷省午建築研究所設立／現在、京都精華大学建築学科非常勤講師／2008年第3回関西建築家新人賞受賞／2008年U40コンペティション「六甲山上の展望台」佳作／2009年大阪建築コンクール奨励賞受賞／2010年北九州市公園トイレ提案設計競技佳作

荒谷省午建築研究所　〒662-0854 兵庫県西宮市櫨塚町3-10 西宝ビル2階　tel.0798-31-3484　fax.0798-31-5508
info@ararchitect.com　http://ararchitect.com/

木村吉成　Yoshinari Kimura　**松本尚子**　Naoko Matsumoto

（木村吉成・左）1973年和歌山県生まれ／1996年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業／1997年同大学根岸研究室研究生／1997〜98年狩野忠正建築研究所／2003年木村松本建築設計事務所設立／2009年〜大阪工業技術専門学校・大阪市立大学非常勤講師
（松本尚子・右）1975年京都府生まれ／1997年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業／1999年同大学根岸研究室研究生／2003年木村松本建築設計事務所設立／2009年〜大阪市立大学、2011年〜滋賀県立大学非常勤講師
「3人の作家のためのアトリエと住宅」で2008年SD review入選

木村松本建築設計事務所　〒558-0011 大阪府大阪市住吉区苅田3-10-30-702　tel. 06-6691-3220
kimura@kmrmtmt.com（木村）　matsumoto@kmrmtmt.com（松本）　http://kmrmtmt.com

三宅正浩　Masahiro Miyake

1974年島根県生まれ／1993年大阪市立大学工学部土木工学科卒業／1997〜2002年積水化学工業近畿住宅支店／2003〜06年宮本佳明建築設計事務所／2006年y+M design office共同設立／現在、摂南大学・大阪府立大学工業高等専門学校・穴吹カレッジキャリアアップスクール非常勤講師／「階段の家」でJIA優秀建築選2008、エコビルド賞2008、グッドデザイン賞、INAXデザインコンテスト2008審査委員特別賞、第1回JIA中国建築大賞優秀賞／「光明台幼稚園」でJCDデザインアワード2009新人賞、JIA優秀建築選2009／「出窓の家」で第55回神奈川建築コンクール優秀賞、作品選集2012（日本建築学会）入選／「ARBOR」でSDレビュー 2011入選／「北庭の家」でJIA優秀建築選2012／「スミキリノイエ」でDesign for Asia Award 2011 Bronze Award／「挟持の間」でINAXデザインコンテスト2011審査委員特別賞

y+M design office　〒654-0161 兵庫県神戸市須磨区弥栄台3-3-7林タオルビル1階　tel. 078-891-7616　fax. 078-891-7620
ymdo@feel.ocn.ne.jp　http://ymdo.net/

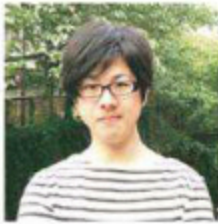
魚谷繁礼　Shigenori Uoya

1977年兵庫県生まれ／2001年京都大学工学部卒業／2003年同大学院工学研究科修了／現在、魚谷繁礼建築研究所代表、京都造形芸術大学非常勤講師、京都建築専門学校非常勤講師／「京都型住宅モデル」により2007年都市住宅学会賞業績賞、地域住宅計画賞奨励賞、2009年環境デザインアワード環境デザイン優秀賞、同アワードベターリビングブルー＆グリーン賞、2011年京都デザイン賞京都府知事賞を受賞／「都島の住宅 I A House and 3-Boxes」により2009年SDレビュー入選／「西都教会」により2012年第7回関西建築家新人賞を受賞／主な著書に『近代世界システムと植民都市』（共著、2005年、京都大学学術出版会）、『世界住居誌』（共著、2005年、昭和堂）、『いま、都市をつくる仕事』（共著、2011年、学芸出版社）

魚谷繁礼建築研究所　〒600-8029 京都市下京区西橋詰町762 京栄中央ビル4階　tel. 075-361-5660　fax. 075-585-4181
shigenori-uoya@sings.jp　http://www.uoya.info

板垣元彬　Motoyoshi Itagaki

1940年北海道生まれ／1963年東京藝術大学美術学部建築科卒業／吉田五十八研究室を経て、1977年板垣元彬建築事務所開設

板垣元彬建築事務所　〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-9 STB.11

能作淳平　Junpei Nousaku

1983年富山県生まれ／2006年武蔵工業大学（現・東京都市大学）卒業／2006〜10年長谷川豪建築設計事務所／2010年能作淳平建築設計事務所設立

能作淳平建築設計事務所　〒106-0031 東京都港区西麻布3-24-23八星ビル4階　tel. &fax. 050-3485-6911
nskjnp@ybb.ne.jp

中田裕一　Yuichi Nakada

1983年栃木県生まれ／2006年武蔵工業大学（現・東京都市大学）卒業／2006〜10年設計・施工会社勤務／2010年中田製作所設立／2011年HandiHouse project 始動

中田製作所　〒214-0034 神奈川県川崎市多摩区三田3-1-2.1-305
yuichinakada@hotmail.co.jp

©TAKAMURADAISUKE

古澤大輔　Daisuke Furusawa　**馬場兼伸**　Kanenobu Baba　**黒川泰孝**　Yasutaka Kurokawa

（古澤大輔・中）1976年東京都生まれ／2000年東京都立大学工学部建築学科卒業／2002年同大学大学院修士課程修了／2008年明治大学大学院兼任講師／2009年首都大学東京非常勤講師／2011年〜リライトデベロップメント取締役／現在、日本大学、首都大学東京大学院、東京理科大学大学院非常勤講師
（馬場兼伸・左）1976年東京都生まれ／2000年日本大学理工学部建築学科卒業／2002年同大学大学院修士課程修了
（黒川泰孝・右）1977年東京都生まれ／2000年日本大学理工学部建築学科卒業／2002年同大学大学院修士課程修了

2002年メジロスタジオ共同設立／2007年「アシタノイエ」（本誌0501）[*1]で2007年日本建築学会作品選奨、第2回サステナブル住宅賞国土交通大臣賞受賞　（[*1]小泉雅生／小泉アトリエと協働）／2011年「3331 Arts Chiyoda」（『新建築』1102）[*2]で2012年日本建築学会作品選奨、「バルコニービル」でSDレビュー 2011朝倉賞受賞　（[*2]佐藤慎也／日本大学と協働）

メジロスタジオ　〒171-0032 東京都豊島区雑司ヶ谷3-3-25-811　tel. 03-3981-5229　fax. 03-3981-5219
mejiro@par.odn.ne.jp　http://www.mejirostudio.com/

山口誠　Makoto Yamaguchi

1972年千葉県生まれ／2001年東京芸術大学大学院修士課程修了／2001年山口誠建築設計事務所設立／2007年山口誠デザインに改組／現在、芝浦工業大学非常勤講師／「軽井沢の別荘／ギャラリー」（『新建築』0307）で2003年ar+d awards, highly commended、2004年Wallpaper* Design awards 2004、Best residential project受賞／2008年「FRASER PLACE」でグッドデザイン賞、「狛江の住宅」（本誌0801）でInternational Architecture Awards, Winner、AR AWARDS, Honourable Mentions、2012年日本建築学会作品選集入選／2010年「HANEGI G-House」（同1008）でグッドデザイン賞受賞

山口誠デザイン　〒106-0047 東京都港区南麻布2-8-17鳥海ビル1階　tel. 03-6436-0371　fax. 03-6436-0372
mail@ymgci.net　http://www.ymgci.net

塩塚隆生　Takao Shiotsuka

1965年福岡県生まれ／1990年大分大学大学院修士課程修了／1990〜93年アルカイック／1994年塩塚隆生アトリエ設立／2002〜11年大分大学工学部非常勤講師／2004〜08年九州大学芸術工学部非常勤講師／2012年〜大分大学工学部客員教授

塩塚隆生アトリエ　〒870-0035 大分県大分市中央町3-5-3 8ビル1階　tel.097-538-8838　fax.097-538-8839
shio-atl@shio-atl.com　http://www.shio-atl.com

稲垣淳哉　Junya Inagaki　**佐野哲史**　Satoshi Sano　**永井拓生**　Takuo Nagai　**堀英祐**　Eisuke Hori

（稲垣淳哉・左上）1980年愛知県生まれ／2004年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2006年早稲田大学大学院修士課程修了（建築学）／2007〜09年早稲田大学建築学科助手（古谷誠章研究室）／2011年〜早稲田大学理工学研究所客員次席研究員／2009年〜Eureka共同主宰
（佐野哲史・左下）1980年埼玉県生まれ／2003年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2004年Fondazione Renzo Piano奨学生として渡仏／2004年Renzo Piano Building Workshop, Paris 在籍／2006年早稲田大学大学院修士課程修了（建築学）／2006〜09年隈研吾建築都市設計事務所／2009年〜Eureka共同主宰
（永井拓生・右下）1980年山口県生まれ／2003年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2005早稲田大学大学院修士課程修了（工学）／2006〜09年早稲田大学助手／2009〜11年永井構造計画事務所主宰／2011年〜滋賀県立大学助教、永井構造計画事務所設計顧問／2009年〜Eurekaパートナー
（堀英祐・右上）1980年佐賀県生まれ／2004早稲田大学理工学部建築学科卒業／2007早稲田大学大学院修士課程修了（工学）／2007年〜09年早稲田大学大学院博士後期課程（単位取得退学）／2009〜11年早稲田大学理工学術院助手／2011年〜国士舘大学理工学部非常勤講師／2012年〜早稲田大学理工学術院助教／2009年〜Eurekaパートナー
2005年「House8」でSD Review 2005朝倉賞受賞／2006年早稲田大学小野梓記念芸術賞受賞

Eureka　〒171-0021 東京都豊島区西池袋4-15-1-101　tel. & fax. 03-3988-4065
info@eurk.jp　www.eurk.jp

石崎哲也　Tetsuya Ishizaki　**石崎瑠美子**　Rumiko Ishizaki

（石崎哲也・左）1980年福島県生まれ／2003年日本大学理工学部建築学科卒業／2005年同大学院修士課程修了／2005〜09年ワークステーション／2010年〜石崎建築設計／2011年日本建築学会近畿支部設計競技佳作受賞
（石崎瑠美子・右）1978年新潟県生まれ／2001年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2003年同大学院修士課程修了／2003〜05年ワークステーション／2005〜07年三井住友建設／2008年石崎建築設計設立／2011年日本建築学会近畿支部設計競技佳作受賞

石崎建築設計　〒212-0016 神奈川県川崎市幸区南幸町2-17-1-704　tel. 044-280-6420　fax. 044-280-6420
mail@ishizaki-aa.com　http://www.ishizaki-aa.com

三澤文子　Fumiko Misawa

1956年静岡県生まれ／1979年奈良女子大学理学部物理学科卒業／1980年大阪工業技術専門学校建築学科卒業／1980年高木滋生建築設計事務所／1982年現代計画研究所 ／1985年夫・三澤康彦と共にMs建築設計事務所設立／1991～99年大阪芸術大学非常勤講師／1996年木構造住宅研究所を共同設立／2001～09年岐阜県立森林文化アカデミー教授、2010年～客員教授／2009年木構造住宅研究所をMSDに改称／2011年～京都造形芸術大学通信制大学院教授／現在、Ms建築設計事務所・MSDを共同主宰／1993年大阪府都市景観建築賞受賞／2007年日本建築学会賞教育賞（教育貢献）受賞／主な著書に『住宅に空間力を・住まいかたと住むくふう』（2000年、彰国社）、『環境の時代の木造住宅』（共著、2009年、日経BP社）、『最高の「木造」住宅をつくる方法』（2011年、エクスナレッジ）

Ms建築設計事務所・MSD　〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島2丁目9-16　tel.06-6224-7820　fax.06-6458-5090
info@mok-msd.com　http://mok-msd.com/

豊田保之　Yasushi Toyoda

1974年京都府生まれ／1996年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業／1996～99年 瀬戸本淳建築研究室／1999～2004年Ms建築設計事務所／2005年～トヨダヤスシ建築設計事務所／2008年大阪事務所開設／2004年～岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師／2007年～特定非営利活動法人WOOD AC監事／2011年～住宅医ネットワーク委員／2011年～ウッドマイルズ研究会監事／2012年～住宅医ネットワーク大阪事務局／2012年～京都造形芸術大学非常勤講師／2011年「南禅寺の家」にて自立循環型住宅研究会アワード2011優秀賞／2011年「美濃加茂の二所帯住宅」にて第6回地域住宅計画賞作品部門地域住宅計画奨励賞受賞／2011年「西七条の町家」（本誌0905）にて第6回日本漆喰協会作品賞受賞／2010年「小野の長家」にて第5回地域住宅計画賞自立循環型住宅部門地域計画賞受賞／「西七条の町家」で第5回木の建築賞花吉野新人賞受賞／「川原町泉屋」で平成18年度岐阜市都市景観賞（建築物部門）受賞

トヨダヤスシ建築設計事務所　京都事務所　〒600-8893 京都市下京区西七条御領町84
大阪事務所　〒553-0003 大阪市福島区福島2丁目9-16　tel.075-313-7116（代表）　fax.06-6458-5090
info@t-sakan.com　http://www.t-sakan.com

執筆者

杉下均（すぎした・ひとし）
1952年岐阜県生まれ／1975年建築研究所J共同設立／1978年杉下均建築工房設立／1995年「真鍋記念館クララザール」で岐阜県ふるさとづくり芸術賞最優秀賞受賞／2003年「本町の家」で第7回ウッドワン実施作品コンペ最優秀賞受賞

服部信康（はっとり・のぶやす）
1964年愛知県生まれ／1984年東海工業専門学校卒業、名巧工芸／1987年総合デザイン／1989年スペース／1992年R&S設計工房／1995年服部信康建築設計事務所設立／「長湄の家」で2003年INAXデザインコンテスト銀賞、2004年AWDA 2004 Award受賞／2003年、2005年、2008年、2009年、2010年中部建築賞受賞

若原一貴（わかはら・かずき）
1971年東京都生まれ／1994年日本大学芸術学部卒業／1994～2000年横河設計工房／2000年若原アトリエ設立／2003年「あがり屋敷の家」（本誌0311）にて第7回WOOD ONE実施作品コンペ入選／2008年「四季の森デンタルクリニック」にて日本木材青壮年団体連合会主催、第11回木材活用コンクール部門賞（第一部門）／2009年「小日向の仕事場」（本誌0811）にて第30回 INAXデザインコンテスト入賞

高野保光（たかの・やすみつ）
1956年栃木県生まれ／1979年日本大学生産工学部建築工学科卒業／1991年遊空間設計室設立／2003年木の国日本の家デザインコンペ最優秀賞受賞／2004年「まちなみ住宅」100選日本建築士会連合会会長賞受賞／2010年～「NPO法人 家づくりの会」副代表理事／2011年～日本大学生産工学部建築工学科非常勤講師

黒柳崇（くろやなぎ・たかし）
1980年埼玉県生まれ／2001年中央工学校建築工学科卒業／2001～08年本間建設勤務／2008年内田産業入社工事部所属／2010年東京営業所勤務、現在に至る

岩岡竜夫（いわおか・たつお）
1960年長崎県生まれ／1983年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業／1987～88年フランス・パリ建築大学第8分校留学／1990年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了（工学博士）／1995年東海大学第二工学部建設工学科助教授／2011年～東京理科大学理工学部建築学科教授／1992年日本建築学会奨励賞（論文）／2001年「アビタ戸祭」（共同設計）で東京建築士会住宅建築賞受賞／2003年「アイテクノプラザ」でリフォームリニューアルコンバージョン設計アイデアコンテスト優秀賞受賞／主な著書に『図・建築表現の手法』（共著、1999年、東海大学出版会）／『図2・建築模型の表現』、『図3・建築の図形表現』（共著、2000年、東海大学出版会）

橋本一郎（はしもと・いちろう）
1970年和歌山県生まれ／1994年東京理科大学工学部建築学科卒業／1996年東京理科大学工学研究科建築学専攻修了／1996～2001年岡本設計事務所／2002～07年TIS&Partners／2008年S[3] Associates共同設立

青井哲人（あおい・あきひと）
1970年愛知県生まれ／1995年京都大学大学院博士課程中退／1995～2000年神戸芸術工科大学助手／2002～08年人間環境大学助教授（准教授）／2008年～明治大学理工学部建築学科准教授／博士（工学）／著書に『植民地神社と帝国日本』『彰化一九〇六年』（単著）、『アジア都市建築史』『世界住居誌』『近代日本の作家たち』（共著）ほか

清原昌洋（きよはら・まさひろ）
1972年岐阜県生まれ／1995年日本大学理工学部海洋建築工学科卒業／2000年atelier cube一級建築士事務所設立／2009年～ ARCH(K)INDY/アーキンディを井上聡と共同主宰

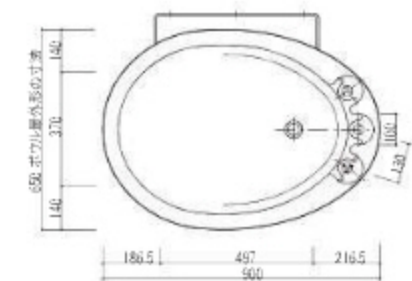
井上聡（いのうえ・さとる）
1974年千葉県生まれ／1999年九州芸術工科大学（現九州大学）卒業／2004年イノウエサトル建築計画事務所設立／2009年～ ARCH(K)INDY/アーキンディを清原昌洋と共同主宰

馬淵健太（まぶち・けんた）
1981年福岡県生まれ／2006年早稲田大学大学院修了／2007年～NKSアーキテクツ勤務／福岡建築見学会主宰

末光弘和（すえみつ・ひろかず）
1976年愛媛県生まれ／1999年東京大学建築学科卒業／2001年東京大学大学院修了／2001～06年伊東豊雄建築設計事務所／2007年～SUEP／2008年東京電機大学非常勤講師／2009～11年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手／2010年～首都大学東京非常勤講師／2011年～ 東京理科大学非常勤講師／2011年～SUEP代表取締役／2012年～東京大学非常勤講師／2012年～横浜国立大学非常勤講師／末光陽子と共に2009年『我孫子の住宅 Kokage』（本誌0909）で住宅建築賞受賞／2011年『地中の棲処』（本誌1007）で第27回新建築賞受賞／2011年嬉野市塩田中学校プロポーザル、嬉野市社会文化体育館プロポーザル最優秀賞

末光陽子（すえみつ・ようこ）
1974年福岡県生まれ／1997年広島大学工学部第四類（建設系）卒業／1997～2003年佐藤総合計画／2003年～SUEP／2010年広島大学非常勤講師／2011年～SUEP代表取締役／2012年～武蔵野大学非常勤講師

◎本誌7月号の訂正

・6頁において、「FLAT EGG」の上面図に誤りがありました。正しくは下記になります。

FLAT EGG上面図　縮尺1：30

・84頁において、「深川の家」の所在地を「東京都杉並区」としておりますが、正しくは「広島県広島市」です。

・162頁において、山口隆氏のお名前のアルファベットに誤りがありました。正しくは「Takashi Yamaguchi」です。

訂正し、お詫び申し上げます。

編集後記

今月の特集はリノベーションです。意図したわけではありませんが、作品の半分以上が関西、九州のものになりました。たとえば京都の町家にリノベーションの事例が多いのは、壁を共有して建つ独特な敷地条件を考えると分かります。さらにもうひとつの近年の傾向として、リノベーション（改修・増築）によって、敷地が抱える問題がクリアされる。そういう事例が増えているのではないかと感じるのです。京都の町家にせよ、改修設計で手を加えることで、耐震性の改善や設備更新といったさまざまな問題解決が求められています。そういう街並みの中で生まれたリノベーションが、人びとにとって切実な問題を切り開く価値ある手段＝建築として、別な地域へも認知が広がっているのではないか、と思います。

建築の役割を考えると、そういった事例が増えるのは嬉しいことです。ですが誌面づくりに戻って考えてみると、建築写真と図面からだけでは、そこでの重要な視点、つまり建築としてどう問題解決が行われたのか？　についてはなかなか伝えられません。その問題意識も含めて、今月はリノベーションされた建築空間に対して、建築家が何をしようと考えたのか、その根拠をできるだけ最初にプレゼンテーションしてみました。そのうえで、写真を見ていただけたらと思ったのです。建築雑誌としては、説明が先にくるような、逆に見える構成かもしれません。でも、建築がつくられるプロセスとしては、思考があって、空間が生まれる流れですから、それに沿った誌面にしてみたいと思いました。

ストック型社会といわれる中で、民家から工業化住宅、高層タワーマンションの一室、小規模ビルの1棟まるごと住宅転用等々、1年前と比べてもリノベーションがより多様になっているように感じています。空間性だけでなく、何らかの問題解決が計れて、ストック型社会を支えていけること。この重要な役割があってこそ、今後の展開も期待できます。問題と展開が表裏一体となって、そこに生まれる時代性を、誌面の中でも多様な表現を思考し、伝えていきたいと思います。　（pika）

バックナンバー・年間定期購読のご案内

新建築　新建築 住宅特集

バックナンバーをお求めの方は最寄りの書店にてお申し込みください。また、下記のバックナンバー常備店にてお買い求めいただくことができます。
定期購読をご希望の方は最寄りの書店にてお申し込みください。書店でのご購入が不便な方は、弊社からお客様へ直送する「年間定期購読」をご利用ください。お申し込みは右記の年間定期購読係までご連絡下さい。

年間定期購読料（送料は弊社負担）

月刊『新建築』	¥24,000（税込）
月刊『新建築住宅特集』	¥24,000（税込）
季刊『JA』	¥10,000（税込）

株式会社 新建築社　年間定期購読係
〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380　fax. 03-6205-4386
e-mail: business@japan-architect.co.jp

月刊『新建築』は1960年1月号より、月刊『新建築住宅特集』は1999年1月号より、季刊『JA』は1号（1991年春号）より目次などの内容が弊社ホームページにてご覧いただけます。

http://www.japan-architect.co.jp

バックナンバー取扱店　※書店により、在庫状況は異なります。事前にお電話で商品在庫をご確認ください。またお取り寄せも可能です。

北海道
MARUZEN＆ジュンク堂書店 札幌店
（札幌市中央区）011-223-1911
コーチャンフォー ミュンヘン大橋店
（札幌市北区）011-817-4000

宮城県
ジュンク堂書店 仙台本店
（仙台市青葉区）022-716-4511
丸善 仙台アエル店
（仙台市青葉区）022-264-0151

新潟県
ジュンク堂書店 新潟店
（新潟市）025-374-4411

埼玉県
ジュンク堂書店 大宮ロフト店
（さいたま市大宮区）048-640-3111

千葉県
丸善 津田沼店
（習志野市）047-470-8313
芳林堂書店
（習志野市）047-472-5011

東京都
三省堂書店 神田本店
（千代田区）03-3233-3312
南洋堂書店
（千代田区）03-3291-1338
丸善 丸の内本店
（千代田区）03-5288-8881
八重洲ブックセンター
（中央区）03-3281-8203
ブックファースト銀座コア店
（中央区）03-3573-8889
TSUTAYA TOKYO ROPPONGI
（港区）03-5775-1515
ブックファースト新宿店
（新宿区）03-5339-7611
○芳林堂書店 高田馬場店
（新宿区）03-3208-0241
紀伊國屋書店 新宿本店
（新宿区）03-3354-0131
デザインブックス
（品川区）03-3445-1341
ジュンク堂書店 池袋本店
（豊島区）03-5956-6111
紀伊國屋書店 新宿南店
（渋谷区）03-5361-3301
青山ブックセンター本店
（渋谷区）03-5485-5750

神奈川県
丸善 ラゾーナ川崎店
（川崎市幸区）044-520-1869

山梨県
○朗月堂本店
（甲府市）055-228-7356

富山県
BOOKSなかだ本店
（富山市）076-492-1192

長野県
□平安堂 長野店
（長野市）026-224-4545

愛知県
丸善 名古屋栄店
（名古屋市栄区）052-261-2251
ジュンク堂書店名古屋店
（名古屋市中村区）052-589-6321

京都府
大龍堂書店
（京都市中京区）075-231-3036
ふたば書房 ゼスト御池店
（京都市中京区）075-253-3151
ジュンク堂書店京都BAL店
（京都市中京区）075-253-6460

大阪府
柳々堂
（大阪市西区）06-6443-0167
□丸善 なんばOCAT店
（大阪市浪速区）06-6635-3225
旭屋書店 本店
（大阪市北区）06-6313-1192
ジュンク堂書店 大阪本店
（大阪市北区）06-4799-1090
アセンス アメリカ村店
（大阪市中央区）06-6258-3255
○紀伊國屋書店 梅田本店
（大阪市北区）06-6372-5821

兵庫県
ジュンク堂書店 三宮店
（神戸市中央区）078-392-1001

鳥取県
ブックヤードチャプター2
（米子市）0859-33-0222

広島県
○ジュンク堂書店 広島駅前店
（広島市南区）082-568-3000
○フタバ図書MEGA祇園中筋店
（広島市安佐南区）082-830-0600
○フタバ図書TERA広島府中店
（安芸郡）082-561-0770

福岡県
紀伊國屋書店 福岡本店
（福岡市博多区）092-434-3100
○GEN建築芸術書房
（福岡市中央区）092-524-2535
○丸善 福岡ビル店
（福岡市中央区）092-731-9000
ジュンク堂書店 福岡店
（福岡市中央区）092-738-3322

大分県
■ジュンク堂書店 大分店
（大分市）097-536-8181

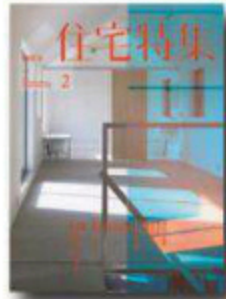
書店名の頭についた記号は以下の通りです。

無印	『新建築』『新建築住宅特集』『JA』
○	『新建築』『新建築住宅特集』のみ
●	『新建築』『JA』のみ
□	『新建築住宅特集』『JA』のみ
■	『新建築』のみ
△	『新建築住宅特集』のみ
▲	『JA』のみ

新建築 住宅特集 バックナンバー

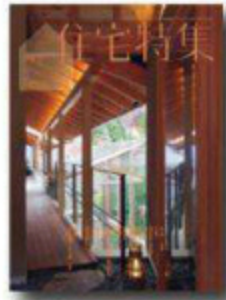
バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。
また、下記ウェブサイトからもご注文いただけます。
http://www.japan-architect.co.jp

株式会社 新建築社　〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380（大代表）　fax. 03-6205-4386

2012 2月号
定価＝2,000円

[作品] villa A／岡田哲史　もみじの家／鈴木エドワード　Dual house／甲村健一　交差の家／髙砂正弘　テラス・ハウス／アトリエ・ワン　国分寺の家／谷尻誠　オーノJAPAN　IN-IN-home／服部信康　K-HOUSE／向山徹　六甲の住居／島田陽　House in ABIKO／布施茂　法面庭の家／井上玄　笠の家／長坂大　小屋の家／藤村龍至　オーノJAPAN　倉庫の家／藤村龍至
[連載] いま、住宅をつくるときに考えること　018／青木淳×佐伯聡子＋K.M. TAN
建築家自邸からの家学び　第9回 後編　北嶺町の家
真壁智治　武蔵野美術大学 高橋スタジオ　小室匡示
古田陽子　室伏次郎
[コラム] 住宅の設計力　手嶋保
近作を訪ねて　堀越英嗣　前田圭介
[エッセイ] 住宅を読む　眞田大輔　藤原徹平
[PROCESS VIEW] 六甲の住居　島田陽

2012 3月号
定価＝2,000円

[特集] 光と住宅
Daylight House／保坂猛　ナチュラルイルミナンスⅡ／遠藤政樹　名和研二　ナチュラルストリップⅣ／遠藤政樹　名和研二　論考：光空間に試される脚本力　遠藤政樹
TUTANAGA HOUSE／荒谷省午　スキマノイエ／富永哲史　横尾真　HOUSE γ／河内一泰　元浅草の住宅／中央アーキ　SLIT／奥村和幸　調布の家／小川広次　茅ヶ崎の家／小川広次　深大寺東の家／小川広次　寄稿：ある建築家の肖像　高宮眞介
[特集2] 軒先のデザイン
樋口善信　益子アトリエ　川口通正　塩田能也　阪根宏彦　奥野公章　元良信彦　阿部勤　上野英二　城戸崎建築研究室　横内敏人　堀部安嗣　野沢正光
[コラム] 住宅の設計力　吉村篤一
近作を訪ねて　伊藤博之　藤原徹平
[エッセイ] 住宅を読む　堀越英嗣　前田圭介

2012 4月号
定価＝2,000円

[作品] 伯翠荘／吉村篤一　ジオ メトリア／原田真宏＋原田麻魚　井原の家／藤本寿徳　荻窪の家／早川邦彦　成城の家／岡田哲史　Layer／中原祐二　MISHIMA HOUSE／芦沢啓治　新小岩の家／飯田善彦　中村の家／加藤功　Portico／会田友朗＋久野紀光＋我伊野威之　柄の浦の住宅／前田圭介　鷹ノ巣の2世帯住宅／納谷学＋納谷新　牛久の家／八島正年＋八島夕子　那の家／神家昭雄
[連載] 素材再発見　第7回「再生素材・古材」　安井正
[コラム] 住宅の設計力　北山恒
近作を訪ねて　堀越英嗣　前田圭介
[エッセイ] 住宅を読む　安田博道　藤原徹平
[PROCESS VIEW] ジオ メトリア／原田真宏＋原田麻魚　Layer／中原祐二
[展覧会] 「メグロアドレス—都会に生きる作家」／「土門拳写真展「和」—古寺巡礼第五集より—」／「ザ・タワー ～都市と塔のものがたり～」

2012 5月号
定価＝2,000円

[特集] 小さいことへのアプローチ
志立別邸／横河健　43base／三浦慎　ZYX House／中佐昭夫＋田中知博　乃木坂ハウス／岩岡竜夫＋渡邉光　荏原の家／荒木毅　中崎の家／榊原節子　千歳船橋の住宅／長谷川洋平　YNH／平瀬有人＋平瀬祐子　東大泉の家／杉浦英一　川に寄り添う家／水石浩太　青戸の家／田中秀弥　梅島の建物／齋藤由和　BW3／中辻正明＋中辻雅江　Dig In the Sky／竹口健太郎＋山本麻子　南沢の小住宅／若原一貴　目黒本町の住宅／鈴野浩一＋禿真哉
[コラム] 住宅の設計力　菅正太郎
[エッセイ] 住宅を読む視線　安部良
つくり手とのコラボレーション　城戸崎博孝×二ツ谷憲彦
[建築家のプロダクト]　泉幸甫　斉藤名穂
[展覧会] レポート：ハギエンナーレ2012　宮崎晃吉
「縮退時代における都市の記述法へ」／「甦った西本願寺「伝道院」と伊東忠太展」／「多様な光のあるガラス建築展」

2012 6月号
定価＝2,000円

[特集] オリジナルメイキング2012
凱風館／光嶋裕介　川越の家／手嶋保　アース・ブリックス／山下保博　N邸／新田有平＋丸山美紀　狭山丘陵の家／佐藤武見　等々力の二重円環／藤原徹平　HOUSE S／芦沢啓治
[作品] 土橋邸／妹島和世　空の見える下階と街のような上階／栗原健太郎＋岩月美穂　石神井町の家Ⅲ／高野保光　大宮の家／長坂大　Folded W／駒田剛司＋駒田由香
[連載] 建築家自邸からの家学び　第10回 前編　松原の家
真壁智治　東京都市大学 手塚貴晴研究室　小室匡示
古田陽子　内藤恒方　内藤嬰子
[コラム] 住宅の設計力　渡辺康
[エッセイ] 特集を読む　東海林弘靖
つくり手とのコラボレーション　城戸崎博孝×二ツ谷憲彦
住宅を読む視線　荒谷省午
[コンペ作品募集] 第8回 ダイワハウスコンペティション

2012 7月号
定価＝2,000円

[作品] Tunnel House／塚田眞樹子　K HOUSE／吉村昭範＋吉村真基　名和研二　PATIO／矢板久明＋矢板直子　house I／賓神尚史　K／木村吉成＋松本尚子　深川の家／谷尻誠　大野博史　パラメトリック・フラグメント／山口隆　ヨシダセカンドハウス／宇野求　青木豊実　竹内晶洋　吉川の家／庄司寛　甲州街道の家／髙山正樹　岡由実子　埼玉の家/O邸／相川直子＋佐藤勤　目神山のいえ／須賀定邦　ヒメシャラの森の家／横内敏人
[連載] 建築家自邸からの家学び　第10回 後編 松原の家
真壁智治　東京都市大学大学院手塚貴晴研究室　中山英之
古田陽子　内藤恒方
家をつくる図面　第1回 敷地の活かし方 回帰草庵　石井修
竹原義二　石井智子
[コラム・エッセイ] 生田京子　坪井宏嗣
[建築家のプロダクト]（水回り）横河健　藤原徹平・岡安泉
鈴木エドワード　佐藤オオキ　伊礼智